長崎県文化財調査報告書　第81集

# 上原遺跡

1986

長崎県教育委員会

題字は浦川春実氏による

# 上原遺跡

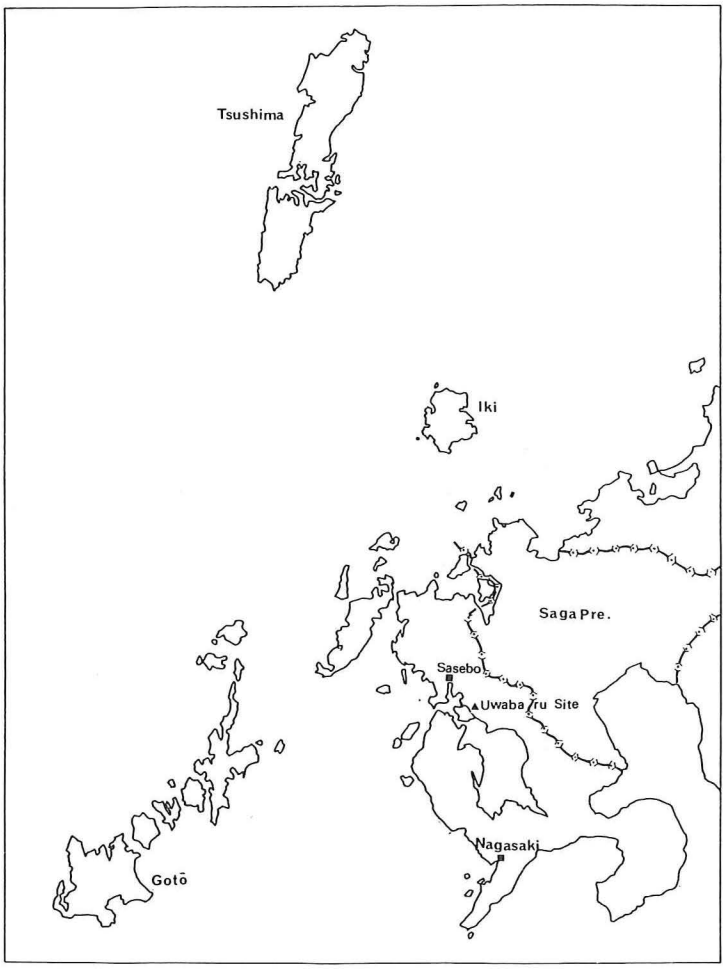
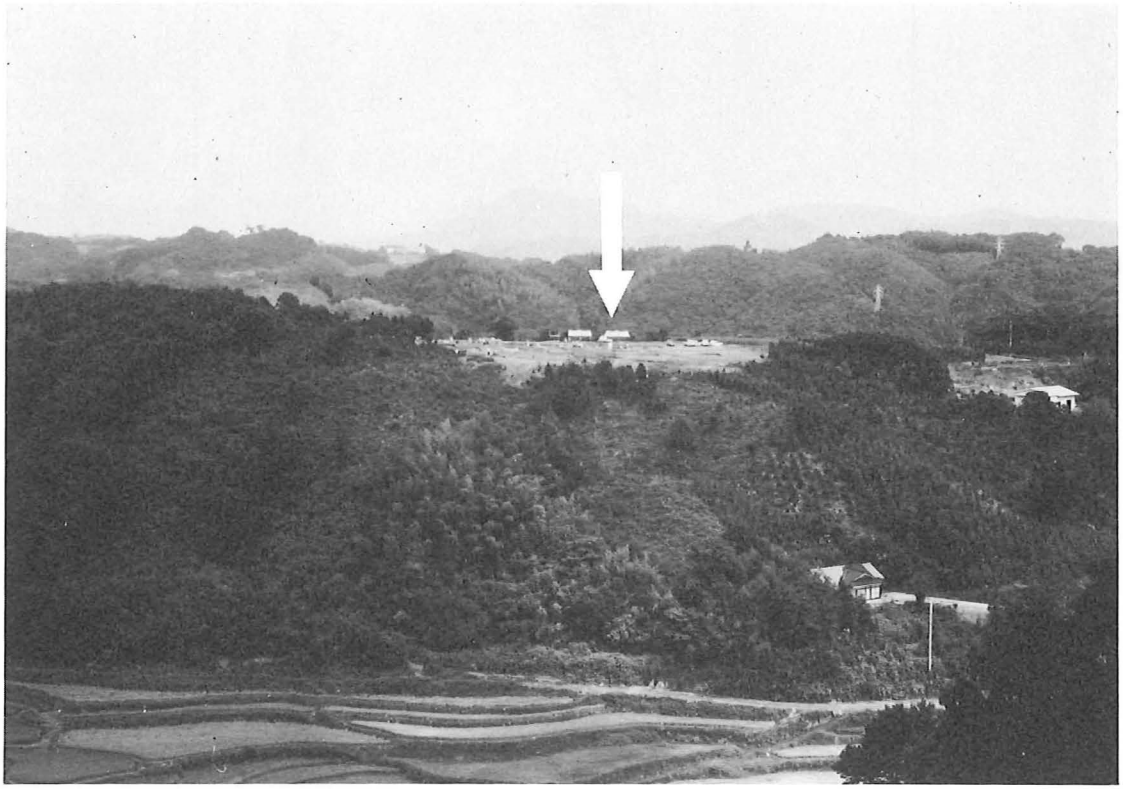



Fig. 1　遺跡位置図



遺跡遠景

# 序　文

このたび，上原遺跡の調査報告書を公刊することとなりました。

この報告書は，佐世保―武雄間のバイパス建設工事に伴い，事業主体である日本道路公団より，長崎県教育委員会が委託を受けて事前に発掘調査を実施し，内容を取りまとめたものであります。

発掘調査は，昭和59年４月より同年11月まで行い，その結果，旧石器時代～縄文時代の石器，土器など総数３万点を超える遺物や遺構群を検出しました。

それらの調査により，本県の貴重な歴史資料の数々に新たな資料を加えることになりました。

本調査の実施にあたり，真摯に御協力をいただいた関係者の皆様に感謝申し上げますと共に本書が学術，教育，文化財保護の資料として広く一般の活用に供することができれば望外の幸せであります。

昭和61年３月31日

長崎県教育長　伊 藤 昭 六

# 例　言

1．本報告は，昭和59年４月16日から昭和59年11月30日まで実施した佐世保市早岐地区に所在する国道35号線バイパス関係の埋蔵文化財調査報告である。

2．調査は，長崎県教育庁文化課が行い，高野晋司（主任文化財保護主事）・福田一志（文化財調査員）・草野誠司（同）が担当した。

3．本報告は，分担執筆し，各項執筆者は文末に記した。

4．本報告の遺物の科学分析の内，土壌の花粉分析結果については，パリノサーヴェイ㈱より巻末に附した報告を受けた。

5．本報告の関係遺物は，現在長崎県教育庁文化課が保管の任にあたっている。

6．本報告の編集責任は草野による。

また，発掘現場において，多くの方々の御協力があった。芳名を記して感謝申し上げたい。
久村貞男，山口正人，山田鐵也，高瀬美智子
山鹿敏紀　　（敬称略）

# 本　文　目　次


Ⅰ　序説

一、調査に至るまで…… 1

二、調査経過…… 1

三、遺跡の地理的歴史的環境…… 5

Ⅱ　遺跡の調査

一、層位…… 11

二、遺構…… 19

1号土壙…… 19

2号土壙…… 21

3号土壙…… 22

4号土壙…… 23

5号土壙…… 24

6号土壙…… 26

7号土壙…… 26

8号土壙…… 27

9号土壙…… 28

10号土壙…… 29

11号土壙…… 32

12号土壙…… 32

Ⅲ　出土遺物

一、近世磁器…… 34

近世陶器…… 34

窯道具…… 34

明染付…… 34

二、縄文土器…… 37

三、縄文時代の石器…… 40

四、旧石器時代の遺物…… 58

遺跡周辺表面採集の石器…… 60

A地点表土出土の石器…… 60

A地点出土の石器…… 60

B地点出土の石器…… 70
A地点ナイフ形石器遺存状態…… 79
B地点の遺物遺存状態…… 83
Ⅳ　上原遺跡試料花粉分析結果報告…… 86

# 挿　図　目　次

Fig. 1　遺跡位置図
Fig. 2　上原台地付近断面図…… 2
Fig. 3　調査区配置図…… 3
Fig. 4　調査区区分図…… 4
Fig. 5　金ヶ崎城図…… 8
Fig. 6　井手平城図…… 8
Fig. 7　周辺遺跡図（$\frac{1}{5000}$）…… 9
Fig. 8　掲載土層位置図…… 11
Fig. 9　遺跡周辺表層地質図…… 12
Fig. 10　A地点10列東壁土層図（$\frac{1}{80}$）…… 13
Fig. 11　A地点C列北壁土層図（$\frac{1}{80}$）…… 15
Fig. 12　A地点G列北壁土層図（$\frac{1}{80}$）…… 15
Fig. 13　B地点28列東壁土層図（$\frac{1}{80}$）…… 17
Fig. 14　B地点I列北壁土層図（$\frac{1}{80}$）…… 18
Fig. 15　土壙位置図…… 19
Fig. 16　1号土壙図（$\frac{1}{30}$）…… 20
Fig. 17　2号土壙図（$\frac{1}{30}$）…… 21
Fig. 18　3号土壙図（$\frac{1}{60}$）…… 22
Fig. 19　4号土壙図（$\frac{1}{30}$）…… 24
Fig. 20　5号土壙図（$\frac{1}{30}$）…… 25
Fig. 21　6号土壙図（$\frac{1}{60}$）…… 26
Fig. 22　7号土壙図（$\frac{1}{30}$）…… 27
Fig. 23　8号土壙図（$\frac{1}{30}$）…… 28
Fig. 24　9号土壙図（$\frac{1}{30}$）…… 29
Fig. 25　10号土壙図（$\frac{1}{40}$）…… 30

Fig. 26　11号土壙図（$\frac{1}{30}$）…… 32
Fig. 27　12号土壙図（$\frac{1}{30}$）…… 32
Fig. 28　陶磁器…… 35
Fig. 29　土器出土状況図…… 37
Fig. 30　石器出土状況図…… 40
Fig. 31　石鏃出土状況図…… 41
Fig. 32　石鏃(1)…… 42
Fig. 33　石鏃(2)…… 43
Fig. 34　石鏃(3)…… 44
Fig. 35　石鏃(4)…… 45
Fig. 36　石鏃(5)…… 46
Fig. 37　石材別遺存度…… 47
Fig. 38　長さ・厚さ・幅の三角グラフ…… 47
Fig. 39　先端角度グラフ…… 47
Fig. 40　尖頭器・石匙…… 48
Fig. 41　スクレイパー・グレーバー…… 49
Fig. 42　使用痕ある剥片・剥片…… 50
Fig. 43　剥片…… 51
Fig. 44　石核…… 52
Fig. 45　砥石…… 53
Fig. 46　遺跡周辺表面採集の石器…… 59
Fig. 47　A地点表土出土の石器(1)…… 61
Fig. 48　A地点表土出土の石器(2)…… 62
Fig. 49　A地点出土の石器(1)…… 63
Fig. 50　A地点出土の石器(2)…… 64
Fig. 51　A地点出土の石核(1)…… 66
Fig. 52　A地点出土の石核(2)…… 67
Fig. 53　A地点出土の石器(3)…… 68
Fig. 54　A地点出土の石器(4)…… 69
Fig. 55　B地点出土の石器(1)…… 71
Fig. 56　B地点出土の石核…… 72
Fig. 57　B地点出土の石器(2)…… 73
Fig. 58　B地点出土の石器(3)…… 74
Fig. 59　B地点出土の石器(4)…… 75

Fig. 60　Ｂ地点出土の石器(5) …… 76
Fig. 61　その他の石器…… 77
Fig. 62　Ｂ地点表土出土の石器…… 78
Fig. 63　Ａ地点ナイフ形石器平面分布図…… 80
Fig. 64　Ｂ地点深度別遺物出土…… 81
Fig. 65　Ｂ地点遺物遺存状況図（灰青色黒曜石）…… 84
Fig. 66　Ｂ地点遺物遺存状況図（漆黒色黒曜石）…… 85

# 図　版　目　次

PL. 1　空中写真
PL. 2　遺跡遠景
PL. 3　Ａ地点10列東壁土層（Ｅ・Ｆ・Ｇ区）
PL. 4　Ａ地点Ｃ列北壁土層（Ｃ-7・Ｃ-11・Ｇ-10区）
PL. 5　Ｂ地点28列東壁土層
PL. 6　Ｂ地点Ｉ列北壁土層
PL. 7　１号土壙
PL. 8　４号土壙
PL. 9　９号土壙
PL. 10　10号集石土壙・遺物出土状況
PL. 11　11号土壙
PL. 12　Ｃ－８区出土縄文土器
PL. 13　Ｇ―12区・Ｆ―12区出土縄文土器
PL. 14　石核出土状況
PL. 15　石核出土状況
PL. 16　ナイフ形石器出土状況
PL. 17　ナイフ形石器出土状況
PL. 18　明染付・近世磁器
PL. 19　近世磁器
PL. 20　陶器（表）
PL. 21　陶器（裏）
PL. 22　石鏃（表）
PL. 23　石鏃（裏）

PL. 24　石鏃（表）
PL. 25　石鏃（裏）
PL. 26　石鏃（表）
PL. 27　石鏃（裏）
PL. 28　石鏃（表）
PL. 29　石鏃（裏）
PL. 30　石鏃・尖頭器・石匙（表）
PL. 31　石鏃・尖頭器・石匙（裏）
PL. 32　スクレイパー（表）
PL. 33　スクレイパー（裏）
PL. 34　使用痕ある剥片（表）
PL. 35　使用痕ある剥片（裏）
PL. 36　剥片（表）
PL. 37　剥片（裏）
PL. 38　砥石・石核（表）
PL. 39　砥石・石核（裏）
PL. 40　遺跡周辺表面採集の石器（表）
PL. 41　遺跡周辺表面採集の石器（裏）
PL. 42　A地点表土出土の石器(1)（表）
PL. 43　A地点表土出土の石器(1)（裏）
PL. 44　A地点表土出土の石器(2)（表）
PL. 45　A地点表土出土の石器(2)（裏）
PL. 46　A地点出土の石器(1)（表）
PL. 47　A地点出土の石器(1)（裏）
PL. 48　A地点出土の石器（表）
PL. 49　A地点出土の石器（裏）
PL. 50　A地点出土の石核(1)（表）
PL. 51　A地点出土の石核(1)（裏）
PL. 52　A地点出土の石核(2)（表）
PL. 53　A地点出土の石核(2)（裏）
PL. 54　A地点出土の石器(3)（表）
PL. 55　A地点出土の石器(3)（裏）
PL. 56　A地点出土の石器(4)（表）
PL. 57　A地点出土の石器(4)（裏）

PL. 58　B地点出土の石器(1)（表）
PL. 59　B地点出土の石器(1)（裏）
PL. 60　B地点出土の石器　（表）
PL. 61　B地点出土の石器　（裏）
PL. 62　B地点出土の石器　（表）
PL. 63　B地点出土の石器　（裏）
PL. 64　B地点出土の石器　（表）
PL. 65　B地点出土の石器　（裏）
PL. 66　B地点出土の石器　（表）
PL. 67　B地点出土の石器　（裏）
PL. 68　B地点出土の石器　（表）
PL. 69　B地点出土の石器　（裏）
PL. 70　B地点出土の石器　（表）
　　B地点出土の石器　（裏）
PL. 71　調査参加者

# 表　目　次

Tab. 1　周辺遺跡地名表……6～7
Tab. 2　上原遺跡出土石鏃破損部位別一覧表……36
Tab. 3　石鏃計測表……44～46
Tab. 4　尖頭器・石匙計測表……46
Tab. 5　スクレイパー計測表……47
Tab. 6　使用痕ある剥片・剥片・石核計測表……47
Tab. 7　試料表……76
Tab. 8　上原遺跡の花粉分析試料と土質……77
Tab. 9　上原遺跡試料花粉分析結果……78
Tab. 10　上原遺跡試料花粉分析結果……79
Tab. 11　検出花粉胞子化石名一覧表……80～84

# I 序　説

## 一、調査に至るまで

国道35号線は，長崎県佐世保市と佐賀県武雄市とを結ぶ長崎県北部の主要幹線道路であるが，幅員も狭く，加えて近年の交通事情による渋滞もひどくなった事から幹線道路としての機能の低下が指摘されていた。

この為，これに代る高規格の自動車専用道路の再整備が急務となり，九州横断道と連絡するバイパス「武雄佐世保線道路」が計画されることとなった。

計画によると道路は有料とし，佐世保―武雄間の総延長22㎞の内，長崎県側が17㎞，佐賀県側が５㎞の準高速道となる予定である。

計画の概要が示されたのは昭和50年で，まず県土木部長から文化課長あての関連公共事業調査依頼が契機であった。

その後の調査・協議経過を順を追って説明すると下記のようになる。

1. 第１次現地踏査（分布調査）　昭和51年５月19日～６月２日。対象地区，佐世保市，長さ11.8㎞，巾400ｍ。
2. 第２次現地踏査（分布調査）　昭和55年４月14日～４月17日。対象地区，佐世保市～東彼杵郡波佐見町。長さ5.3㎞，巾400ｍ。
3. 上記，１，２次分布調査の結果，巾400ｍの道路予定路線の中に15ケ所の遺跡が含まれる事を確認。その旨日本道路公団に対して文書により回答。
4. 道路公団はこの回答を参考として，巾を200ｍに狭めて道路設計を行い再協議を提出。なお，この再協議設計図には先に示した15ケ所の遺跡の内14ケ所については現状保存の方向で示される。
5. 文化課はこの後，昭和56年11月９日～10日，及び昭和57年12月15日～16日の２回にわたり，再協議があった路線を再度踏査したが，新たな遺跡の発見無し。

如上の経過をもって，最終的には保存不可能な遺跡（上原遺跡）１ケ所についてのみ事前に緊急発掘を実施する事になった。　（高野）

## 二、調査経過

分布調査の結果，上原遺跡そのものの範囲は全体で約３万㎡程にも上るものと思われたが（Fig. 2），遺物の散布状況の密度からみると，その中にも幾つかの集中地点が認められた。道路建設によって消滅する部分はこの中で，北側遺物集中地点に当る。面積は約１万㎡程度である。

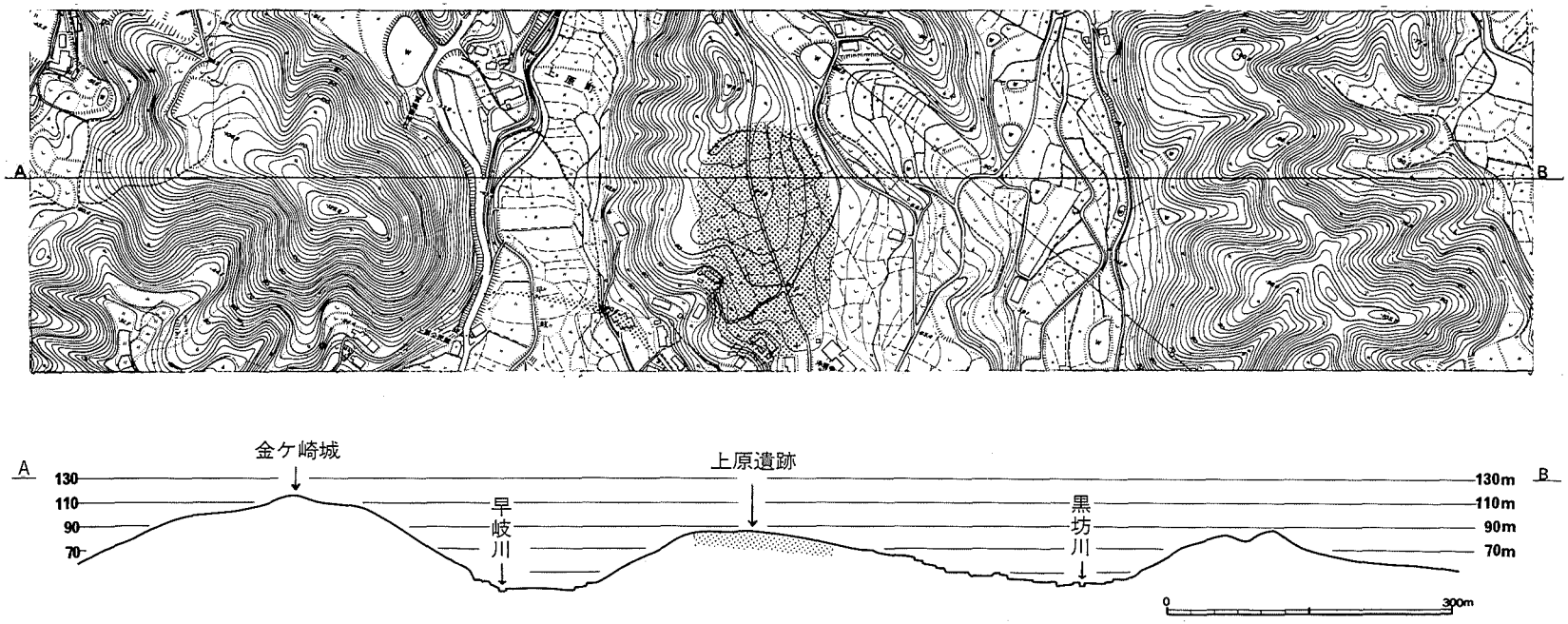



Fig. 2　上原台地付近断面図

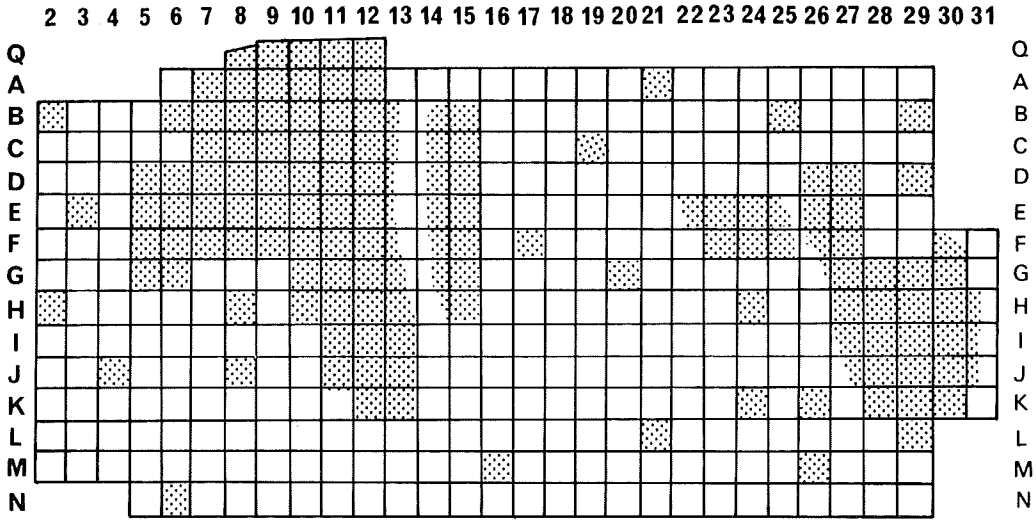



Fig. 3　調査区配置図

①調査方法

東西に走る道路中心杭の延長線を調査基軸線とし，これから南北に直角に振って10m間隔に杭を打ち，調査対象区内全域にわたって10mの方眼を設定した。実際的な調査はこの方眼を更に１辺５mの小グリッドに分割して掘り進めた。なお出土遺物はドットマップ法をとった。

②調査経過

調査区設定段階では，遺物の表面採集資料のみで内容が全て不明であった。この為，調査は当初当該区全域を対象として任意のグリッドを掘り進めることによって，まず遺跡の範囲を確認することとした。この結果，すでに開墾等による遺跡消滅部分もあったが，標高84m～87mの台地平坦部分（以下Ａ地点と呼ぶ）と，その東側標高77m～82mに位置する傾斜地（以下Ｂ地点と呼ぶ）になお良好な遺物包含層が残存している事が判った。内容的には旧石器時代～縄文時代，更に一部近世遺構と遺物の資料を含むもので，その面積はＡ地点で約1900m²，Ｂ地点で約1400m²の計3300m²程度であった。

以上の成果をもとに調査地点を上記２地点に絞り本格的な調査に入ることとなった。(Fig. 3, Fig. 4)　（高野）

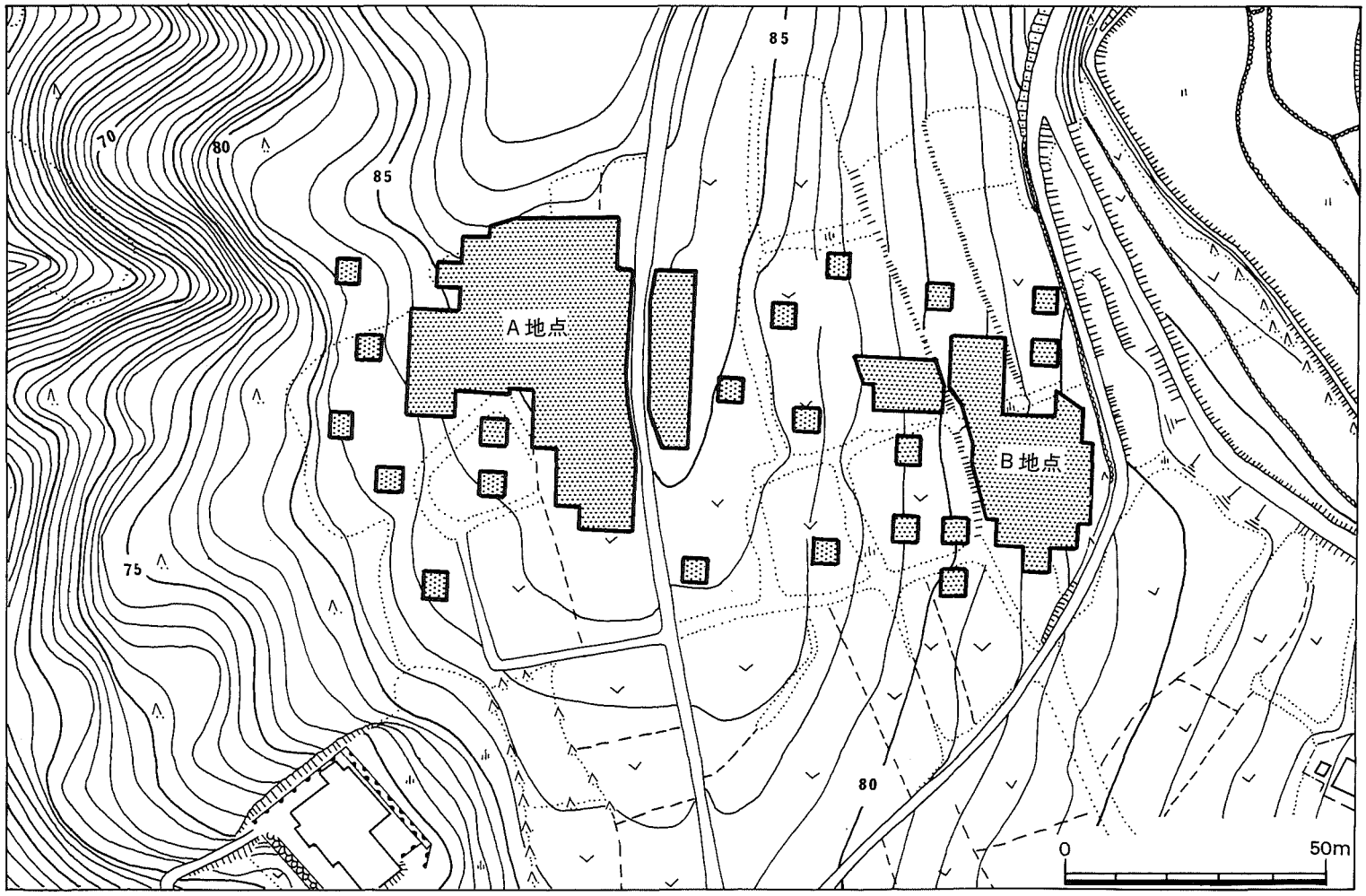



Fig. 4　調査区区分図

文　献

1. 文化庁　「全国遺跡地図―長崎県―」　1976年，及び1981年長崎県文化課による分布調査結果による。
2. 佐世保市教育委員会　「三川内古窯跡群緊急確認調査報告」　1978年３月
3. 佐世保市教育委員会　「中世山城分布調査報告」　佐世保市埋蔵文化財調査報告書　昭和56年度
4. 久村貞男　「三島山経塚報告」　佐世保市文化科学館文化財報告１　1971年
5. 下川達彌　「長崎県三川内，久賀島，野母崎の文化―特定地域の基礎文化調査報告書―」　長崎県立美術博物館　1981年３月
6. 久村貞男　「泉福寺洞穴と周辺の開地遺跡」　考古学ジャーナル№172，所収　1980年
7. 佐世保市教育委員会　「三川内古窯群緊急確認調査報告―木原地蔵平窯跡の発掘調査―」　1978年３月

## 三、遺跡の地理的歴史的還境

長崎県北東部に位置し，国見山を最高所とする一連の山並，すなわち北より烏帽子岳（597ｍ），国見山（776ｍ），八天岳（707ｍ），隠居（かくい）岳（670ｍ）の山々は南北にほぼ10キロ程直線で連なるが，同時にその山陵は長崎と佐賀の県境を成している。傾斜は東側佐賀県側に急で西側長崎県側に緩傾斜である。

これらの最南端を占拠する隠居岳から派生する幾つかの小丘陵はゆるやかな勾配を持って南西に放射状に拡がるが，その中の１つ，丘陵先端部に近い上原台地上に遺跡は位置する。標高は77～86ｍ間に在り台地上平坦部分から緩傾斜面にかけての拡がりを持つ。台地の東西両側端直下には二筋の小河川が流れる。（Fig. 2）

附近の遺跡の概観を行ってみたい。

現在，上原遺跡の周辺には，62ケ所の諸遺跡が知られているが（Fig. 5），その主な時期的内訳は，旧石器～縄文２ヶ所，縄文～弥生16ヶ所，平安１ヶ所，中世16ヶ所，近世27ケ所である。（Tab. 1）

個々にみていくと，旧石器時代に属する遺跡としては㉔の皆瀬遺跡と本書で報告する上原遺跡がある。皆瀬遺跡は標高20ｍ小森川下流の南面する河岸段丘上に位置し，且って舟底型細石核10数点がまとまって出土したことで知られる。[註1] 只，当該地の土層確認の試掘の結果では明瞭な包含層はすでに消失しているらしい。[註2]

Tab. 1　周辺遺跡地名表

| 番号 | 名称 | 種別 | 時代 | 所在地 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 椿ケ丘遺跡 | 散布地 | 縄文 | 佐世保市黒髪町椿ケ丘 | 1 |
| 2 | 藤原窯 | 窯跡 | 近世 | 〃　〃　6706・6707・6710 | 2 |
| 3 | 北町遺跡 | 散布地 | 縄文 | 〃　針尾北町 | 1 |
| 4 | 牛ノ岳砦 | 山城 | 中世 | 〃　江上町 | 3 |
| 5 | 〃　城 | 〃 | 〃 | 〃　指方町 | 3 |
| 6 | 宮ノ浦遺跡 | 散布地 | 縄文 | 〃　針尾北町宮ノ浦 | 1 |
| 7 | 平松神社遺跡 | 〃 | 中世 | 〃　江上町平松神社 | 1 |
| 8 | 江上支所裏(大刀洗)遺跡 | 〃 | 中世・近世 | 〃　指方町江上支所裏 | 1 |
| 9 | 大刀洗城 | 山城 | 中世 | 〃　〃　小田職業訓練校裏 | 3 |
| 10 | 貴船神社遺跡 | 塚 | 〃 | 〃　〃　〃 | 3 |
| 11 | 指方城 | 平山城 | 〃 | 〃　〃　〃 | 3 |
| 12 | 三日月島遺跡 | 散布地 | 中世・近世 | 〃　〃　〃 | 3 |
| 13 | 三島山遺跡 | 古墳・経塚 | 古墳・平安 | 〃　広田町三島 | 4 |
| 14 | 早岐城 | 山城 | 中世 | | 3 |
| 15 | 稗田窯跡 | 窯跡 | 近世 | 〃　早苗町稗田 | 2 |
| 16 | 広田下窯 | 〃 | 近世・明治 | 〃　広田町760・758の第1大手 | 2 |
| 17 | 上村城 | 山城 | 中世 | 〃　江上町 | 3 |
| 18 | 広田城 | 〃 | 〃 | 〃　広田町 | 3 |
| 19 | 峰ノ前遺跡 | 散布地 | 縄文 | 〃　権常寺町峰ノ前 | 5 |
| 20 | 千人塚古墳前遺跡 | 〃 | 〃 | 〃　〃 | 5 |
| 21 | 千人塚 | 墓地 | 中世 | 〃　〃 | 1 |
| 22 | 梶ノ川A遺跡 | 散布地 | 縄文 | 〃　〃　梶ノ川 | 1 |
| 23 | 梶ノ川B遺跡 | 〃 | 〃 | 〃　〃 | 1 |
| 24 | 皆瀬遺跡 | 〃 | 旧石器～縄 | 〃　〃 | 6 |
| 25 | 金ケ崎城 | 山城 | 中世 | 〃　上原町 | 3 |
| 26 | 上原遺跡(A) | 散布地 | 旧石器～縄 | 〃　〃 | 本書 |
| 27 | 上原C遺跡 | 〃 | 縄文 | 〃　〃 | 1 |
| 28 | 鷹ノ巣城 | 山城 | 中世 | 〃　塩浸町 | 3 |
| 29 | 塩浸城 | 〃 | 〃 | 〃　〃 | 3 |
| 30 | 井手平城 | 〃 | 中世 | 〃　新替町 | 3 |
| 31 | 新替遺跡(A) | 散布地 | 縄文 | 〃　〃 | 5 |
| 32 | 塩浸鉄橋遺跡 | 〃 | 〃 | 〃　塩浸町 | 5 |
| 33 | 観音寺前遺跡 | 〃 | 縄文 | 〃　〃 | 5 |
| 34 | 観音寺遺跡 | 〃 | 〃 | 〃　〃 | 5 |
| 35 | 塩浸遺跡 | 〃 | 縄文 | 〃　〃　383 | 5 |
| 36 | 三川内入口遺跡 | 〃 | 〃 | 〃　〃 | 5 |
| 37 | 長葉山窯(たたら窯) | 窯跡 | 近世 | 〃　三川内町217・又217・218長葉山 | 2 |
| 38 | 吉ノ田奥窯 | 〃 | 〃 | 〃　〃　634・637・638 | 2 |
| 39 | 三川内下窯(新) | 〃 | 〃 | 〃　〃　693―1～10 | 2 |
| 40 | 神林窯 | 〃 | 〃 | 〃　〃　122・123神林 | 2 |

| 番号 | 名称 | 種別 | 時代 | 所在地 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|
| 41 | 小谷窯 | 窯跡 | 近世・明治 | 佐世保市三川内町1099-第1・1101-1～3・1104～1108小谷 | 2 |
| 42 | 杉林窯 | 〃 | 近世 | 〃 〃 1011－1～3・1018杉林 | 2 |
| 43 | 潜石窯 | 〃 | 〃 | 〃 〃 794付近潜石 | 2 |
| 44 | 三川内東窯 | 〃 | 〃 | 〃 〃 1561－1～20又1561金剛辻板谷 | 2 |
| 45 | 山の神窯 | 〃 | 〃 | 〃 〃 1550金剛土板谷 | 2 |
| 46 | 三川内西窯 | 〃 | 〃 | 〃 〃 912－1～15中通 | 2 |
| 47 | 上両千西窯 | 〃 | 明治 | 〃 〃 又1309上両千 | 2 |
| 48 | 上両千東窯 | 〃 | 〃 | 〃 〃 1362・1363・1364－2上両千 | 2 |
| 49 | 新行江A遺跡 | 散布地 | 縄文 | 〃 新行江町 | 5 |
| 50 | 新行江遺跡 | 〃 | 縄・中世・近世 | 〃 〃 1357 | 5 |
| 51 | 江永西窯 | 窯跡 | | 〃 江永町610－1～22，611・612江永口 | 2 |
| 52 | 江永古窯 | 〃 | 近世 | 〃 〃 896-第1・第2・898～900・909・309-8横谷 | 2 |
| 53 | 江永東窯 | 〃 | 〃 | 〃 〃 640・644・又644出口谷 | 2 |
| 54 | 牛石窯 | 〃 | 〃 | 〃 新行江町862・863・828・559－第3下牛石 | 2 |
| 55 | 地蔵平西窯 | 〃 | 〃 | 〃 木原町2002・2006～2008 | 7 |
| 56 | 木原西窯 | 〃 | 〃 | 〃 〃 1782 | 2 |
| 57 | 谷窯 | 〃 | 〃 | 〃 三川内町1761・1774～1781釜の谷 | 2 |
| 58 | 木原東窯 | 〃 | 〃 | 〃 木原町1725～1・2，1727～1733観音平 | 2 |
| 59 | 木原下窯 | | 近世・明治 | 〃 〃 1803～1807窯の谷 | 2 |
| 60 | 庵の横窯 | 窯跡 | 近世 | 〃 〃 2005・2006地蔵平 | 2 |
| 61 | 庵の前窯 | 〃 | 〃 | 〃 〃 1926・1928皿山 | 2 |
| 62 | 地蔵平東窯 | 〃 | 〃 | 〃 〃 1941～1944・1955～2001地蔵平貉谷 | 7 |

縄文～弥生時代に比定される遺跡としては一応16ケ所が周知されているが，何れも表採資料による判断であり，土器についても一部で少量の弥生土器が出土したという記録[註3]のみで，内容解明には程遠いのが現状である。今後の調査に負う所が大といえる。

古墳時代の明確な遺跡は当該地附近では只13の1ケ所を除いて[註4]知られていない。早岐瀬戸を中心とする一帯は，現地形でこそ平坦部を随所にみる事が出来るが，それらは早岐新田（慶安二年，1651年），宮崎新田（同年），大手原新田（宝永二年，1705年），小田新田（文化元年1804年）等，何れも江戸初期以降始まった干拓の結果によっている[註5]。つまり古墳時代にあっては，未だ平地が少なく生産の為の十分な後背地に乏しかった地形的な要因によるものかとも思えるが確証は無い。

平安時代以降の遺跡としては，13，三島山遺跡が知られている。往時は名の如く針尾瀬戸に浮かぶ小島であるが，砂岩地山を切り込んだ小ピット内より滑石製経筒と共に胡州鏡，合子等が出土している。時期としては平安末頃～鎌倉時代に比定されている[註6]。

中世末，戦国期から近世初頭にかけては，各所に山城が築かれた時期である。当該地周辺が松浦氏，大村氏，そして佐賀の諸氏などとの勢力分岐点に当ることからそれぞれの有力な橋頭

Fig. 5　金ケ崎城図（文献３より転載）

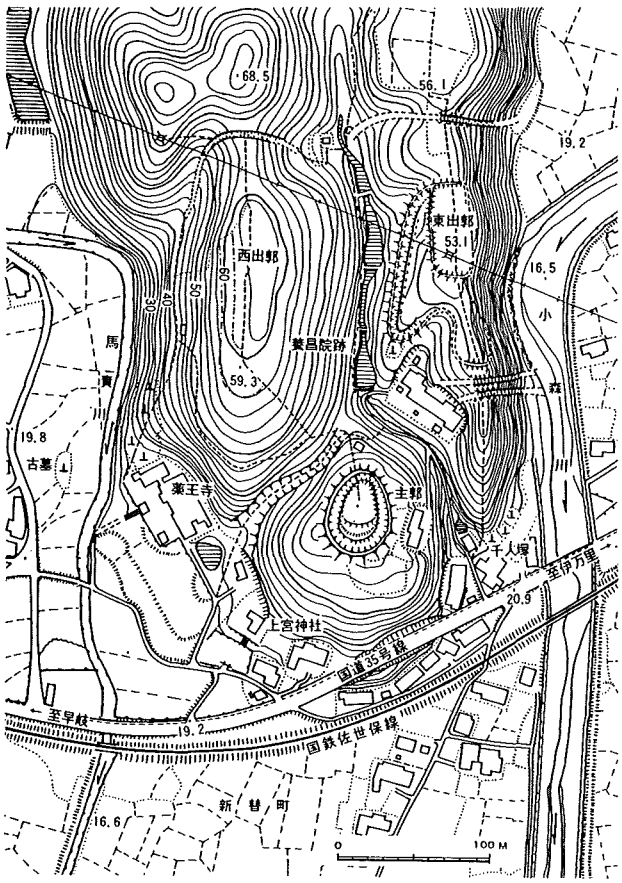



Fig. 6　井手平城図（文献３より転載）

堡になり得る地勢を備えていた事による。

これらを物語る史実として30の井手平城合戦がある。（Fig. 6）天正14年（1586年）城を守る松浦氏と所領奪還を計る大村・有馬・波多氏連合軍の間に壮絶な戦いが繰り広げられ，結果守備兵300名全員討死落城という戦国悲話が残されている。[註7]

現在佐世保市を代表する特産品として三川内地区の陶磁器生産があげられるが，その前身は江戸初期までさか上る。

元々佐賀県唐津，あるいは隣接町の有田の強い影響の下に発達したものであるが，以後江戸中期，後期，明治，大正，そして今日まで連綿としてその伝統は保持されている。

窯跡そのものは三川内地区のみで29基残存している模様であるが，調査の結果によると，地域的に３群に分かれているという。すなわち木原地区（54～62），江永地区（51～53），そして三川内地区（37～48）がそれである。それら各々の特徴については文献２，７に詳しいのでここでは触れない。

（高野）

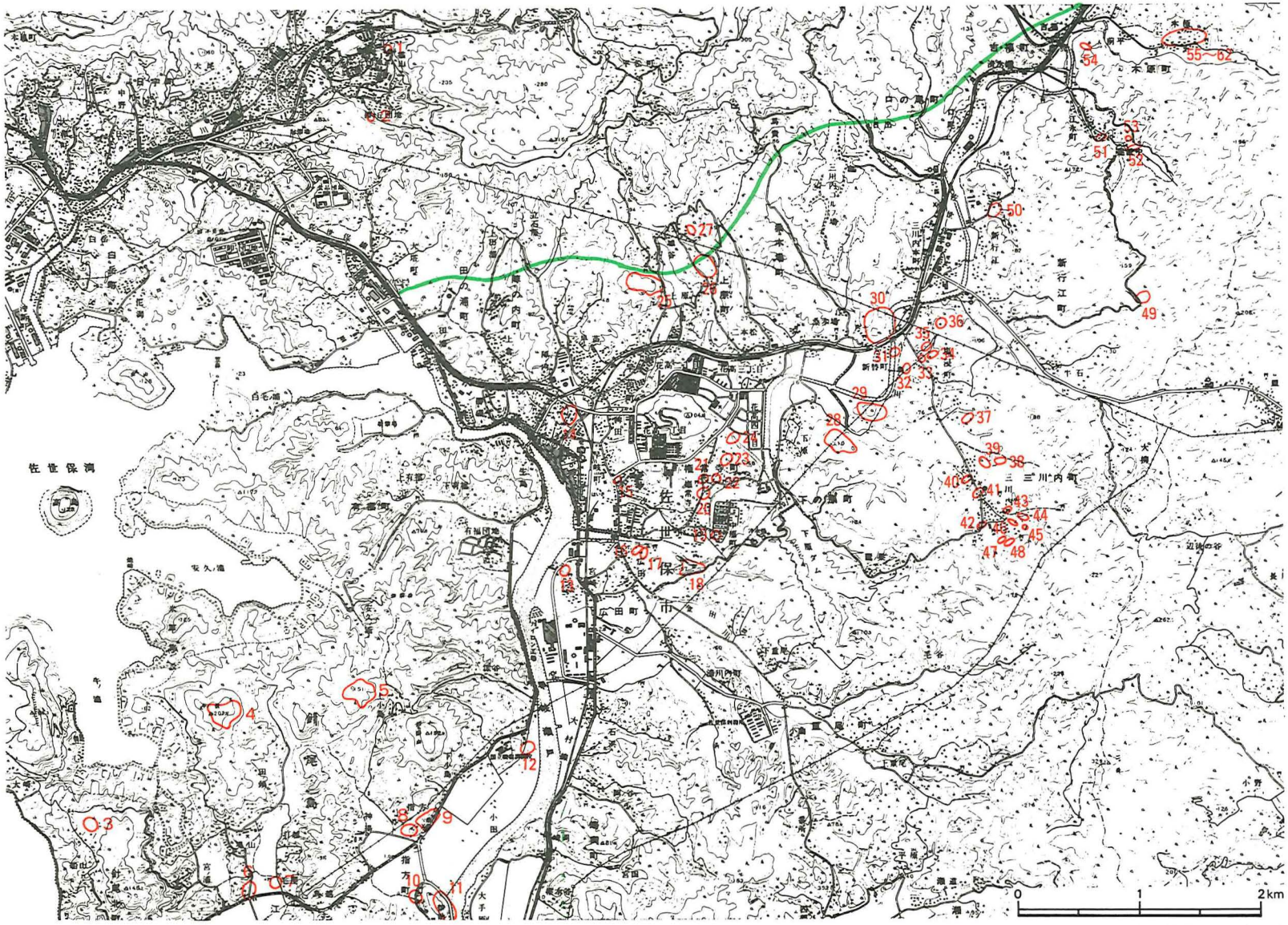



Fig. 7　周辺遺跡図（1/5000）

註1　文献6　26頁

2　久村貞男氏教示

3　文献5所収,「東彼杵郡折尾瀬村誌」の第3節古文書古器物の中に記載されているという。

4　文献4，追記の中に古墳時代と思われる石棺が出土した旨記述してある。

5　吉富一　「佐世保近郊の地形と人生」 183頁昭和47年　只，早岐瀬戸そのものが元々針尾島と本土とを隔てる狭い水道であった事は疑い無く，それが原因で起る潮の干満時の激しさを肥前風土記では「速来門」として説明している。

6　文献4

7　松浦家文書「印山記」に井手平合戦の事として記載されている。山口文庫蔵

# II　遺跡の調査

## 一、層位（Fig. 8～Fig. 14）

図示する土層図は，Ａ地点ではＣ列北壁，Ｇ列北壁及び10列の東壁，Ｂ地点ではＩ列北壁と28列の東壁である。(Fig. 10～14)

基本的にはＡ地点，Ｂ地点共同様な色調と堆積状況を示すが，Ｂ地点の方がＡ地点に比して礫が少なく又整然としている。

当該地の表層地質図（Fig. 9）[註1]をみると，上原の台地は遺跡中央を南北に走る道路を境として，西側（Ａ地点）は洪積世の段丘堆積層である砂礫・粘土が中心であるのに対して，東側（Ｂ地点）は杵島（西彼杵）層群に属する波多津頁岩層とされ，泥岩・砂岩薄互層が表層を覆っている。調査の結果では，Ａ地点はII・III層共に特に風化礫が多いのに比してＢ地点ではIII層に到るまで殆ど礫をみない区域がある。

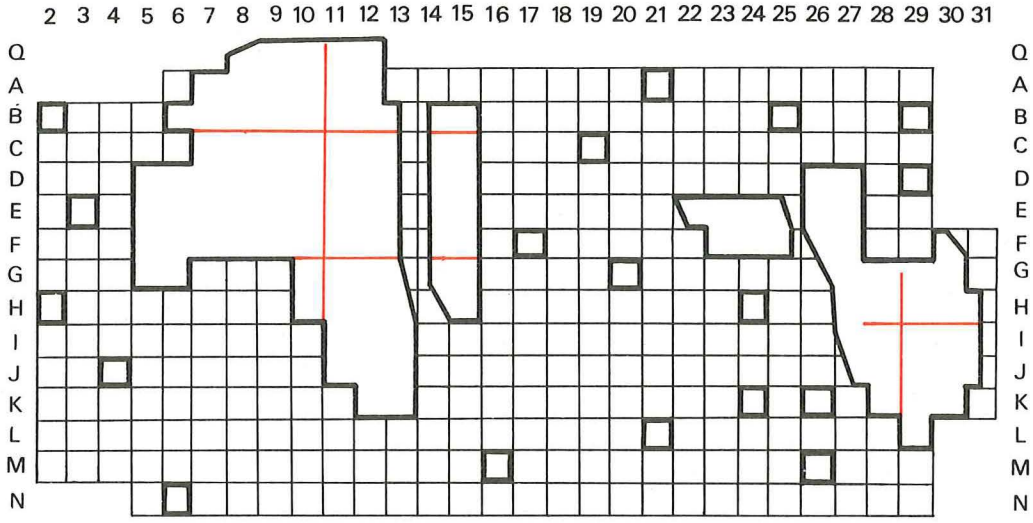



Fig. 8　掲載土層位置図

各層位の説明をしておきたい。

Ａ地点……Ｉ層表土耕作土（暗褐色土），II層赤褐色粘質土で遺物包含層。10～40cm程の厚みを有するが，大小の礫を多く含み，部分的に乱れた堆積状況を示す。更に細分が可能な地点もあるが，基本的に同じ土層として認識している。出土遺物はナイフ形石器から縄文時代の資料が混在するが，土器片は殆ど砕片であり，時期を特

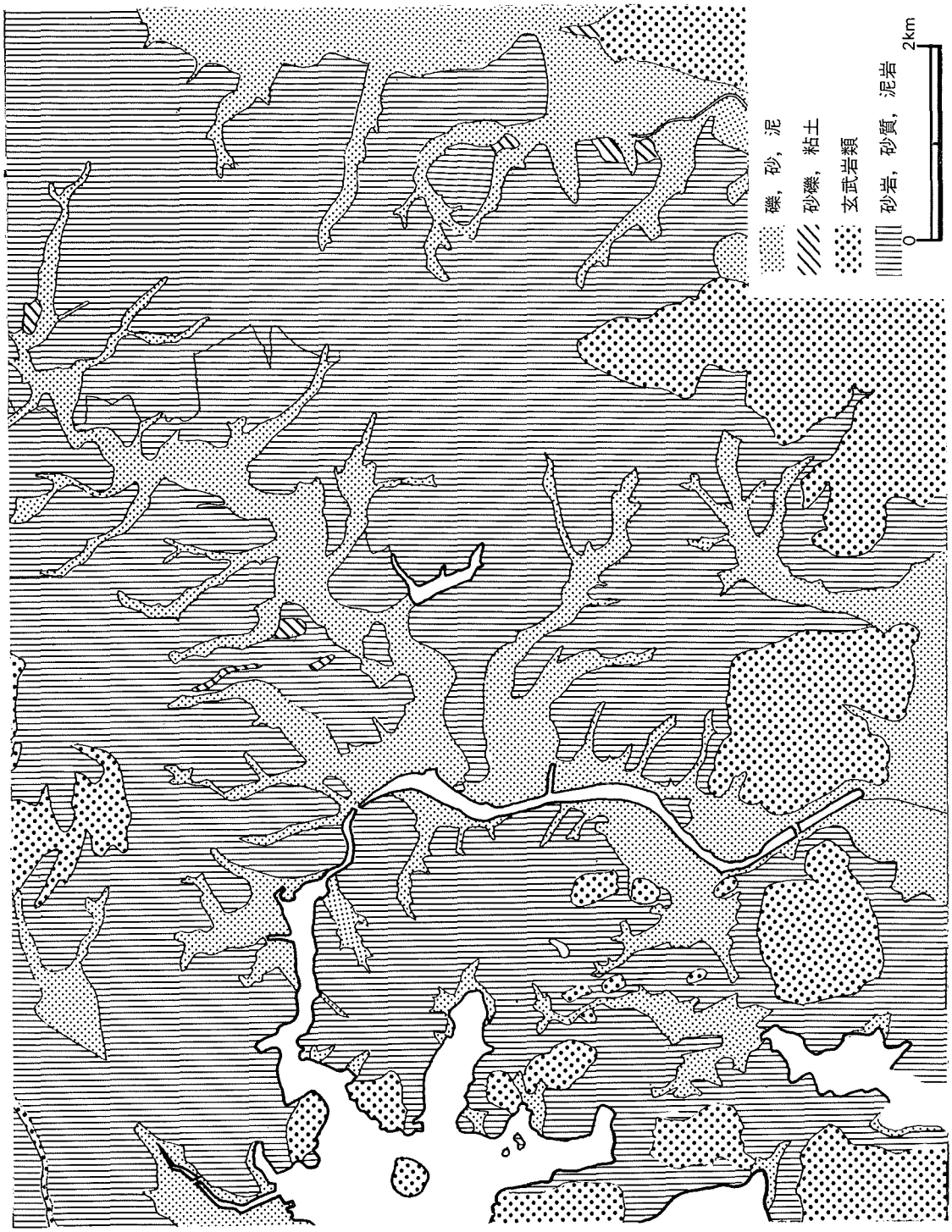



Fig. 9　遺跡周辺表層地質図

（長崎県土地分類基本調査図（早岐）より転載）

定し得る例が少ない[註2]。Ⅲ層黄褐色粘質土。所謂地山で大小の風化礫を多く含む。無遺物層・Ⅲ層以下は，更に風化礫が大部分を占める赤味の強い土質に変化する。

B地点……Ⅰ層表土耕作土（暗褐色土），Ⅱ層赤褐色粘質土。遺物包含層で整然としており層に殆ど乱れがない。只，同じB地点でも，E—24，25，27区あたりを中心とする北側部分と，H，I，J区の28，29，30地点あたりを中心とする南側部分では若干様相が異なる。すなわち前者にはⅡ層中にやはり多くの小礫を含むが，後者には殆ど含まないという相違である[註3]。層の厚さも前者は20～30cm程と薄いのに対して，後者は40～60cm程と厚くしかも一定している。出土遺物に時期的な差異は見い出せないが，遺物の出土密度からみると，B地点は更にブロック別に分けられよう。Ⅲ層黄褐色粘質土。粘性が強く厚さ40cm程堆積する。遺物は全く含まない。部分的な試掘によると，この層の下には色調はあまり変らないが風化礫を含む層が現われる。Ⅳ層としたが無論無遺物層である。　（高野）

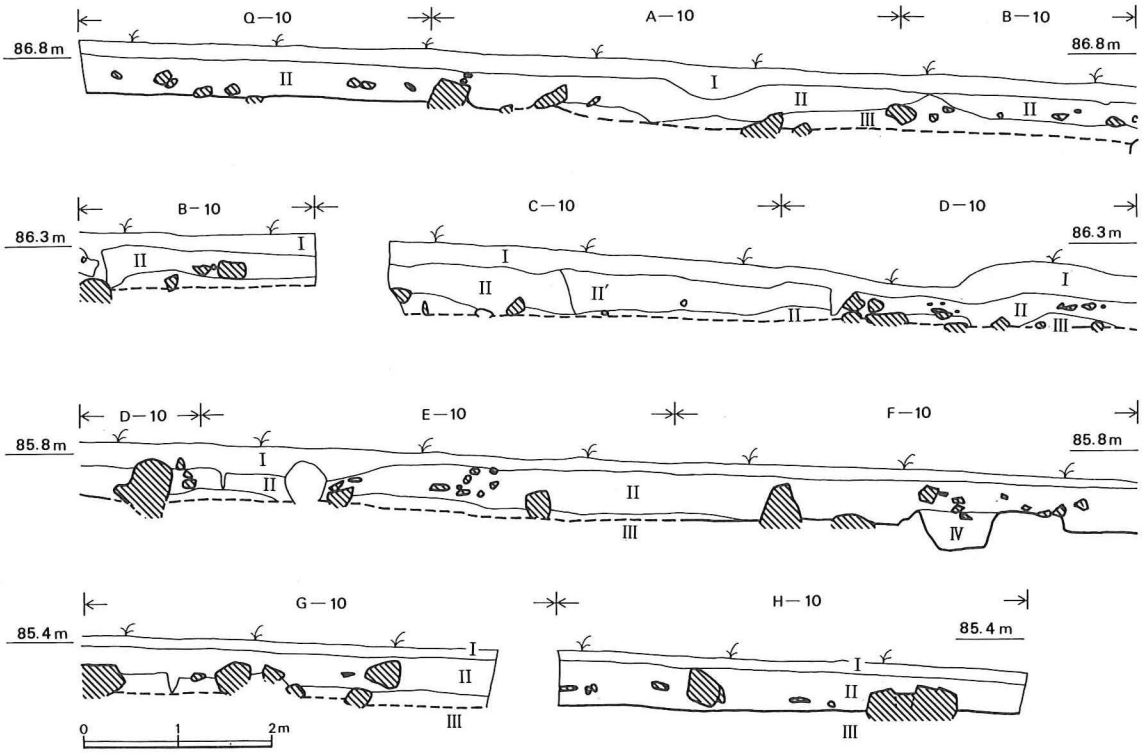
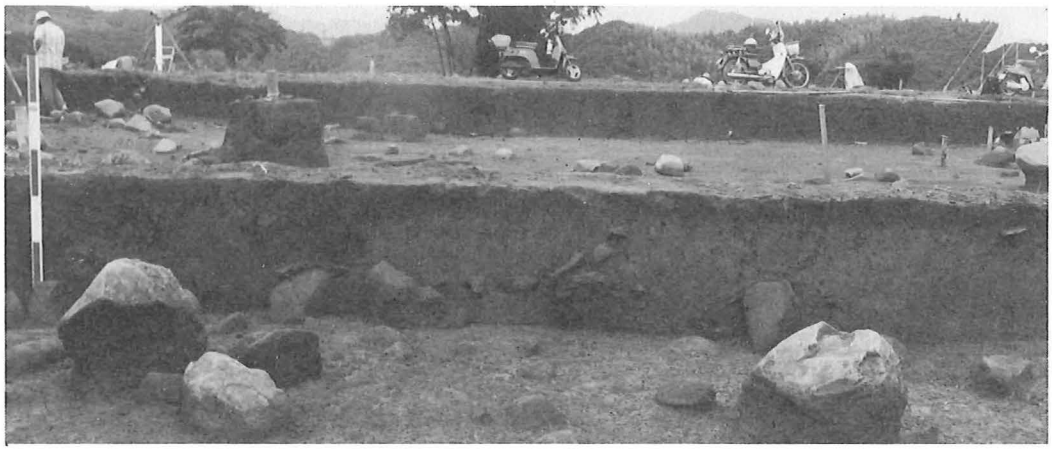


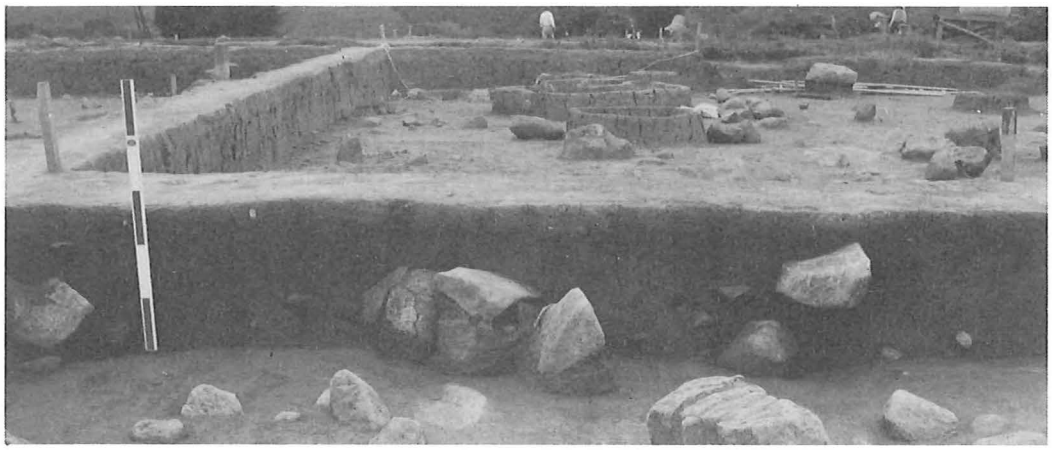

Fig. 10　A地点10列東壁土層図（1/80）

PL. 3



E－10 区 東 壁

F－10 区 東 壁



G－10 区 東 壁

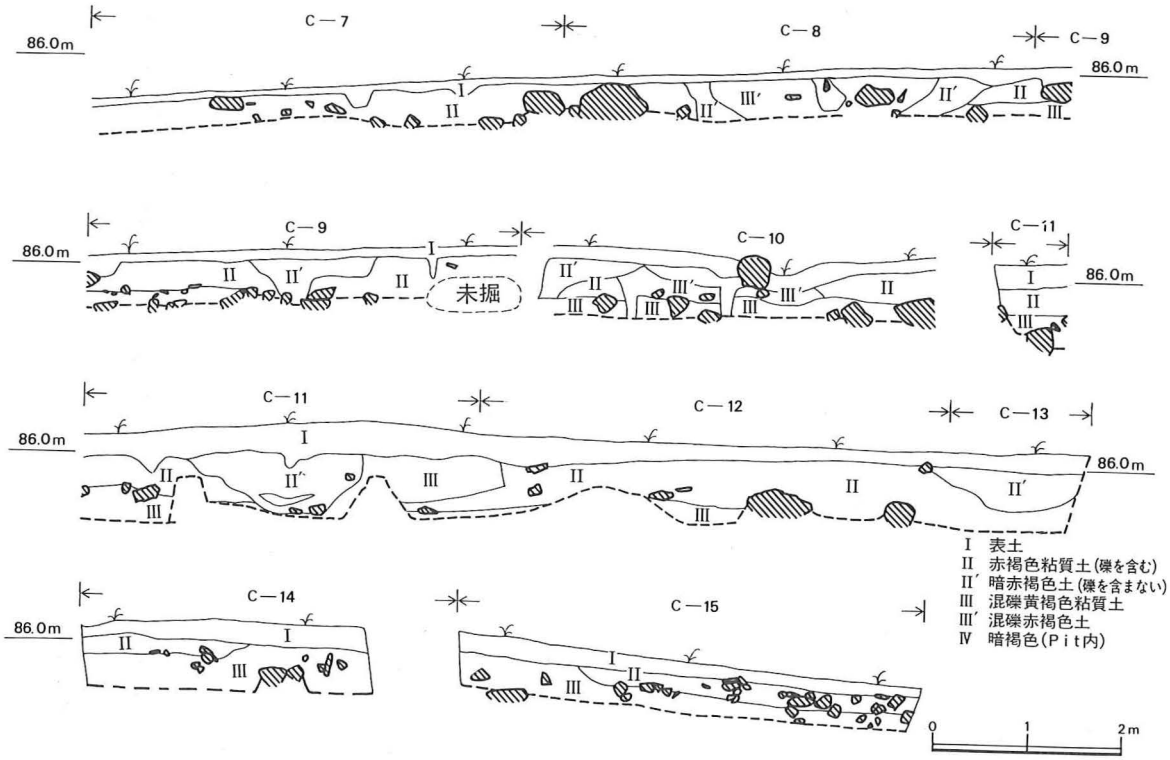



Fig. 11　A地点C列北壁土層図 (1/80)

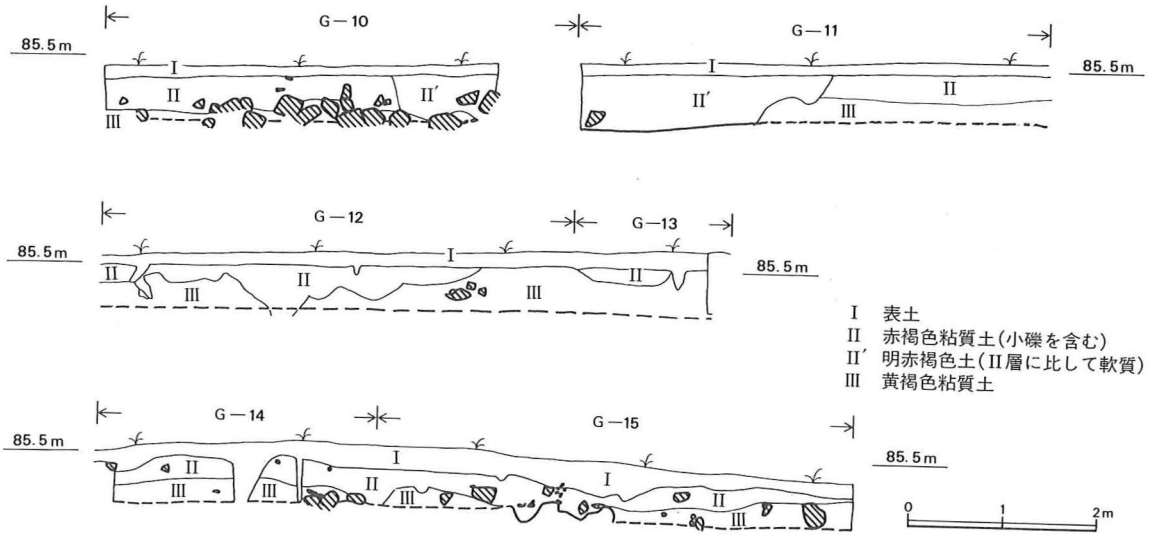
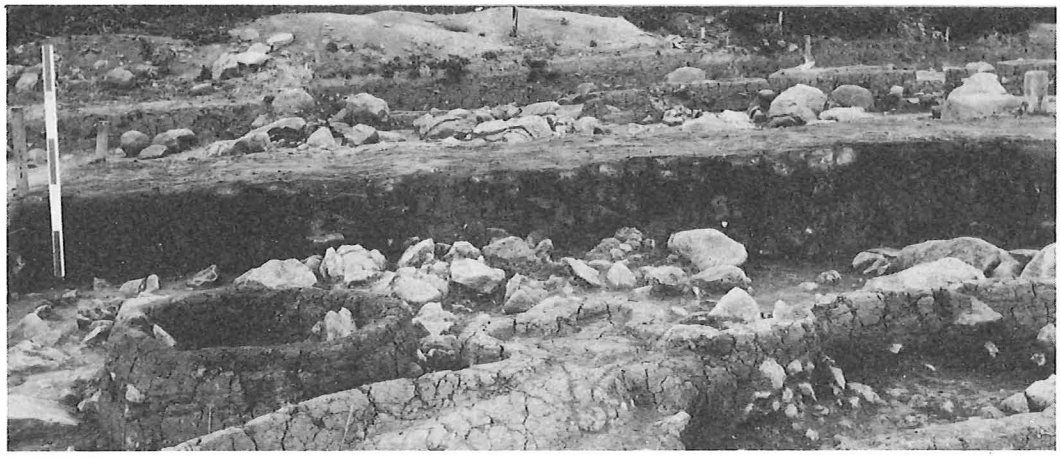


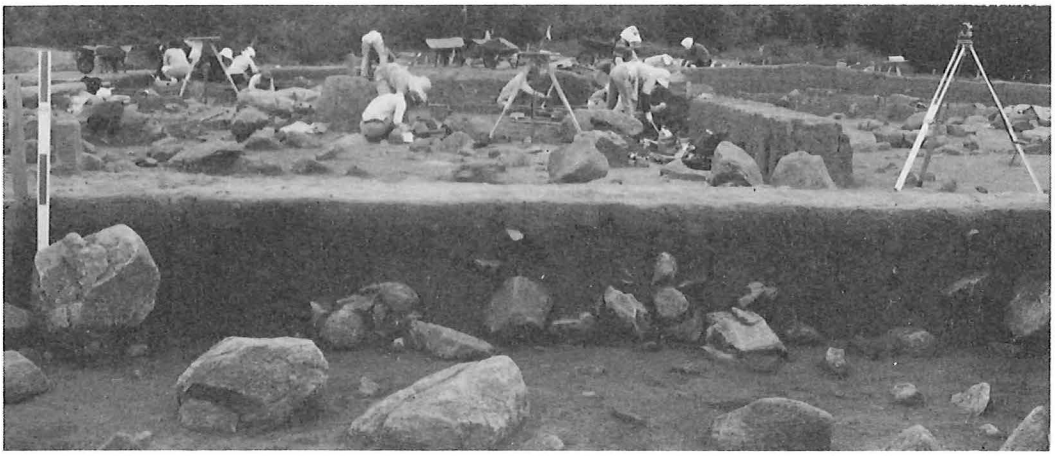

Fig. 12　A地点G列北壁土層図 (1/80)

PL. 4



C－7 北 壁

C－11 北 壁



G－10 区 北 壁

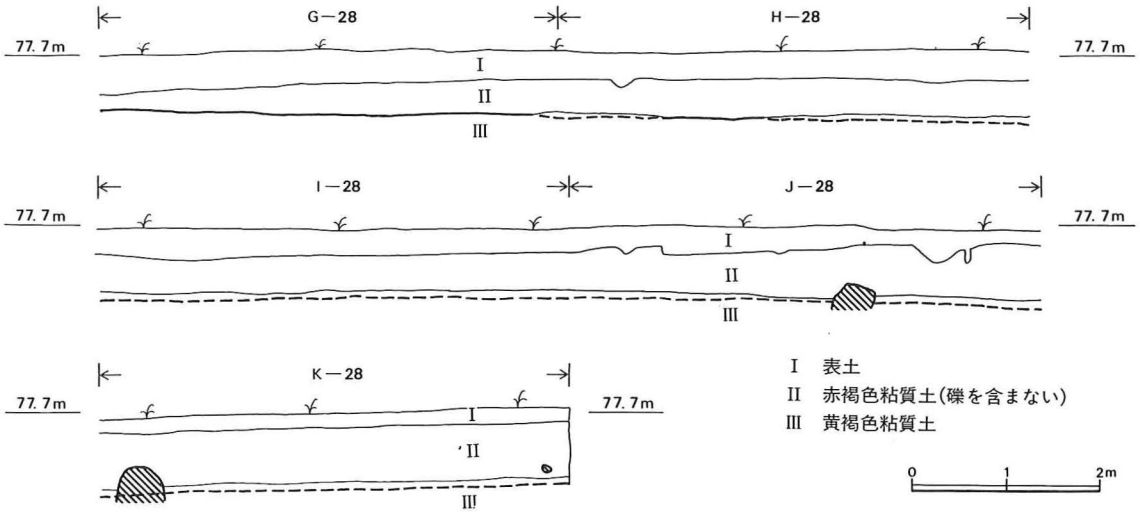
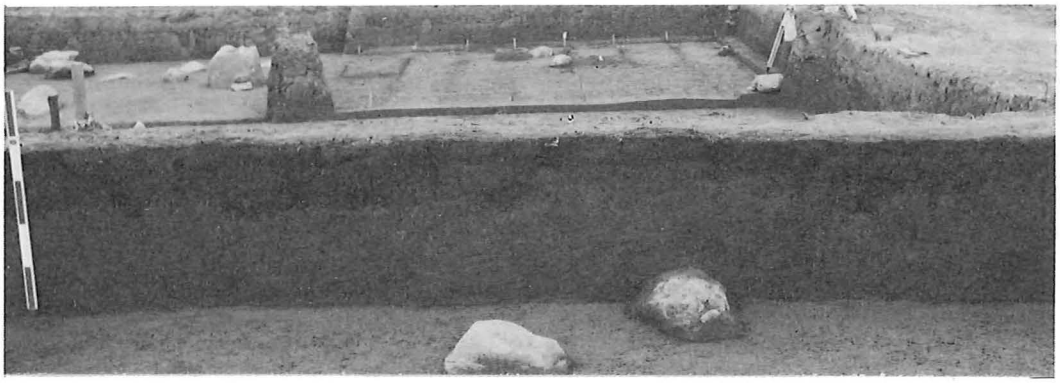



Fig. 13 B地点28列東壁土層図 (1/80)

PL. 5



J－28 東 壁

H－28 東 壁

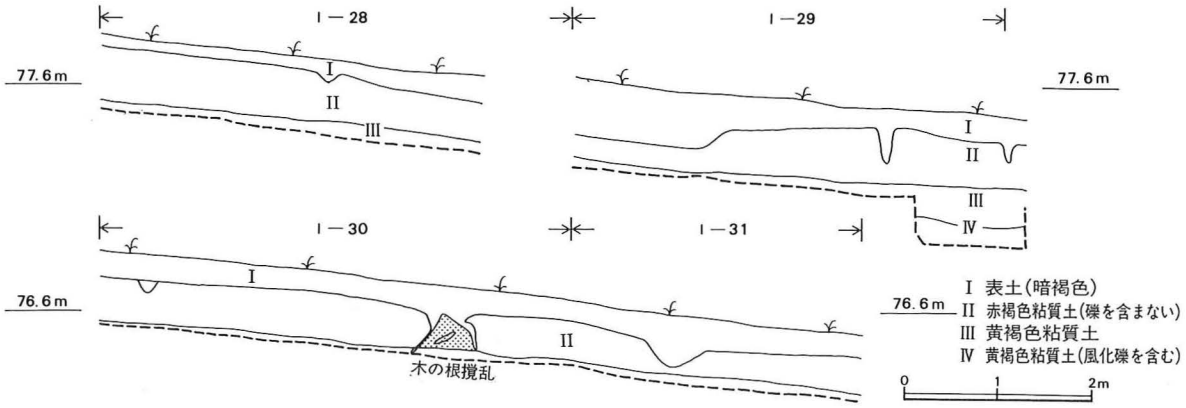
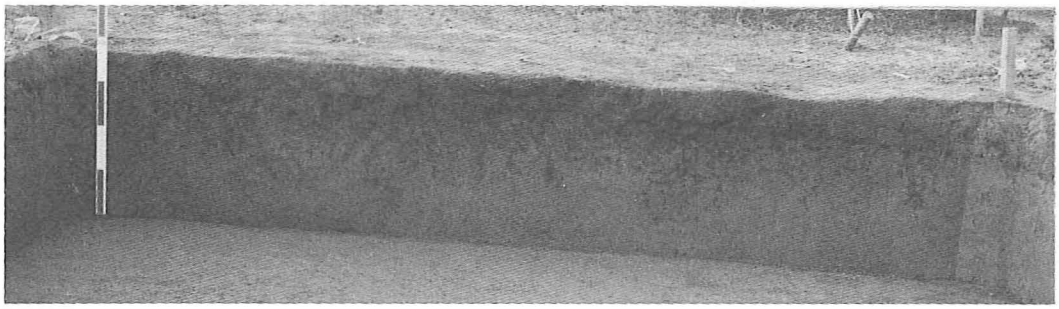
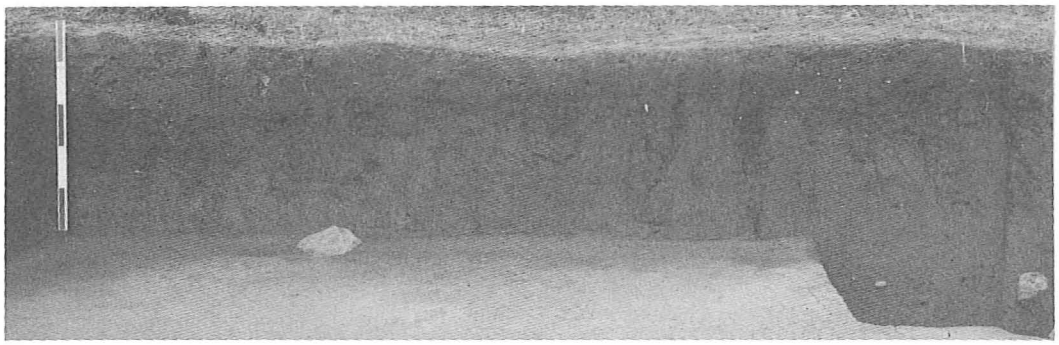



Fig. 14　B地点I列北壁土層図 (1/80)

PL. 6



I－28 北 壁



I－29 北 壁

註1　長崎県土地分類基本調査「早岐」　長崎県　昭和51年

2　出土炭化物の$^{14}$C測定を依頼中であるが，結果が出るのが昭和61年3月末であり本書刊行に間に合わない。いづれ何らかの形で報告したい。

3　H－28西壁の土壌をサンプリングして花粉分析を依頼した。結果については第V章に掲載する。

## 二、遺　構

前章で述べた如く，調査区全般にわたって様々な遺構が検出された（Fig. 15）。その大部分は，近年の耕作による大小不規則なピットであり，相互の脈絡が不明瞭な点が多かった。結果的に性格不明のピットが大部分ということになった。

以下特徴的な遺構について説明を行いたい。

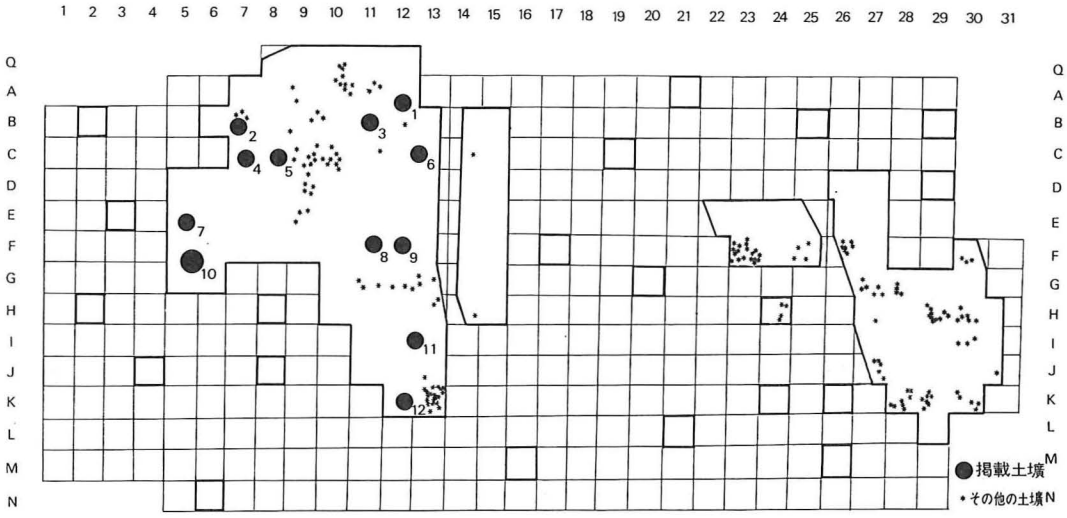



Fig. 15　土壙位置図

### 1号土壙（Fig. 16, PL. 7）

A—12・13区にまたがる遺構で長軸2m50cm，短軸1m80cm，深さ70cmを測り，東西に長い不定形を呈する。土壙内からは，2点の黒曜石片と，土壙中央部付近に上部から下部まで炭化物が集中し，特に下部の方により多く集中する傾向が強い。又，内部充填土をふるいにかけたところ，炭化物片とともに微細チップが多量に出土するなど，他の土壙とは様相を異にし，その充填土もかなり安定したものを持っているため，旧石器あるいは縄文期における遺構として捉えられるものと考える。このように安定した遺構は，6号土壙においても認められ，近接するこの2つの遺構がなんらかの時間的同時性を持つ可能性もある。

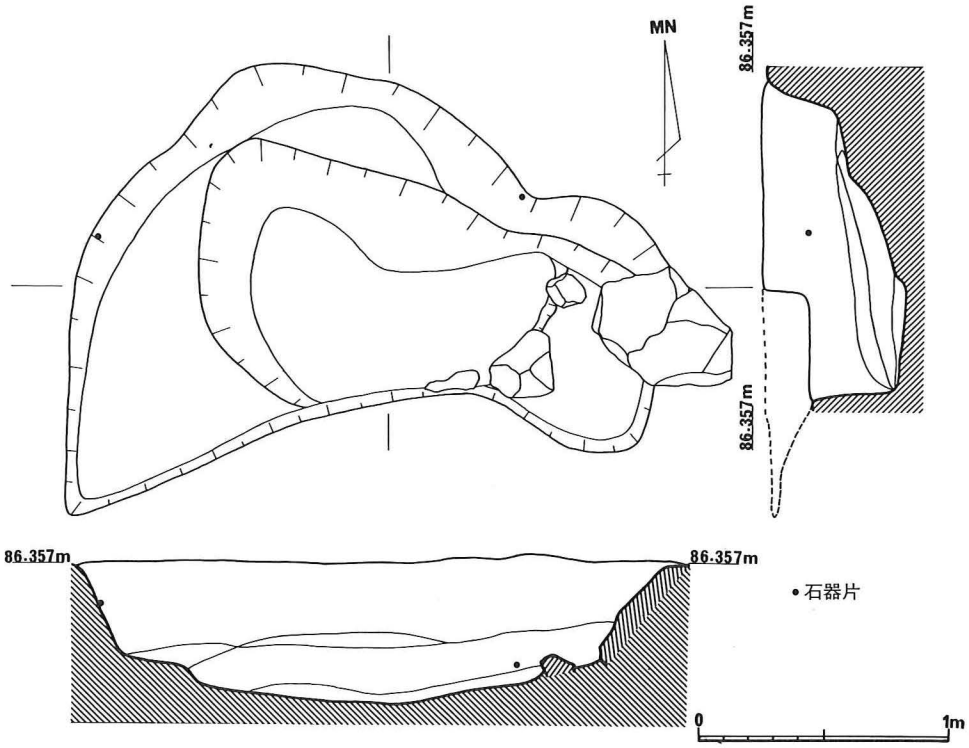



Fig. 16　1号土壙図 (1/30)

PL. 7

2号土壙 (Fig. 17)

2号については，3つの土壙を一括して取り扱ったが，これら3つの土壙は近接し，その性格も同様なものと思われるため一括して扱った。3つの土壙は，プラン検出の際，上部に小さな角礫が散乱し，プラン上部にのるような形で出土し，内部はフカフカの灰白色土が充塡しており，2つのものについては内部に20～40cm大の安山岩礫を含んでいた。西側の土壙は，2段構造となり，深度40cm余を測るもので，周囲に40cm大の礫，内部にも20cm大の礫が入り込んでいた。他の2つの土壙は深度30～40cmでプランは50cm×50cm，もう一方は80cm×50cmとほぼ同様な形状をしており，一つの方には安山岩礫を含んでいた。この3つの時期についてはその充塡土の在り方から，後世における所産として考えられ，特に10号の溝状遺構などとの結びつきが強いものと思われる。

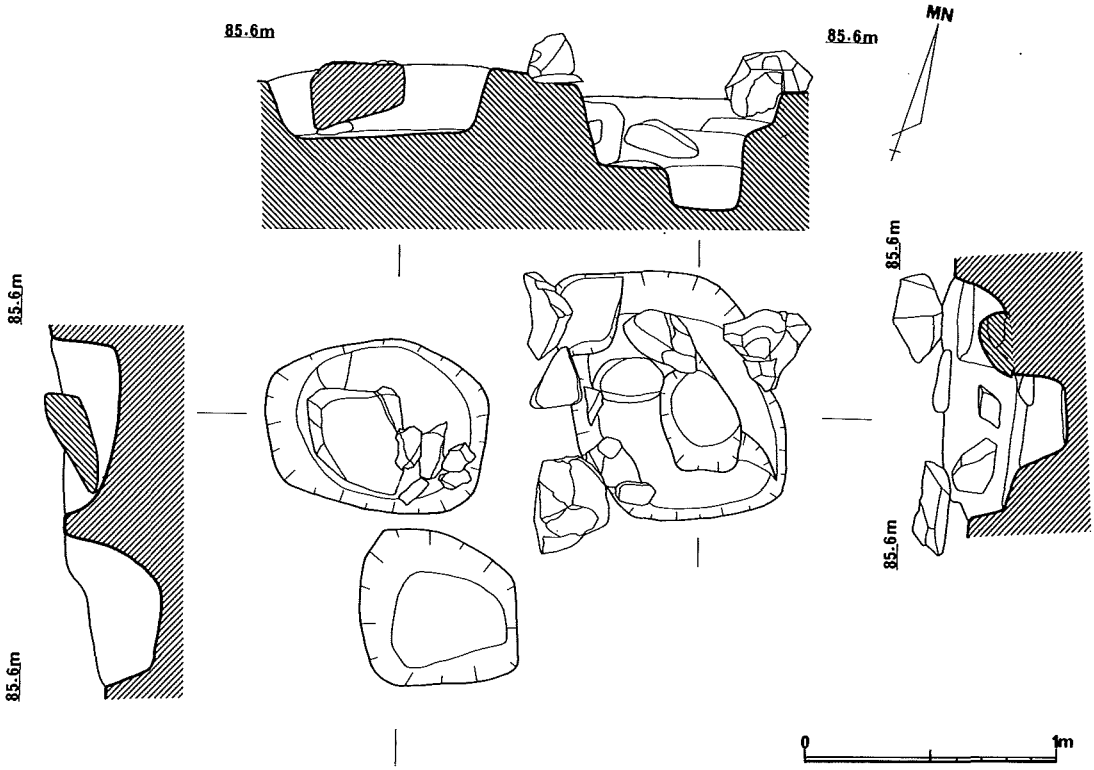



Fig. 17　2号土壙図 (1/30)

3号土壙（Fig. 18）

II層上面より20cmのところで確認されたもので，主軸を北西―南東に取り，灰白色度が充塡していた。長軸８ｍ余，短軸５ｍを測り，不定形を呈するもので，中程で２段構造となる。深度は，各々の段が10cmを測るが，南西側の土壙は，深さ１ｍで袋状になり，充塡土も灰黒色を呈する点，この土壙が，全体の遺構に付属するものなのか，あるいは単独で，別の時期に形成されたものか判然としない。この遺構内からの遺物の出土はなく，性格及び所属時期についても不明である。

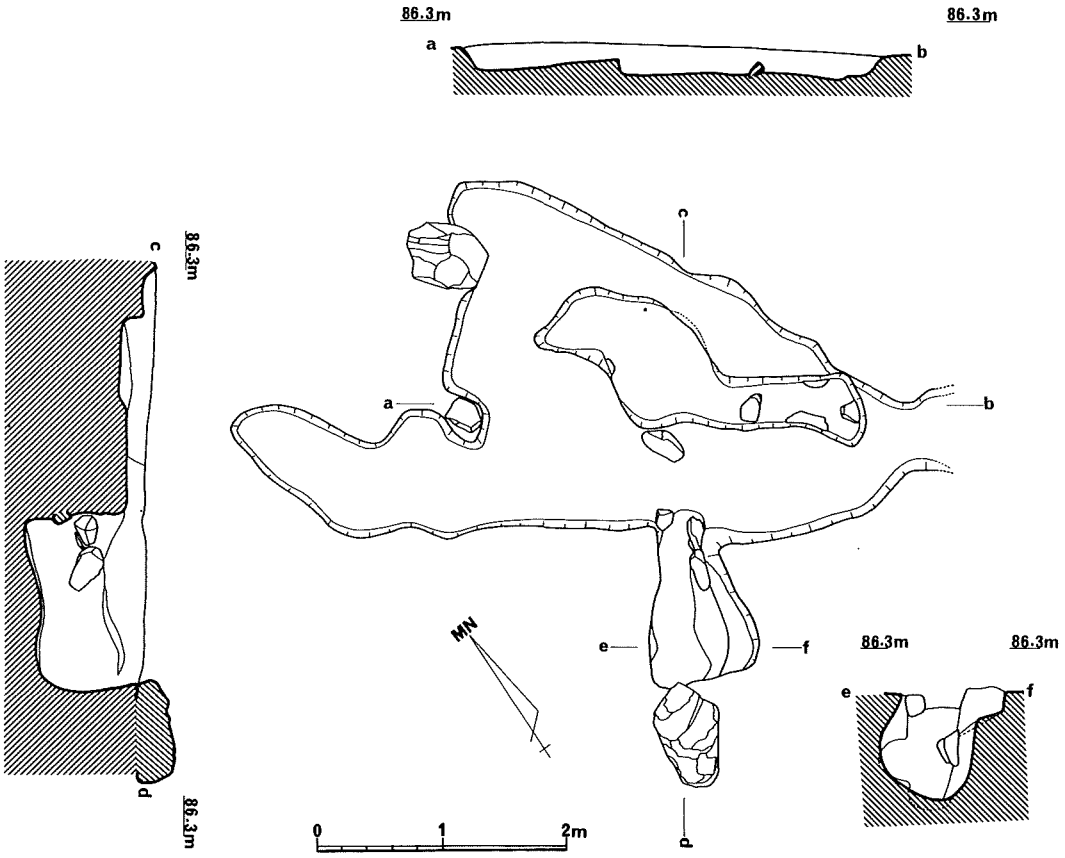
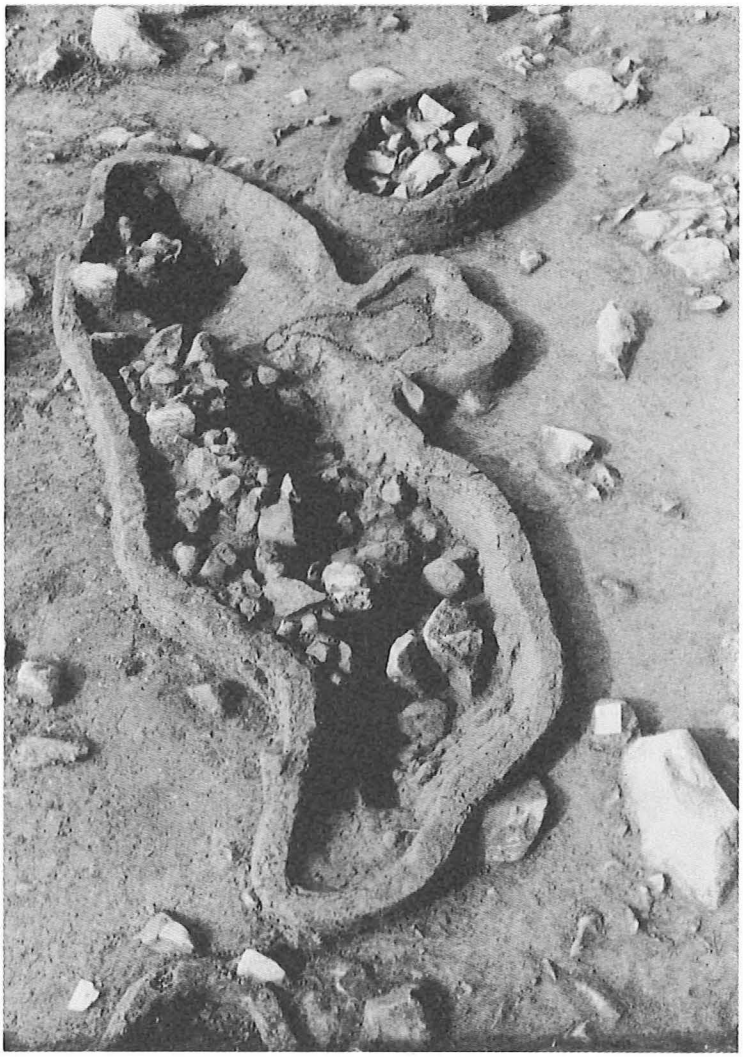



Fig. 18　3号土壙図（1/60）

**4号土壙**（Fig. 19, PL. 8）

長軸を東西にもつもので，長さ３ｍ，幅１ｍ50cm，深度30cmを測る。II層下10cmのところで確認し，土壙内は灰白色の充塡土と，小礫が認められ，小礫はすべて安山岩の角礫で構成される。遺構西側に舌状に突きでた部分には，炭化物，焼土が集中し，火を使用した床面と思われる部分が見られる。遺構全体においては，炭化物，焼土などは確認されず，この部分を焚き口とする施設ではないかと思われる。内部充塡土はフカフカしており，角礫も後に投げこまれたと見え，礫自体浮いた状態で出土している。北側の小土壙も同様な状態であり，この小土壙は，礫を投げ込むために設けられたものであろう。

PL. 8



C－7

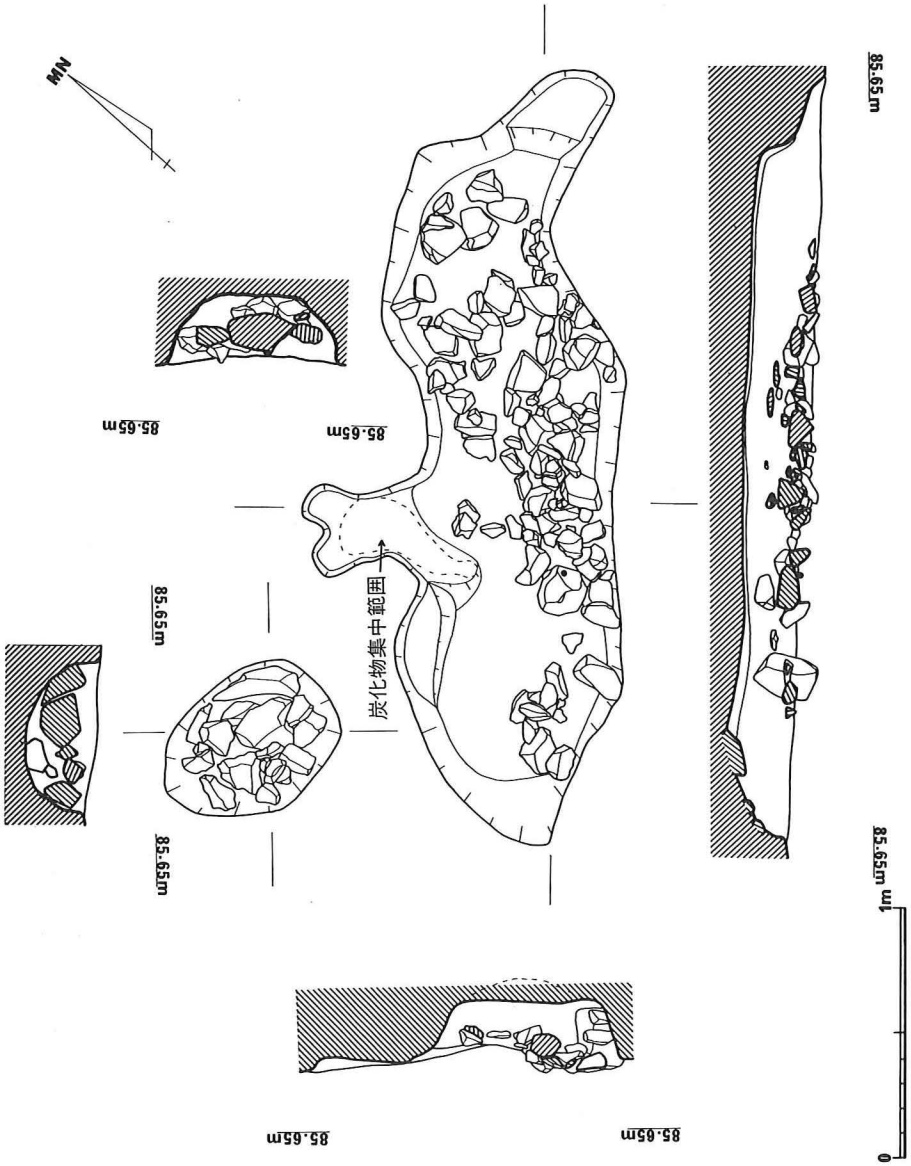



Fig. 19　4号土壙図（1/30）

**5号土壙**（Fig. 20）

長軸を北東―南西にもち，長楕円形状のプランを呈し，南西側は途中で切れた状態にある。内部からは黒曜石片，土器片が出土したものの時代の決め手となる資料に欠き，遺構の充填土も，不明瞭な灰黒色土でなる。内部には安山岩礫が入り込み，南側では2段構造となるものの，遺構の床面は判然としない点があり，後世の撹乱を受けたことも考えられる。遺構の状況は，

３号土壙と類似し，遺構の性格についても不明確である。平面プラン形状は，長軸３ｍ50cm，短軸１ｍ80cm，深度20～40cmを測る。

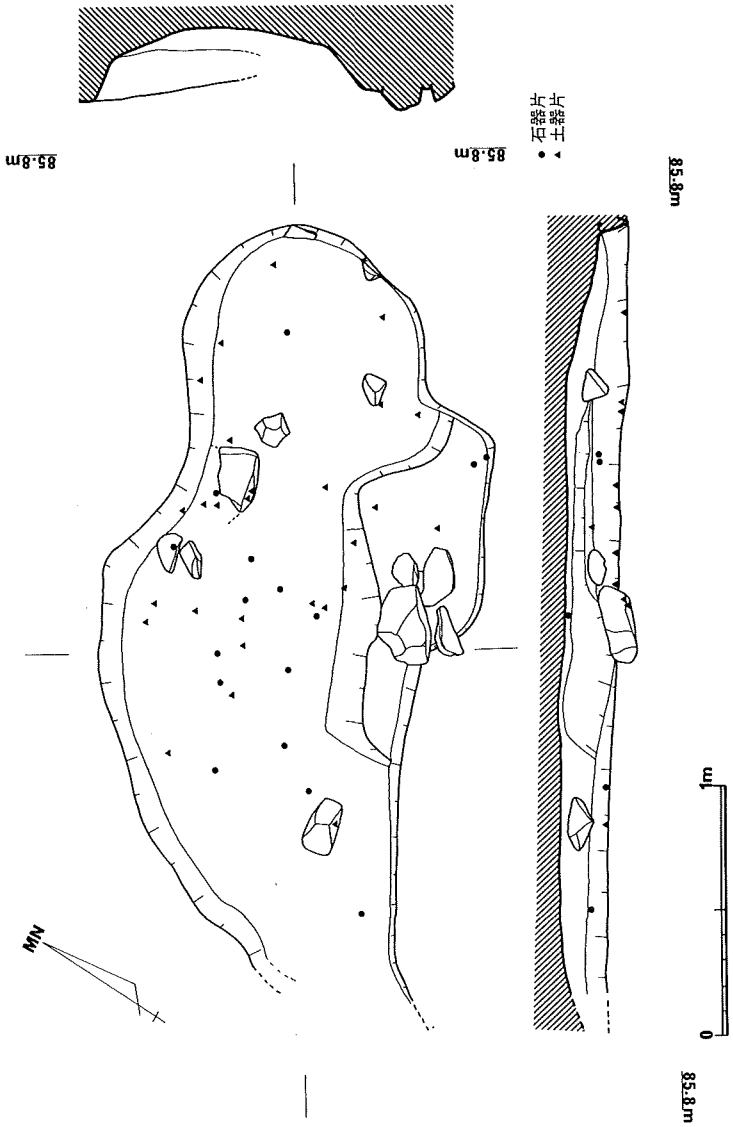



Fig. 20　5号土壙図（1/30）

6号土壙（Fig. 21）

A地点北東側隅II層下20cmのところで確認されたもので，灰黒色土が充塡。プランはしみ状を呈して，東西を軸とし，内部からは，多量のチップ片が出土した。炭化物の出土はなかったものの，1号土壙と性格的には類似しており，内部充塡土の状態などは，かなりしまりをもち，内部の遺物の出土状況などからも，2，4，7，12号土壙とは，その所産の相違が伺える。しかし，土壙内からは，Tool 及び土器の出土はないため，旧石器時代に属するのか，縄文時代に属するのかは判然としない。土壙の状況としては，1号土壙に通ずるものがあり，その時期的判別は別として，古い時期の土壙として捉えられよう。長軸3m50cm，短軸1m，深度30cmを測る。

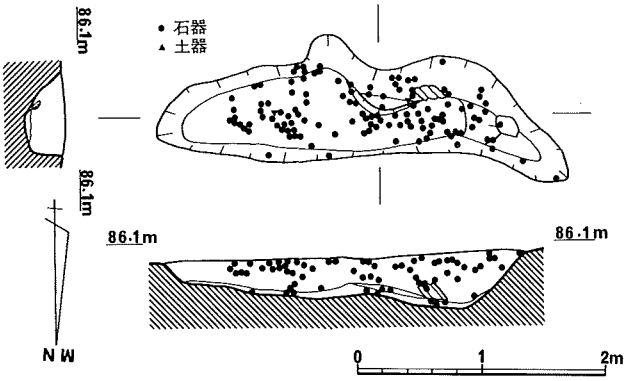



Fig. 21　6号遺構（1/60）

7号土壙（Fig. 22）

4つの土壙を一連のものとして一括したもので，4つの土壙は半孤状に並んで形成され，各々安山岩角礫を含んでいる。特に西側から2番目の土壙は，10cm～20cmの角礫を土壙内全体に投げ込んでおり，上部は詰まった状態にあるが，下部はフカフカの土が詰まり，後に投げ込まれた状態を呈する。南側の土壙は他のものに比べ，不定形を呈し，底部床面も凹凸が激しく，充塡土も灰白色のしまりのない土であったため，後世の所産であろうと思われる。これら4つの土壙内から遺物の出土はなかったものの周辺からは江戸期の磁器類が出土しており，10号の集石遺構との関連の中から江戸期のものとして捉えられよう。またその性格としては，畑などを耕作する際の石などを集めるための施設と考えられる。

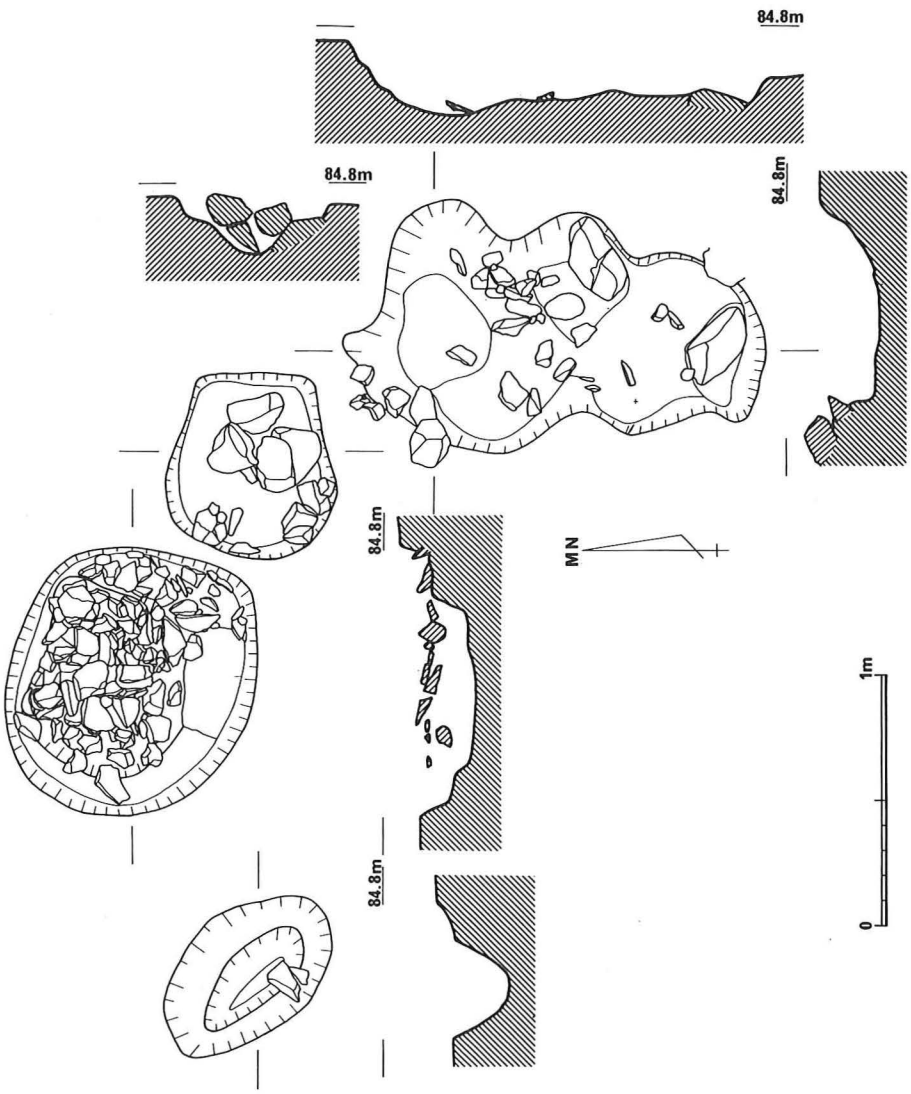



Fig. 22　7号土壙図 (1/30)

**8号土壙** (Fig. 23)

長さ2m80cm，最大巾1m，深さ0.2～0.4mの不定形を成す。西側と南北の立ち上りは急で東側はゆるやかとなる。

表土下30cm，II層中からの切込みである。ピット内は更に2，3の段がつくが，地山にくい込む自然礫も含まれる。

覆土内より十数点の黒曜石の石器片が出土しているが何れもフレークとチップであり定形石器はない。

その他，焼土，炭化物共に見当らずその性格は不明である。

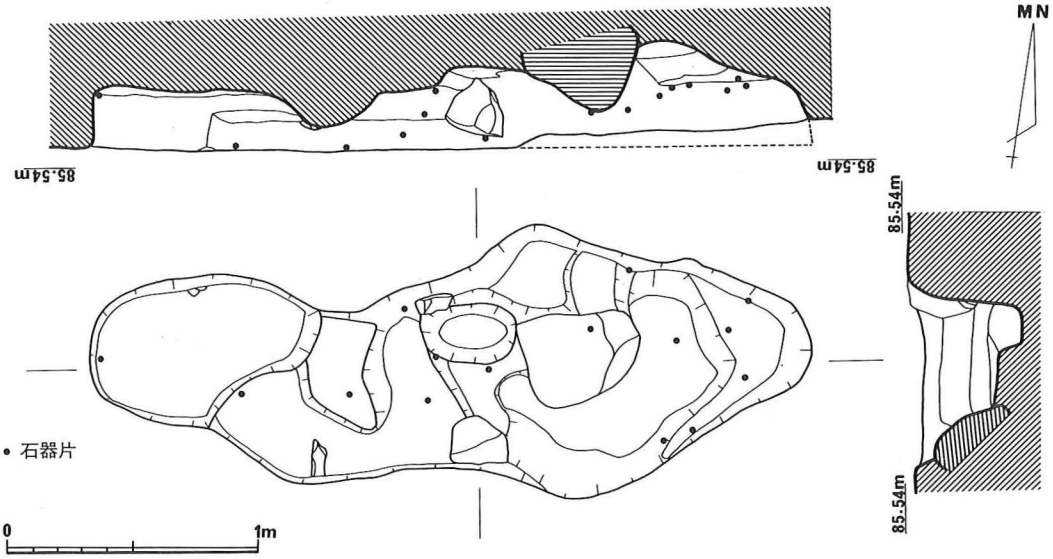



Fig. 23　8 号土壙図 (1/30)

9 号土壙 (Fig. 24, PL. 9)

PL. 9

F－12

F—12区のほぼ中心に位置する。長さ約2.5m，最大巾0.7m，深さは0.15～0.2mの浅い半馬蹄形を成す。地山のⅢ層を切込んで作られる。ピット内覆土より数点の石器片と土器片が出土している。只土器片は無文の細片であり縄文土器である事のみしか判らない。又石器片も黒曜石のチップという特徴のみで明確な時期は比定できない。

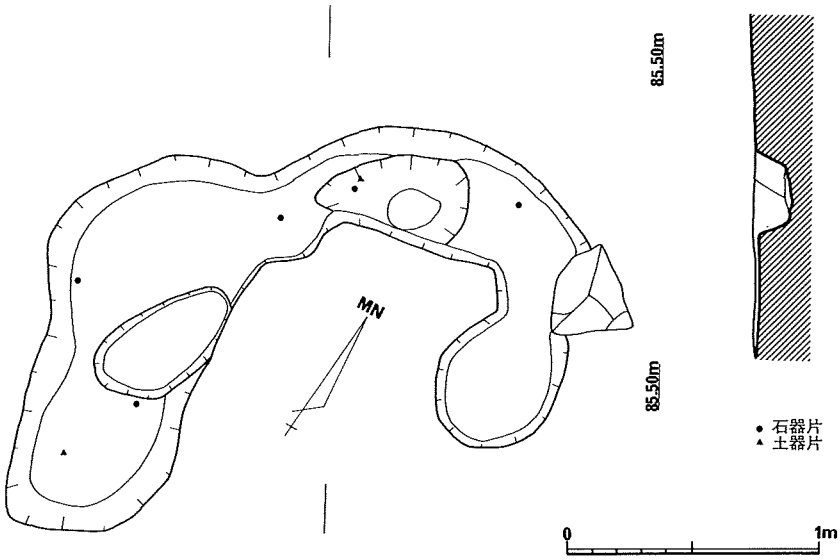



Fig. 24　9号土壙図（1/30）

**10号土壙**（Fig. 25, PL. 10）

G－5・6区にわたって位置する。最初G－5区東端において，溝状に凹んだ部分に，大小の角礫がかたまった遺構が検出された。その集石は，G－6区の南端まで東西6m，南北1.2m，深さ30cmを測る。内に含まれる遺物は，黒曜石の剝片，瓦，近世陶磁器などさまざまな時期のものを含み，この遺構の性格としては，前述の7号遺構と同様に，畑などを耕作する際に，石などを集めて投げ込んだものと考えられる。しかも，この集石遺構は，掘り方の不明な点，断面における角礫の在り方などからして，溝を人為的に掘り込んだのではなく，自然に出来ている溝を利用している可能性が大きい。なおこの集石遺構の時期としては，7号遺構とほぼ同一時期として考える。

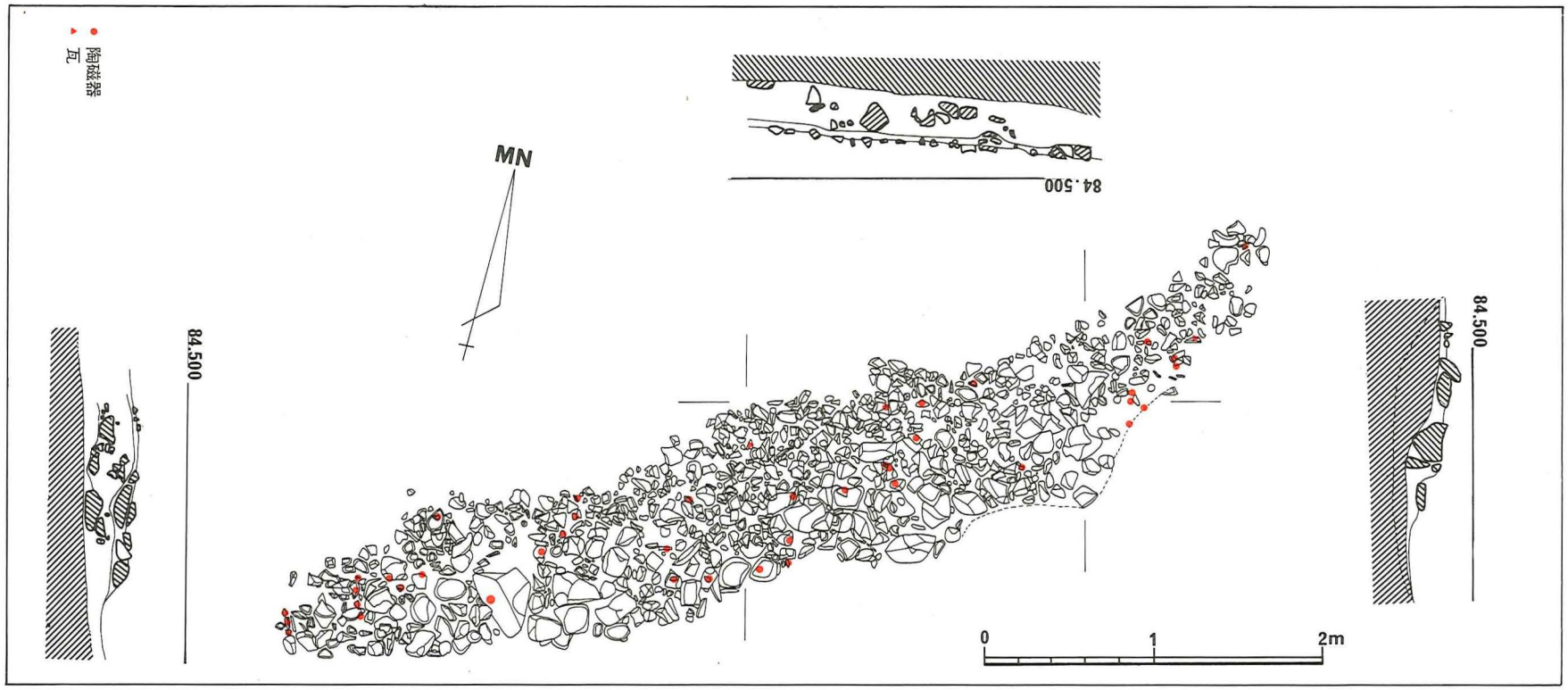



Fig. 25　10号集石土壙図（1/40）

10号集石土壙

遺物出土状況

11号土壙（Fig. 26）

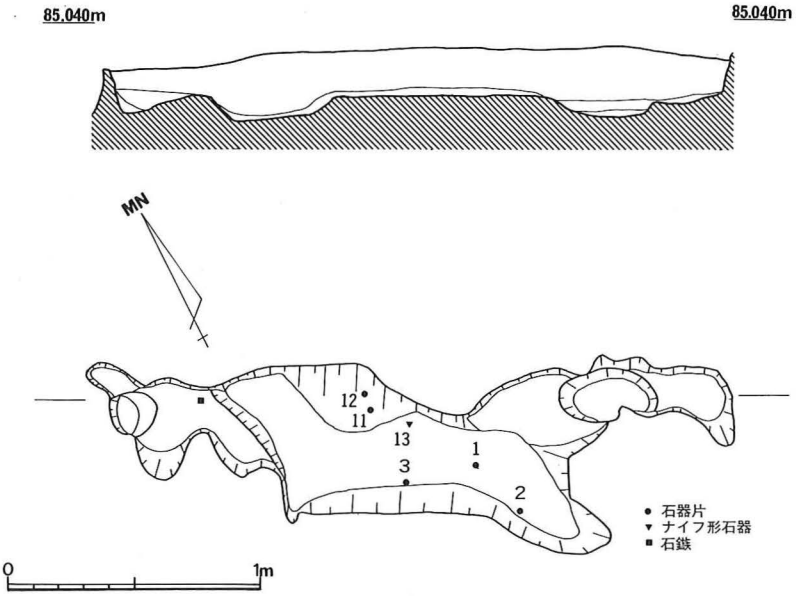



Fig. 26　11号土壙図（1/30）

小型ナイフと石鏃が１点ずつ出土。しかし，土壙内の土が，茶褐色を呈し，さらにこの土壙自体がいくつかの小ピットで構成された可能性が強く，土壙の時期幅にかなりのひらきがあると考える。したがって，この土壙の性格は，明確でない。

12号土壙（Fig. 27，PL. 11）

北東―南西に長軸をとり長楕円形を呈する遺構で，１m×0.8m×0.4mを測る。北東側に段を有して，内部には安山岩礫を投げ込んだ状態にあり，性格的には２，４，７号遺構と同様なものと思われる。後世において礫を投げ入れるために作られたものと解される。内部から遺物の出土はなかったため，その形成時期については不明であるが，２，４，７号遺構については10号の集石遺構との関連の中から，江戸期のものとして捉えられるため，12号土壙についても同様な時期を考えたい。

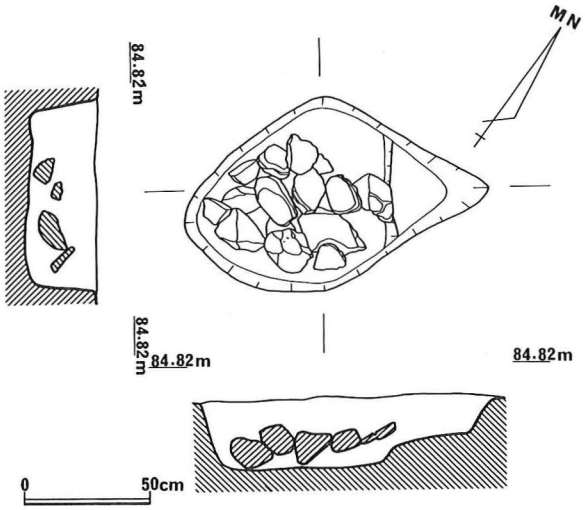



Fig. 27　12号土壙図（1/30）

PL. 11

I −12・13

# Ⅲ 出 土 遺 物

## 一、近世磁器（4～7）

4は¼に残存する小碗で，口径8.1cm，器高3.7cm，高台高0.6cm，高台径3.4cmを測る。腰部でふくらみを持ち，胴部はほぼ直線に伸び，口唇部は丸く仕上げる。胴部外面には草花文が描かれる。小さな気胞が多い青灰色の釉が，畳付を除き全体にかかる。畳付には砂が付着している。5は½残存する小碗で，口径9.2cm，器高4.7cm，高台高0.3cm，高台径3.6cmを測る。胴は丸みを持って立ちあがり，口唇部は丸く仕上げる。胴部外面には唐子文が描かれ，口縁部内外面にはリンボウが描かれる。高台外面には2条の，内面には1条の圏線が巡る。釉は畳付を除き全体に掛けてある。見込にはあばた状の凹凸が点在する。この凹凸は1と同じく，焼成の際，降灰によってできたものであろう。畳付には一部砂が付着する。唐子は，流れるような筆使いで，遊ぶ姿が伸び伸びと描かれている。6は⅓ほど残存する小皿で，口径10.2cm，器高2.2cm，高台高0.5cm，高台径6.4cmを測る。胴は緩やかに丸味を持って立ち上がり，口唇部は丸く仕上げる。胴部には内外面ともに，2条の圏線の間に梅文が描かれ，高台の外面には2条の，内面には1条の圏線が巡る。見込には「□日村」の文字が縦書きで書かれている。釉は青味を帯びたガラス質で，畳付を除き全体に掛かる。見込の「□日村」の文字であるが，村の文字が行書で書かれてあるのに対して，日は一辺一画の，計五画で書かれており，村と比べ一回り大きい事から，日は文字ではなく文様であろう。見込には「□村」という文字が書かれていたと思われる。

7は坏部の一部と脚部を残す仏飯碗で，脚部高3.0cm，脚部径3.8cmである。脚端部と脚内底部はヘラ削りされ，脚端部は斜めに立ちあがり，内底部はわずかに窪んだ高台状を呈し露胎である。脚裾部中位に山形の隆起を有する。坏部外面と脚部上端に，それぞれ1条の染付圏線が巡り，釉は白濁色である。底部には砂が付着する。

## 近世陶器（8，9）

8は碗で，高台高0.7cm，高台径3.7cmを計る。キメの細かい胎土で青灰色を呈する。外面は，細い線で鉄絵が描かれた上から白濁釉が厚く掛かり，内面は釉が薄く掛かり貫入が入る。畳付が露胎である。

9は焼き締めの捏ね鉢で底径6.1cmを測る。胎土は赤褐色で，白色粒子，黒色粒子をまばらに含む。内面に3条の重ね焼きの痕が残る。底部には右回転の回転糸切り痕を残し，中央に深さ0.6cmの凹みがあり，緑色の釉がつけてある。これは，底部にあたる部分に石か固い粘土魂があり，切り離しの際に生じた傷跡であり，水もれを防ぐために釉を付けたものであろう。ま

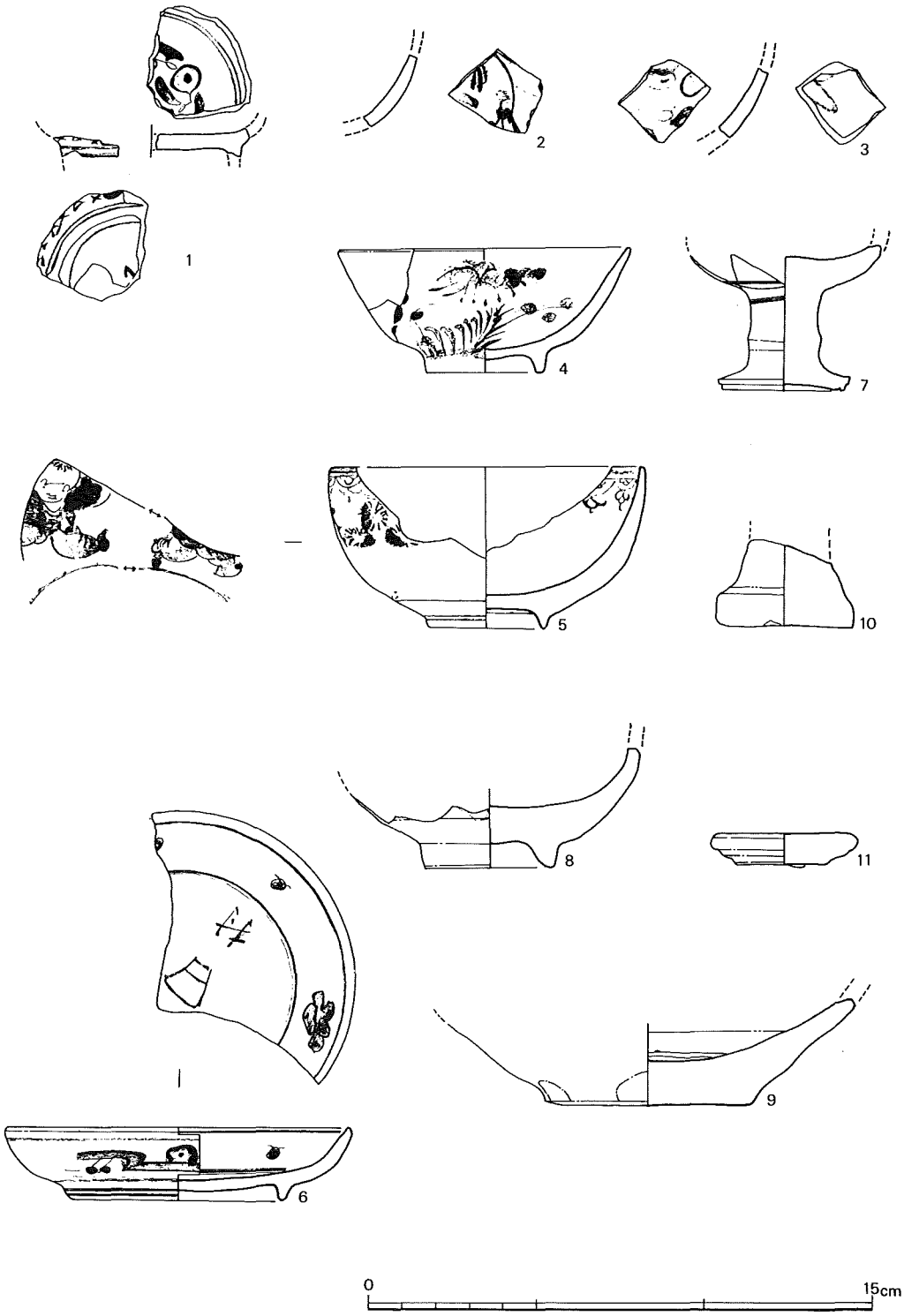



Fig. 28 陶 磁 器

た，胴部下端には糸切り後ロクロ上から成品を持ちあげた指痕が明瞭に残る。

**窯道具（10，11）**

10は磁器質のトチンで，底径4.1cmを測る。茶色の釉が掛かる。11は磁器質のハマで，上径4.4cm，下径2.7cm，高1.0cmを測る。磨滅をしているが茶色の釉が部分的に認められる。

**明染付（1～3）**

1は¼ほど残存する碗底部である。わずかに残る胴部外面には梵字文と思われる文様が描かれる。高台外面には2条，内面には1条の圏線が巡る。また，高台内面には字款と思われるものが書いてあるが明確でない。見込には2条の圏線が巡り，花弁文と思われる文様が描かれる。外面は光沢を持ち滑らかであるが，見込にはあばた状の凹凸が覆っている。この凹凸は焼成の際に，灰が掛かりできたものであろう。2は碗胴部の小片である。外面には唐草文が描かれる。釉は青味を帯び，表面は光沢を持つ。3は碗胴部の小片である。外面には唐草文，内面には花文と思われる文様が描かれる。釉には小さな気胞が多く入る。

参考文献

本田三郎　「三川内の歴史」　平戸藩窯三川内のやきもの所収　三川内陶栄会編　（1978）
倉田芳郎　「長崎，松浦皿山窯址」　松浦市教育委員会　（1982）
小野正敏　「15，16世紀の染付碗，皿の分類とその年代」　貿易陶磁研究所収　日本貿易陶磁研究会（1982）
「波佐見古陶磁文様集」　長崎県窯業試験場　（1982）
長崎県教育委員会　「今福遺跡　II」　長崎県文化財調査報告書　第77集　（1985）

## 二、縄文土器（Fig. 29, PL. 12, 13）

縄文土器片は全部で132点出土しているが，その殆どが細片でありしかも風化が著しい。従って図示出来る個体が無いに等しいのであるが僅かにその特徴で時期を判別し得る資料が2，3みられる。

土器の出土状況は大きく3群に分かれる。B，C－8区附近，F，G－12区附近，そしてH－29区を中心とする地点である。しかもこの内H－29区出土の土器は撹乱気味のピット内からの出土である為プライマリーな状態とは言えない。又，H－29区を除く2地点についても，土器集中地点とはいってもその絶対量は限られており，土器の胎土・色調からも同一個体の可能性も強い。

時期的にみると，B，C－8区附近の土器には山形押型文の破片が含まれ，その他の破片も色調が似ているところから同じ時期のものと思われる。一応縄文早期に比定されよう。F，G－12区を中心とする土器の中には，明らかに縄文晩期後半に比定される浅鉢が含まれ，又他の破片も色調・胎土が似るところから同時期に比定して差しつかえあるまい。H－29区中心の土器は全てが無文の砕片であり時期は特定できない。

こうしてみると，縄文時代における上原台地の利用は，早期に始まり，後断絶があって又晩期に到ることが判る。但し，上述した如く，土器の絶対量から推定すると，どの地点もある一時期において短期間使用されたものと考える方が妥当であろう。

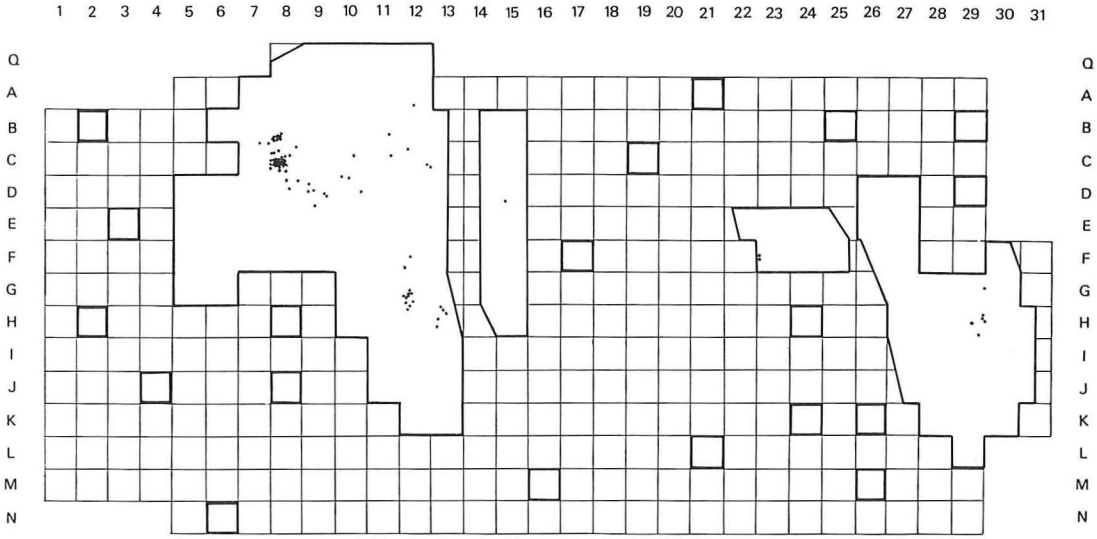
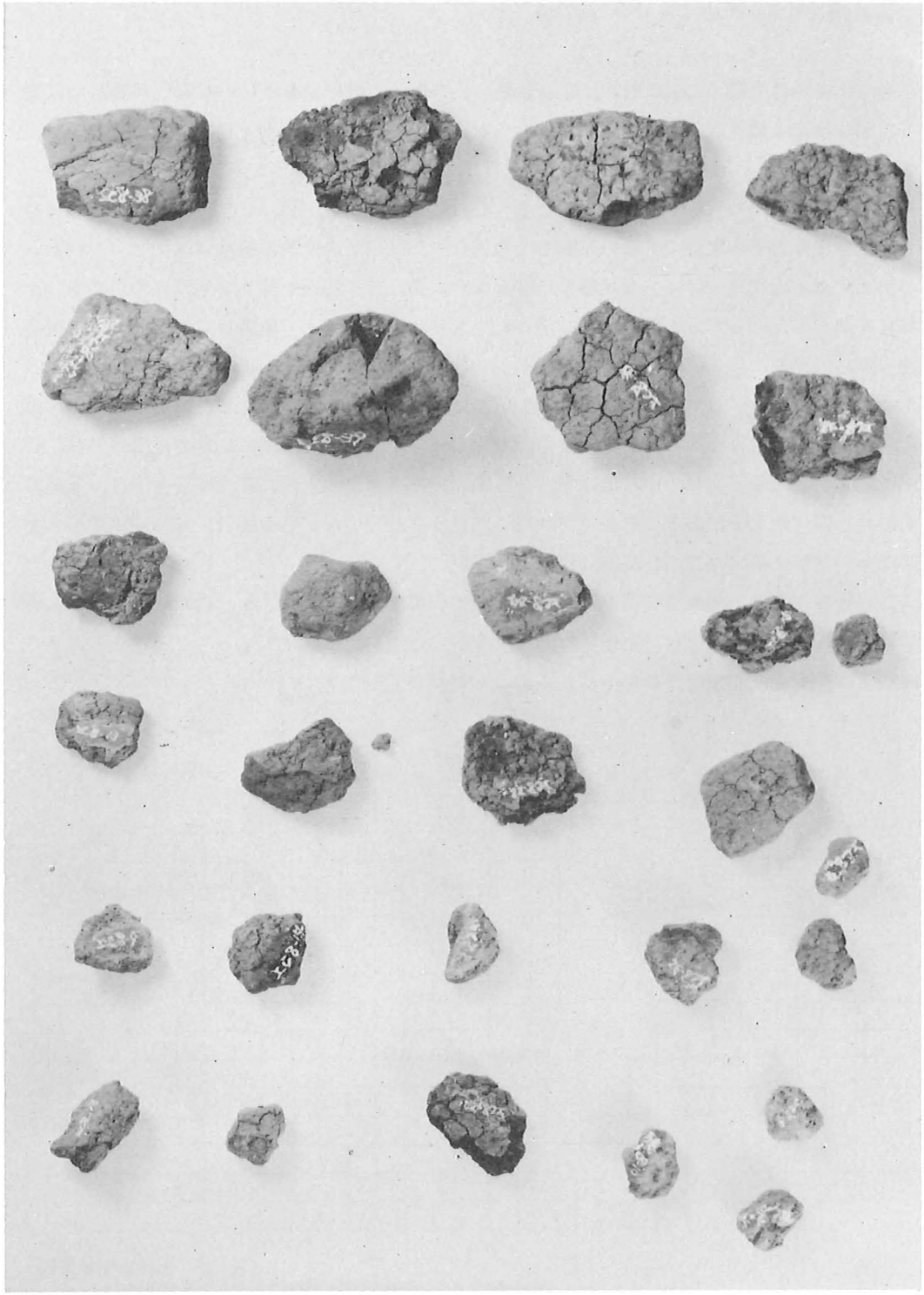
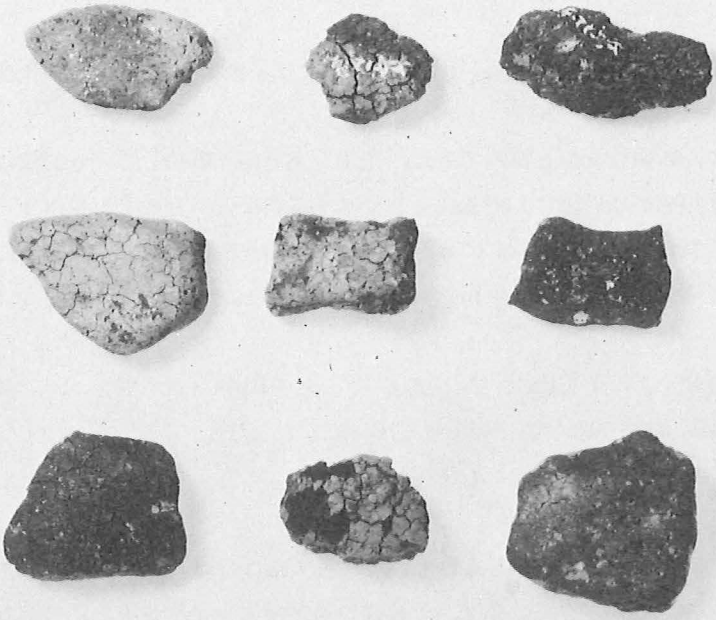



Fig. 29　土器出土状況図



C－8区出土縄文土器



G-12区

F-12区

縄 文 土 器

## 三、縄文時代の石器

### 石鏃（Fig. 32～36, PL. 22～31）

上原遺跡で出土した石鏃は，総計111点である。表土及び表面採集の出土が71点，層位中より出土のものが40点である。

本遺跡において，石鏃の分類を試みてみた。先ず，完形品と破損している部位により，A～Fに分け，次に基辺の形状により，平基式もしくは平基式に近いものをⅠ類（1～13），凹基式をⅡ類として大別した。本遺跡における石鏃は，完形品が少ない為（Tab. 2）に分類を抉りの長幅比によって分類した。さらに，局部磨製鏃（86～89），剝片鏃（90～94）に分類した。

特にⅡ類を長幅比が1：1をⅡa類（14～20），1：⅔をⅡb類（21～54），1：½Ⅱc類（55～64），1：⅖をⅡd類（65～74），1：⅓Ⅱe類（77～85）とした。

その他，未製品，脚部片（95～99）を最後に図示した。

Ⅰ類（1～13）

Ⅰa類　1・2は，明確に基部を形成しないもので，最大幅はほぼ基部にあり，平基無茎鏃と呼ばれるものである。特に，2は，先端部の両側面より抉りが施されている。

Ⅰb類　3～13は，Ⅰa類と同形式を示しながらも基部の面がわずかに内彎し，脚部を形成しつ

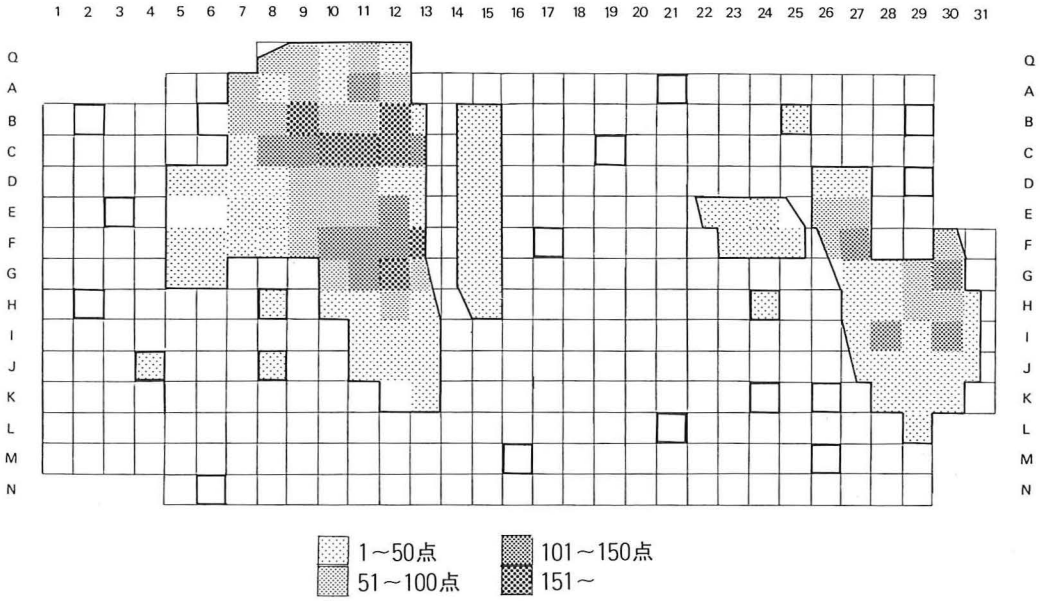



Fig. 30　石器出土状況図

つあるもので，凹基無茎鏃に近い形式を取るものである。9・10などは両脚のつくりが明確になりつつあるものとして押えられる。12は，二次加工が粗雑である。

II類（14～85）

IIa類　基部が意識的に抉られ，抉り部分の長幅比が同じものをIIa類とした。長幅比では同じ値を示すが，石鏃の長さと幅との比較では，長さが長いものが多い。特に，15・16は二等辺三角形を呈し，長さに比べて，抉りの深度が，非常に浅いものもある。17は，1と同様に先端部に両側より抉りが施されている。雁股状に使用された可能性もあると考えられる。

IIb類　基部の抉りがIIa類に比べ比較的浅いものをIIb類とした。IIb類もIIa類と同様に長さが幅より長いものが多く，しかも二次加工が丁寧である。また，特に目立つのが脚部の欠損品が多くそのことからも，縦長の石鏃であるがゆえであろうことは，明確であることが理解できる。45・46は，いわゆる鍬形鏃である。

IIc類　抉りの長幅比が1：½のものをIIc類とした。この類の中の石鏃は，2～3cmのやや小型の石鏃ばかりであり，やはり脚部の欠損品が多くみられる。

IId類　抉りの長幅比が1：⅔のものをIId類とした。大きさは，IIc類より小さめで，2cm台の石鏃が多い。先端角度でみると65・66などのように鋭利な石鏃や，69・70のように，鈍角の石鏃などさまざまな形式を呈する。

IIe類　抉りの長幅比が1：⅓のものをIIe類とした。77・78などは，左右が非対称で，片方の脚が短くなっている。いずれも黒曜石製である。

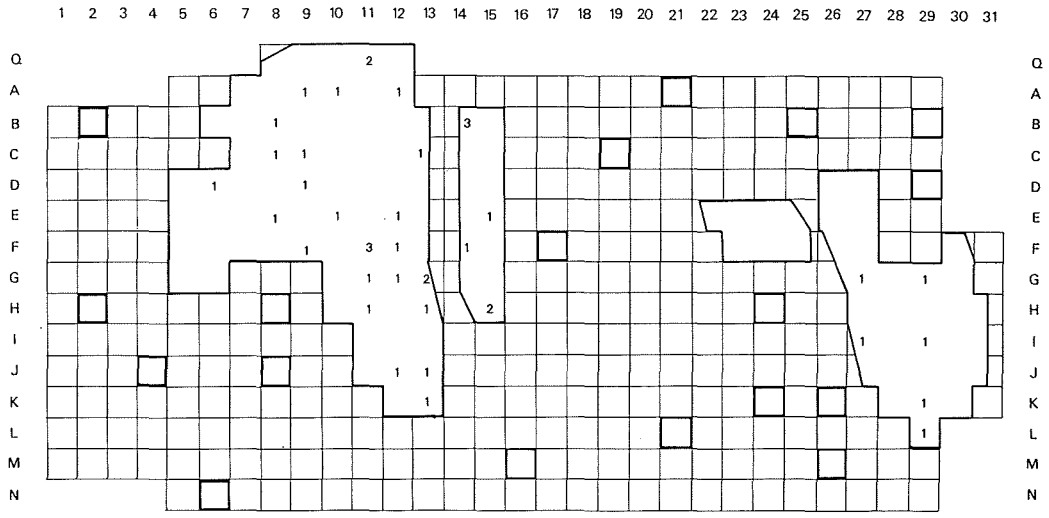



Fig. 31　石鏃出土状況図

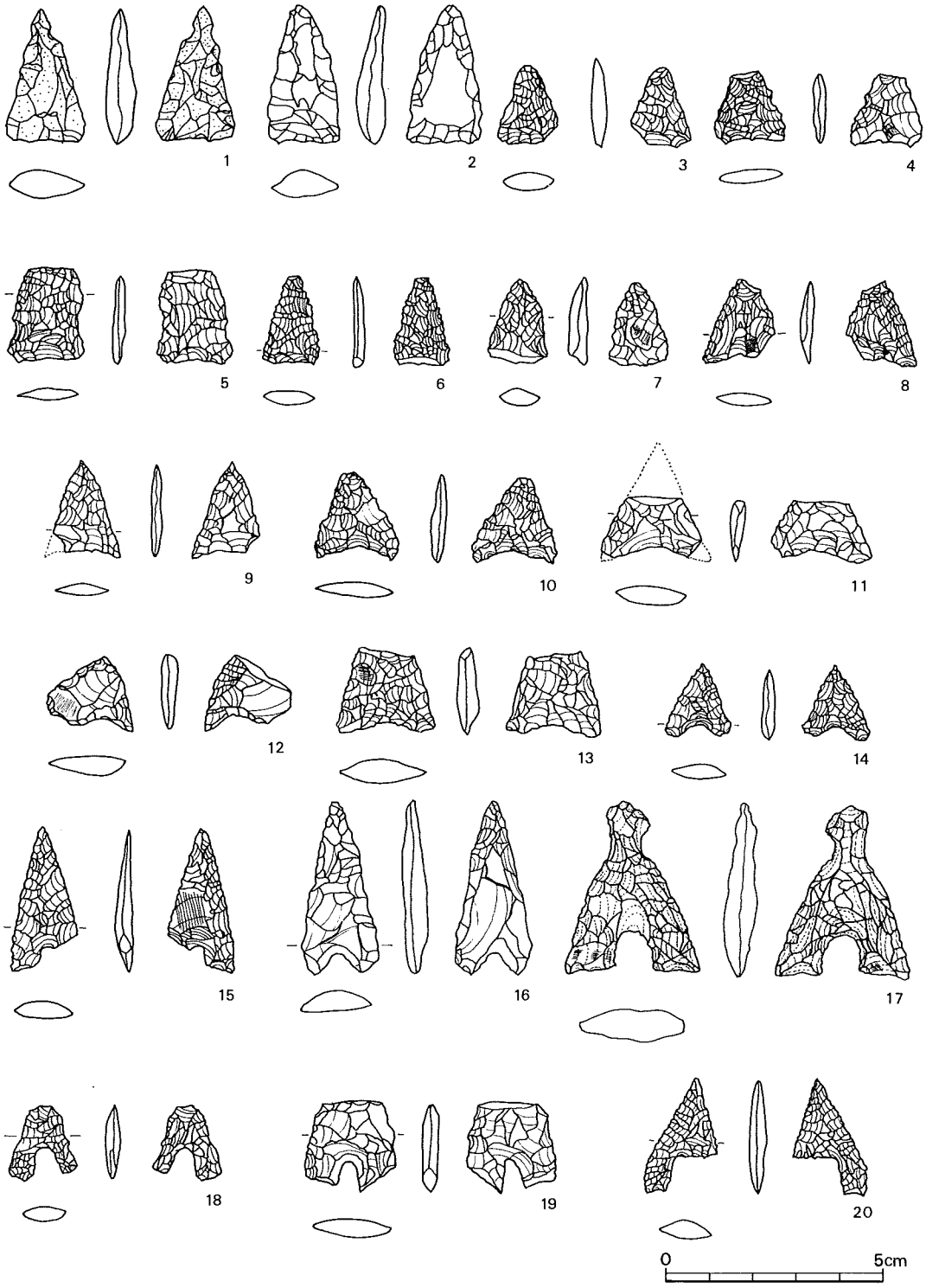



Fig. 32　石 鏃 (1)

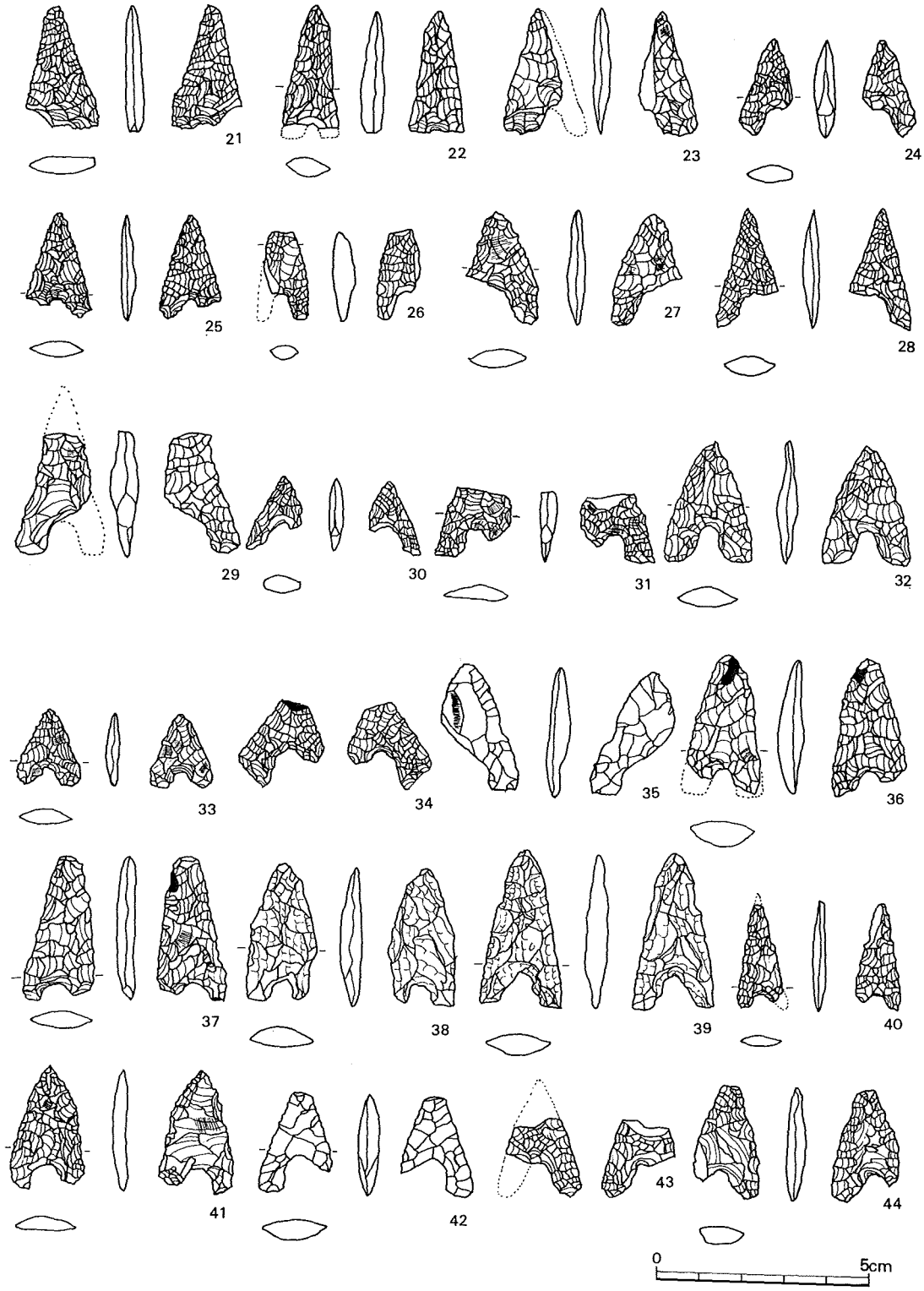

21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0
5cm

Fig. 33 石 鏃 (2)

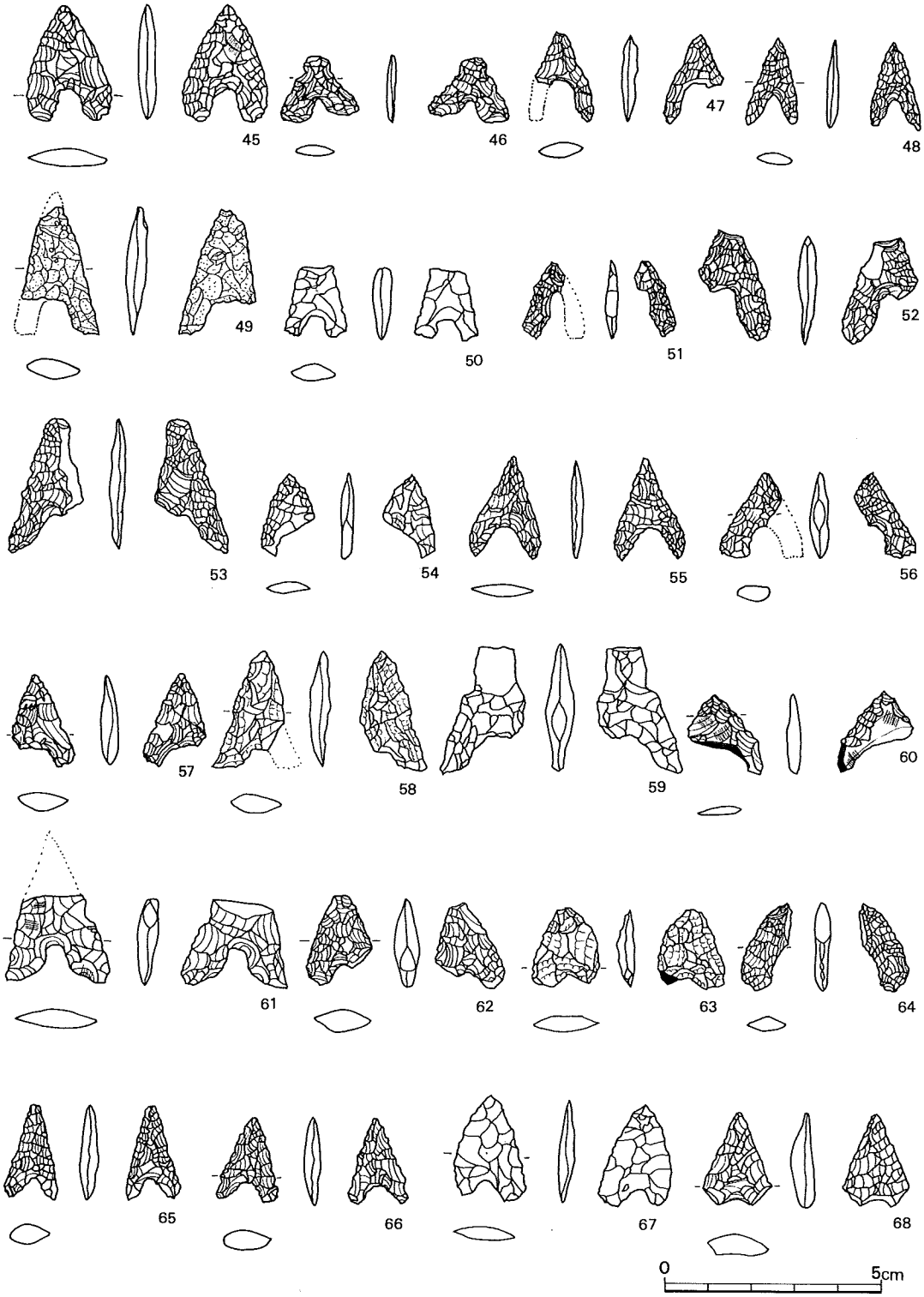

45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
0
5cm

Fig. 34　石 鏃 (3)

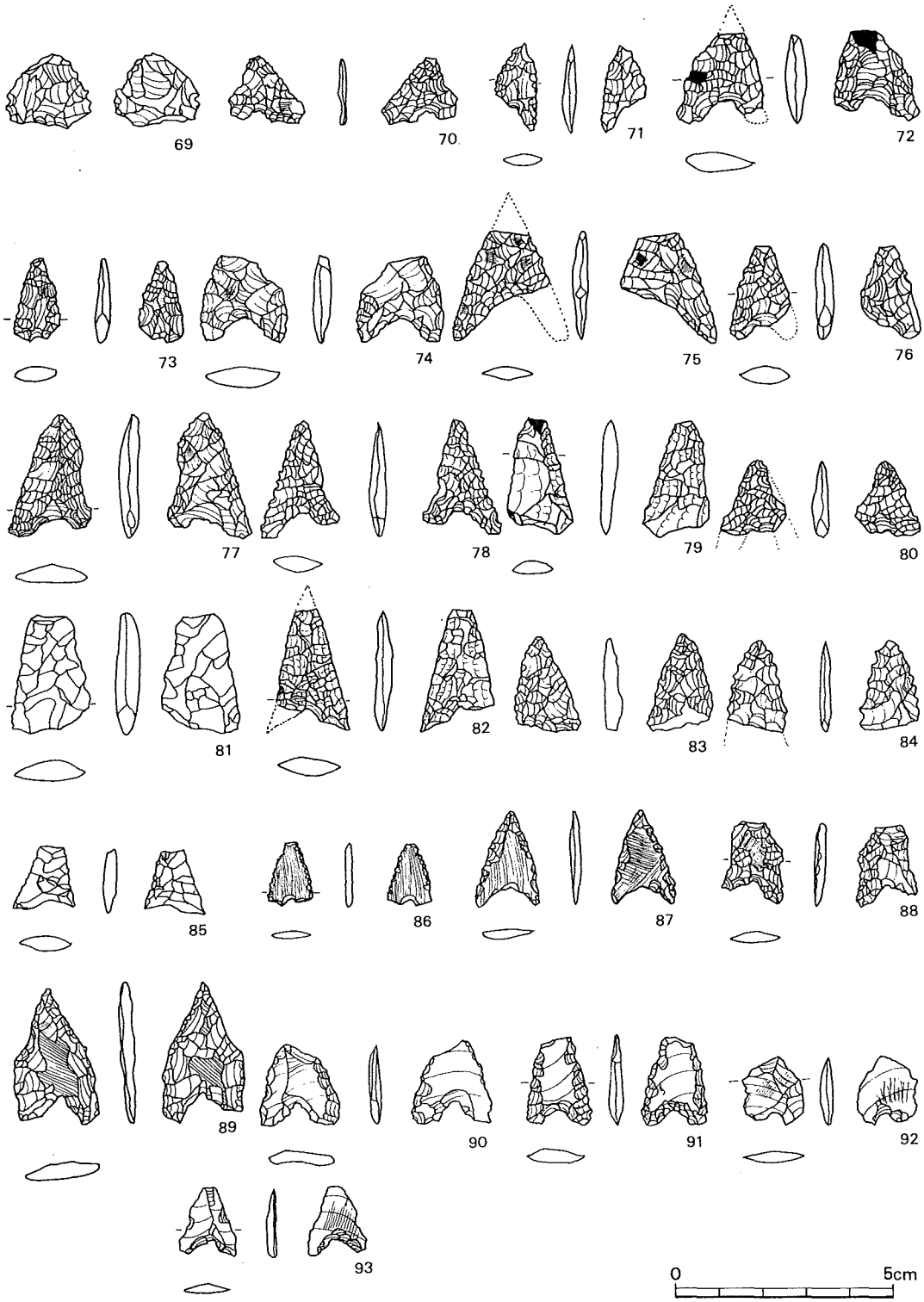

69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
0
5cm

Fig. 35 石 鏃 (4)

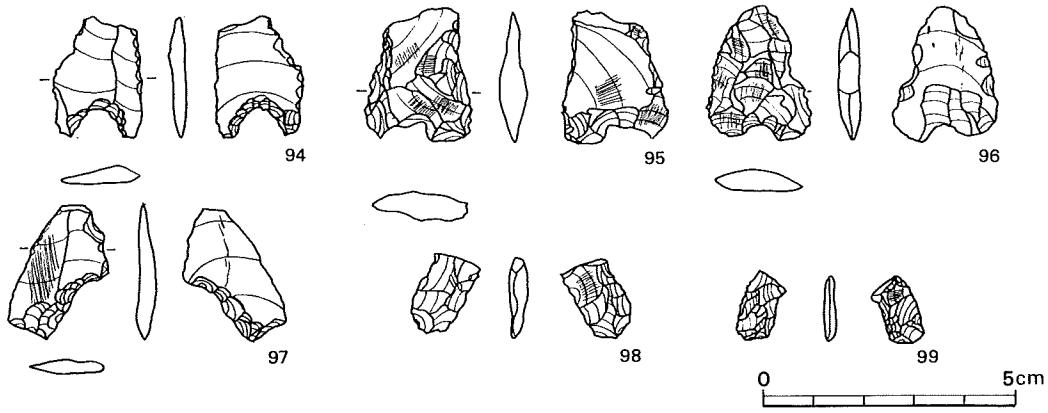



Fig. 36　石 鏃 (5)

Ⅲ類　局部磨製鏃

4点の出土，86・87は両面に研磨の跡がみられるが，88・89は片面の一部，両面の一部に研磨の跡があり，五角形を呈している。

Ⅳ類　剝片鏃

5点の出土，1～2cm台の小形で，いずれも縦長剝片を使用している。抉りの部分も比較的，丁寧に加工されている。

上原遺跡出土の石鏃を全体的にみると，石材別依存度（Fig. 37）では全体の88%を黒曜石が占める。黒曜石は色調により，漆黒色，灰青色，灰白色の3つに分類した。さらに安山岩と4つに分類する。また，長さ，幅，重量を集計した三角グラフ（Fig. 38）によれば（長さ，幅，重量を100としてそれぞれの値をパーセントで表わしたもの）厚さがほぼ一定値内でおさまっているのに対し，長さと幅にややひらきがあることがわかる。重量は完形品が少ないので数値による表現は一覧表によることとした。先端角度（Fig. 39）は25°～40°前後をピークとしているが，60°以下にすべてがおさまっている。先述したように，縦長の石鏃が本遺跡に多いのが先端角度に反映しているのだろうと考えられる。

Tab. 2　上原遺跡出土石鏃破損部位別一覧表

| 記号 | 破損部位 | | 黒曜石 | 安山岩 | その他 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 完 | | 完形品 | 17 | 4 | | 21 |
| A | | 先端部破損 | 17 | 2 | | 19 |
| B | | 両脚破損 | 5 | | | 5 |
| C | | 片脚破損 | 26 | 2 | | 28 |
| D | | 先端部片脚破損 | 19 | 2 | | 21 |
| E | | 先端部両脚破損 | 4 | | | 4 |
| F | | 脚部のみ | 11 | | | 11 |
| | | | 99 | 10 | | 109 |

| 安山岩 | 黒曜石 | | |
|---|---|---|---|
| 12% | 漆　黒　色　74% | 灰青色 7% | 灰白色 7% |

Fig. 37　石材別依存度

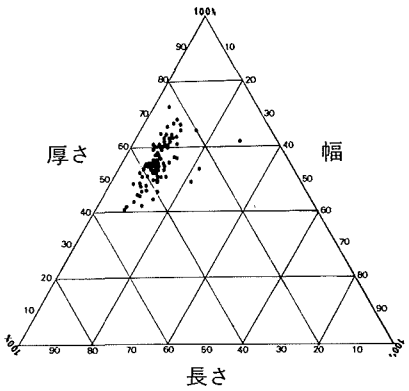



Fig. 38　長さ・厚さ・幅の三角グラフ

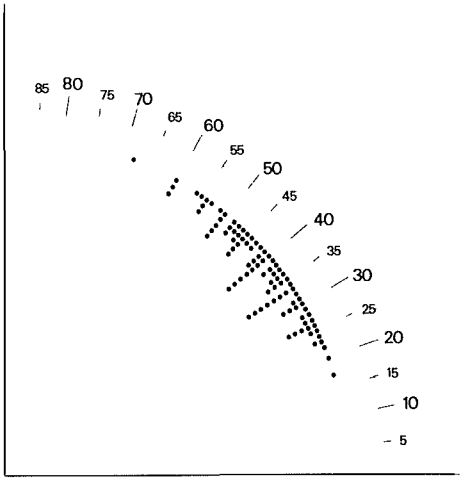


Fig. 39　先端角度グラフ

**尖頭器**（Fig. 40, PL. 30, 31）

安山岩製が1点出土。先端部はするどく尖ってはいるが，胴部は，厚みがある。全体的に玉子形を呈している。

**石匙**（Fig. 40, PL. 30, 31）

安山岩製2点，黒曜石製2点の出土。101，103は，横形石匙で，いずれもつまみ部が中心よりやや横にずれた位置についている。さらに，101は，打面部を残し，刃部にあたる部分を加工し，他の部分は，粗雑に仕上げられている。102は，安山岩製の縦形石匙である。これも前者と同様に，刃部のみを加工しつまみ部分などは，比較的粗雑に加工されている。また，101の刃部は，直線的に加工されているのに対し，102の刃部は，丸く加工されている。

**スクレイパー**（Fig. 41, PL. 32, 33）

全体で7点の出土。グリッド別（Tab. 5）にみると，すべてA地点よりの出土である。石材では，安山岩5点，黒曜石製2点である。刃部をみると，長軸に平行に刃部があるいわゆるサイド・スクレイパーがほとんどであるが，大きさや重さにややバラエティがある。105は，全面

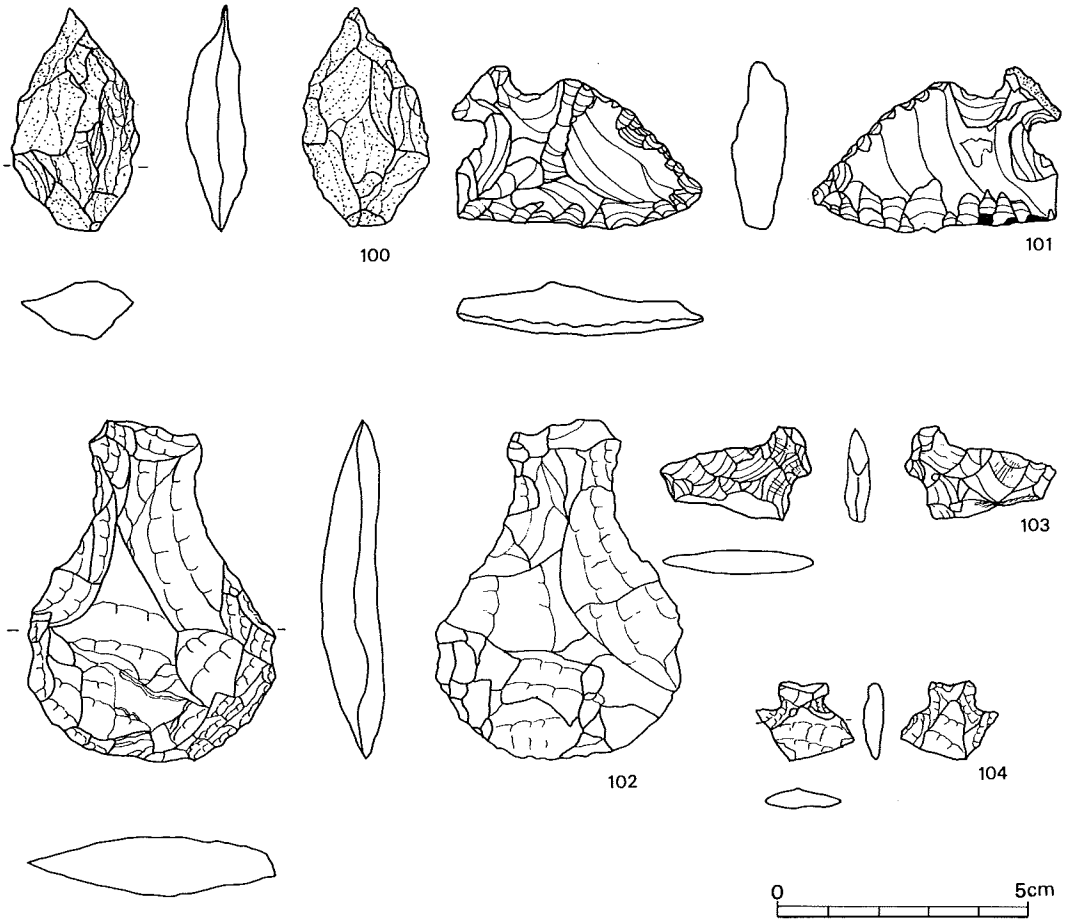


Fig. 40　尖頭器・石匙

にパティナで覆われ刃部は，比較的粗く加工されている。106は一部に自然面を残している。110は，スクレイパーの類に入れてはいるが，先端部を利用した，グレーバーと考えられる。111は加工が粗いが比較的薄い為，スクレイパーとしての機能はあったと考える。

**使用痕ある剥片**（Fig. 42, PL. 34, 35）

112～115は，打面を上部とする縦長剥片を素材としている。さらに，112・113は一部に自然面を残す。116は，折断剥片の側縁部に刃こぼれが顕著なものである。118, 120～122はいずれも安山岩の縦長剥片を素材とし，側縁部に刃こぼれがみられるものである。

**剥片**（Fig. 42, 43, PL. 36, 37）

剥片は15点を図示した。内，黒曜石10点，（漆黒色７点，灰白色１点，灰青色１点，２点）

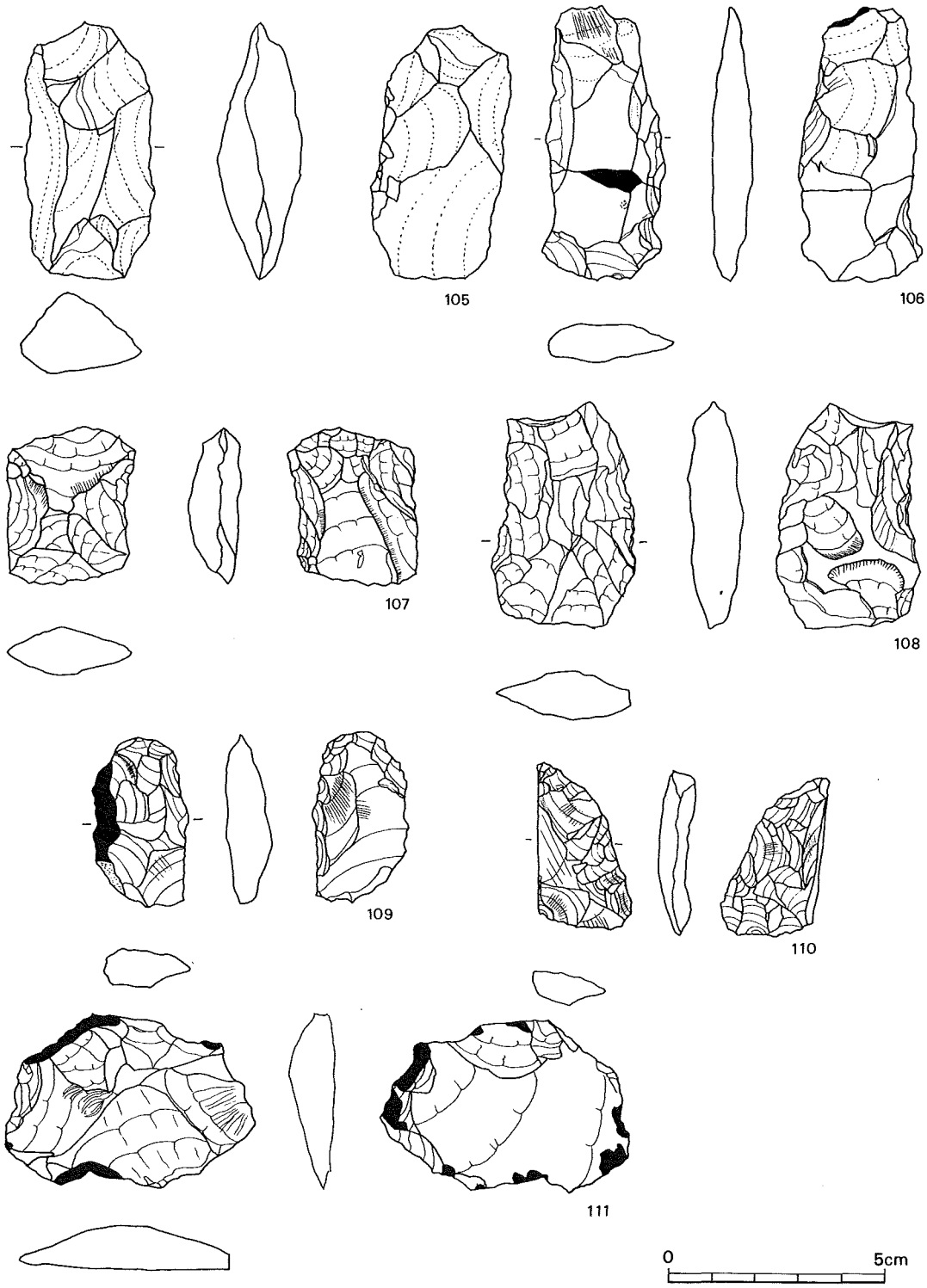



Fig. 41　スクレイパー・グレーバー

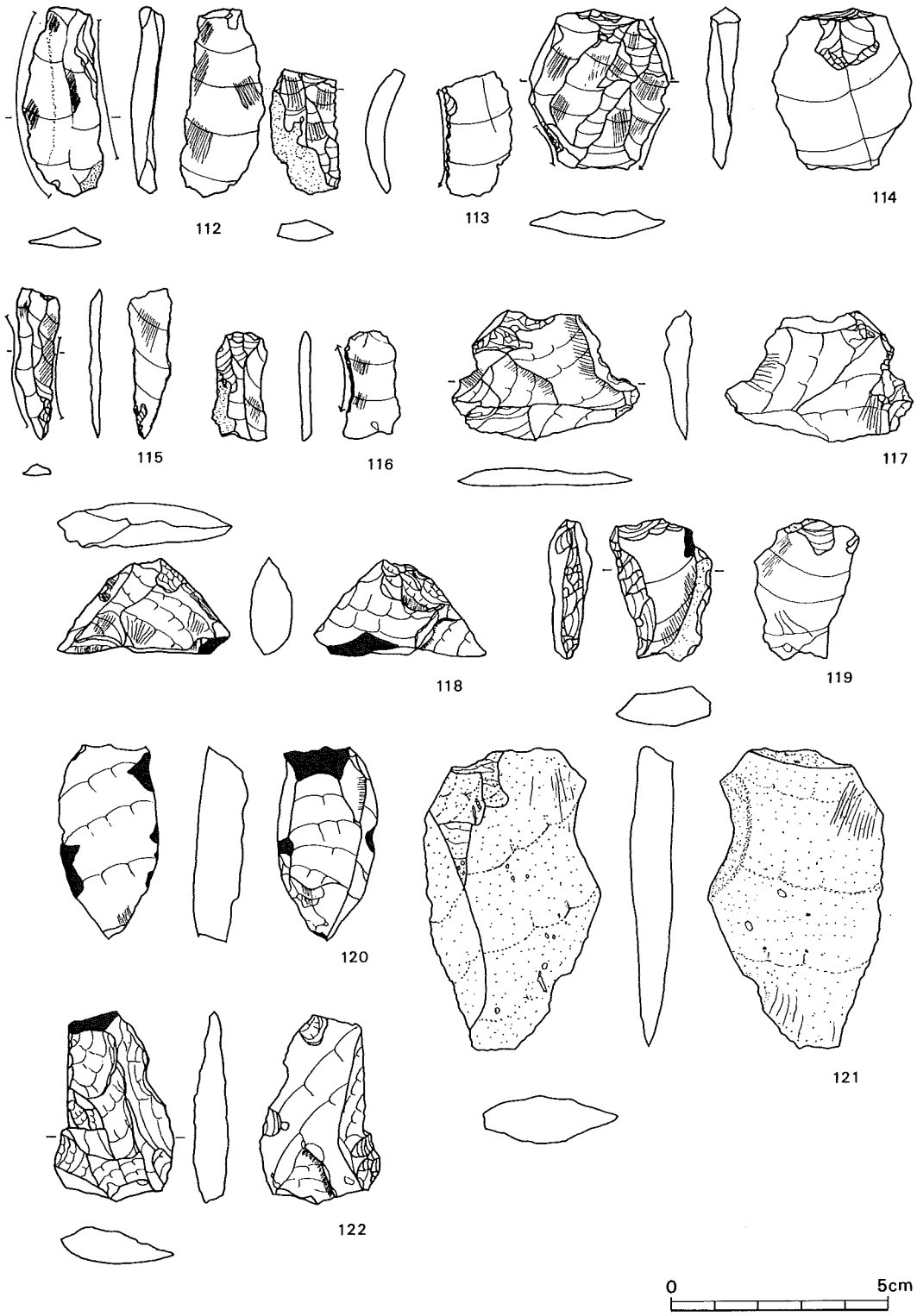



Fig. 42　使用痕ある剝片・剝片

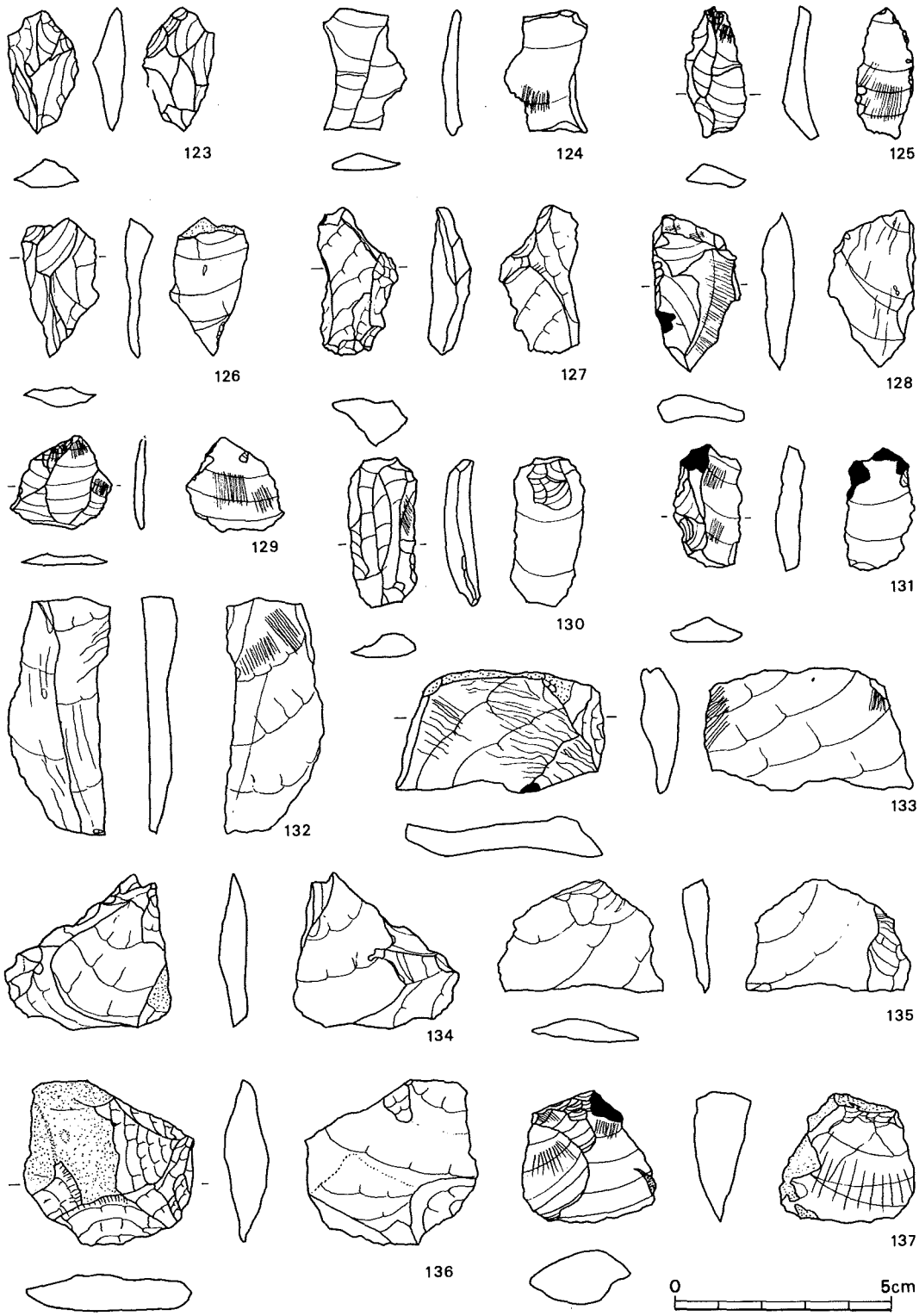



Fig. 43 剝 片

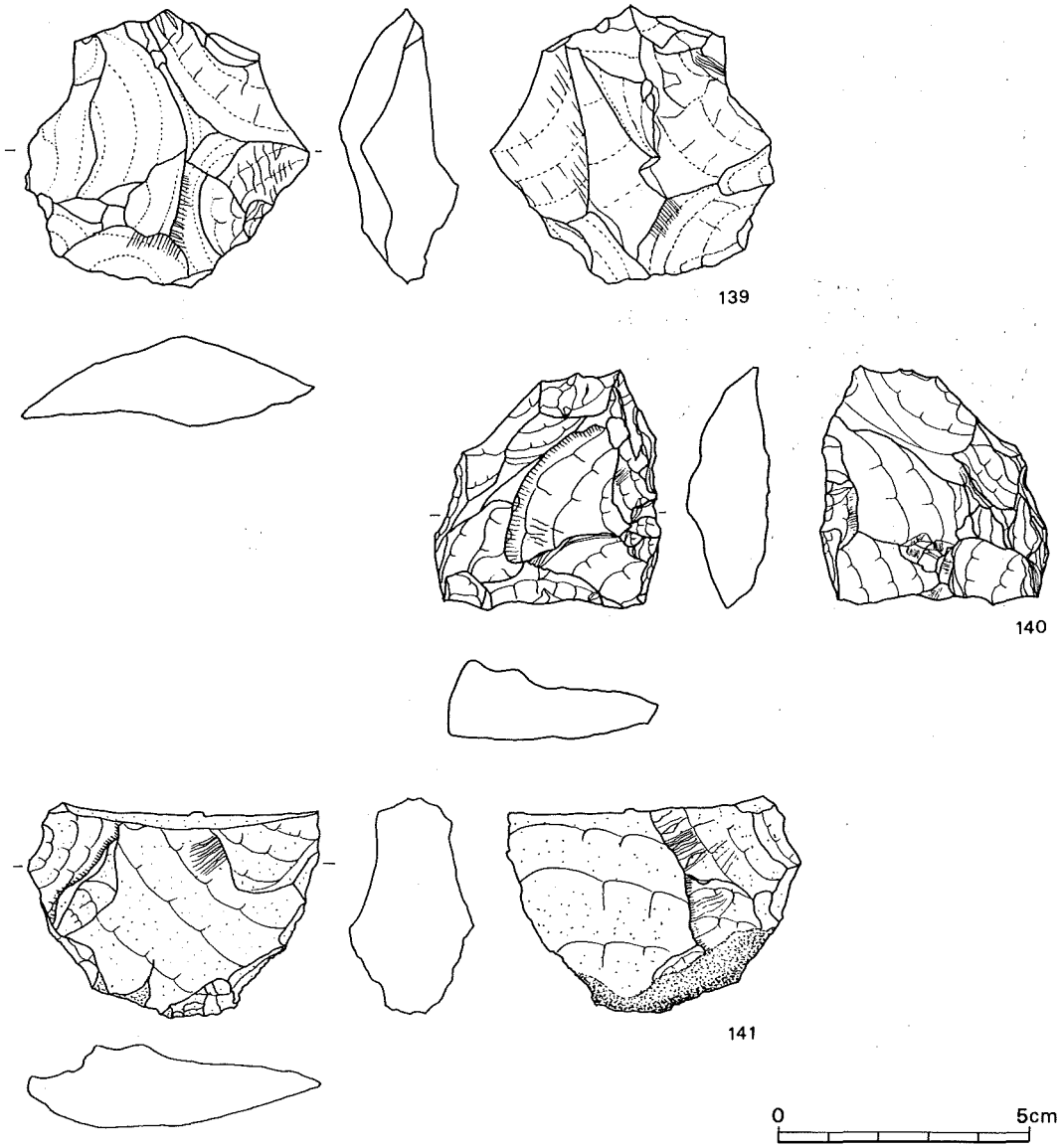


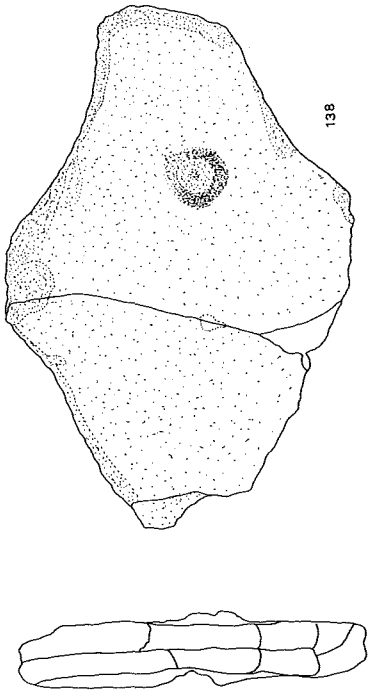

Fig. 44　石　核

安山岩５点である。打面部は自然面なもの，調整痕があるもの２つに分類できる。

打面部が自然面なものは，126，130，131～133，135～137である。130，131は表面にいくつかの剥離痕がうかがえる。特に131は中央に稜を有し，断面が三角形を呈する。

調整された打面部を有するのは，123，125，127，128，129，134である。123は中央に稜を打ち断面は扁平な三角形を呈する。（灰青色の黒曜石である）129は小形の縦長剥片である。

最後に124は，上下とも切断されたもので中央部に稜を持つものである。灰白色ｏｂである。




**石核**　(Fig. 44, PL. 38, 39)

3点図示した。いずれも安山岩である。139, 140の2点は，打面を転移しながら，多方向よりの剥片剥離を行なっている。また剥片そのものも大きいものはなく，一定の剥片を取りだしている状況も認められない。表裏面共に作業面として利用され，円盤状に仕上がり，断面形も扁平になっている。これら2点とは明らかに相違する剥片剥離を行なっているのが141で正面のみを剥離作業面としており，裏面は一次剥離を残し，下部には自然面に覆われている。前者の石核よりも厚めの縦長剥片剥離を目的としたものであると考えられる。

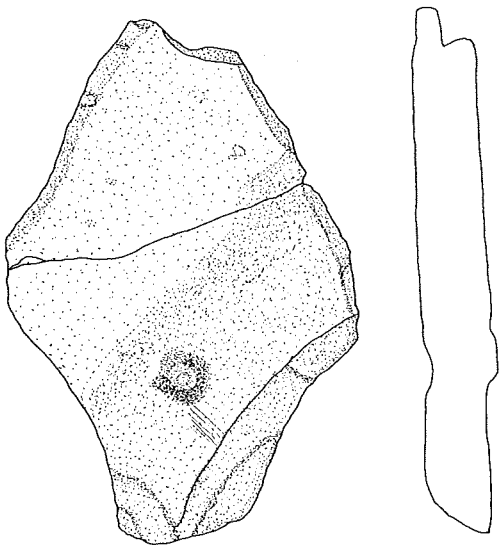


Fig. 45　砥　石

**砥石**　(Fig. 45, PL. 38, 39)

G－10区，第II層よりの出土。扁平な砂岩製である。長さ14.2cm，幅9.2cm，厚さ1.8cm，重量283gを測る。表面は全体的に摩耗痕が認められ，中央部より半分は摩耗痕が高い。裏面は風化により板状の欠損がうかがえる。特に表面において，直径1.2cm程の円形のくぼみが認められ，この部分は他の円柱状のものを砥ぐ為に使用されたものと考える。二つの用途を持った砥石と考える。

Tab. 3 石鏃計測表

| 挿図番号 | 出土区 | 層位 | 石材 | 破損部位 | 重さ(g) | 大きさ(mm) 長 | 幅 | 厚 | 抉り(mm) 深度 | 幅 | 先端角度 | 分類 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | A－9 | 赤褐色粘質土層 | 安山岩 | 完 | 2.8 | 31 | 14 | 6 | | 7 | 35° | Ia |
| 2 | F－11 | 〃 | 灰青色 | 完 | 3.3 | 32 | 16 | 6 | | 7 | 30° | Ia |
| 3 | E－11 | 表面採集 | 黒色ｏｂ | C | 0.9 | 18(21) | 13(16) | 5 | 1 | 9 | 45° | Ib |
| 4 | | 〃 | 〃 | A | 0.7 | 17(23) | 17 | 3 | 2 | 12 | 45° | Ib |
| 5 | | 〃 | 〃 | 〃 | 1.3 | 22(32) | 18 | 3 | 1 | — | (17°) | Ib |
| 6 | G－27 | 〃 | 〃 | E | 0.9 | 20(24) | 12 | 4 | 1 | — | 36° | Ib |
| 7 | D－5 | 〃 | 灰白色ｏｂ | 完 | 0.9 | 19 | 13 | 5 | | | 45° | Ib |
| 8 | B－6 | 〃 | 黒色ｏｂ | D | 1.0 | 19(22) | 14(20) | 4 | 2 | (12) | 50° | Ib |
| 9 | I－27 | 赤褐色粘質土層 | 〃 | C | 0.8 | 22(24) | 14(17) | 4 | 1 | — | 38° | Ib |
| 10 | | 表面採集 | 黒色 | 完 | 1.1 | 19 | 19 | 4 | 3 | 17 | 56° | Ib |
| 11 | B－14 | 赤褐色粘質土層 | 黒色ｏｂ | A | 1.3 | 14(24) | 22 | 5 | 3 | (17) | 54° | Ib |
| 12 | E－13 | 表面採集 | 〃 | D | | 18(26) | 19(21) | 4 | 3 | — | | Ib |
| 13 | G－13 | 赤褐色粘質土層 | 〃 | A | 2.2 | 19(33) | 22 | 6 | 2 | 15 | 33° | IIa |
| 14 | O－13 | 表面採集 | 〃 | 完 | 0.5 | 17 | 15 | 3 | 3 | 9 | 54° | IIa |
| 15 | H－13 | 赤褐色粘質土層 | 〃 | C | 1.4 | 33(35) | 14(17) | 4 | 6 | 7 | 30° | IIa |
| 16 | G－13 | 〃 | 灰青色ｏｂ | 完 | 3.0 | 40 | 14 | 6 | 9 | 6 | 25° | IIa |
| 17 | G－12 | 〃 | 安山岩 | 〃 | 4.9 | 39 | 21 | 9 | 8 | 7 | 35° | IIa |
| 18 | E－15 | 表面採集 | 黒色ｏｂ | A | 1.8 | 17 | 10 | 8 | 7 | 5 | (41°) | IIa |
| 19 | E－7 | 〃 | 〃 | 〃 | 1.9 | 21(43) | 20 | 5 | 7 | (5) | (28°) | IIa |
| 20 | E－7 | 〃 | 〃 | C | 1.1 | 27 | 14(19) | 5 | 9 | 8 | 45° | IIa |
| 21 | C－14 | 〃 | 〃 | D | 1.8 | 29 | 13 | 5 | 5 | 5 | 32° | IIb |
| 22 | B－15 | 〃 | 〃 | B | 1.8 | 29(35) | 13 | 6 | 1 | (4) | 22° | IIb |
| 23 | A－12 | ピット内 | 〃 | C | 1.3 | 29 | 13(15) | 4.5 | 7 | (8) | 33° | IIb |
| 24 | G－13 | 表面採集 | 〃 | 〃 | 1.0 | 22 | 11(14) | 5 | 6 | (8) | 38° | IIb |
| 25 | H－15 | 赤褐色粘質土層 | 〃 | 〃 | 0.9 | 25(27) | 14(15) | 4 | 5 | (5) | 33° | IIb |
| 26 | A－10 | 〃 | 〃 | D | 1.0 | 21(29) | 9(12) | 5 | 7 | (7) | (28°) | IIb |
| 27 | A－8 | 表面採集 | 〃 | C | 1.1 | 26 | 15(18) | 4 | 8 | (12) | 41° | IIb |
| 28 | B－8 | 赤褐色粘質土層 | 〃 | 〃 | 1.1 | 28 | 13(17) | 5 | 8 | | 36° | IIb |
| 29 | B－12 | 表面採集 | 〃 | D | 2.0 | 29(45) | 13(20) | 6 | | | (24°) | IIb |
| 30 | D－15 | 〃 | 〃 | C | 0.5 | 17 | 8 | 7 | 10 | 4 | 54° | IIb |
| 31 | M－9 | 〃 | 〃 | D | 1.1 | 16 | 15 | 5 | 7 | 7 | | IIb |
| 32 | G－29 | 赤褐色粘質土層 | 灰白色ｏｂ | 完 | 1.9 | 28(33) | 21 | 5 | 8 | 12 | 40° | IIb |
| 33 | G－11 | 〃 | 黒色ｏｂ | 〃 | 2.6 | 17(19) | 15 | 4 | 4 | 5 | 50° | IIb |
| 34 | J－8 | 表面採集 | 〃 | D | 1.1 | 21(25) | 18 | 4 | 10 | (10) | 60° | IIb |
| 35 | D－14 | 〃 | 灰青色 | C | 1.9 | 29(35) | 13(22) | 6 | 7 | 7 | 40° | IIb |
| 36 | D－8 | 〃 | | 〃 | | 32(43) | 17(18) | 7 | 6 | (7) | 26° | IIb |
| 37 | C－11 | 〃 | 黒色ｏｂ | D | 2.6 | 34(47) | 16 | 6 | 5 | (7) | 20° | IIb |
| 38 | D－14 | 〃 | 安山岩 | A | 2.7 | 32(36) | 16 | 6 | 5 | 6 | 38° | IIb |
| 39 | H－15 | 赤褐色粘質土層 | 〃 | 完 | 2.7 | 37(47) | 19 | 5 | 8 | 10 | 25° | IIb |

| 挿図番号 | 出土区 | 層位 | 石材 | 破損部位 | 重さ(g) | 大きさ(mm) 長 | 幅 | 厚 | 抉り(mm) 深度 | 幅 | 先端角度 | 分類 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 40 | J－31 | 表面採集 | 灰白色ｏｂ | C | 1.0 | 22 | 11(14) | 5 | 6 | (8) | 23° | IIb |
| 41 | B－14 | 赤褐色粘質土層 | 黒色ｏｂ | 完 | 1.3 | 29(32) | 17 | 3 | 6 | (8) | 45° | IIb |
| 42 | Q－11 | 〃 | 灰青色 | C | 1.4 | 24(27) | 15(19) | 6 | 9 | 10 | 41° | IIb |
| 43 | I－29 | 表面採集 | 黒色ｏｂ | D | 0.9 | 18(31) | 15(19) | 4 | 8 | (14) | 33° | IIb |
| 44 | | 〃 | 〃 | 〃 | 1.7 | 26 | 15(17) | 5 | 6 | (11) | 35° | IIb |
| 45 | K－13 | 赤褐色粘質土層 | 〃 | 完 | 1.9 | 27(29) | 19 | 5 | 7 | 8 | 50° | IIb |
| 46 | I－29 | 表面採集 | 黒色 | A | 0.6 | 16 | 17(19) | 3 | 6 | (11) | 60° | IIb |
| 47 | | 〃 | 黒色ｏｂ | C | 0.4 | 20(22) | 11(17) | 4 | 10 | 13 | 51° | IIb |
| 48 | D－7 | 〃 | 灰白色ｏｂ | 完 | 0.4 | 20(21) | 11 | 3 | 7 | 9 | 35° | IIb |
| 49 | F－11 | 赤褐色粘質土層 | 安山岩 | C | 1.5 | 29(36) | 16 | 4.5 | 8 | (9) | 30° | IIb |
| 50 | E－12 | 〃 | 〃 | A | 1.1 | 16 | 14 | 5 | 5 | 7 | (26°) | IIb |
| 51 | A－9 | 表面採集 | 黒色ｏｂ | C | 0.3 | 18(19) | 18 | 3 | 11 | (12) | 48° | IIb |
| 52 | I－29 | 赤褐色粘質土層 | 〃 | D | 1.2 | 26(31) | 14(21) | 5 | 10 | 12 | (47°) | IIb |
| 53 | D－26 | 表面採集 | 〃 | C | 1.4 | 31(40) | 14(19) | 4 | 9 | (16) | (27°) | IIb |
| 54 | H－30 | 〃 | 〃 | 〃 | 0.6 | 19(22) | 11(14) | 4 | 6 | (8) | 45° | IIb |
| 55 | G－27 | 赤褐色粘質土層(A) | 黒色 | 完 | 0.7 | 23 | 16 | 3 | 7 | 12 | 47° | IIc |
| 56 | E－8 | 〃 | 黒色ｏｂ | C | 0.6 | 20 | (20) | 4 | 7 | (10) | 60° | IIc |
| 57 | B－7 | 表面採集 | 〃 | 〃 | 0.8 | 22 | 13(16) | 4 | 5 | 9 | 46° | IIc |
| 58 | E－10 | 赤褐色粘質土層 | 安山岩 | 〃 | 1.3 | 27(32) | 12(19) | 5 | 4 | (9) | 33° | IIc |
| 59 | D－9 | 〃 | 〃 | D | 2.3 | 30(38) | 14(23) | 7 | 9 | 14 | (31°) | IIc |
| 60 | Q－11 | 表面採集 | 黒色ｏｂ | C | 0.7 | 19 | 17 | 3.5 | 6 | 11 | | IIc |
| 61 | D－6 | 赤褐色粘質土層 | 〃 | 〃 | 2.1 | 20(36) | 25 | 6 | 9 | 17 | (33°) | IIc |
| 62 | | 表面採集 | 〃 | C | 1.3 | 20(25) | 14(17) | 5 | 4 | (7) | 44° | IIc |
| 63 | D－9 | 赤褐色粘質土層 | 安山岩 | 〃 | 1.2 | 18 | 16 | 4 | 3 | 9 | | IIc |
| 64 | H－15 | 表面採集 | 黒色ｏｂ | C | 0.7 | 20 | (22) | 4 | 10 | (15) | | IIc |
| 65 | E－12 | 〃 | 〃 | A | 0.7 | 22 | 7 | 5 | 10 | 5 | 30° | IId |
| 66 | J－12 | 赤褐色粘質土層 | 〃 | 完 | 0.8 | 20(22) | 14 | 5 | 5 | 10 | 42° | IId |
| 67 | F－12 | 〃 | 安山岩 | 〃 | 1.4 | 24 | 15 | 5 | 4 | (9) | 37° | IId |
| 68 | Q－11 | 表面採集 | 灰青色ｏｂ | B | 1.3 | 21(22) | 16 | 5 | 1 | 6 | 46° | IId |
| 69 | I－30 | 〃 | 黒色ｏｂ | E | 1.3 | 17 | 19 | 5 | 7 | (14) | | IId |
| 70 | E－14 | 〃 | 〃 | C | 0.6 | 16 | 17(19) | 3 | 3 | 6 | 68° | IId |
| 71 | C－11 | 〃 | 〃 | D | 0.5 | 18(21) | 14 | 3 | 4 | (9) | 40° | IId |
| 72 | C－11 | 〃 | 〃 | P | 1.8 | 21(29) | 18 | 6 | 6 | 15 | 43° | IId |
| 73 | B－25 | 〃 | 〃 | E | 0.6 | 19(22) | (11) | 3 | 2 | 4 | 33° | IId |
| 74 | F－14 | 赤褐色粘質土層 | 〃 | A | 0.5 | 20 | 10 | 5 | 15 | 5 | 55° | IId |
| 75 | G－19 | 表面採集 | 〃 | D | 1.6 | 25(33) | 19(24) | 4 | (10) | 22 | (44°) | IIe |
| 76 | | 〃 | 〃 | C | 1.1 | 21(23) | 12(15) | 5 | 3 | (8) | 40° | IIe |
| 77 | | 〃 | 〃 | 〃 | 1.9 | 28(32) | 17(22) | 5 | 4 | (10) | 48° | IIe |
| 78 | D－14 | 〃 | 〃 | 完 | 1.0 | 25(27) | 18 | 4 | 4 | (11) | 40° | IIe |

| 挿図番号 | 出土区 | 層位 | 石材 | 破損部位 | 重さ(g) | 大きさ(mm) 長 | 幅 | 厚 | 抉り(mm) 深度 | 幅 | 先端角度 | 分類 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 79 | E－23 | 表面採集 | 安山岩 | D | 1.6 | 26(34) | 15 | 4 | | | 26° | IIe |
| 80 | L－25 | 赤褐色粘質土層 | 黒色ｏｂ | C | 0.8 | 17 | 13(16) | 4 | 1 | (6) | 50° | IIe |
| 81 | B－11 | 表面採集 | 灰白色ｏｂ | D | 3.1 | 28(45) | 17(19) | 6.5 | 2 | (8) | (23°) | IIe |
| 82 | C－8 | 赤褐色粘質土層 | 黒色ｏｂ | 〃 | 1.5 | 28(34) | 15(18) | 4 | 6 | — | (27°) | IIe |
| 83 | K－29 | 〃 (A) | 灰白色ｏｂ | B | 0.7 | 20(24) | 13 | 3 | | | 40° | IIe |
| 84 | L－18 | 〃 (A) | 黒色ｏｂ | 〃 | 1.3 | 21(24) | 14(16) | 5 | 1 | (3) | 40° | IIe |
| 85 | | 表面採集 | 灰青色ｏｂ | D | 0.6 | 15 | 18(19) | 3 | 2 | | (33°) | IIe |
| 86 | B－14 | 赤褐色粘質土層 | 黒色ｏｂ | E | 0.2 | 14(18) | 10 | 2 | 2 | (4) | (34°) | III |
| 87 | H－11 | 〃 | 〃 | 完 | 0.6 | 22 | 15 | 3 | 4 | 12 | 41° | III |
| 88 | C－15 | 表面採集 | 〃 | D | 0.8 | 18 | 14 | 3 | 5 | (11) | 26° | III |
| 89 | | 〃 | 灰青色ｏｂ | 完 | 2.0 | 31 | 18 | 4 | 7 | (10) | 50° | IV |
| 90 | I－11 | 〃 | 黒色ｏｂ | A | 0.9 | 20(31) | 15 | 4 | 4 | 7 | (43°) | IV |
| 91 | C－11 | 〃 | 〃 | 〃 | 0.6 | 15 | 13 | 3 | 3 | 6 | 26° | IV |
| 92 | M－16 | 〃 | 〃 | 〃 | 0.4 | 16(19) | 13 | 3 | 4 | (9) | | IV |
| 93 | | 〃 | 〃 | 〃 | 1.0 | 19 | 15 | 5 | 11 | 3 | (46°) | IV |
| 94 | | 〃 | 〃 | 〃 | 2.8 | 24 | 17 | 6 | 10 | 6 | 31° | IV |
| 95 | D－11 | 〃 | 〃 | | 1.8 | | | | | | 39° | IV |
| 96 | | 〃 | 〃 | 完 | 2.3 | 27 | 19 | 5 | 3 | 7 | 39° | IV |
| 97 | O－13 | 〃 | 〃 | | 1.2 | 27 | 14 | 4 | | | | IV |
| 98 | H－30 | 〃 | 灰白色ｏｂ | F | 0.7 | | | 4 | | | | V |
| 99 | G－14 | 〃 | 黒色ｏｂ | 〃 | | | | 4 | | | | V |

Tab. 4　尖頭器・石匙計測表

| 挿図番号 | 分類 | 出土区 | 出土層位 | 石材 | 重さ(g) | 長(cm) | 幅(cm) | 厚(cm) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 100 | | C-7-16 | 赤褐色粘質土層 | 安山岩 | 12.3 | 4.4 | 2.4 | 1.1 | ポイント |
| 101 | 横形 | E-12-60 | 〃 | 黒色ｏｂ | 14.3 | 3.1 | 4.8 | 1.0 | 石匙 |
| 102 | 〃 | F-9-33 | 〃 | 安山岩 | 37.1 | 6.8 | 4.8 | 1.2 | 〃 |
| 103 | 縦形 | C-11-H | 〃 | 灰青色ob | 2.3 | | | | 〃 ⅔欠損 |
| 104 | | F-13-3 | 〃 | 安山岩 | | | | | 〃 〃 |

Tab. 5　スクレイパー計測表

| 挿図番号 | 分類 | 出土区 | 出土層位 | 石材 | 重さ(g) | 長(cm) | 幅(cm) | 厚(cm) | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 105 | | B-8-64 | 赤褐色粘質土層 | 安山岩 | 32.3 | 5.8 | 2.9 | 1.9 | |
| 106 | | A-9-H | 〃 | 〃 | 19.9 | 6.3 | 2.6 | 0.9 | |
| 107 | | F-11-24 | 〃 | 〃 | 13.3 | 3.5 | 2.8 | 1.2 | |
| 108 | | E-9-H | 〃 | 〃 | 24.1 | 5.2 | 3.1 | 1.2 | |
| 109 | | E-13-H | 〃 | 灰白色 | 10.3 | 3.8 | 2.1 | 1.0 | 新しい剝離あり |
| 110 | | C-12-98 | 〃 | 黒色ｏｂ | 6.7 | 3.6 | | 0.7 | 切断 |
| 111 | | B-10-10 | 〃 | 安山岩 | 25 | 3.8 | 5.6 | 1.0 | |

Tab. 6　使用痕ある剝片・剝片・石刻計測表　（Hは表面採集）

| 挿図番号 | 出土区 | 石材 | 打面 | 長(cm) | 幅(cm) | 厚(cm) | 重(g) | 自然面 | 折断 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 112 | H-13-H | 黒色ｏｂ | 自然面 | 4.3 | 1.7 | 0.5 | 3.8 | 有 | 無 | |
| 113 | B-8-67 | 〃 | 平坦 | 3.0 | 1.5 | 0.5 | 2.4 | 有 | 有 | |
| 114 | M-26-H | 〃 | 調整 | 3.6 | 2.6 | 0.6 | 7.3 | 無 | 無 | 新しい剝離有 |
| 115 | C-19-H | 〃 | 自然面 | 3.5 | 0.9 | 0.3 | 0.8 | 有 | 無 | |
| 116 | O-13-H | 〃 | 調整 | 2.5 | 1.2 | 0.4 | 1.1 | 有 | 有 | |
| 117 | F-12-121 | 安山岩 | 自然面 | 3.0 | 4.2 | 0.6 | 6.6 | 有 | 無 | |
| 118 | F-8-H | 〃 | 調整 | 2.1 | 3.9 | 1.0 | 8.8 | 無 | 無 | 新しい剝離有 |
| 119 | E-23-H | 黒色ｏｂ | 〃 | 3.2 | 2.2 | 1.0 | 7.5 | 有 | 無 | |
| 120 | A-9-H | 安山岩 | 欠 | 4.3 | 2.1 | 1.0 | 12.7 | 無 | 無 | 一部欠損 |
| 121 | B-11-29 | 〃 | 自然面 | 6.9 | 4.0 | 1.2 | 30.0 | 有 | 無 | |
| 122 | B-8-77 | 〃 | 線状 | 4.3 | 2.8 | 0.8 | 10.7 | 無 | 無 | 新しい剝離有 |
| 123 | F-10-62 | 灰青色ｏｂ | 調整 | 2.3 | 1.6 | 0.7 | 2.4 | 無 | 無 | |
| 124 | B-8-8 | 黒色ｏｂ | 平坦 | 2.7 | 1.5 | 0.3 | 2.2 | 無 | 有 | |
| 125 | G-11-H | 〃 | 調整 | 3.1 | 1.4 | 0.6 | 1.7 | 無 | 無 | |
| 126 | F-10-38 | 灰白色ｏｂ | 自然面 | 3.2 | 1.7 | 0.5 | 2.1 | 有 | 無 | |
| 127 | B-7-8 | 安山岩 | 調整 | 3.4 | 1.7 | 0.9 | 5.5 | 無 | 無 | |
| 128 | F-8-H | 灰青色ｏｂ | 〃 | 3.5 | 1.9 | 0.5 | 5.4 | 無 | 無 | |
| 129 | C-14-11 | 黒色ｏｂ | 線状 | 2.2 | 2.0 | 0.3 | 1.0 | 無 | 無 | |
| 130 | G-12-14 | 〃 | 自然面 | 3.5 | 1.6 | 0.8 | 4.3 | 有 | 無 | 新しい剝離有 |
| 131 | O-13-H | 〃 | 欠 | 2.8 | 1.6 | 0.6 | 2.9 | 有 | 無 | 新しい剝離有 |
| 132 | B-7-18 | 安山岩 | 自然面 | 5.4 | 2.1 | 0.6 | 6.9 | 有 | 有 | |
| 133 | A-12-68 | 〃 | 調整 | 4.2 | 4.7 | 0.6 | 8.4 | 有 | 無 | |
| 134 | B-7-87 | 〃 | 〃 | 3.5 | 3.8 | 0.4 | 9.0 | 有 | 有 | |
| 135 | F-8-4 | 灰青色ｏｂ | 線状 | 2.6 | 3.8 | 0.7 | 5.0 | 有 | 有 | |
| 136 | B-8-H | 安山岩 | 〃 | 3.9 | 3.9 | 0.9 | 14.8 | 有 | 無 | |
| 137 | B-8-20 | 黒色ｏｂ | 自然面 | 3.1 | 3.2 | 1.2 | 9.1 | 有 | 無 | |
| 139 | E-10-54 | 安山岩 | | 5.6 | 5.4 | 1.8 | 42.3 | 有 | 無 | |
| 140 | B-7-88 | 〃 | | 4.6 | 4.2 | 1.5 | 35.5 | 無 | 無 | |
| 141 | G-10-40 | 〃 | | 4.2 | 5.9 | 2.2 | 41.7 | 無 | 無 | |

## 四、旧石器時代の遺物

旧石器時代の遺物は，Ａ地点・Ｂ地点共に出土し，その総出土点数は表土，包含層出土のものを合わせて，Ａ地点で235点，Ｂ地点105点とＡ地点出土のものが圧倒的に多い。しかし，Ａ地点については，包含層の堆積が薄く，土層堆積状況，及び，遺物の出土状況も，縄文時代の遺物がかなり混入するなど，定形的な石器以外の剥片類については，その時代的判別は困難な状態にある。従ってＡ地点の遺存状態については定形的な石器についてのみ，その出土状態を示した。Ｂ地点では，そのほとんどが旧石器時代の遺物で占められ，包含層の堆積も厚いが傾斜がかなり強く，遺物の流れが予想されるため本来の遺存状態を保っているとはいいがたい。

遺物については，周辺からの表面採集品，Ａ地点の表土，包含層出土品，Ｂ地点の表土，包含層出土品に分けてそれぞれ説明し，Ａ地点での石器組成，Ｂ地点での石器組成，Ａ・Ｂ両地点の相違について考えていこうとするものであり，県内の旧石器時代の遺跡との関連の中で，上原遺跡の位置づけを行うことを目的とする。

### 遺跡周辺表面採集の石器（Fig. 46）

遺跡は台地全体に及ぶと思われるものの，発掘区域は台地中央部のみに留まり，その周辺からは，発掘区域内とは相違する石器群が存在することを示唆する資料が採集されている。1～18の資料は，それら表面採集の資料で，ナイフ形石器，彫器，角錐状石器，三陵尖頭器，台形石器からなり，角錐状石器，三陵尖頭器などは，発掘資料では出土していない点，平戸市の堤西牟田遺跡（文献1）の出土関係などから判断すると，発掘資料との間に時間的な差を持つものと考えられる。ナイフ形石器については，中型の柳葉形をなす，中山（文献2）・柿崎遺跡（文献3）に見られるものと同様なものや，当遺跡に普遍的に見られる，小型のナイフ形石器などからなり，台形石器16～18は，その技術的側面からは，各々様相を異にするものが出土している。1～18の採集資料からは，萩原氏編年を踏襲するとすれば，角錐状石器・台形石器の在り方，柳葉形のナイフ形石器などから，フェイズⅡ後期～中期の石器が混入しているものと考えられる。

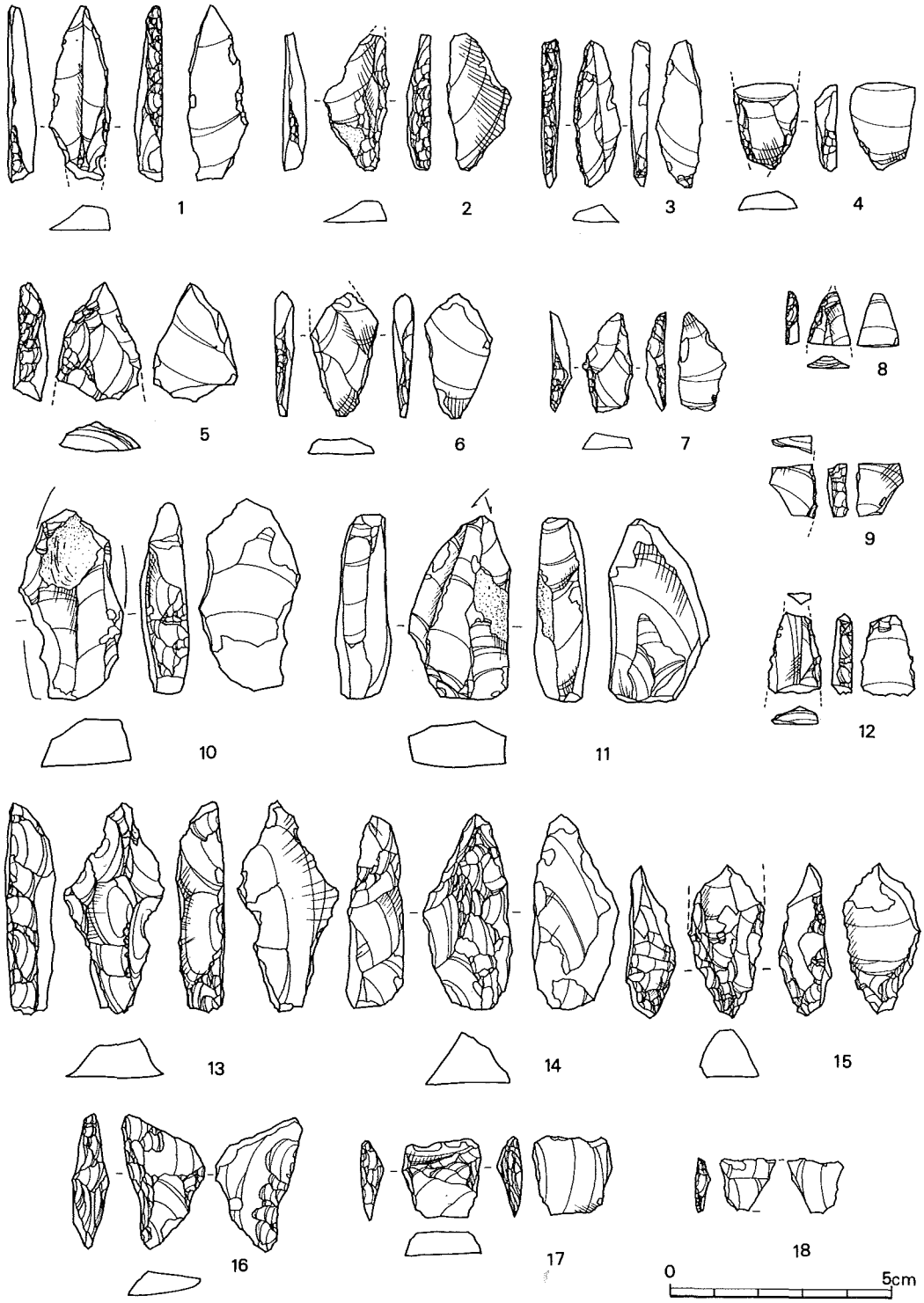



Fig. 46　遺跡周辺表面採集の石器

### A地点表土出土の石器

A地点の表土からは，ナイフ形石器37点，台形石器３点の出土が見られる。ナイフ形石器は中型で柳葉形を呈するものと，先端部切断のナイフ形石器が目を引くもので，柳葉形のナイフ形石器は，中山・柿崎遺跡などのような細身，長身のものは見られず，柳葉形になるものも少ない。先端部切断のナイフは，そのブランティング面が側辺にまで及ぶもので，このような形態は，先端部切断のナイフを多数出土している柿崎遺跡においては見られず，中山遺跡において１点認められるにすぎない。いずれにせよ，先端部切断のナイフ自体はフェイズII後期のものとして捉えられよう。台形石器33は，素材剥片自体が彎曲しているため刃部もやや彎曲し，刃部が全体形から張り出した形をしている。34の刃部は直線上で，ブランティングも両側辺平行して加工しているもので，素材剥片でやや相異があるが，日の岳型と呼ばれる一連のものに類似している。33・34は灰青色黒曜石を使用しているが，55は漆黒色黒曜石を使用し，その素材剥片は薄身で，一側辺にブランティングを加え，もう一側辺は素材剥片のエッジをそのまま使用しているもので，台形石器自体の範疇の中で捉らえられるかどうかも問題があろう。A地点表土出土の石器についても，様々の時期が混入しているものと思われ，その中において統一性は見られない。

### A地点出土の石器

表土出土のものに比べ，比較的まとまった状況にあり，小型の柳葉形ナイフ形石器と，先端部切断のナイフ形石器で構成される。柳葉形のナイフ形石器は，薄い小型の剥片を利用した，59～63，86～92などの一群と，やや肉厚の縦長剥片を使用した一群とに分けられよう。小型のナイフ形石器の一群には，打面部を残存させる，61・62・85などがあり，素材剥片の形状をほぼ残存させるものがある。特に85のナイフ形石器は，B地点出土の155のナイフ形石器と共通している点，このナイフ形石器に見るかぎり，A地点とB地点との繋がりを考えさせる石器である。64以下の中型のナイフ形石器については，64のように尖端部尖鋭になるものと，68・69・72～74・76・77などに見られるような，刃部長が短く，肉厚のナイフ形石器の一群があり，平面分布の中でも集中するような傾向が見られる。先端部切断のナイフ形石器98～103は，表土出土のものと同様に，単に先端部のみがブランティングによって切断されるばかりでなく，それに続く側辺もブランティング加工が施される。このような加工を施すナイフ形石器が，まとまって出土した例は他になく，一つの形式設定ができるものと思われるが，その時期については，他の先端部切断のナイフと同様，素材剥片の在り方からフェイズII後期のものとして捉えられよう。他のナイフ形石器については，フェイズII前期においても看守される面もあり，今後の研究に待たれる面が多い。石核は７点出土しており，円盤状の石核107・108・110と，

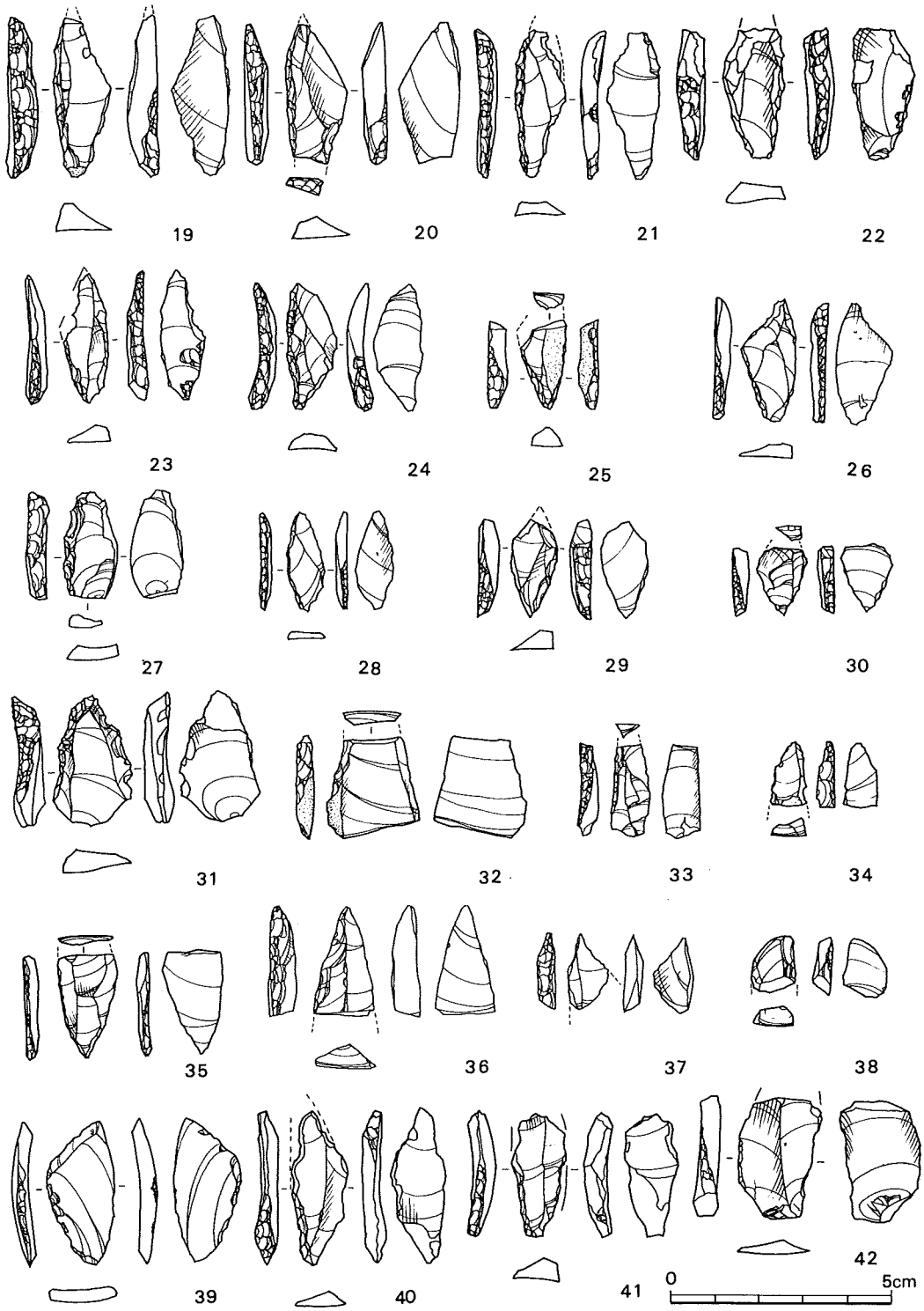



Fig. 47　A 地点表土出土の石器(1)

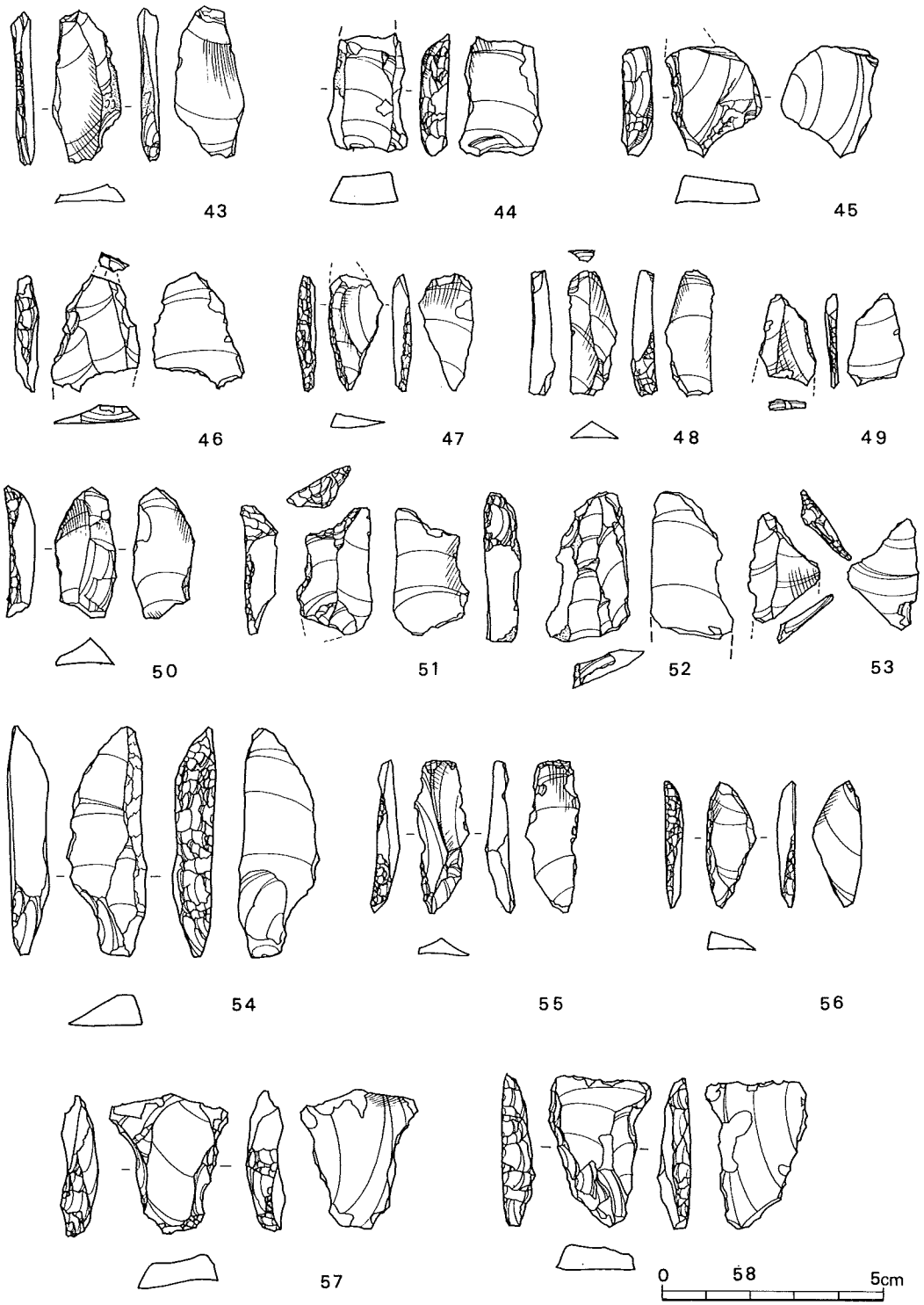



Fig. 48　A地点表土出土の石器(2)

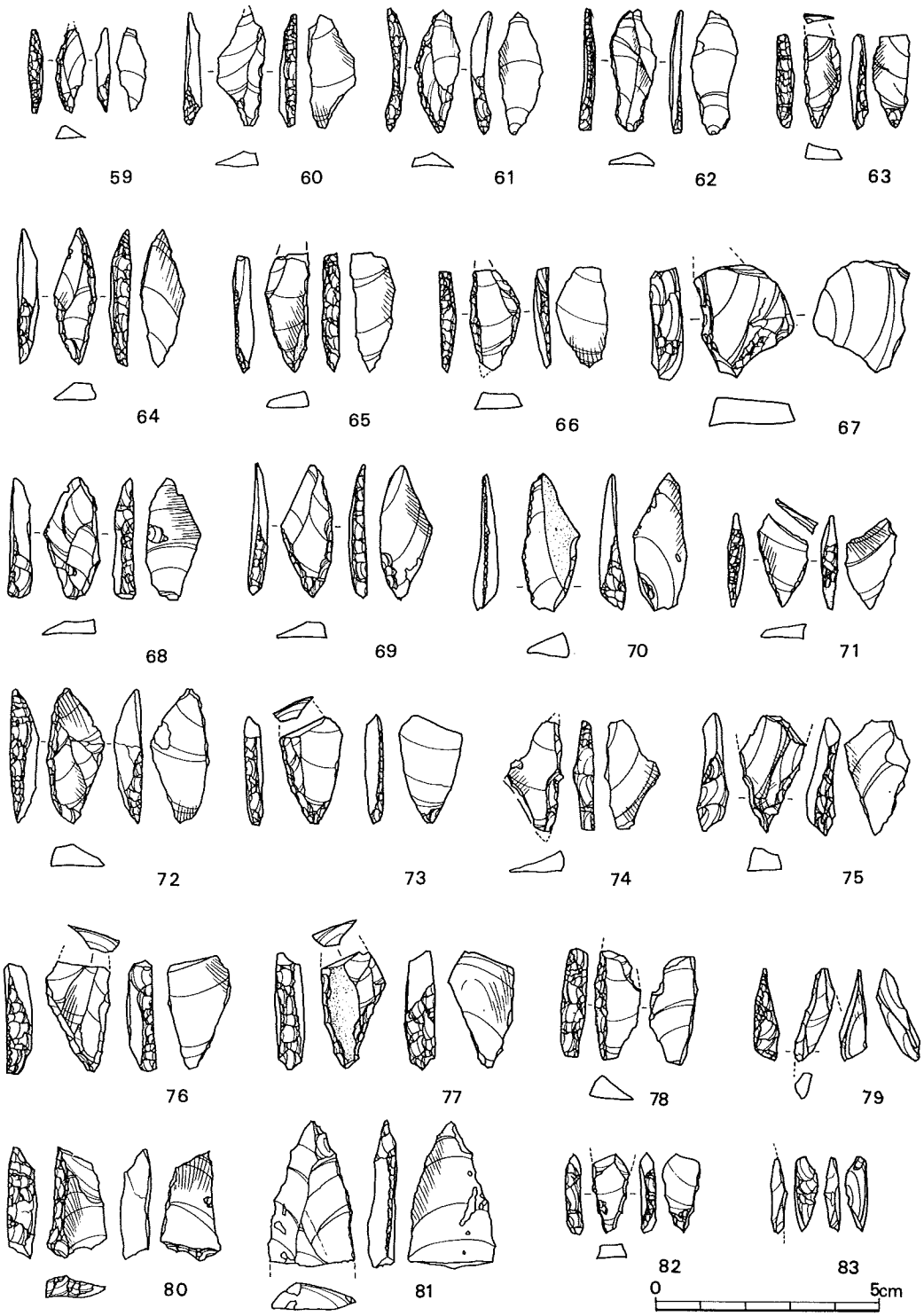



Fig. 49　A 地点出土の石器(1)

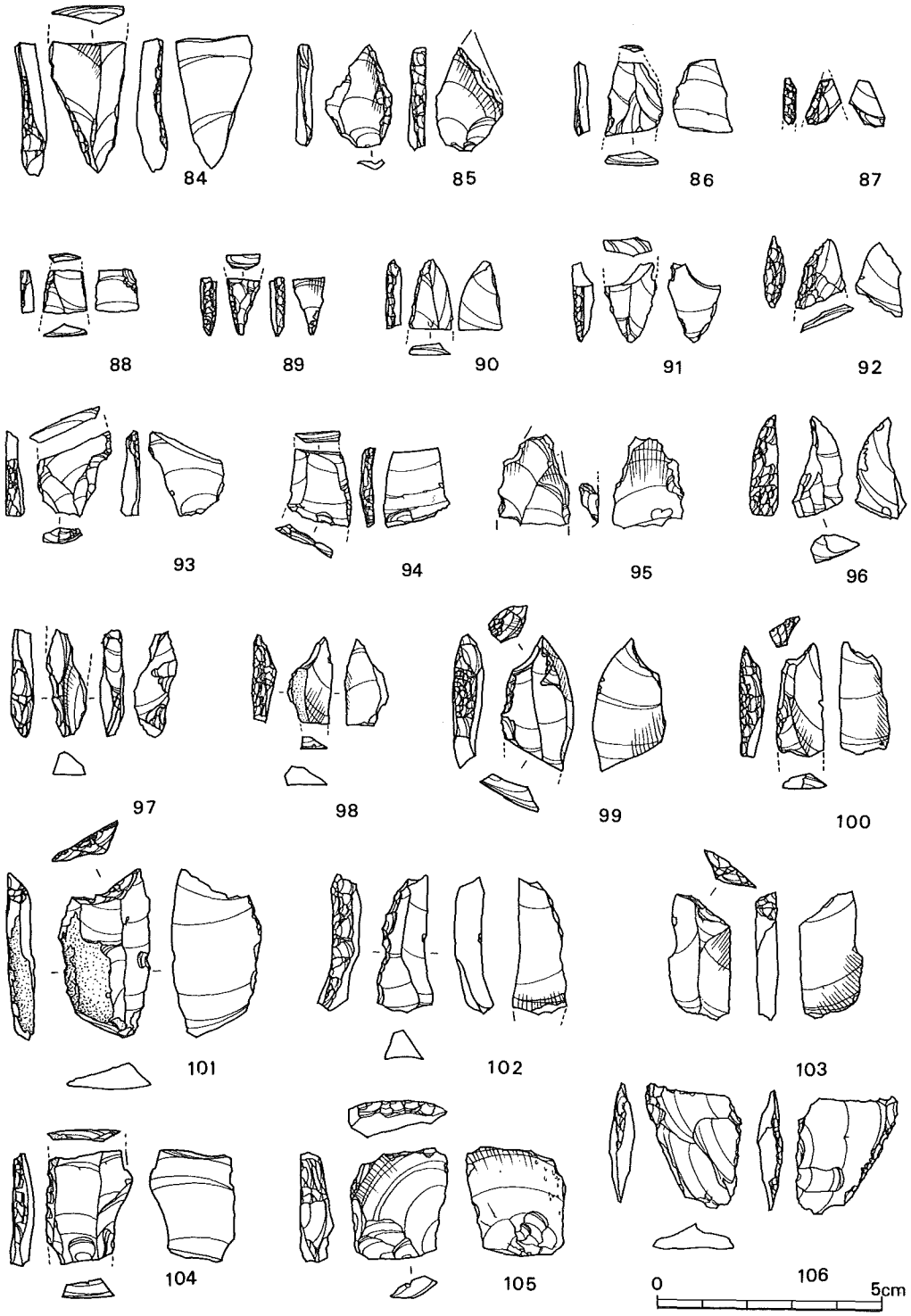



Fig. 50　A地点出土の石器(2)

109の縦長剥片用の石核で代表される。107・108は表裏面共に，作業面として利用され，亀甲状に仕上っている。110も同様に，最初に円盤状に縦長剥片を周囲から剥離していたものを，最終的に，図面正面にあるように打面調整を行い，小型縦長剥片を剥離している。これら３点とはあきらかに相違する剥片剥離を行っているのが109で，方柱状を呈し，正面のみを剥離作業面としており，裏面は自然面に覆われている。前者の石核よりも厚めの縦長剥片剥離を目的としたものであろう。113の石核については，縄文時代の所産としての可能性も強いが，瀬戸内の旧石器時代終末にみられる横長剥片剥離技術にも類似する資料として扱ってみた。114～135は旧石器時代の剥片及び，石器と考えられるもので，掻器・彫器・使用痕ある剥片などを揚げて見た。117・118の掻器は，特に丹念な調整により刃部を厚く作り出しており，特に117については細石器文化に伴う厚手のエンドスクレイパーと考えられよう。彫器は，Ａ地点，Ｂ地点の発掘資料の中では124と167の２点のみで，整った縦長剥片の一端に，打面調整なしで彫刃面を作り出している。この他にＡ地点・Ｂ地点共に言えることであるが，使用痕ある剥片，特に擦痕の目立つ剥片が非常に目立ち，上原遺跡での石器組織の貧弱さを補うものとして捉えられる。

PL. 14

石核出土状況

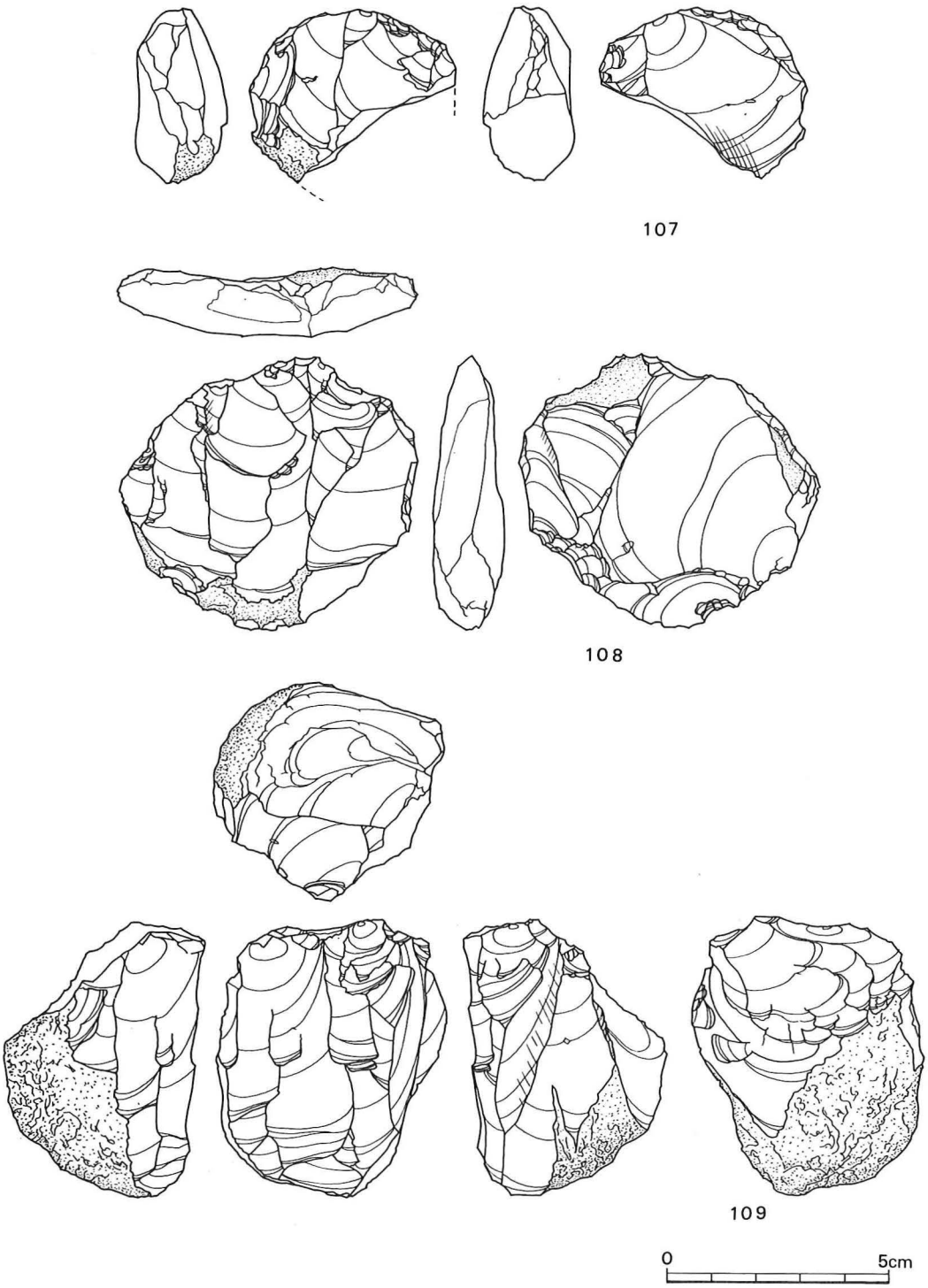



Fig. 51　A 地点出土の石核(1)

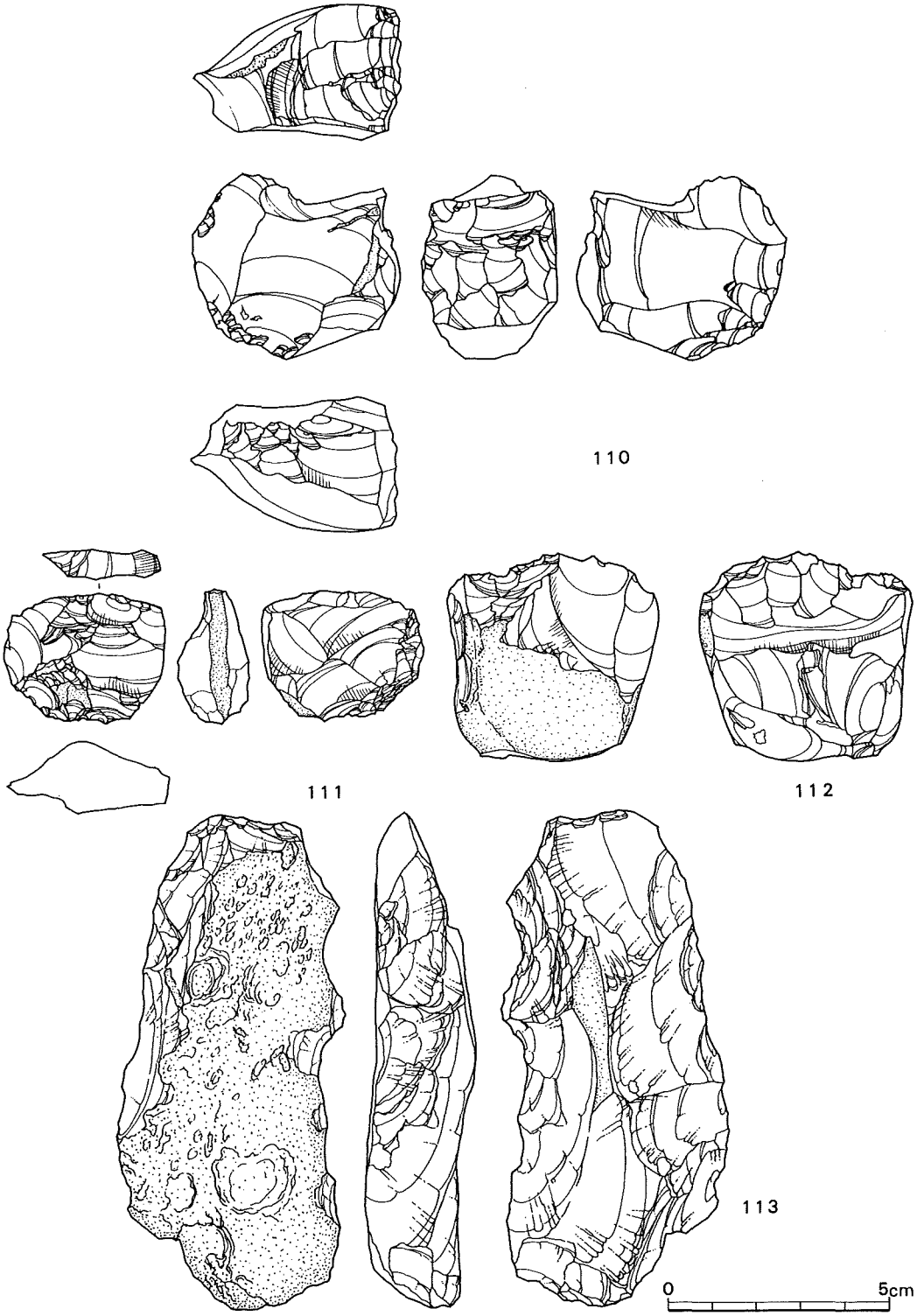



Fig. 52　A 地点出土の石核(2)

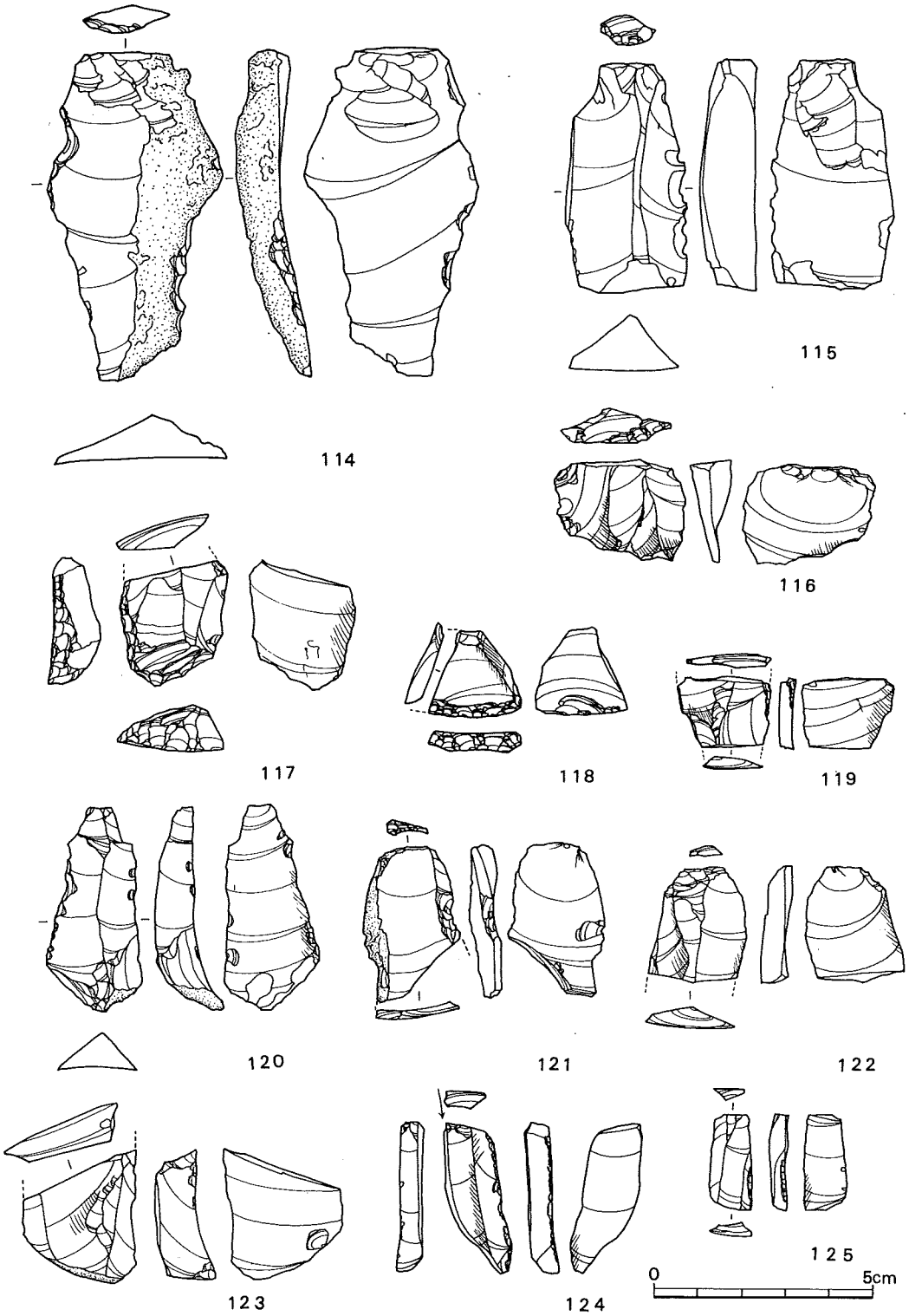



Fig. 53　A 地点出土の石器(3)

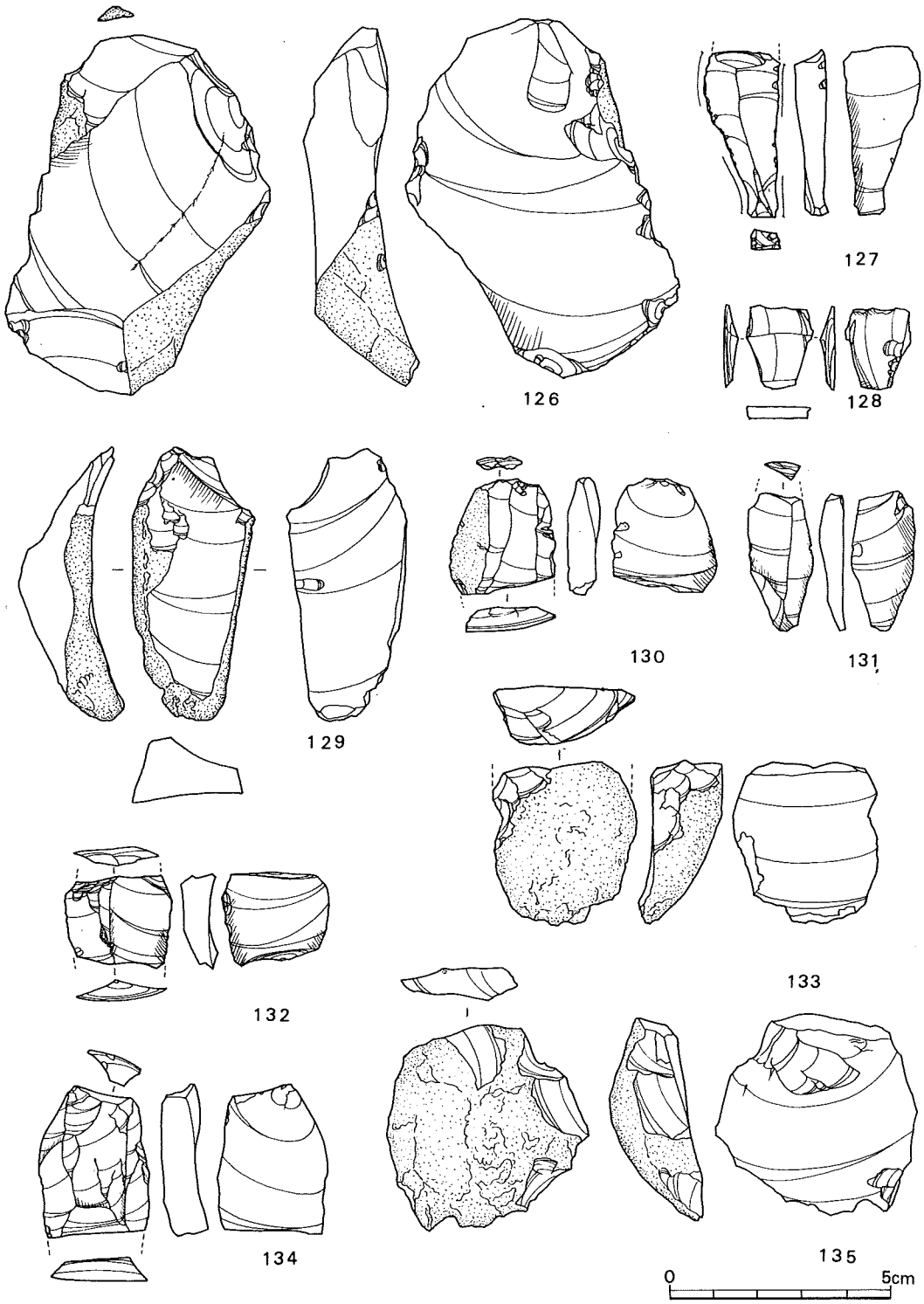



Fig. 54　A 地点出土の石器(4)

## Ｂ地点出土の石器

Ｂ地点の遺物はナイフ形石器を中心に構成され，特に小型のナイフ形石器に特筆すべきものがある。これら小型のナイフ形石器140～155は，薄い小型の縦長剥片を使用することに共通性があり，151～153などは小形の不定形剥片を素材とし，幾何形を呈する。139のような大型のナイフ形石器も，素材剥片は小型のナイフ形石器と同様な，極薄の剥片を使用しており，同じ剥片剥離技術の中で掌握されるものと考えられる。また，背面基部平坦細調整のみられる138・140・142・162などのナイフ形石器があり，162と138においては，他のものに比べ，大型の縦長剥片を使用している点で相異しており，162についてはＢ地点の中でもやや距離をおくＦ－24区に出土している点などから，Ｂ地点で代表される小型のナイフ形石器と時間的な差を持つ可能性がある。138・162については，その所属時期については，柿崎型ナイフと呼ばれる一群に相当するものと考えられ，フェイズII後期に位置づけられようが，130～145の一連の小型のナイフ形石器がこれらと同時共存するものかどうかが一つの問題となり得る。160は，石錐で，中央部から欠損しているが，３つほどの尖鋭部分を作り出していたものと思われ，161についてはチャートの小円礫を半割したものにブランティング加工を施したものである。石核については，３点の出土があり，うち164は表土出土のもので，表裏面ともに剥離面に覆われ，縦断面凸レンズ状を呈する。163は，正面にのみ剥離作業面を設け，裏面は自然面を呈した小石核で，薄い小剥片を剥離したものと考えられる。165は，II層下，III層上面で出土した石核で拳大の角礫に対し，数回の剥離を施した後に，打面調整をした段階で放棄されている。剥離された剥片は自然面を表面に残すものが剥離されたと思われるが，その後に打面調整を行っている点，その後に剥離作業を続ける意志があったものと思われる。この石核については，Ｂ地点遺物出土レベルより，さらに下の方でこの１点が出土しており，上部出土の石器群より古い時期の段階に属するものであろう。この他の石器として，彫器・掻器などが出土しているが，Ａ地点と同様，使用痕ある剥片が多数出土しており，石器の組成上はＡ地点と同じ傾向を持つ。石器素材としては，漆黒色黒曜石と灰青色黒曜石でほぼ占められ，灰白色黒曜石製のものとしては，136と137のナイフ形石器にのみ使用しており，剥片類についても皆無に等しい状況にある。Ｂ地点出土の剥片は，大きさにおいて極端な差が認められるが，すべて縦長剥片剥離の中で捉えられる。灰青色黒曜石製の石核は出土していないが，179・180・181などの大型の調整剥片が出土しており，遺跡内での剥片剥離作業が現に存在し，石核は他に運び込まれたものであろう。

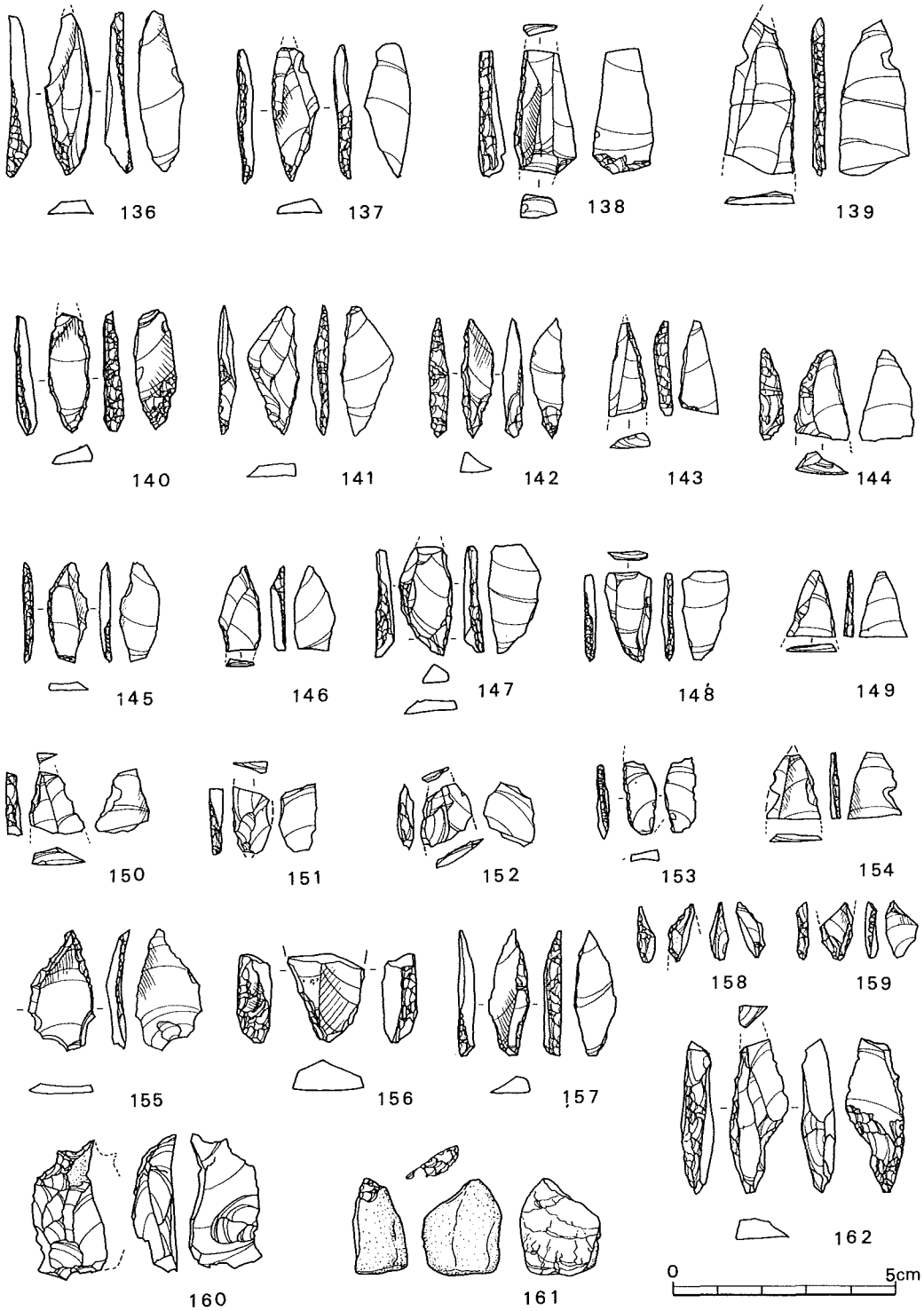



Fig. 55　B地点出土の石器(1)

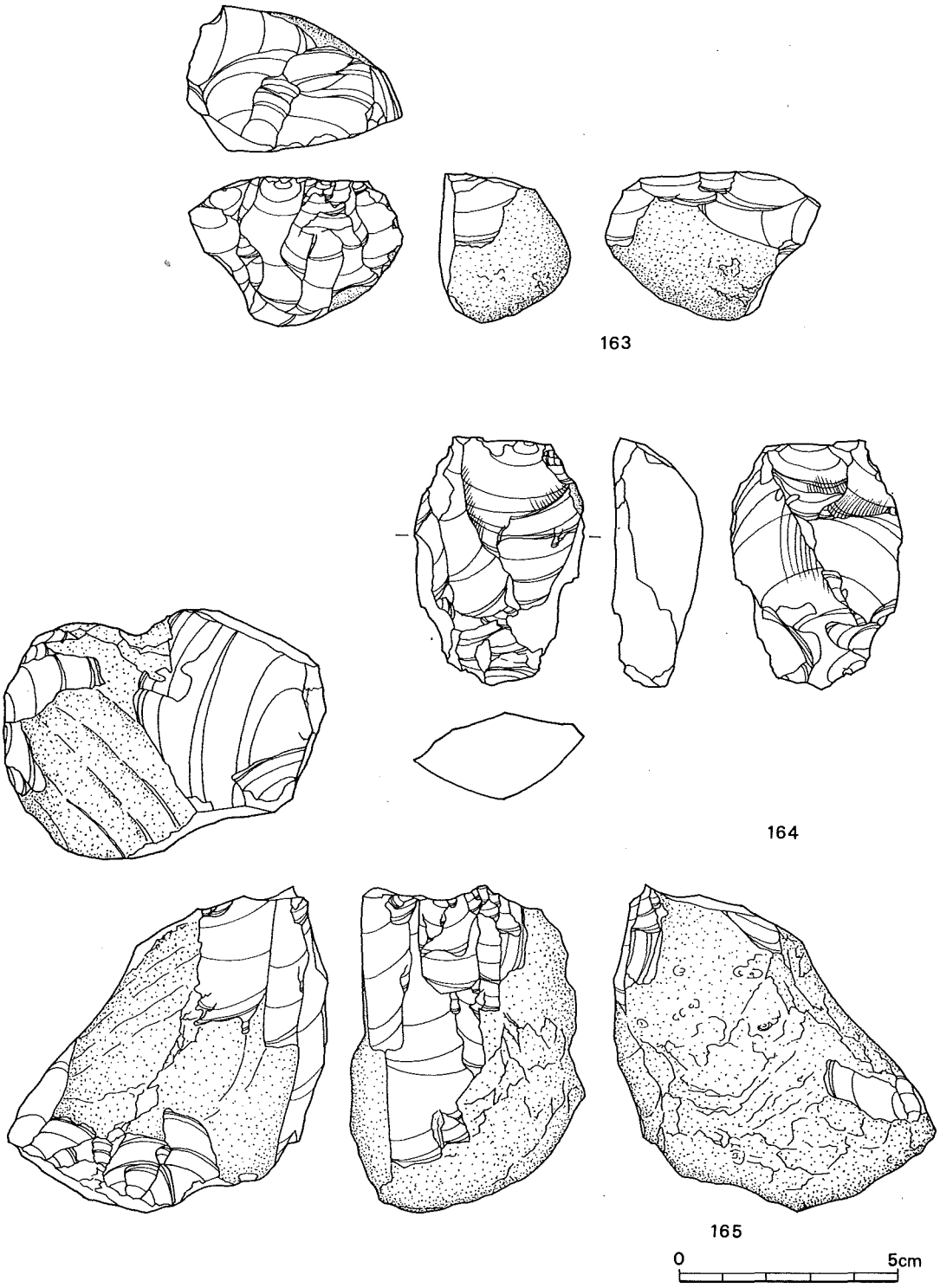



Fig. 56　B地点出土の石核

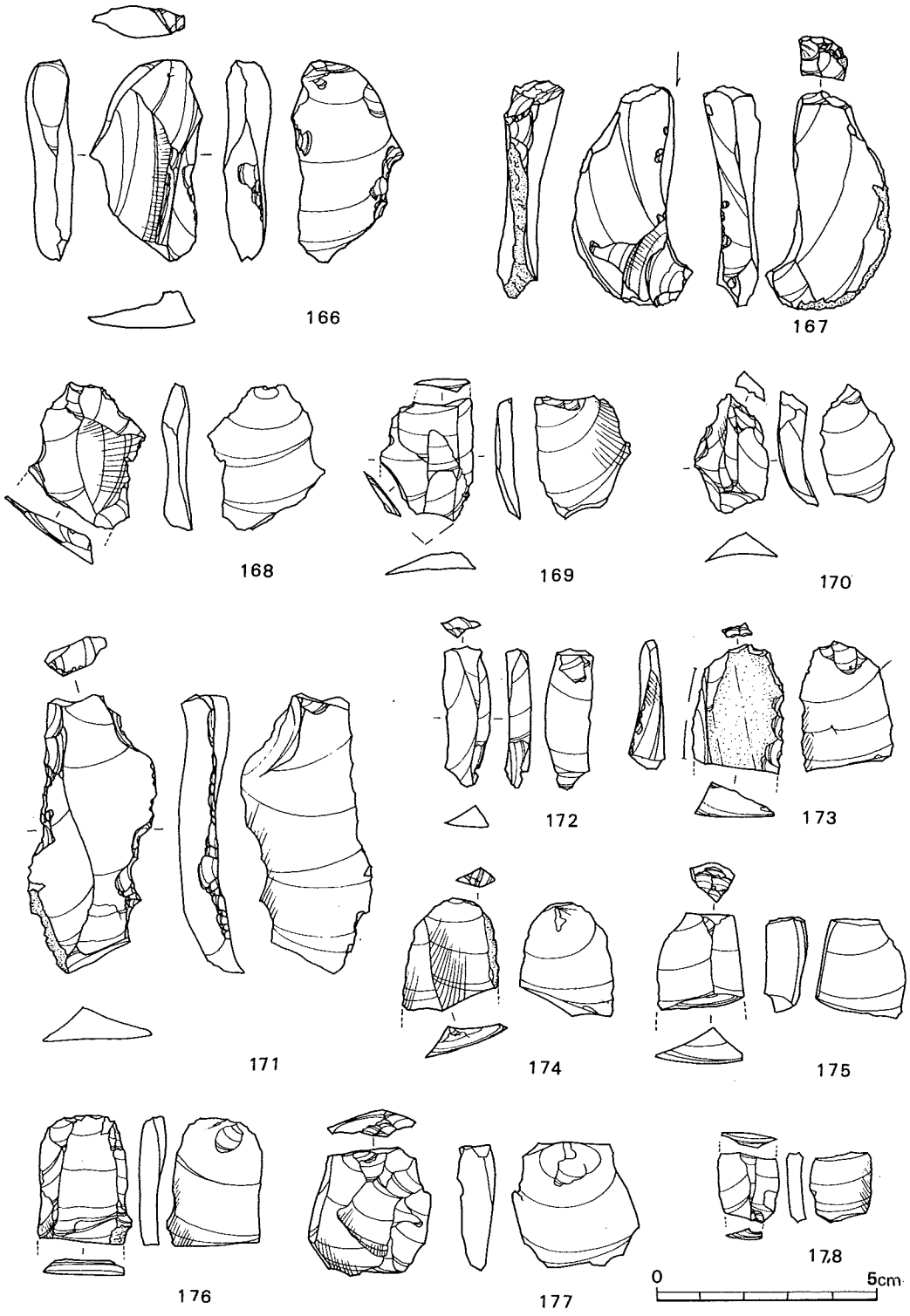



Fig. 57　B地点出土の石器(2)

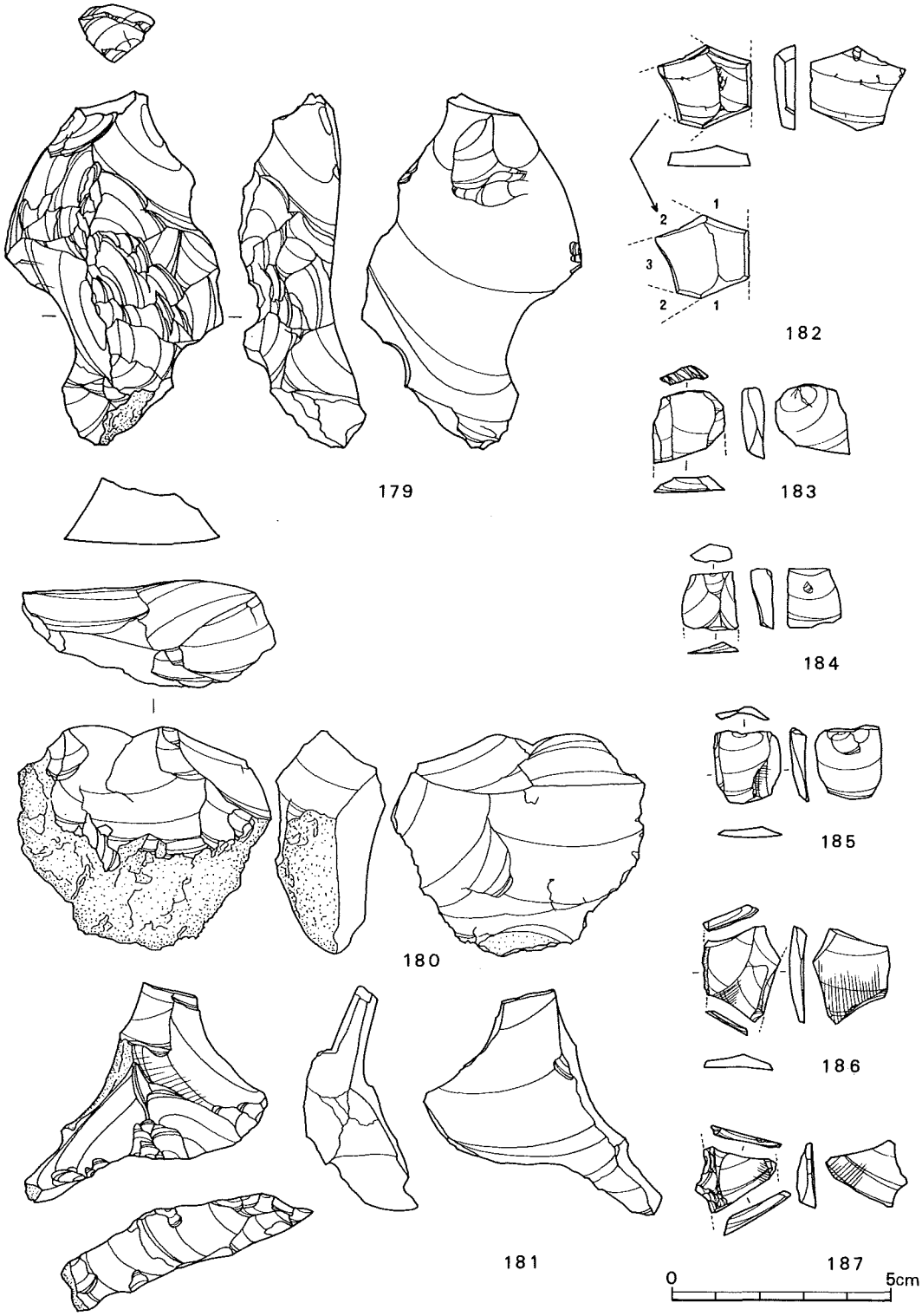



Fig. 58　B地点出土の石器(3)

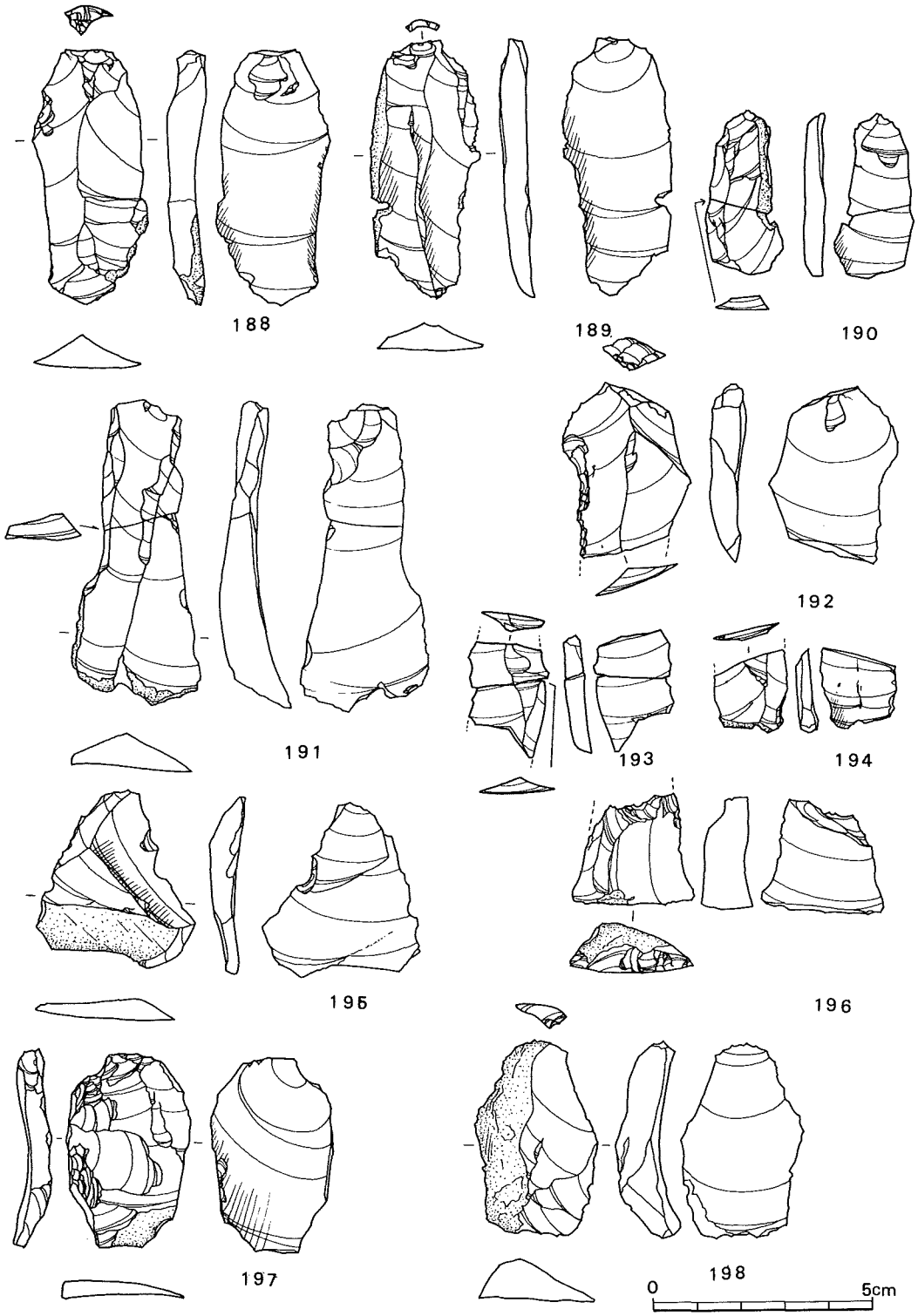



Fig. 59　B地点出土の石器(4)

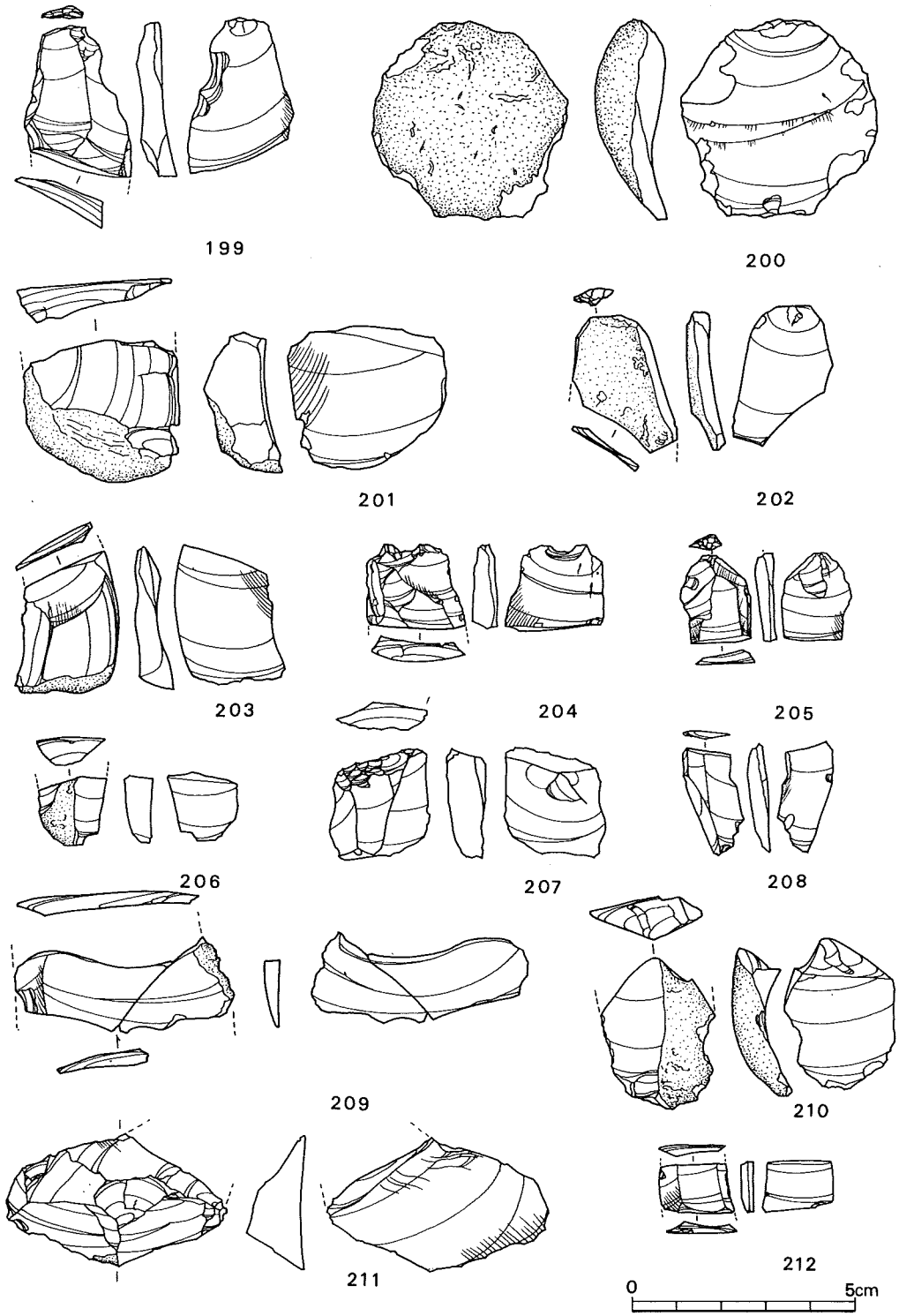



Fig. 60　B地点出土の石器(5)

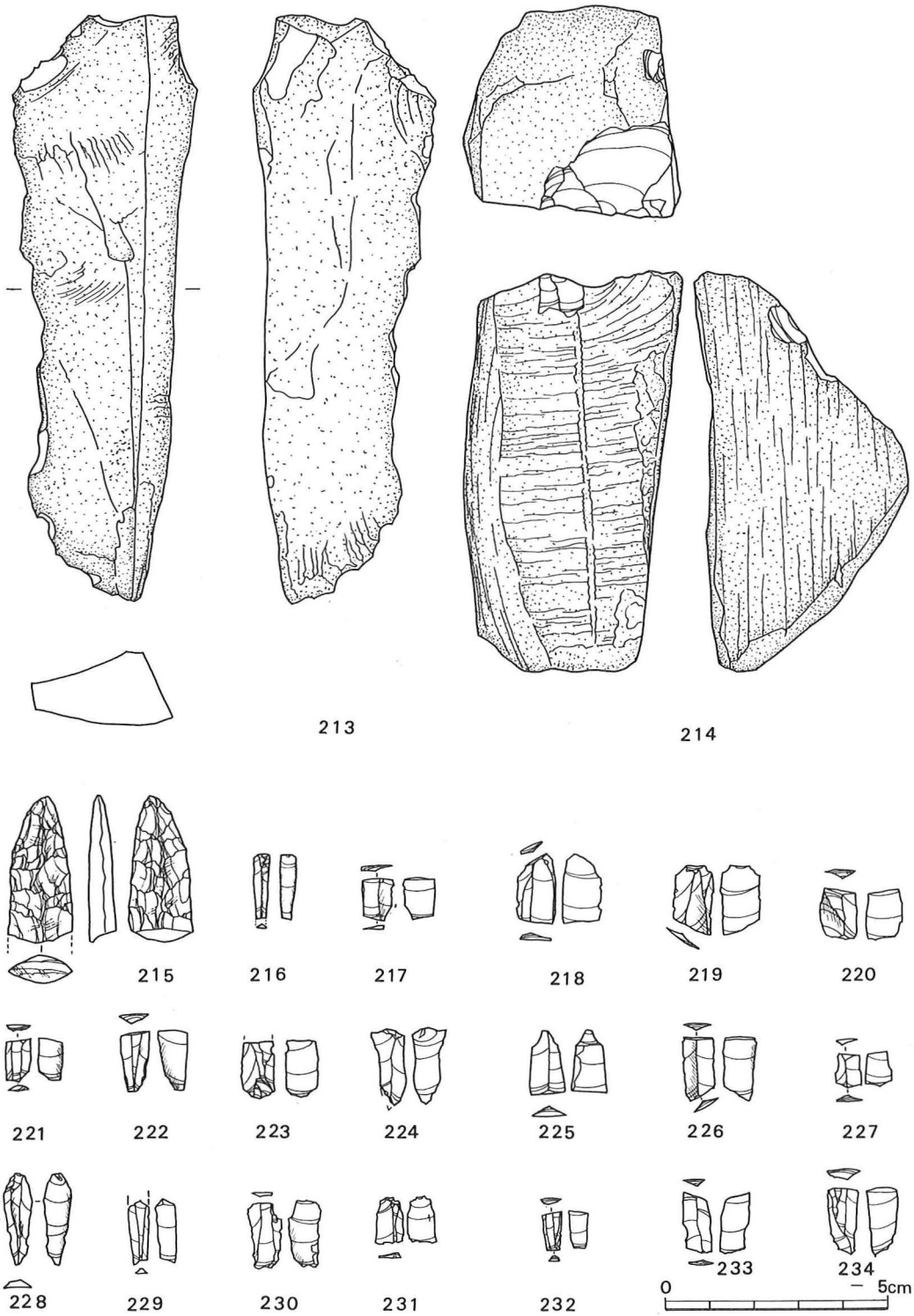



Fig. 61　その他の石器

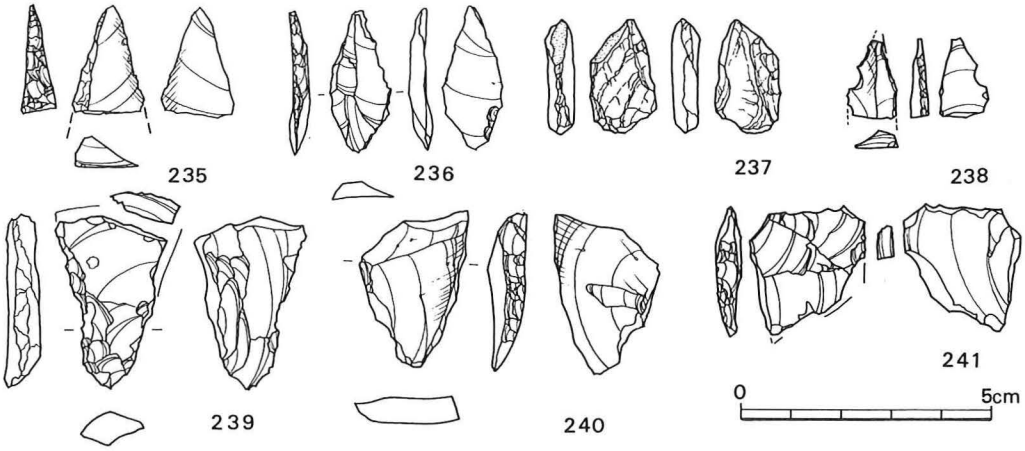



Fig. 62　B地点表土出土の石器

PL. 15

石核出土状況

A地点のナイフ形石器遺存状態（Fig. 63）

A地点からは，ナイフ形石器46点，台形石器1点が出土しているが，土層の堆積状況は3層下部にある安山岩礫により，かなりの撹乱状態にある。このため，縄文時代の遺物がかなり混入し，垂直分布においては，その新旧関係を判断することは困難な状況下にあるため，ここでは平面分布による出土状況を示して見た。本遺跡のように土層堆積が極めて薄く，上下・新旧関係を摑めない状況においても，平面分布におけるブロックの核は，いくらか捉えることができるものと考えるからである。従ってここにおいては，ブロック内のナイフ形石器の中から形態，技術の両面においての共通性を摑むことを目的とするものであり，その時間的な同一性あるいは相異については，今後の研究に待たねばならない点が多いことをふまえて，遺存状態を考えていくことにする。先に述べたようにA地点からは46点のナイフ形石器が出土しているが，その出土状況は，北東側に集中する傾向を見せている。これをブロックとして取り扱うには問題があるが，石核の出土などから考えると，なんらかのブロックの核がそこにあったものと推定される。A地点では北東側にしか，このような集中区は見られず，他は散漫的に出土している状況にある。その集中区でのナイフ形石器の一つの特徴として目を引くのは，器体中央部に最大幅を持つ，68・72・73・76・77などのナイフ形石器で，他のナイフ形石器に比べ，厚みにおいても相違を持ち，刃部長も相対的に短くなるもので，この遺跡において比較的特徴のあるナイフ形石器として捉えられる。

PL. 16

ナイフ形石器出土状況

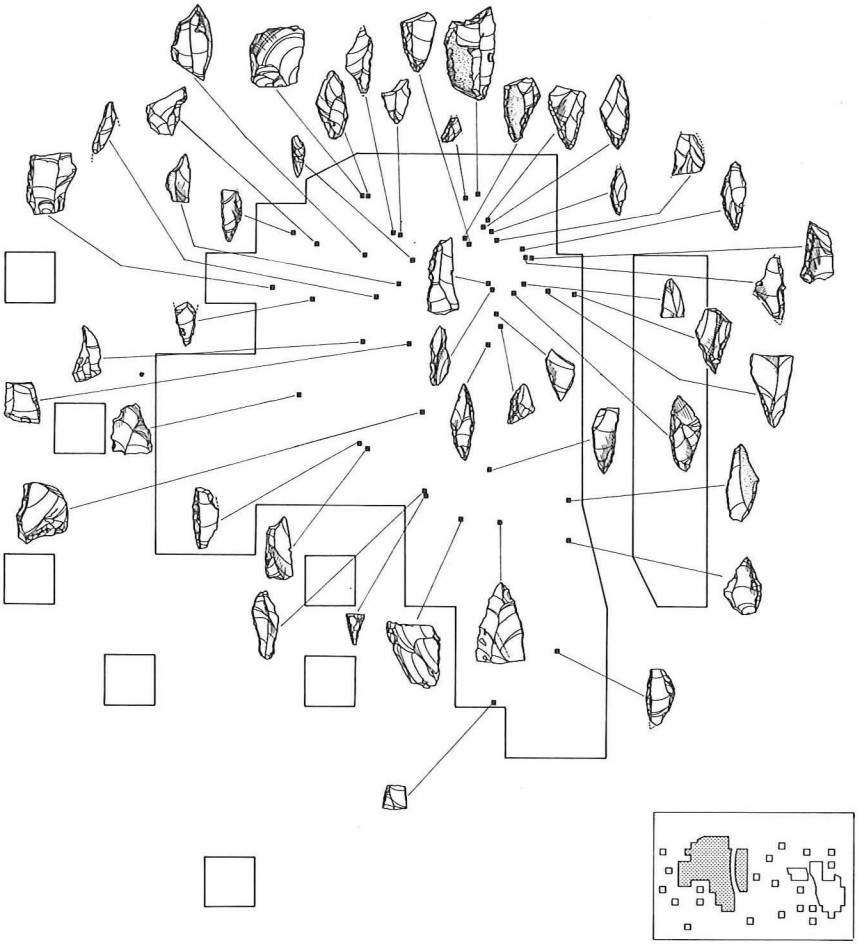
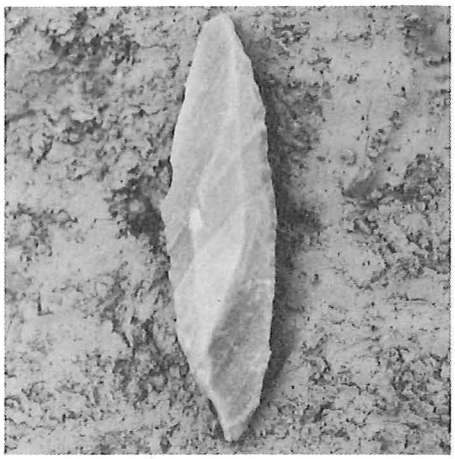


Fig. 63　A地点ナイフ形石器平面分布図

PL. 17



ナイフ形石器出土状況

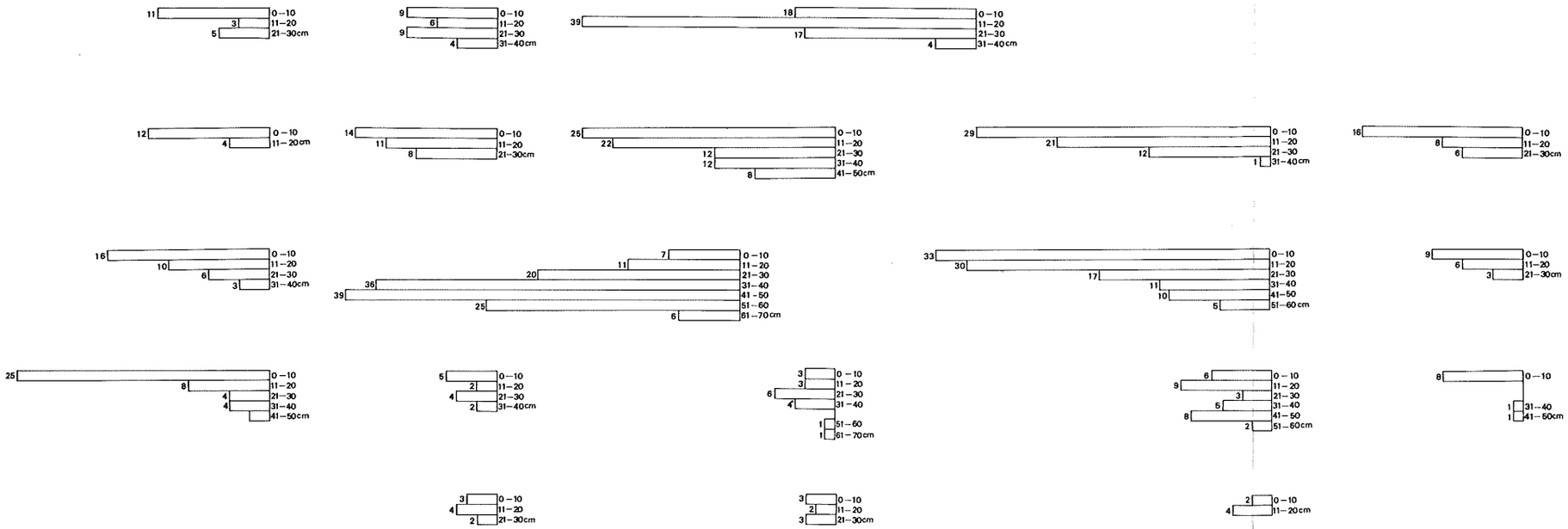



Fig. 64　B地点深度別遺物出土(10cmカット)

**B地点の遺物遺存状態**（Fig. 65, 66）

B地点は台地東側傾斜面部分にあたり，土層自体もかなりの傾斜を持って堆積している。土層は1～4層まで確認され，包含層は2層の赤褐色安山岩風化土層中にある。A地点での土層堆積状況よりも包含層の堆積は厚く，安定した堆積状況を示しているが，いくらかの傾斜角を持つため遺物自体の動きが考えられ，本来の原位置とはかなり様相を異にするものと思われる。傾斜にそった遺物の流れが想定されよう。B地点の調査は傾斜にあわせ5cmカットで発掘を行い，それをもとに10cmの深度で遺物の出土数をあらわした。(Fig. 64)

G－30・I－29区については，5cm掘りを行っていなかったため，グラフとして表われていないが，他のものについては，I－28区を除く多くのグリッドで10～20cmの間にピークをもち，深度が深くなるにつれ，減少する傾向があるとみてよいであろう。これに対し，I－28区については20～60cmの間に遺物出土のピークが見られ，その遺物出土数も集中しており，垂直分布からも遺物が厚く堆積している状況が伺える。これについては旧地形面がI－28区において，いくらかの按部を呈し，そこに遺物が集中したと考えられる。また，その按部において一つのブロックを形成したと考えられないこともない。

このような状況からB地点における遺物の有り方は，赤褐色風化土層中の上部10～20cmの間に生活面があったことを想定させる。しかし，このような中にあって178の石核は，2層下部，3層上面において出土したもので当遺跡の遺物の中で最下部から出土したもので，上部遺物群との間に時間差があるか否か問題を提起するものの一つであり，この点については遺物の項で扱っていくことにする。

平面分布においては調査時から灰青色黒曜石の集中がI－28区を中心としてブロックが形成されるのではないか，あるいは漆黒色黒曜石を使用する石器群との間に時間差が見い出されるのではないかとの仮説の中で，灰青色黒曜石の平面分布と漆黒色黒曜石だけの平面分布を作成してみた。灰青色黒曜石の分布の中では先述したごとく，I－28区における遺物の集中が見られ，遺物自体，179，181などのような石核調整用の大型剥片などが出土し，接合関係などもみられるなど，よりプライマリーに近い状況を呈しているのではないかとの見方ができる。しかし，先述したごとくB地点は傾斜がかなり強く，遺物の流れが予想され，そのことを示すかのように接合関係も，その傾斜と同様に，西側と東側との間に成立している。I－28区は垂直分布，あるいは深度別遺物出土表などから，旧地形状，小さな窪地を呈していたと予想され，そこに遺物がたまったものとしても捉えられる。又，I－30区においても遺物集中区が認められ，灰青色黒曜石の分布の中では2つの集中区がある。この関係についてはその接合関係などからも同一時期内として捉えられるものであろう。漆黒色黒曜石の分布については，かなり散在的で，そこに集中区を認めることはできない状態にあるが，灰青色黒曜石の分布に比べ，北側に多くのナイフ形石器，剥片類を認めることができる。

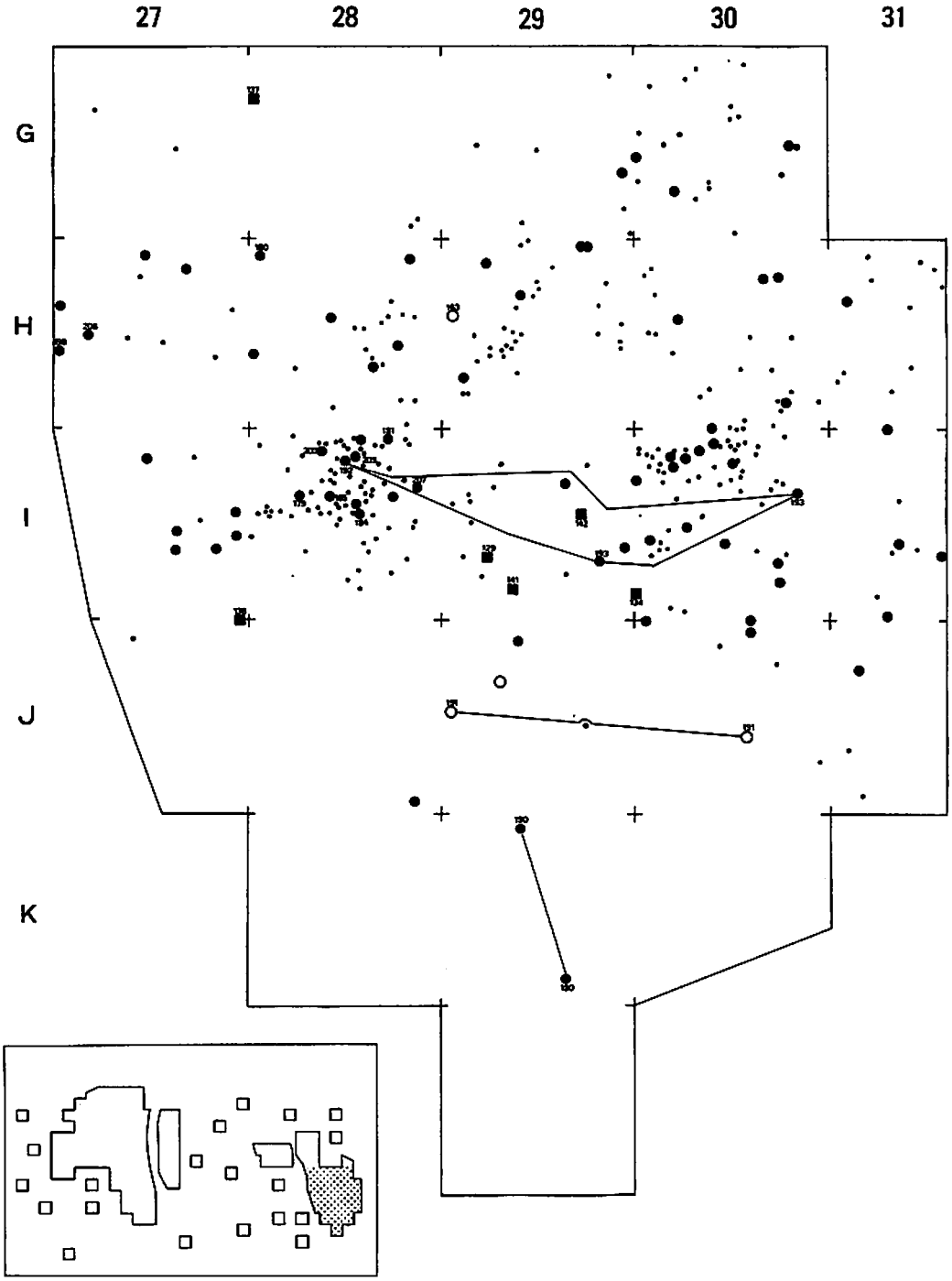



Fig. 65　B地点遺物依存状況図（灰青色黒曜石）

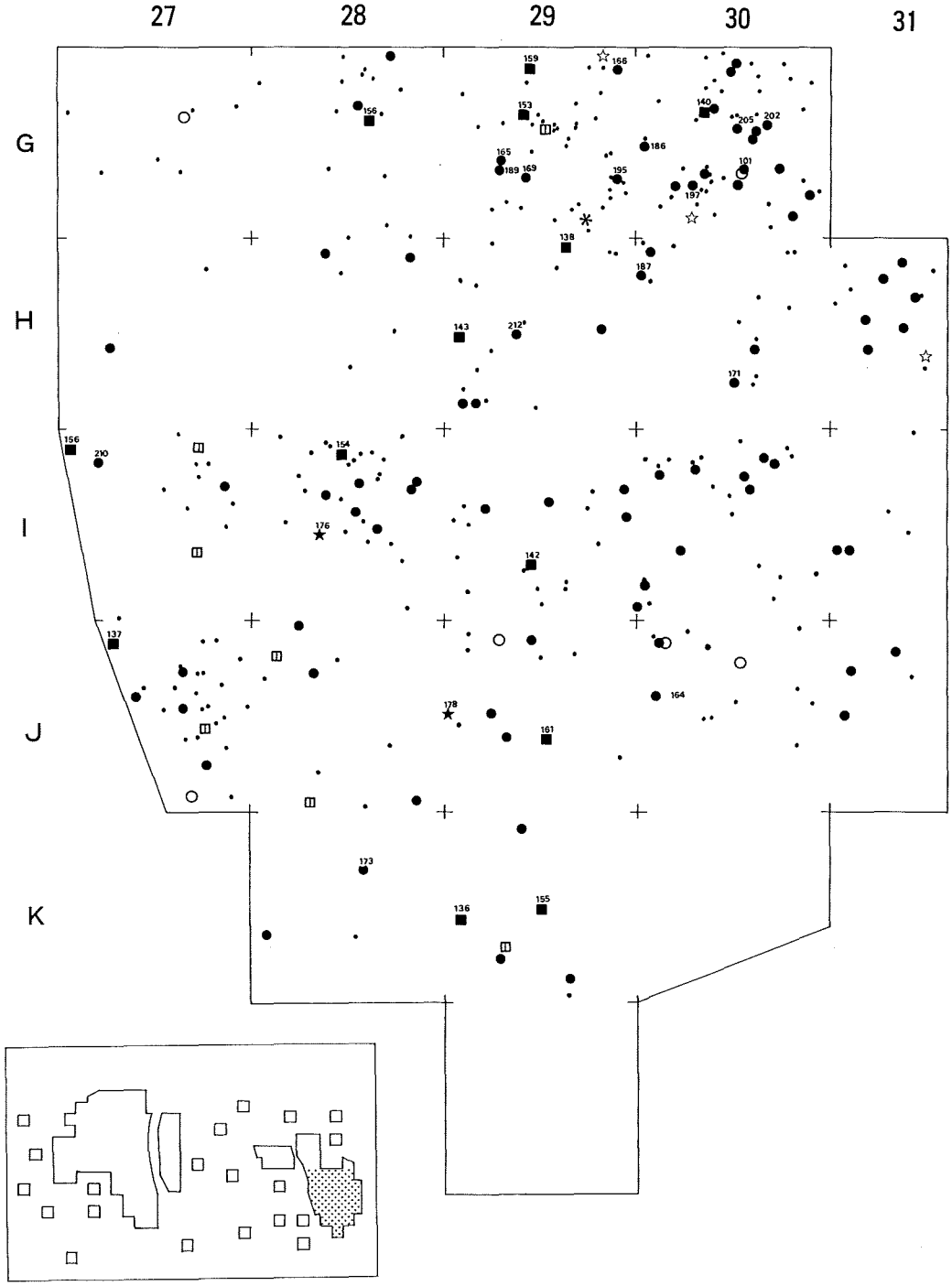



Fig. 66　B地点遺物依存状況図（漆黒色黒曜石）

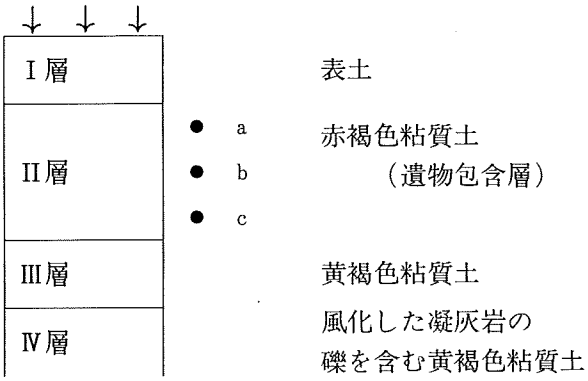
# Ⅳ　上原遺跡試料花粉分析結果報告

## 1　試料

試料は上原遺跡のＢ地点Ⅱ層（遺物包含層）から採取したものである。試料の名称・土質についてTab. 7に示す。

Tab. 7　試 料 表

| 試料名 | 採取層 | 土　　質 |
|---|---|---|
| a | Ⅱ | 赤褐色粘土 |
| b | Ⅱ | 赤褐色粘土 |
| c | Ⅱ | 赤褐色粘土 |




試料採取地点模式土層柱状図

## 2　分析方法

花粉分析の方法は下記の手順で行なった。

試料約15ｇ秤量（湿重）―ＨＦ処理―重液分離―アセトリシス処理―ＫＯＨ処理―封入―検鏡。

封入は残渣が少なかったので全量を用いた。検鏡はプレパラートの全面を走査し，出現した総ての花粉・胞子を同定した。

## 3　分析結果および考察

花粉分析の結果は，Tab. 9に同定した花粉・胞子化石の個体数で表示した。

Tab. 9にみられるように，いずれの試料においても花粉化石の産出が非常に少なかった。

主な花粉をあげるとアカガシ亜属・コナラ亜属・スギ属・ハイノキ属・ヨモギ属・イネ科等である。アカガシ亜属は照葉樹であることからⅡ層の堆積した時代は温暖な気候であったと考えられる。花粉化石の保存状態は非常に悪く，膜がうすくなっているものが多かったこと，花粉化石の産出が少なかったこと，下位試料になるにつれて花粉化石の産出が少なくなる傾向がみられることなどから，花粉が堆積後に分解作用を強く受けたものと考えられる。このような試料は検出花粉の組成が片寄るため，古植生を述べるには十分な試料とはいえない。したがって，古植生について述べることは差控えたい。

なお，この他に少数であったが，ヤマモモ層(a)・ハシバミ属(b)・シイノキ層(a)・モチノキ属(a)・ブドウ属(b)・イギタノキ属(b)・サカキカヅラ属(a)等の樹木花粉，イネ科の他の草本類ではスゲ科(a・c)・ソバ属(a)・トウダイグサ属(a)・アリノトウグサ属(a)・セリ属(b)等が僅かに産出する。

1　試料

試料は上原遺跡A地点のG－12区，B－11区より出土した4点である。各試料の番号・土質についてはTab. 8にまとめた。

Tab. 8　上原遺跡の花粉分析試料と土質

| 遺跡名 | 試　　料 | 土　　質 |
|---|---|---|
| 上　原 | G－12　　II b | 明黄褐色砂質シルト質粘土 |
| 〃 | G－12　　II h | 橙色　〃　　〃　　〃 |
| 〃 | B－11　　南西ピット | 明褐色砂質粘土質シルト |
| 〃 | G－12　　II f | 明褐色シルト質粘土 |

2　分析方法

花粉分析の方法は下記の手順で行なった。試料約20g秤量（湿重）—HF処理—重液分離—アセトリシス処理—KOH処理—封入—検鏡。

封入は分析後の残渣が非常に少なかったので残渣全部を封入し，検鏡はプレパラートの全面を走査した。

3　分析結果

花粉分析の結果は各試料について同定した分類群の個体数で表示し，Tab. 10にまとめた。Tab. 10においてハイフォンで結ばれた分類群は両者間の識別が困難なものである。

このたび分析を行った試料はいづれも花粉・胞子化石の含有が非常に少なく，産出した化石は分解を受けて膜が薄くなっているものが多かった。したがって，各試料共に花粉・胞子化石が解析に十分な数を同定できなかった。また，このように分解を受けている試料は花粉組成が比較的分解しにくい花粉に片寄る傾向にあるので古環境を解析するには十分とはいえない。しかし，このたびの分析結果（Tab. 10）をみると固定した花粉組成に特徴があるので，若干の考察を以下に述べる。

各試料ともにスギ属とアカガシ亜属が産出し，とくに，G－12II fにおいてのアカガシ亜属

の産出は非常に多い。また，G－2のⅡbとG－12Ⅱfにおいてサカキカズラ属が産出している。アカガシ亜属は照葉樹林を形成する樹木類から成るものとして重要であり，サカキカズラ属はアジア東部・南部の熱帯から暖帯に広く分布し，関東南部以西・四国・九州の林中にはえる常緑のつる性の木である。これらのことから，各試料の堆積した当時は，照葉樹林の形成が可能な温暖な気候であったと考えられる。しかし，上原遺跡のG－12Ⅱf試料の堆積層は無文土器や先土器時代の遺物も出土するとのことなので，完新世初頭の堆積物と考えられるが，アカガシ亜属の優占は時代的に調和的でなく，もう少し後の縄文時代早期後半～前期にかけての堆積物とも考えられる。

Tab. 9　上原遺跡試料　花粉分析結果

| 試料名 / 花粉・胞子化石名 | a | b | c |
|---|---|---|---|
| *Cryptomeria* | 4 | 3 | |
| AP-1 | 4 | 3 | 0 |
| *Myrica* | 1 | | |
| *Corylus* | | 1 | |
| *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* | 11 | 1 | 2 |
| *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* | 15 | 5 | 1 |
| *Castanopsis* | 2 | | |
| *Ilex* | 2 | | |
| *Vitis* | | 1 | |
| *Symplocos* | 4 | 1 | |
| *Ligustrum* | | 1 | |
| *Anodendron* | 1 | | |
| AP-2 | 36 | 10 | 3 |
| AP | 40 | 13 | 3 |
| Gramineae | 11 | 1 | |
| Cyperaceae | 1 | | 1 |
| *Fagopyrum* | 4 | | |
| *Euphorbia* | 1 | | |
| *Haloragis* | 1 | | |
| Umbelliferae | | 2 | |
| *Artemisia* | 26 | 4 | 1 |
| Cichorioideae | 1 | | |
| NAP | 45 | 7 | 2 |
| Trizonocolporate pollen | 25 | 9 | |
| FP | 25 | 9 | 0 |
| *Lycopodium* | 1 | | |
| Monolete spore | | 1 | |
| FS | 1 | 1 | 0 |
| Total Number | 111 | 30 | 5 |
| Pseudoschizaea | 1 | | |

Tab. 10　上原遺跡試料花粉分析結果

| 遺跡名及び試料名<br>花粉・胞子化石名 | 上原<br>G－12II b | 上原<br>G－12II h | ピット内<br>B－11 | 上原<br>G－12II f |
|---|---|---|---|---|
| *Podocarpus* | | 1 | | 1 |
| *Pinus* subgen. *Diploxylosn* | 5 | 2 | 1 | |
| *Cryptomeria* | 4 | 14 | 1 | 5 |
| T. — C. | 5 | | 1 | 2 |
| AP — 1 | 14 | 17 | 3 | 8 |
| *Myrica* | | | | 1 |
| *Carpinus* — *Ostrya* | 4 | | 1 | 2 |
| *Corylus* | 4 | | | 3 |
| *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* | 9 | 1 | | 9 |
| *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* | 7 | 2 | 1 | 60 |
| *Castanea* | 1 | | | |
| *Castanopsis* | | 2 | | 1 |
| *Ulmus* — *Zelkova* | | 1 | | |
| *Celtis* — *Aphananthe* | 3 | | | |
| *Acer* | 1 | | | |
| *Symplocos* | 4 | | | 7 |
| *Ligustrum* | 3 | | | |
| *Viburnum* | 2 | | | |
| *Lonicera* | | | | 1 |
| *Anodendron*　サカキカズラ属 | 7 | | | 4 |
| AP — 2 | 45 | 6 | 2 | 88 |
| AP | 59 | 23 | 5 | 96 |
| Gramineae | 10 | 6 | 1 | 1 |
| Cyperaceae | 2 | 3 | 1 | 2 |
| Moraceae | 1 | | | |
| Chenopodiaceae | 6 | 5 | | |
| Caryophyllaceae | 2 | 2 | | |
| Ranunculaceae | 4 | | | 5 |
| *Haloragis* | | 1 | | |
| *Cuscuta* | | 1 | | 1 |
| *Patrinia* | 1 | | | |
| *Actinostemma* | | | | 1 |
| *Artemisia* | 4 | 1 | | 2 |
| Carduoideae | 2 | | | 1 |
| Cichorioideae | 2 | | | 1 |
| NAP | 34 | 19 | 2 | 14 |
| Trizonocolpate pollen | 1 | | | |
| Trizonocolporate pollen | 19 | 3 | 1 | 19 |
| FP | 20 | 3 | 1 | 19 |
| *Lycopodium* | 3 | | | |
| *Pteris* | 2 | | | 1 |
| Monolete spore | 31 | 9 | 5 | 15 |
| Trilete spore | 6 | 13 | 1 | 7 |
| FS | 42 | 22 | 6 | 23 |
| Total Number of Pollen and Spores | 155 | 67 | 14 | 152 |
| Pseudoschizaea | 1 | 1 | | |

Tab. 11　検出花粉・胞子化石名一覧表

| 検出花粉・胞子化石名（学名） | 和　　名 |
|---|---|
| AP－1（針葉樹花粉） | |
| | |
| *Ginkgo* | イチョウ属 |
| *Podocarpus* | マキ属 |
| *Abies* | モミ属 |
| *Tsuga sieboldii* | ツガ |
| *Tsuga diversifolia* | コメツガ |
| *Tsuga* | ツガ属 |
| *Picea* | トウヒ属 |
| *Pseudotsuga* | トガサワラ属 |
| *Larix* subgen. *Haploxylon* | ゴヨウマツ亜属 |
| *Pinus* subgen. *Diploxylon* | ニヨウマツ亜属 |
| *Pinus* | マツ属 |
| *Sciadopitys* | コウヤマキ属 |
| *Cryptomeria* | スギ属 |
| T.-C. | イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科 |
| *Ephedra* | マオウ属 |
| *Metasequoia* | メタセコイア属 |
| *Sequoia* | セコイア属 |
| Taxodiaceae | スギ科 |
| *Dacrydium* | リムノキ属 |
| | |
| AP－2（広葉樹花粉） | |
| | |
| *Myrica* | ヤマモモ属 |
| *Juglans* | クルミ属 |
| *Pterocarya* | サワグルミ属 |
| *Platycarya* | ノグルミ属 |
| *Carya* | ペカン属 |
| *Salix* | ヤナギ属 |
| *Alnus* | ハンノキ属 |
| *Betula* | カバノキ属 |
| *Carpinus-Ostrya* | クマシデ属―アサダ属 |
| *Corylus* | ハシバミ属 |
| *Castanea* | クリ属 |
| *Castanopsis* | シイノキ属 |
| *Fagus* | ブナ属 |
| *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* | コナラ亜属 |
| *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* | アカガシ亜属 |
| *Aphananthe* | ムクノキ属 |
| *Celtis* | エノキ属 |
| *Ulmus* | ニレ属 |
| *Zelkova* | ケヤキ属 |
| Moraceae | クワ科 |
| *Viscum* | ヤドリギ属 |
| Magnoliaceae | モクレン科 |
| *Illicium* | シキミ属 |
| *Euptelea* | フサザクラ属 |

| | |
|---|---|
| *Nandina* | ナンテン属 |
| *Akebia* | アケビ属 |
| *Cercidiphyllum* | カツラ属 |
| Theaceae | ツバキ科 |
| *Camellia* | ツバキ属 |
| Hamamelidaceae | マンサク科 |
| *Hamamelis* | マンサク属 |
| *Corylopsis* | トサミズキ属 |
| *Saxifraga* | ユキノシタ属 |
| Rosaceae | バラ科 |
| *Prunus* | サクラ属 |
| *Daphniphyllum* | ユズリハ属 |
| Leguminosae | マメ科 |
| *Albizzia* | ネムノキ属 |
| *Sapium* | シラキ属 |
| *Mallotus* | アカメガシワ属 |
| *Fagara* | イヌサンショウ属 |
| *Phellodendron* | キハダ属 |
| *Melia* | センダン属 |
| *Orixa* | コクサギ属 |
| *Skimmia* | ミヤマシキミ属 |
| *Rhus* | ウルシ属 |
| *Acer* | カエデ属 |
| *Aesculus* | トチノキ属 |
| *Ilex* | モチノキ属 |
| *Euonymus* | ニシキギ属 |
| *Buxus* | ツゲ属 |
| *Vitis* | ブドウ属 |
| *Parthenocissus* | ツタ属 |
| Rhamnaceae | クロウメモドキ科 |
| *Tilia* | シナノキ属 |
| Malvaceae | アオイ科 |
| *Elaeagnus* | グミ属 |
| *Corunus* | ミズキ属 |
| *Clethra* | リョウブ属 |
| *Aucuba* | アオキ属 |
| Araliaceae | ウコギ科 |
| Ericaceae | ツツジ科 |
| *Diospyros* | カキ属 |
| *Styrax* | エゴノキ属 |
| Oleaceae | モクセイ科 |
| *Osmunthus* | ヒイラギ属 |
| *Symplocos* | ハイノキ属 |
| *Ligustrum* | イボタノキ属 |
| *Fraxinus* | トネリコ属 |
| *Trachelospermum* | テイカカズラ属 |
| *Clerodendron* | クサギ属 |
| *Lonicera* | スイカズラ属 |
| *Viburnum* | ガマズミ属 |
| *Weigela* | タニウツギ属 |

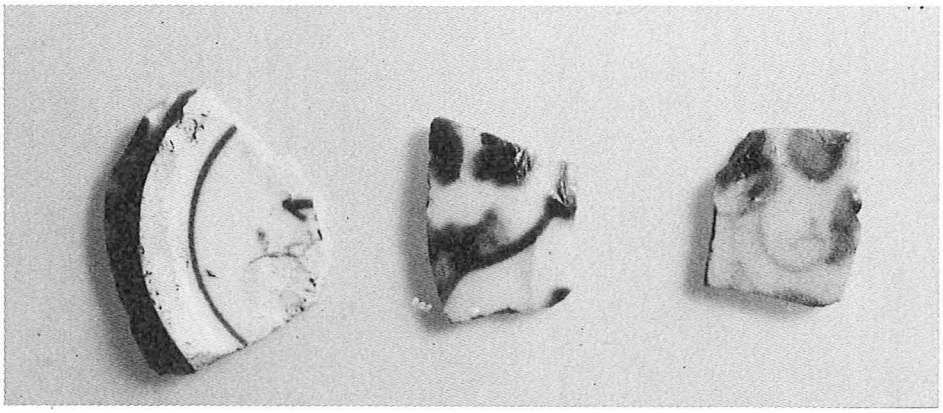
| | |
|---|---|
| *Abelia* | ツクバネウツギ属 |
| *Liquidambar* | フウ属 |
| *Illicium* | シキミ属 |
| *Nyssa* | ヌマミズキ属 |
| | |
| NAP（草本花粉） | |
| | |
| *Humulus* | カナムグラ属 |
| *Polygonum* sect. Persicaria | サナエタデ節 |
| *Polygonum* sect. Echinocaulon | ウナギツカミ節 |
| *Polygonum* sect. Bistorta | イブキトラノオ節 |
| *Polygonum* sect. Reynoutria | イタドリ節 |
| *Polygonum* sect. Tovara | ミズヒキ節 |
| *Polygonum* | タデ属 |
| *Fagopyrum* | ソバ属 |
| *Rumex* | ギシギシ属 |
| *Portulaca* | スベリヒユ属 |
| Caryophyllaceae | ナデシコ科 |
| Chenopodiaceae | アカザ科 |
| *Nelumbo* | ハス属 |
| Amaranthaceae | ヒユ科 |
| *Thalictrum* | カラマツソウ属 |
| Ranunculaceae | キンポウゲ科 |
| *Ranunculus* | キンポウゲ属 |
| Nymphaeaceae | スイレン科 |
| *Nymphaea* | スイレン属 |
| *Aconitum* | トリカブト属 |
| *Nuphar* | コオホネ属 |
| *Euryale* | オニバス属 |
| *Macleaya* | タケニグサ属 |
| Cruciferae | アブラナ科 |
| *Potentilla* | キジムシロ属 |
| *Sanguisorba* | ワレモコウ属 |
| Rosaceae | バラ科 |
| Leguminosae | マメ科 |
| *Azukia* | アズキ属 |
| *Vicia* | ソラマメ属 |
| *Dunbaria* | ヒメクズ属 |
| *Geranium* | フウロソウ属 |
| Euphorbiaceae | トウダイグサ科 |
| *Euphorbia* | トウダイグサ属 |
| *Polygala* | ヒメハギ属 |
| *Impatiens* | ツリフネソウ属 |
| *Corchoropsis* | カラスノゴマ属 |
| *Malva* | ゼニアオイ属 |
| *Actinostemma* | ゴキヅル属 |
| *Campanula* | ホタルブクロ属 |
| *Trapa* | ヒシ属 |
| *Lythrum* | ミソハギ属 |
| *Rotala* | キカシグサ属 |

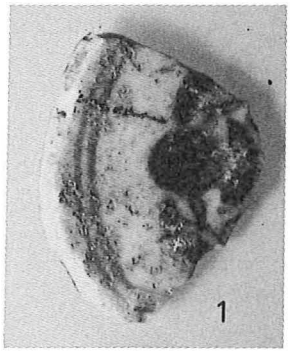
| | |
|---|---|
| *Epilobiwn* | アカバナ属 |
| *Ludwigia* | チョウジタデ属 |
| *Haloragis* | アリノトウグサ属 |
| *Myriophyllum* | フサモ属 |
| Umbelliferae | セリ科 |
| *Paederia* | ヘクソカズラ属 |
| *Utricularia* | タヌキモ属 |
| *Nymphoides* | アサザ属 |
| *Galium* | ヤエムグラ属 |
| *Gentiana* | リンドウ属 |
| *Monotropastrum* | ギンリョウソウ属 |
| Rubiaceae | アカネ科 |
| *Rubia* | アカネ属 |
| *Calystegia* | ヒルガオ属 |
| *Cuscuta* | ネナシカズラ属 |
| Labiatae | シソ科 |
| *Mosla* | ヤマジソ属 |
| *Solanum* | ナス属 |
| *Justicia* | キツネノマゴ属 |
| *Plantago* | オオバコ属 |
| *Ottelia* | ミズオオバコ属 |
| *Patrinia* | オミナエシ属 |
| *Scabiosa* | マツムシソウ属 |
| Campanulaceae | キキョウ科 |
| *Adenophora* | ツリガネニンジン属 |
| *Platycodon* | キキョウ属 |
| Carduoideae | キク亜科 |
| *Artemisia* | ヨモギ属 |
| *Diaspananthus* | クサヤツデ属 |
| Cichorioideae | タンポポ亜科 |
| *Xanthium* | オナモミ属 |
| *Sagittaria* | オモダカ属 |
| *Caldesia* | マルバオモダカ属 |
| *Hydrilla* | クロモ属 |
| *Alisma* | サジオモダカ属 |
| *Blyxa* | スブタ属 |
| *Potamogeton* | ヒルムシロ属 |
| Liliaceae | ユリ科 |
| *Monochoria* | ミズアオイ属 |
| Urticaceae | イラクサ科 |
| Iridaceae | アヤメ科 |
| *Aneilema* | イボクサ属 |
| *Eriocaulon* | ホシクサ属 |
| Gramineae | イネ科 |
| *Sparganium* | ミクリ属 |
| *Typha* | ガマ属 |
| Cyperaceae | カヤツリグサ科 |
| *Zea* | トウモロコシ属 |
| Polygalaceae | ヒメハギ科 |
| Polemoniaceae | ハナシノブ科 |

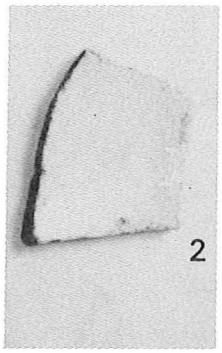
| | |
|---|---|
| *Menyanthes* | ミツガシワ属 |
| *Phyllanthus* | コミカンソウ属 |
| *Gossypium* | ワタ属 |
| | |
| FP（形態分類花粉） | |
| | |
| Inaperturate pollen | 無口型花粉 |
| Monoporate pollen | 単孔型花粉 |
| Trizonoporate pollen | 三孔型花粉 |
| Trizonocolpate pollen | 三溝型花粉 |
| Trizonocolporate pollen | 三溝孔型花粉 |
| polypantoporate pollen | 多散孔型花粉 |
| Tetrazonoporate pollen | 四孔型花粉 |
| Tetrazonocolpate pollen | 四溝型花粉 |
| Tetrazonoclporate pollen | 四溝孔型花粉 |
| | |
| FS（羊歯類胞子・形態分類胞子） | |
| | |
| Lyclpodiaceae | ヒカゲノカズラ科 |
| *Lycopodium* | ヒカゲノカズラ属 |
| Selaginellaceae | イワヒバ科 |
| *Ophioglossum* | ハナヤスリ属 |
| *Osmunda* | ゼンマイ属 |
| *Lygodium* | カニクサ属 |
| Hymenophyllaceae | コケシノブ科 |
| *Pteris* | イノモトソウ属 |
| *Ceratopteris* | ミズワラビ属 |
| Polypodiaceae | ウラボシ科 |
| *Salvinia natans* | サンショウモ |
| *Isoetes* | ミズニラ属 |
| *Marsilea* | デンジソウ属 |
| *Azolla* | アカウキクサ属 |
| Monolete spore | 単条溝型胞子 |
| Trilete spore | 三条溝型胞子 |
| | 和名なし |
| | |
| その他の微化石 | |
| | |
| Pseudoschizaea | 淡水生藻類 |
| *Botryococcus* | 緑藻類 |
| *Dinoflagellates* | 渦鞭藻類 |
| *Pediastrum* | クンショウモ属 |

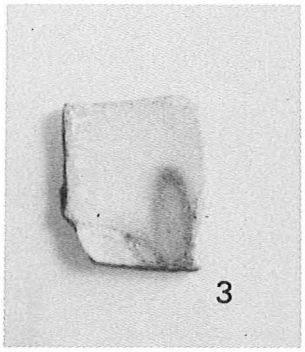
# PLATE

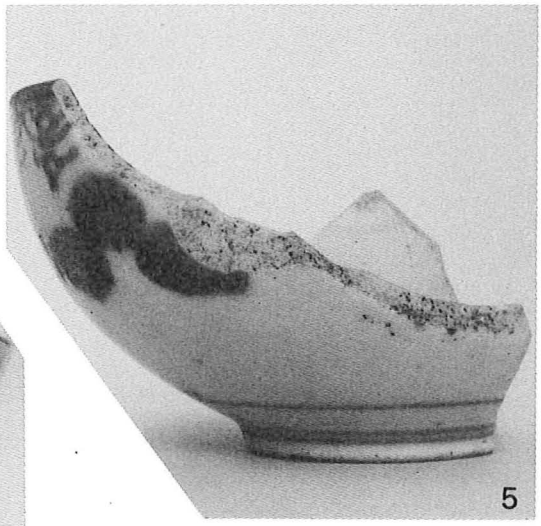
PL. 18

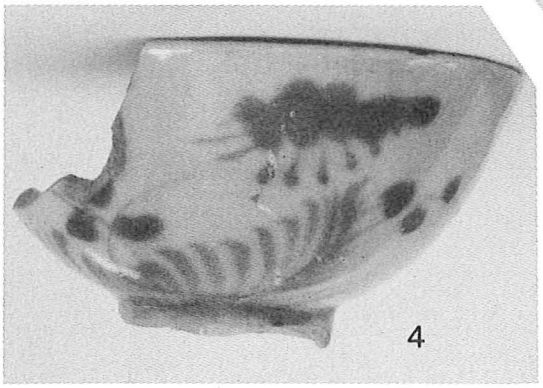




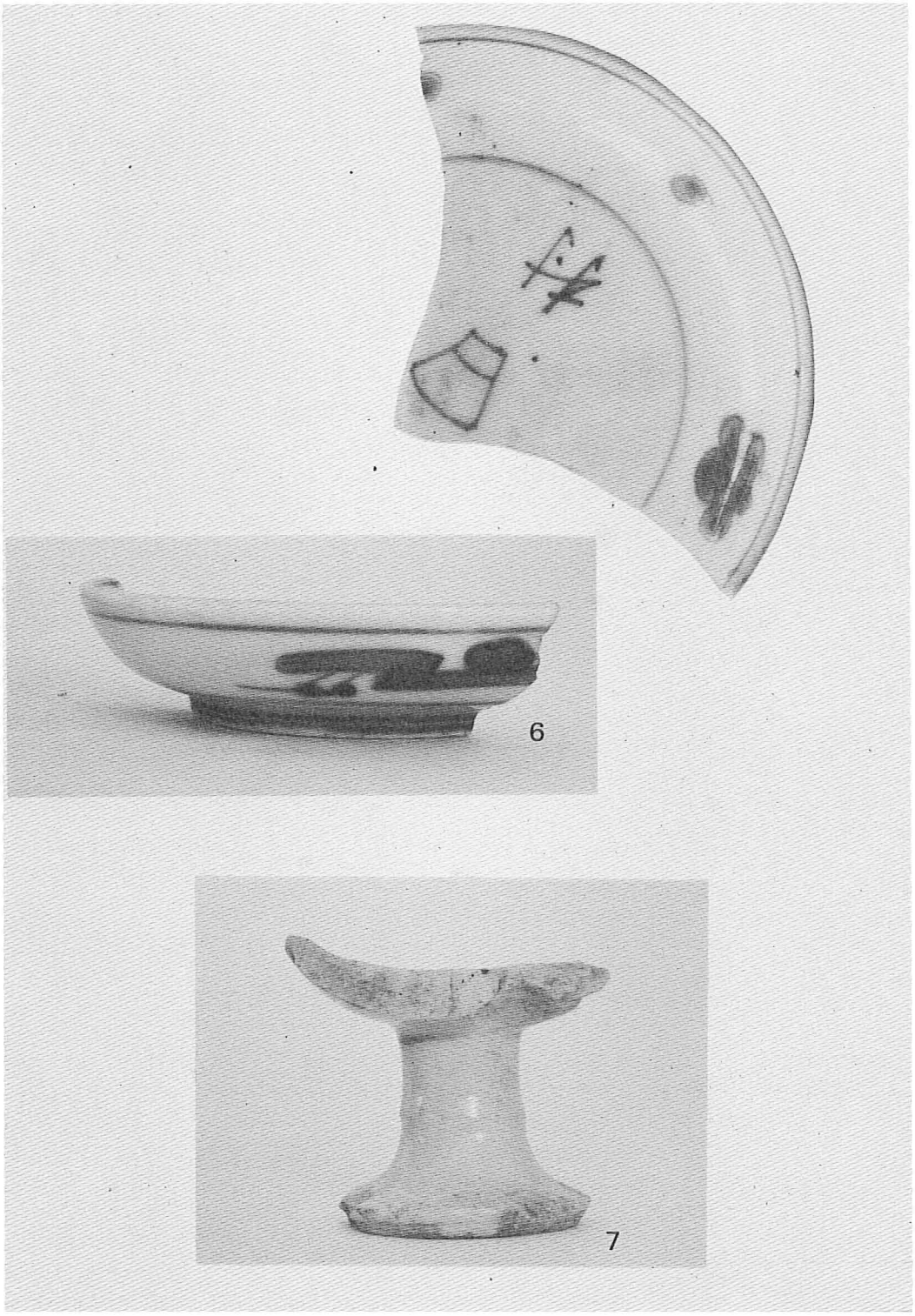



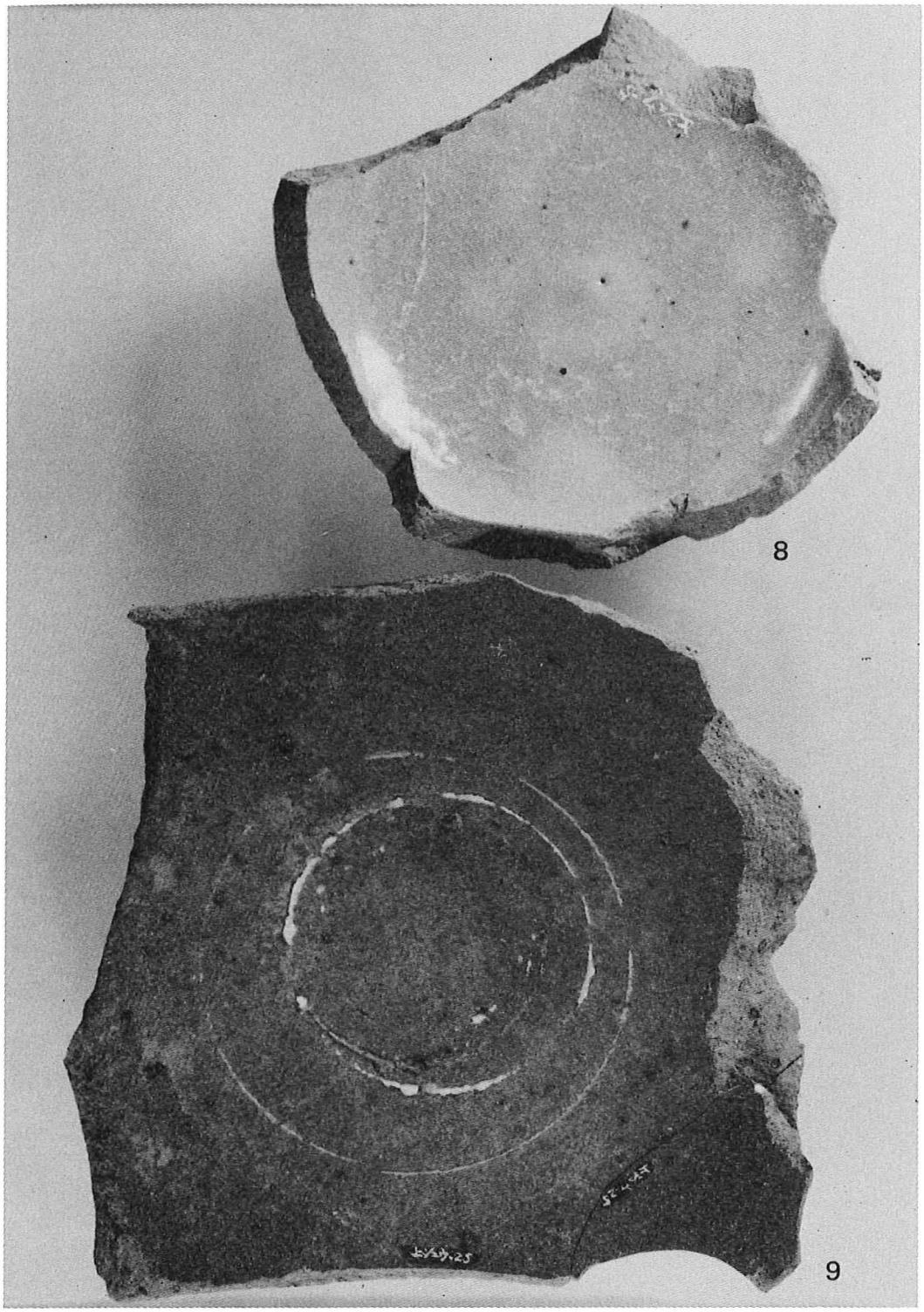



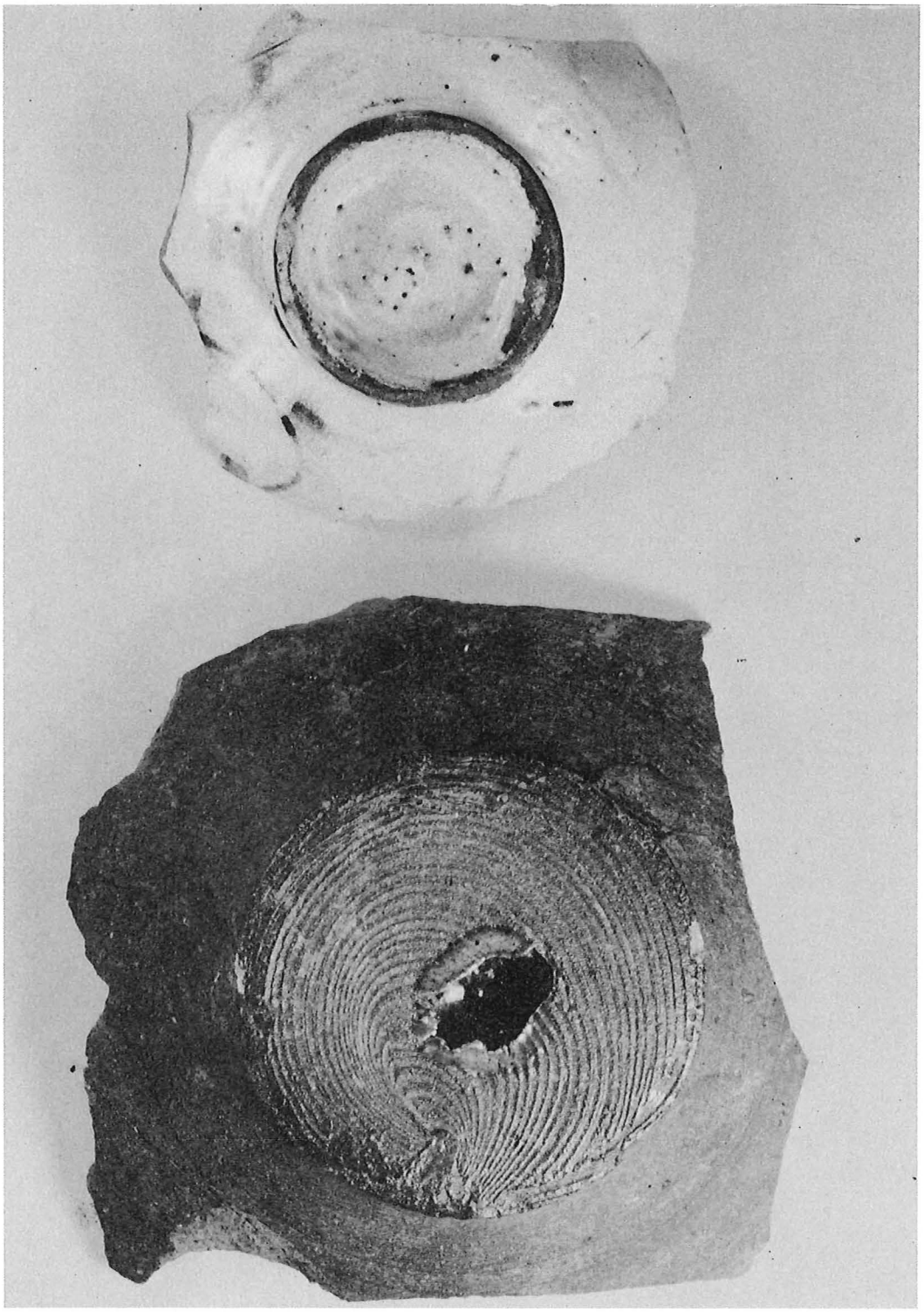

明染付，近世磁器



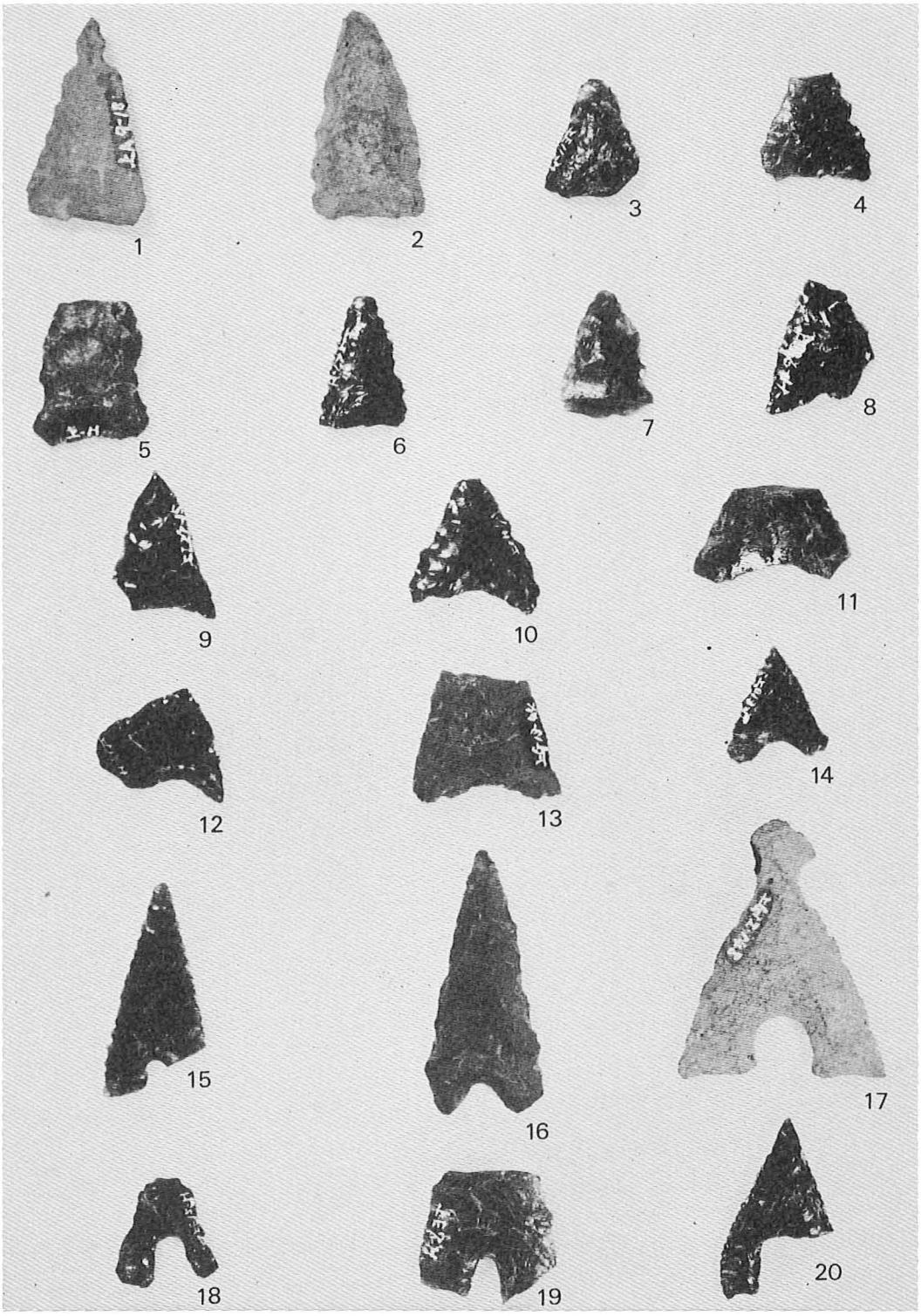

近 世 磁 器



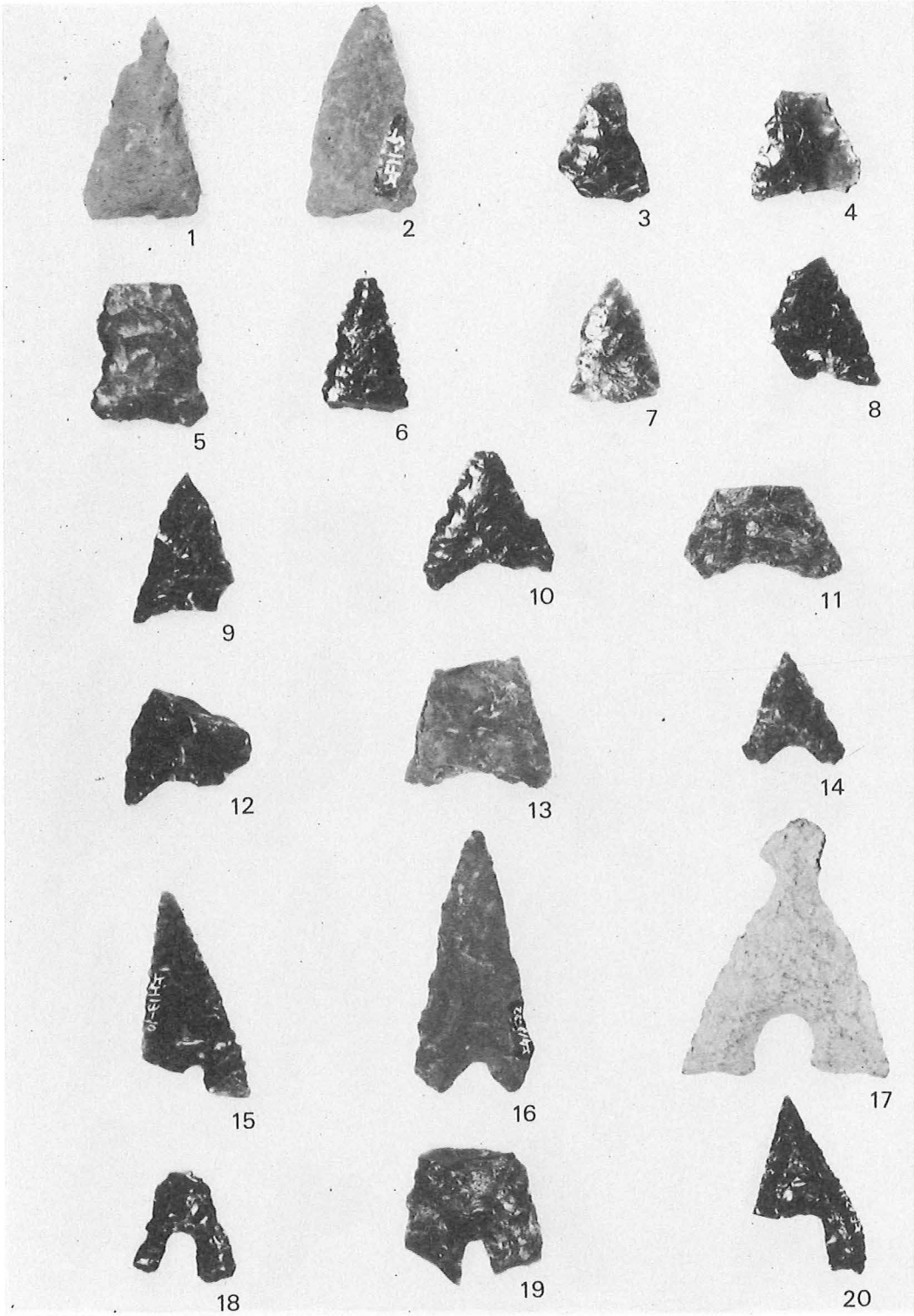

(裏)



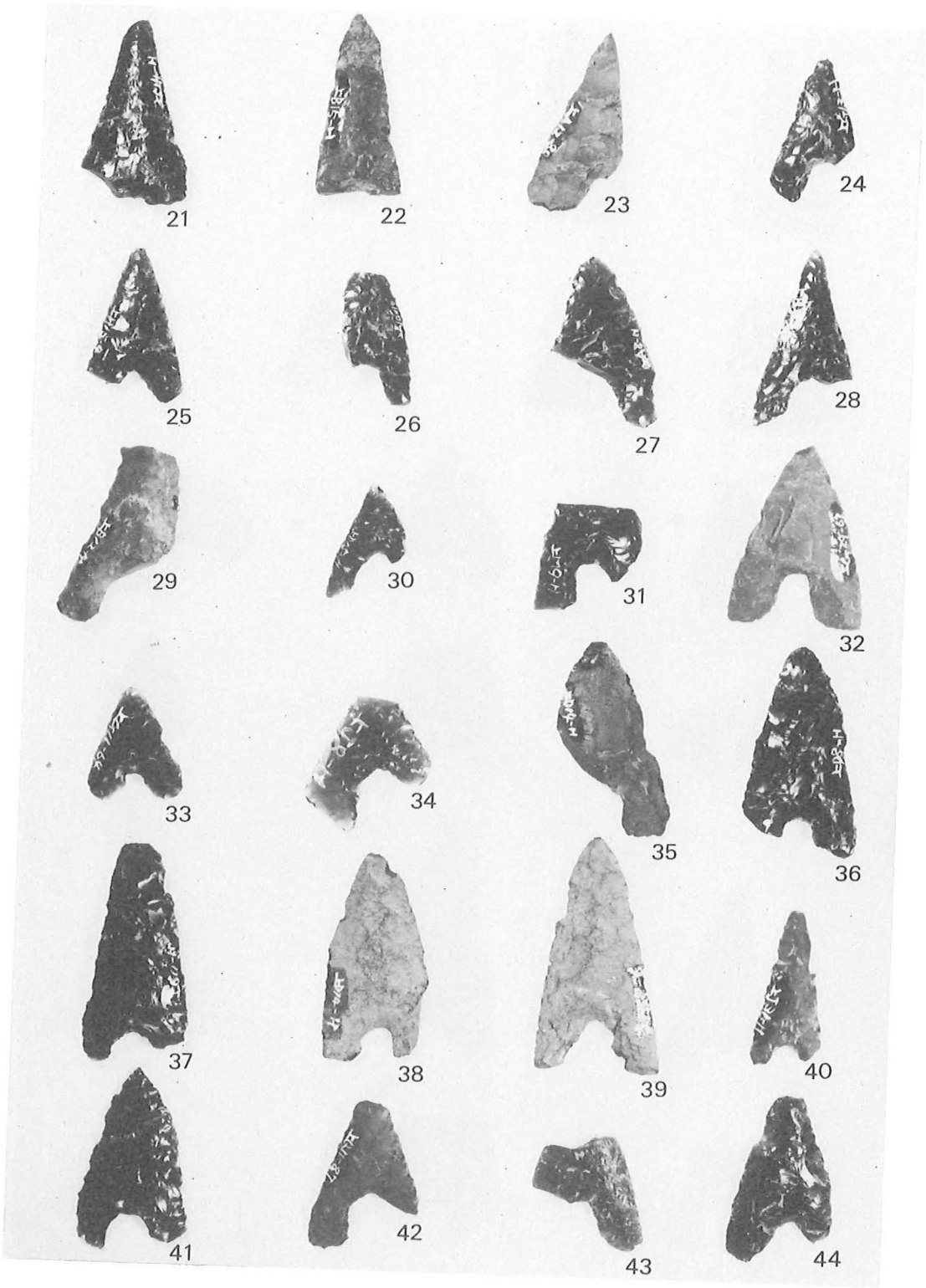
(表)



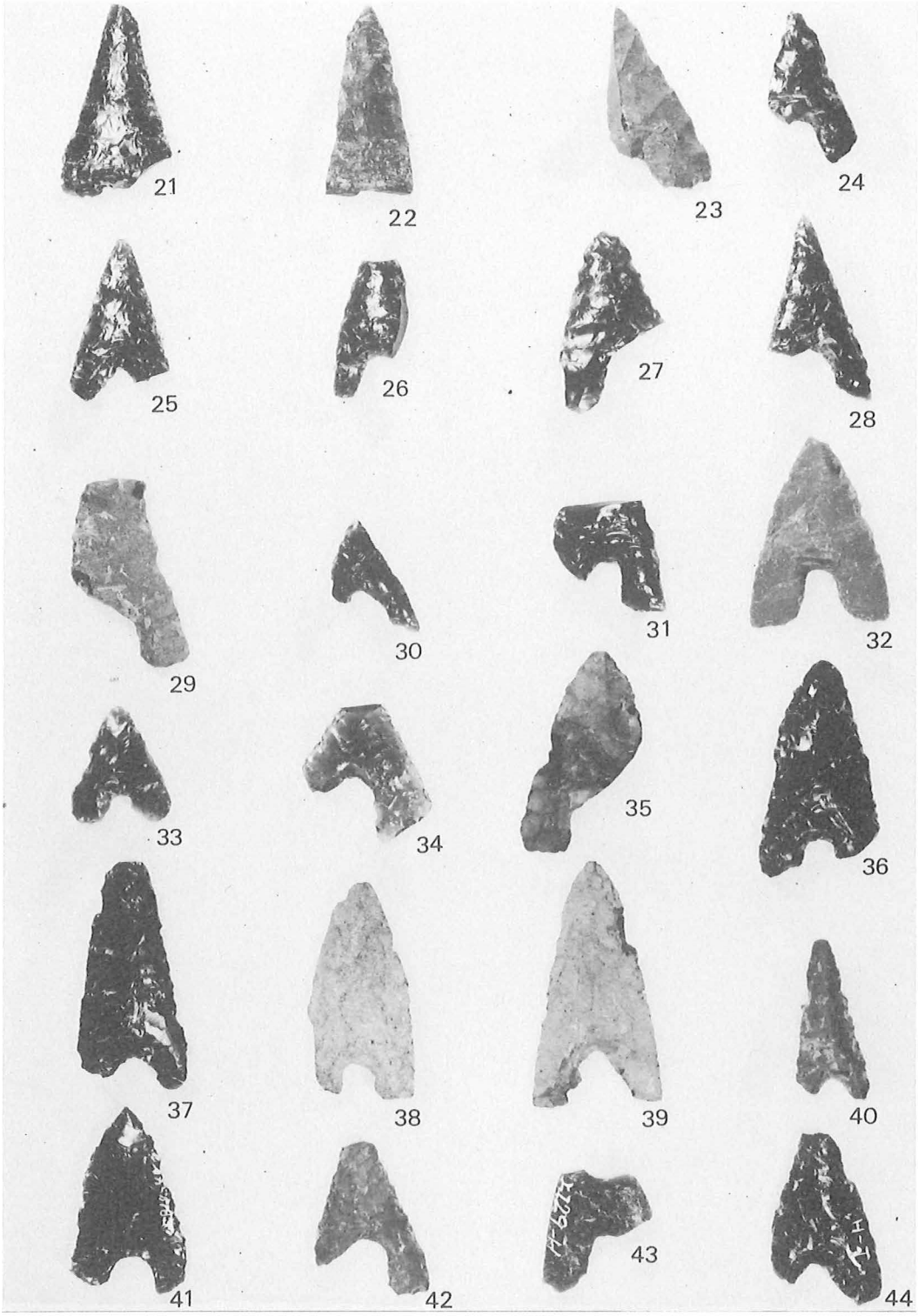

石 鏃（表）



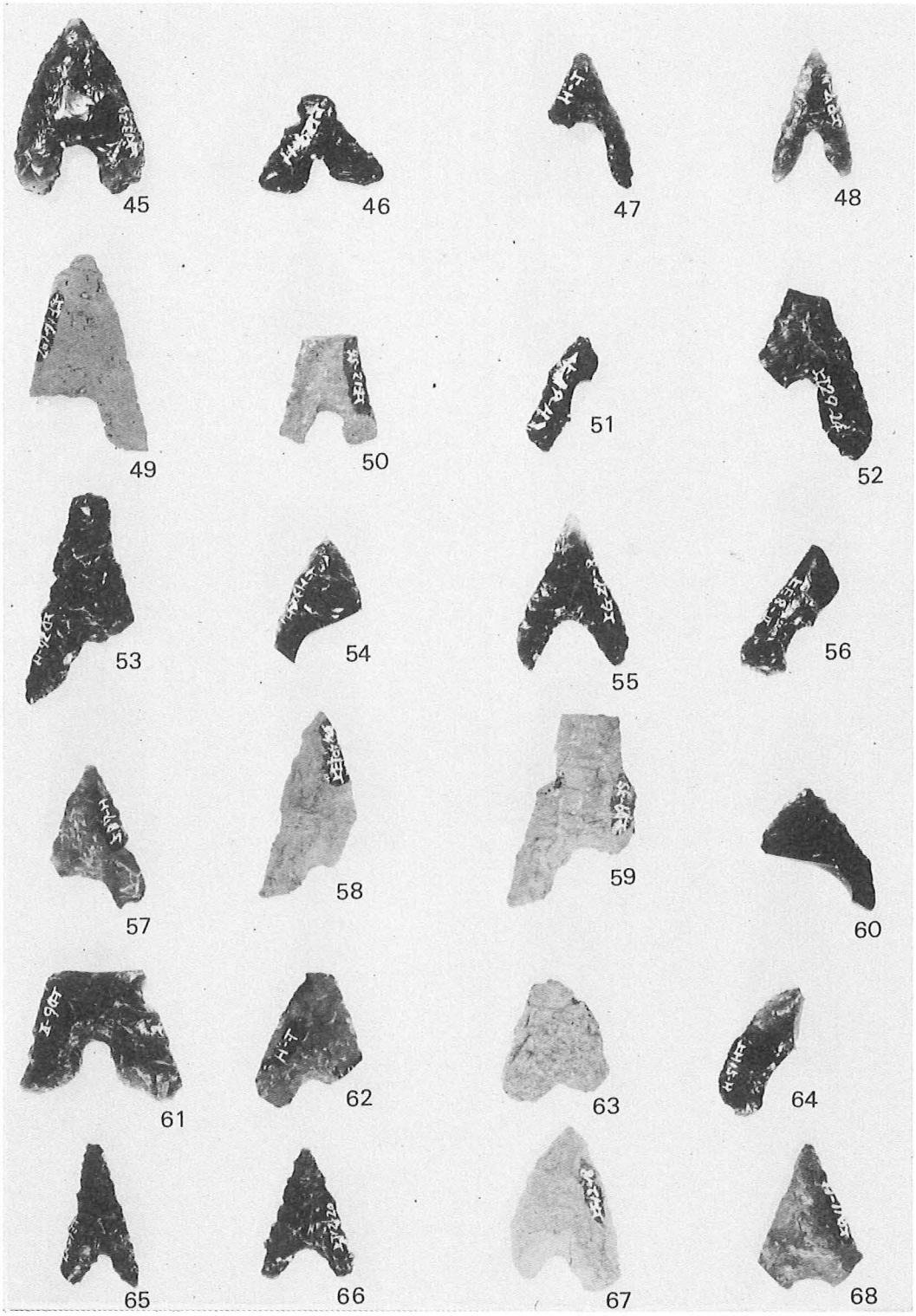

石 鏃（裏）




石 鏃（表）

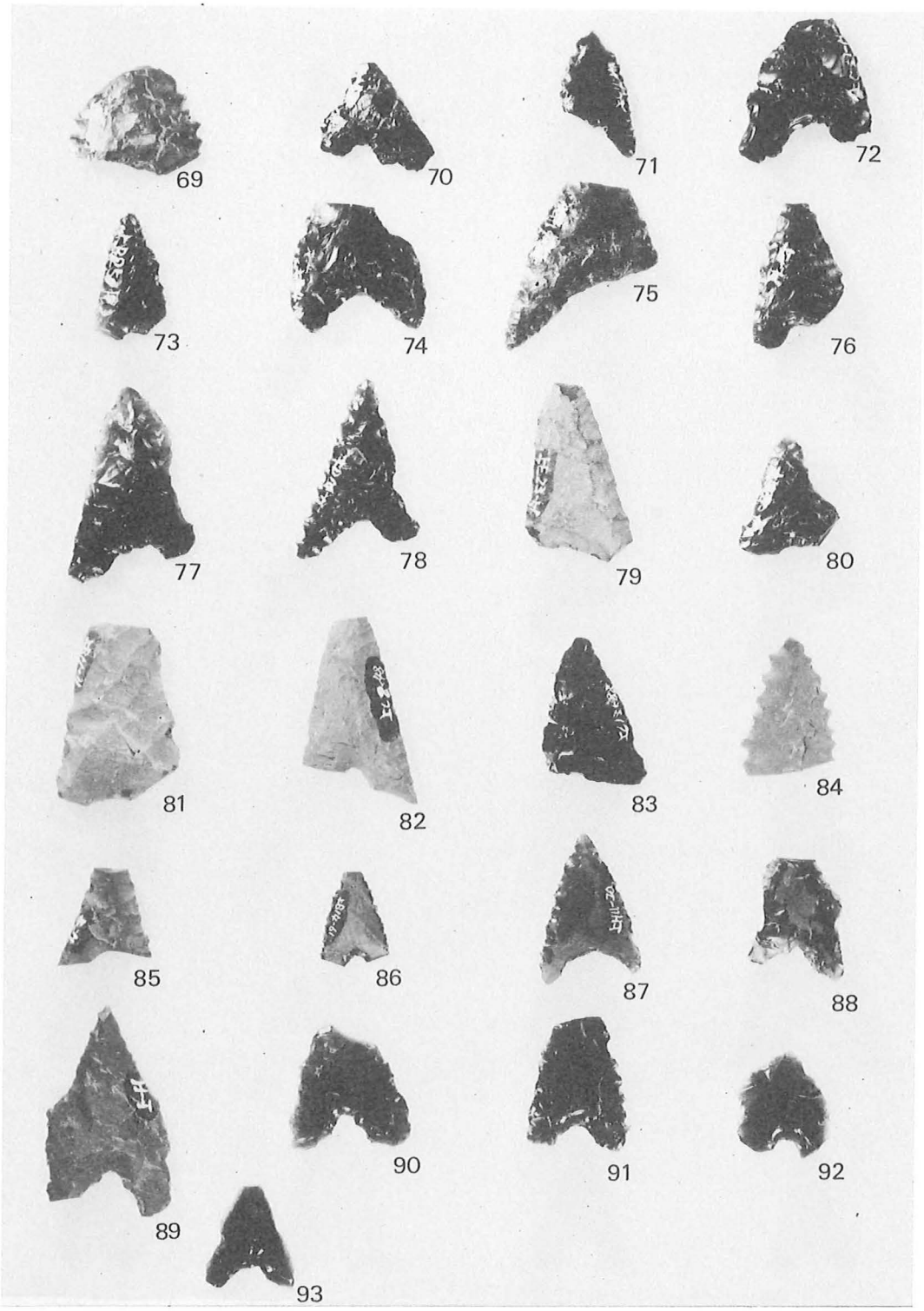



石 鏃（裏）

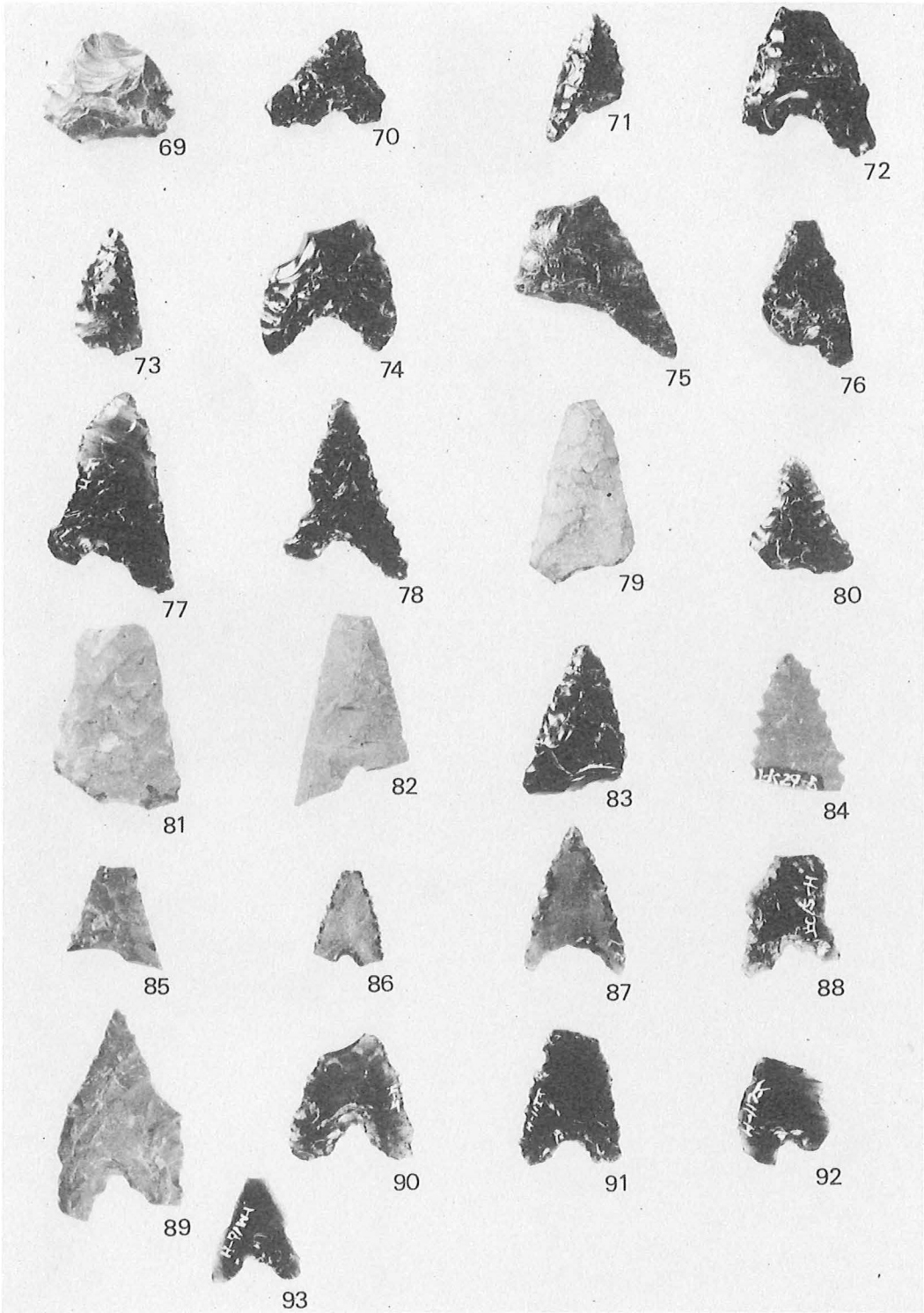



石 鏃（表）

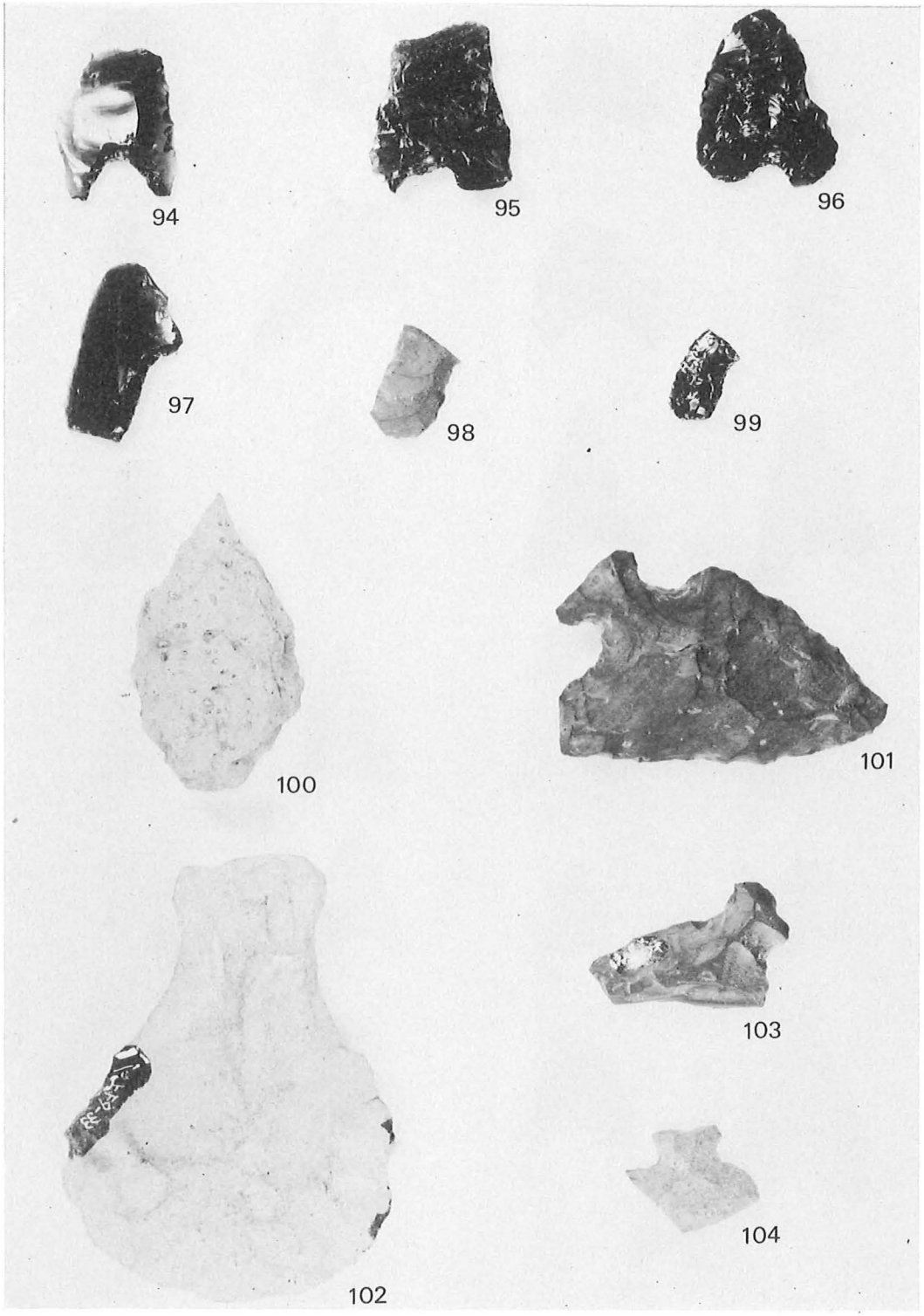
石 鏃（裏）


69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93

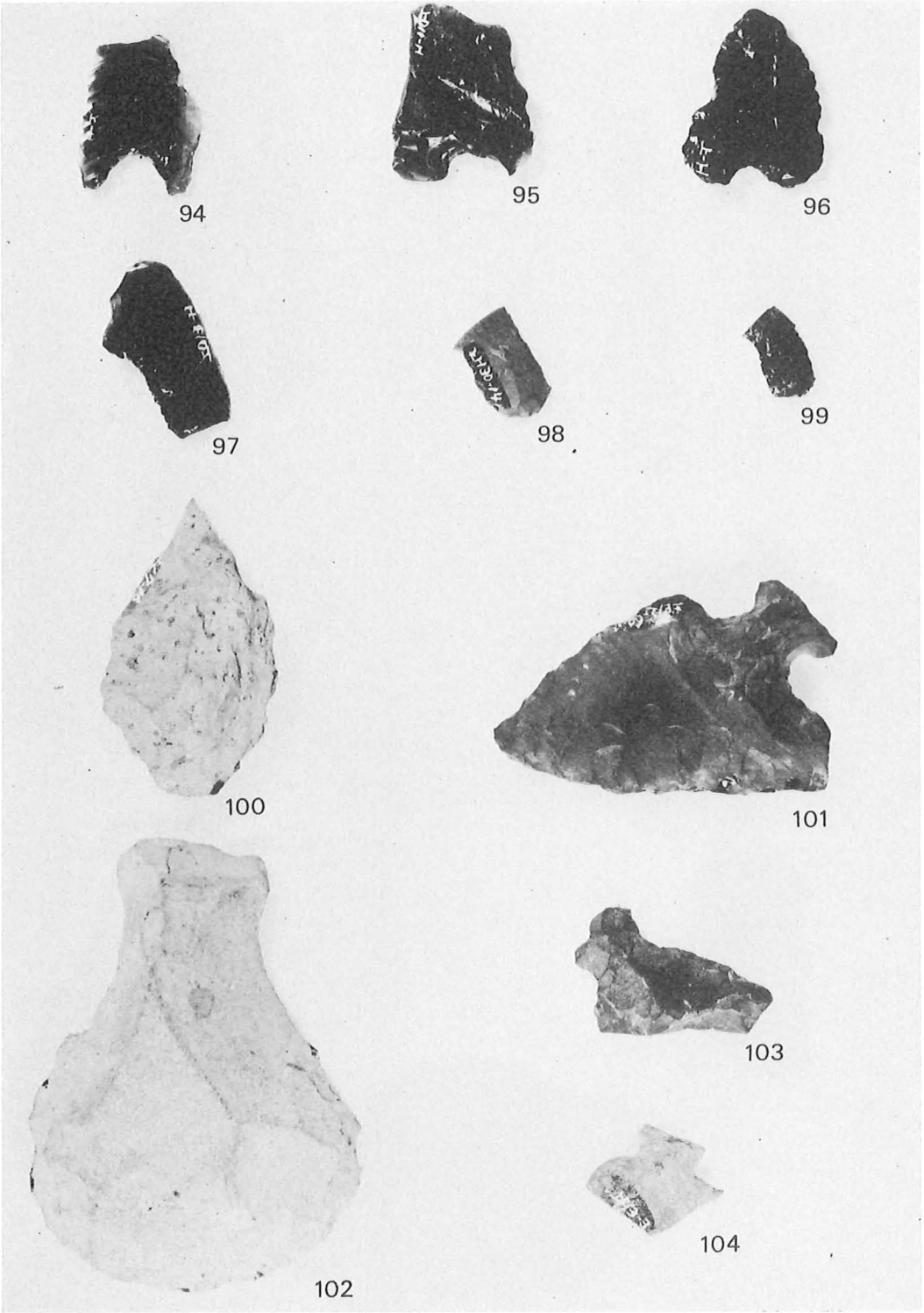
石 鏃（表）


69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93

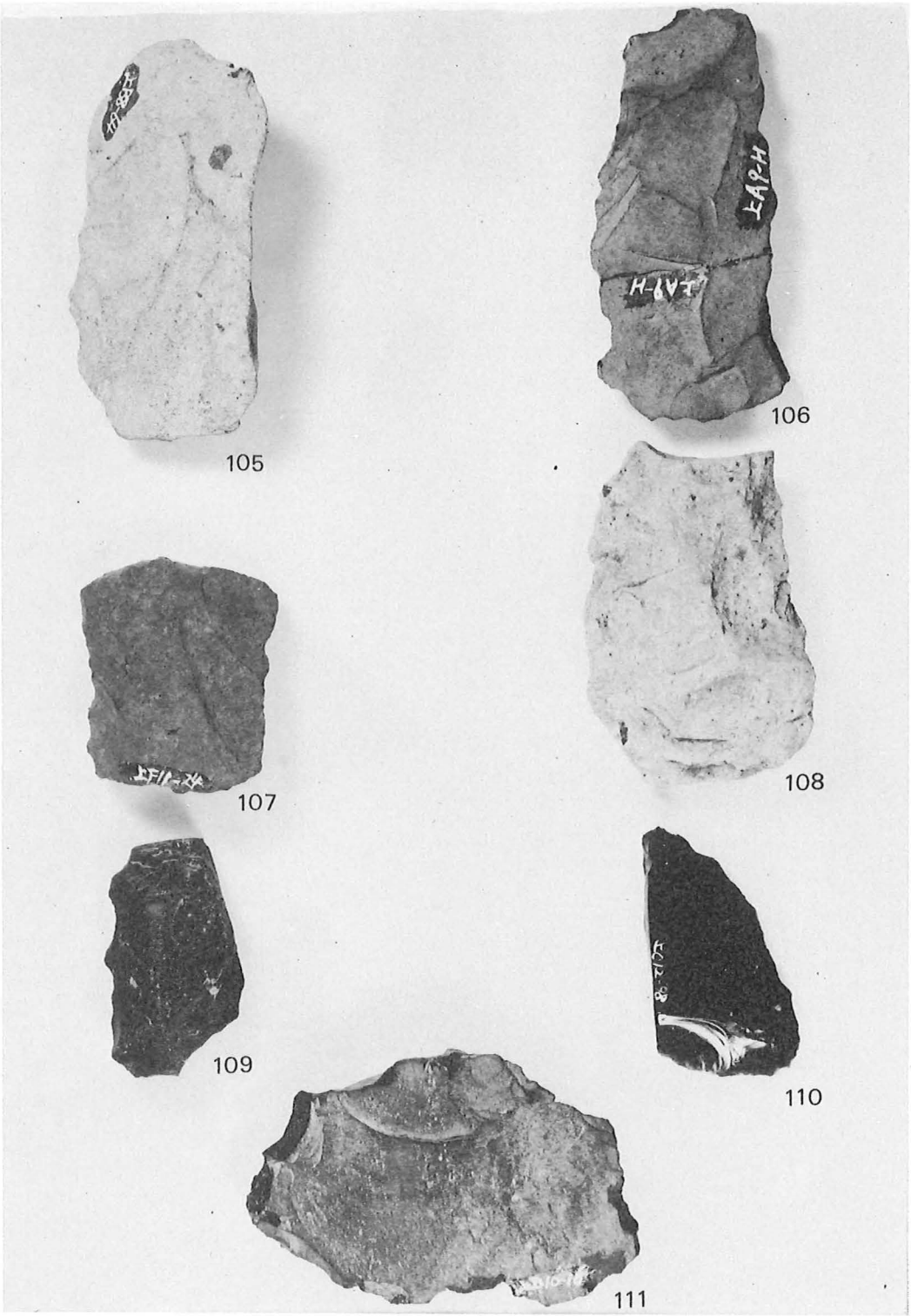
石 鏃（裏）



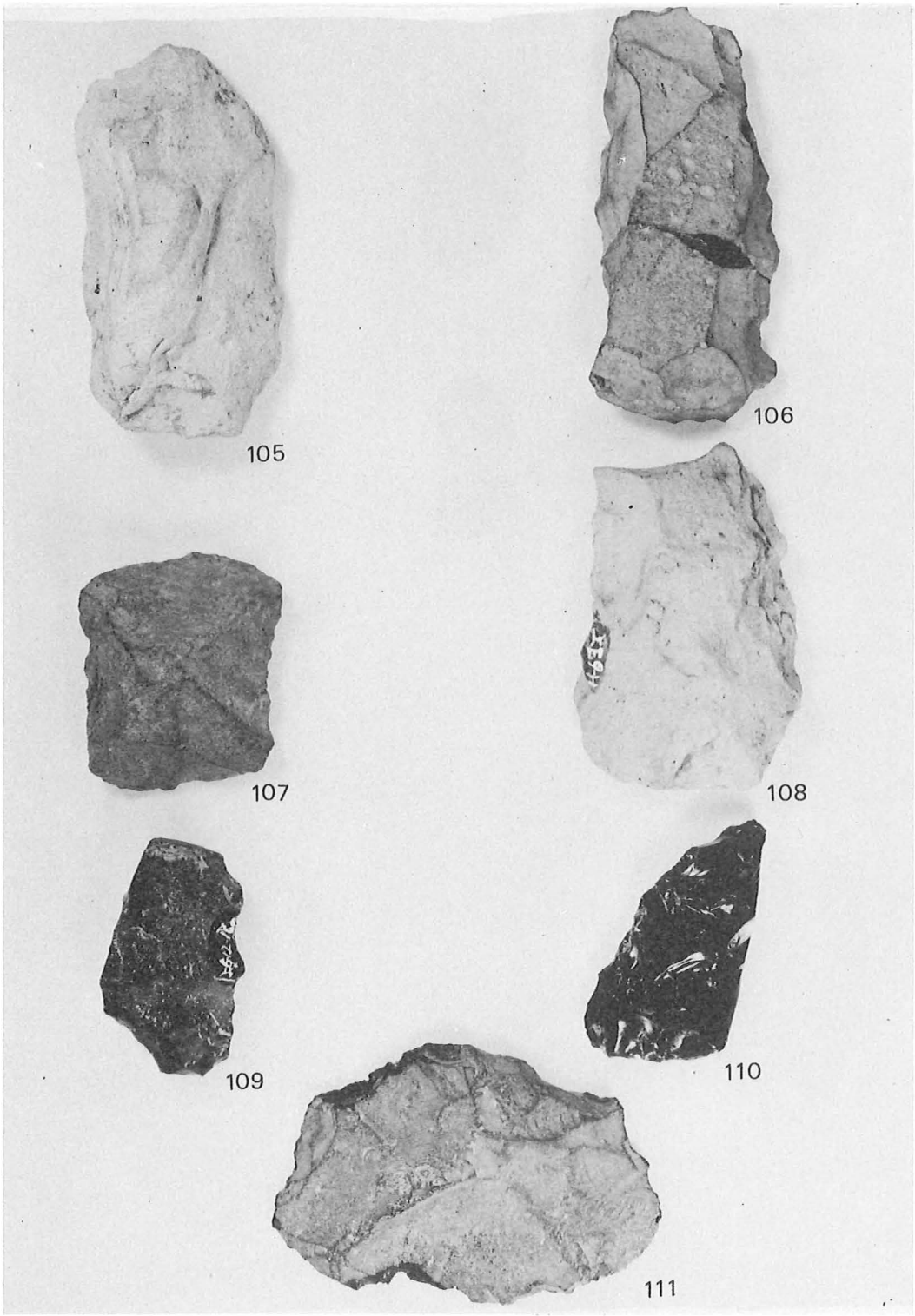

石鏃・ポイント・石匙（表）



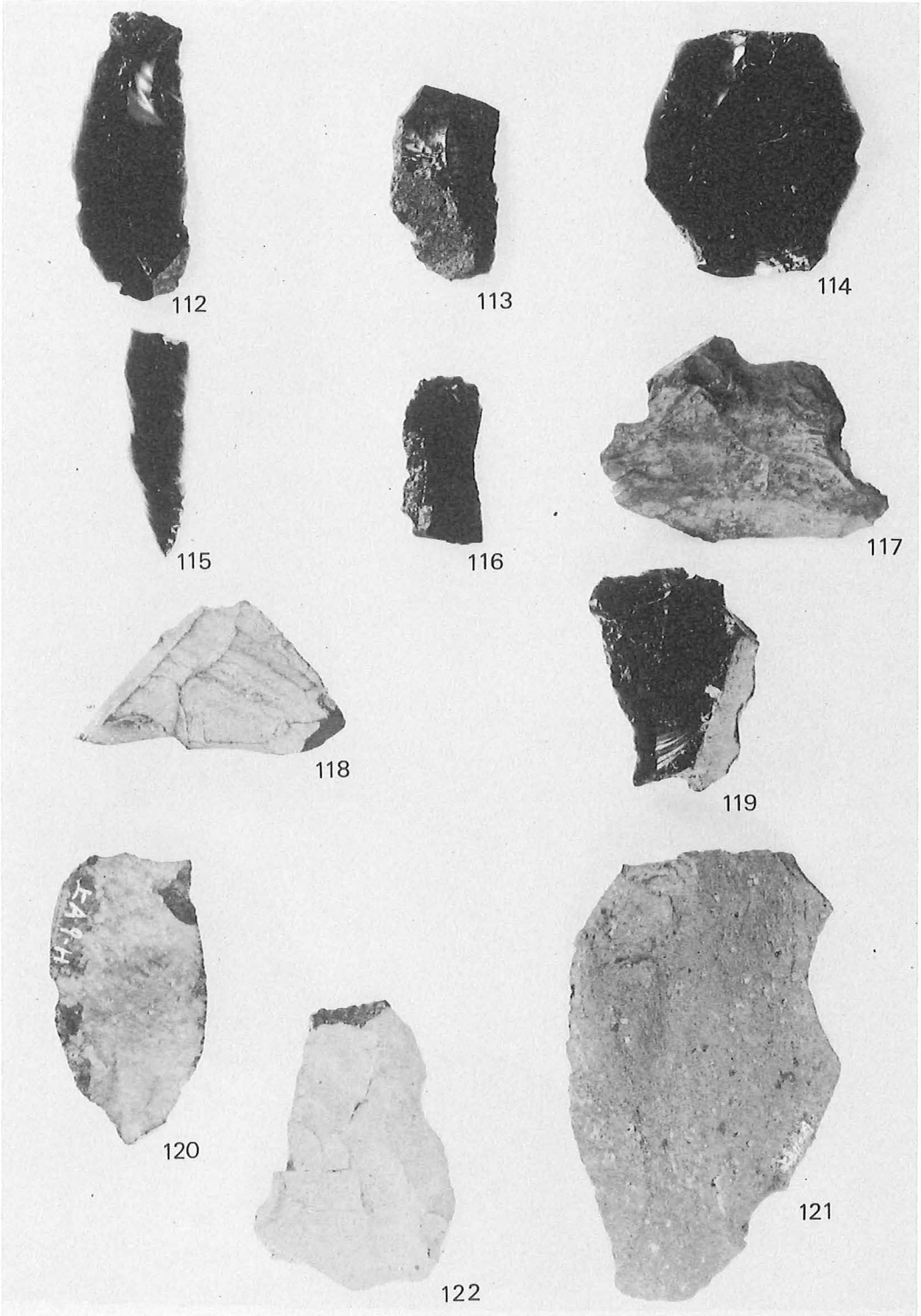

石鏃・ポイント・石匙（裏）



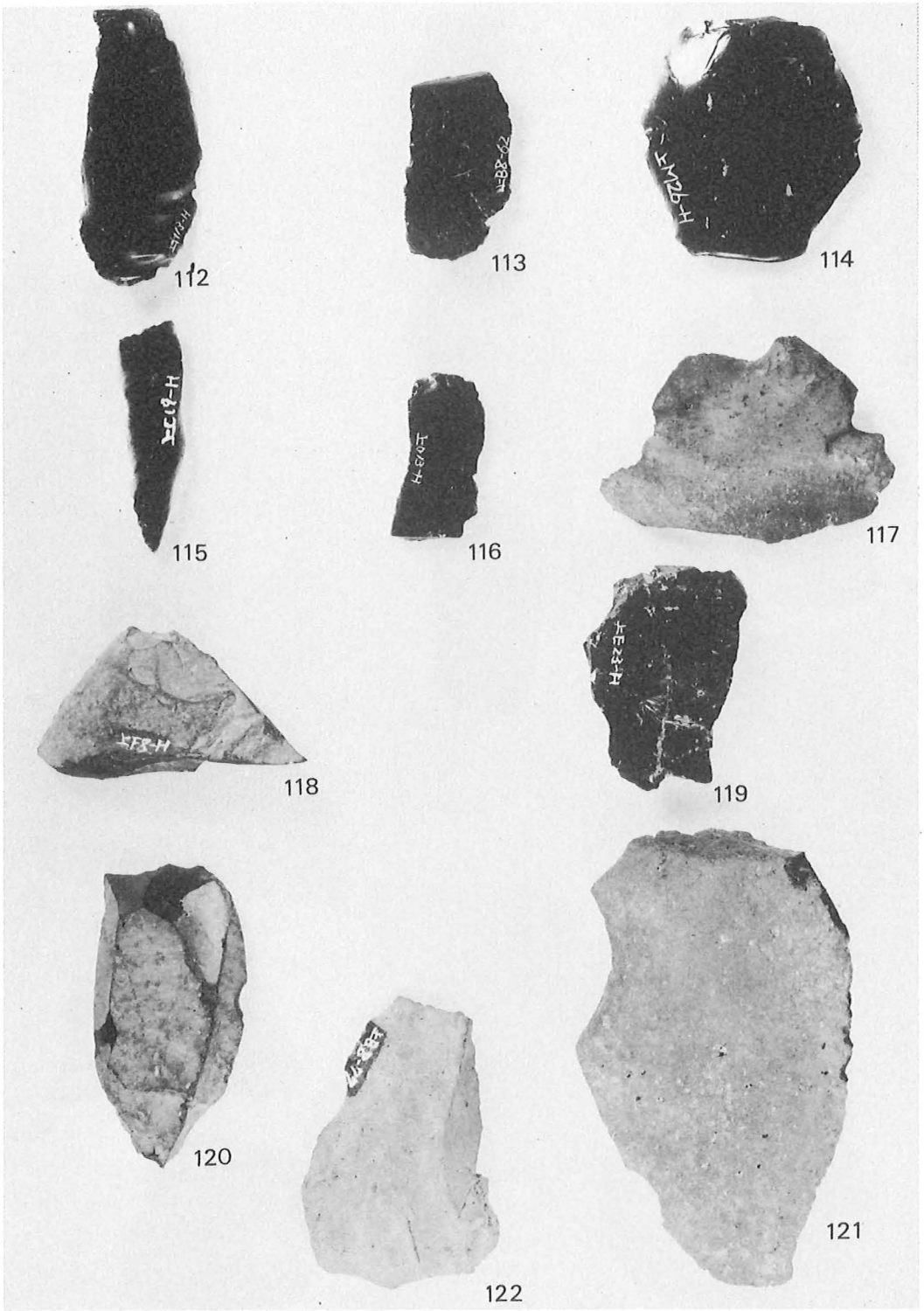

スクレイパー（表）



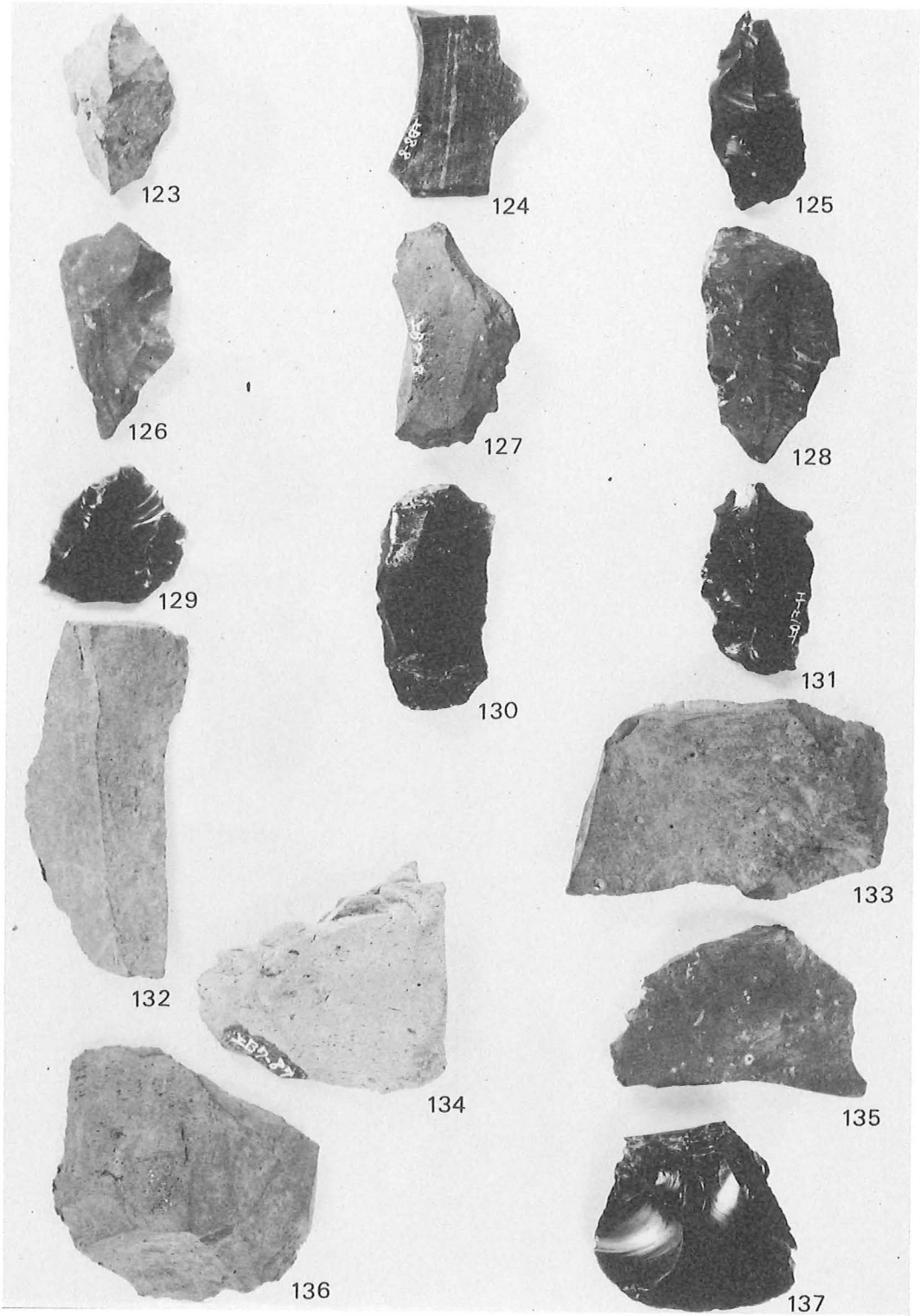

スクレイパー（裏）



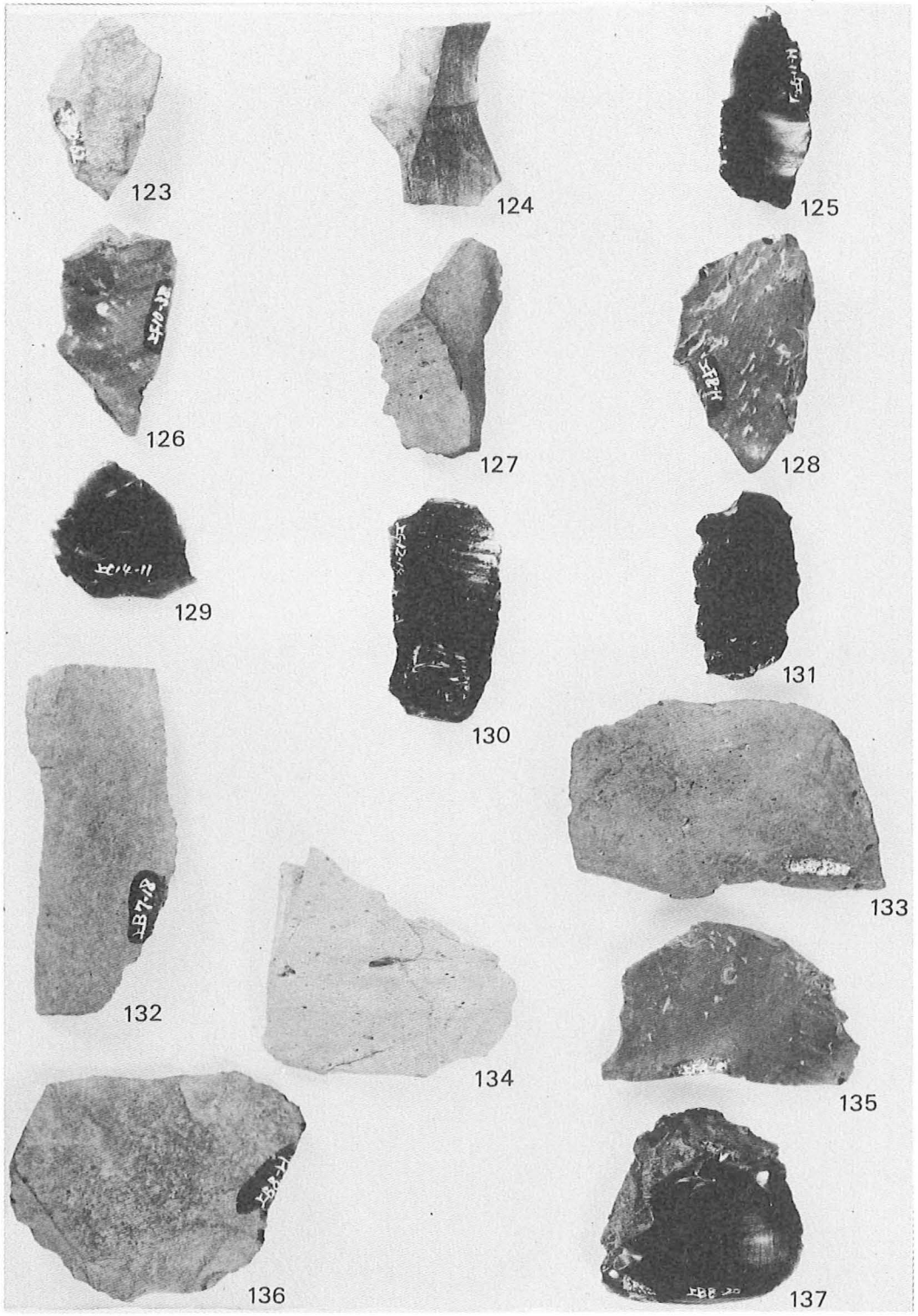

使用痕ある剝片（表）



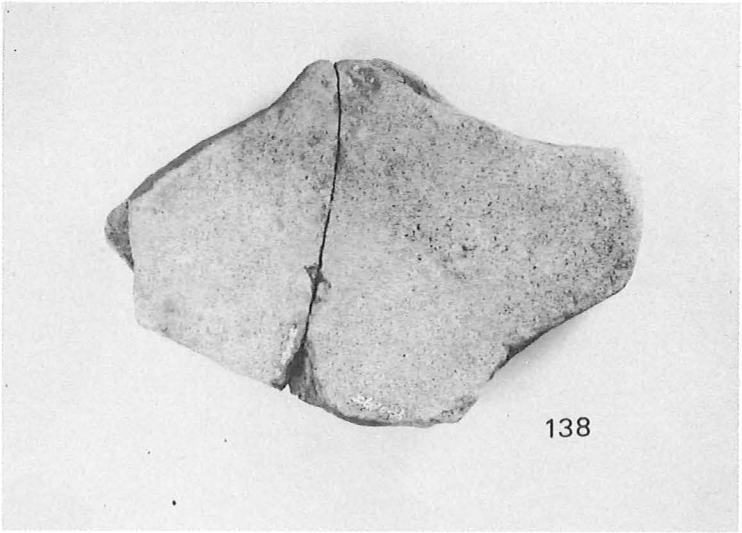

使用痕ある剝片（裏）

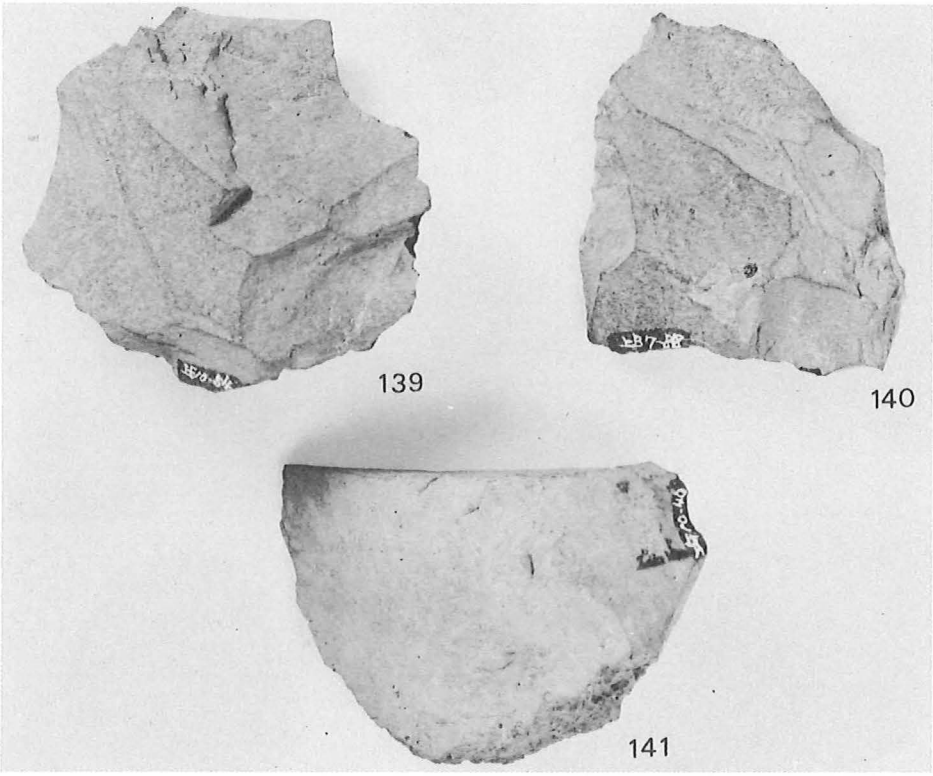



剝片（表）

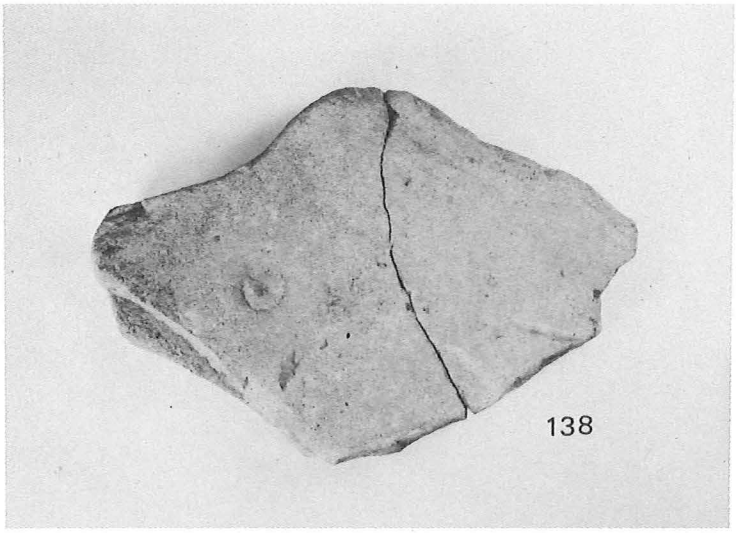


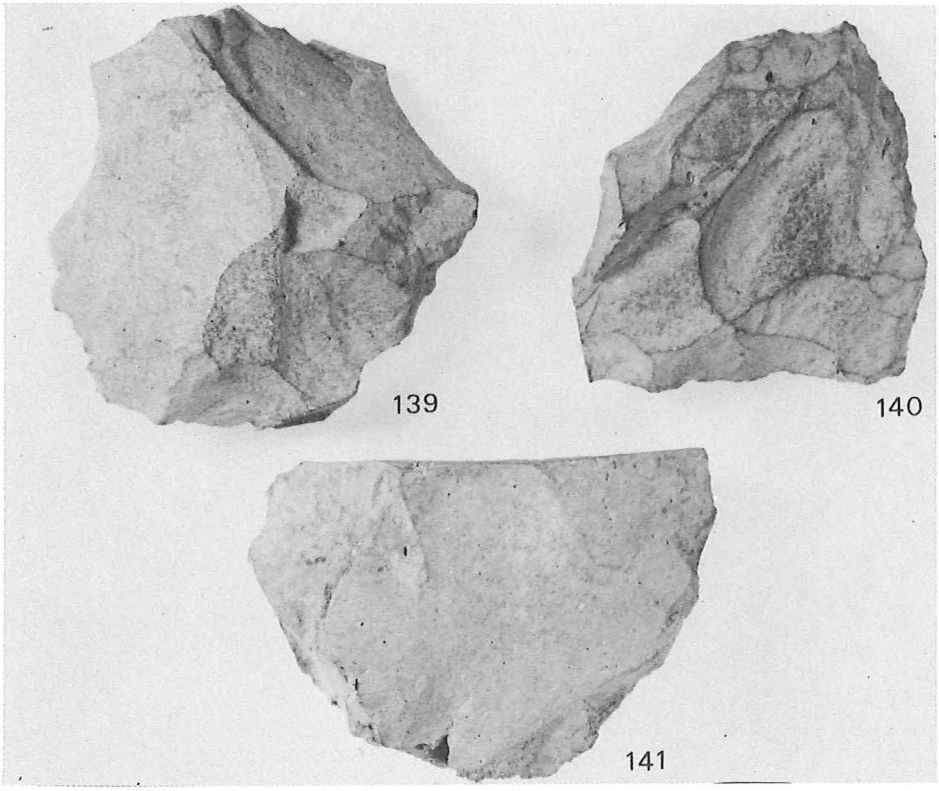

剝 片 （裏）



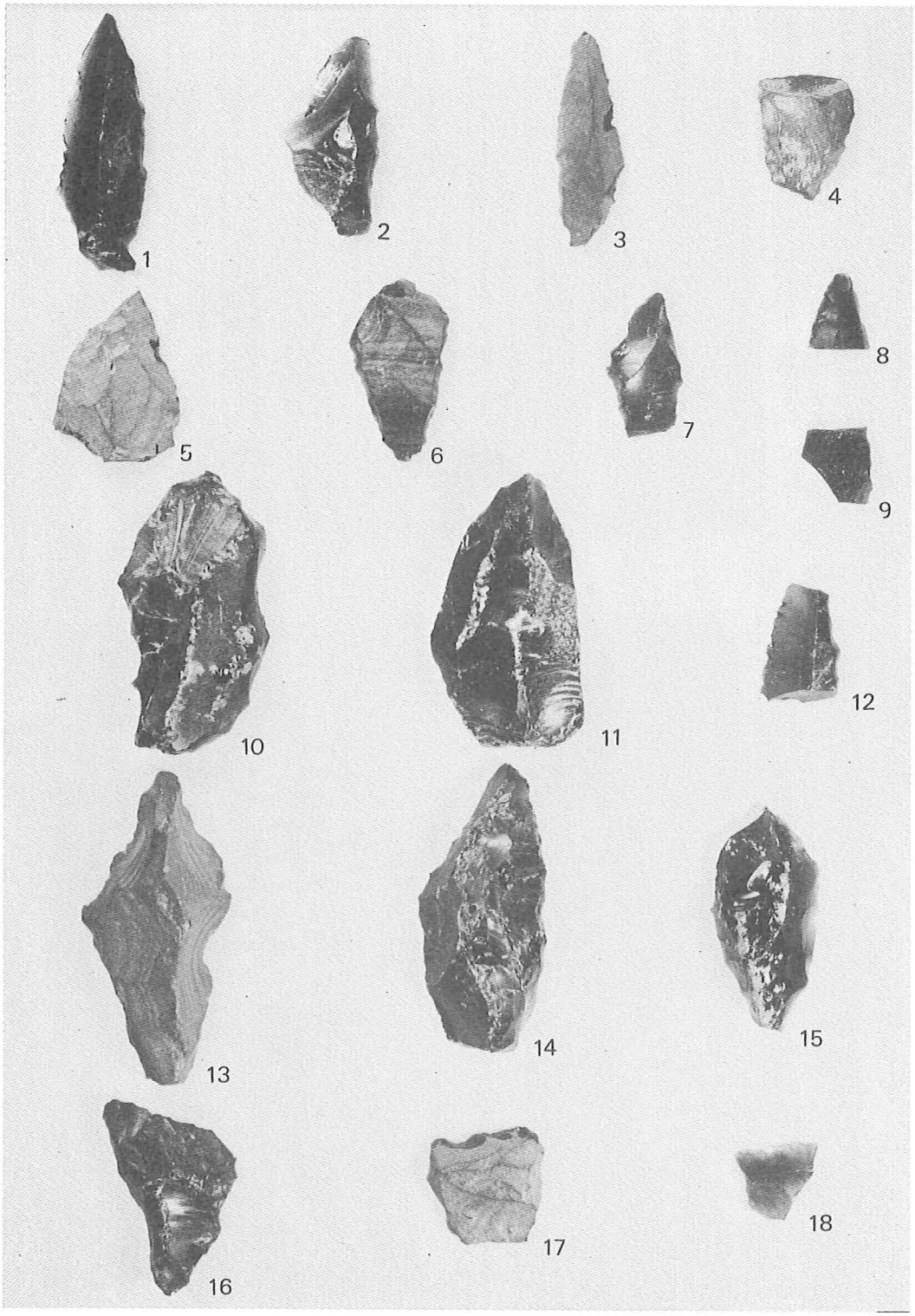




砥石・石核（表）

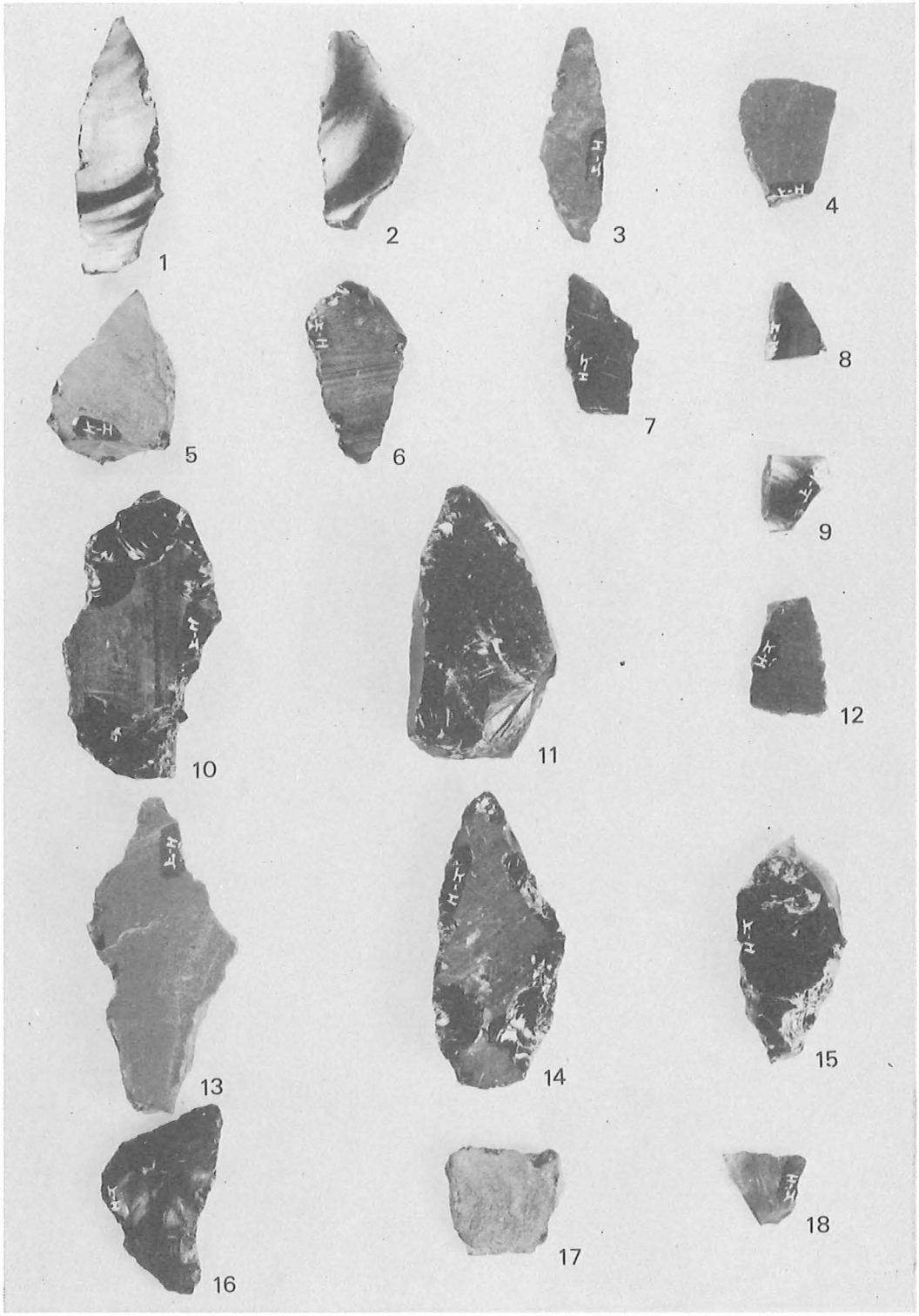


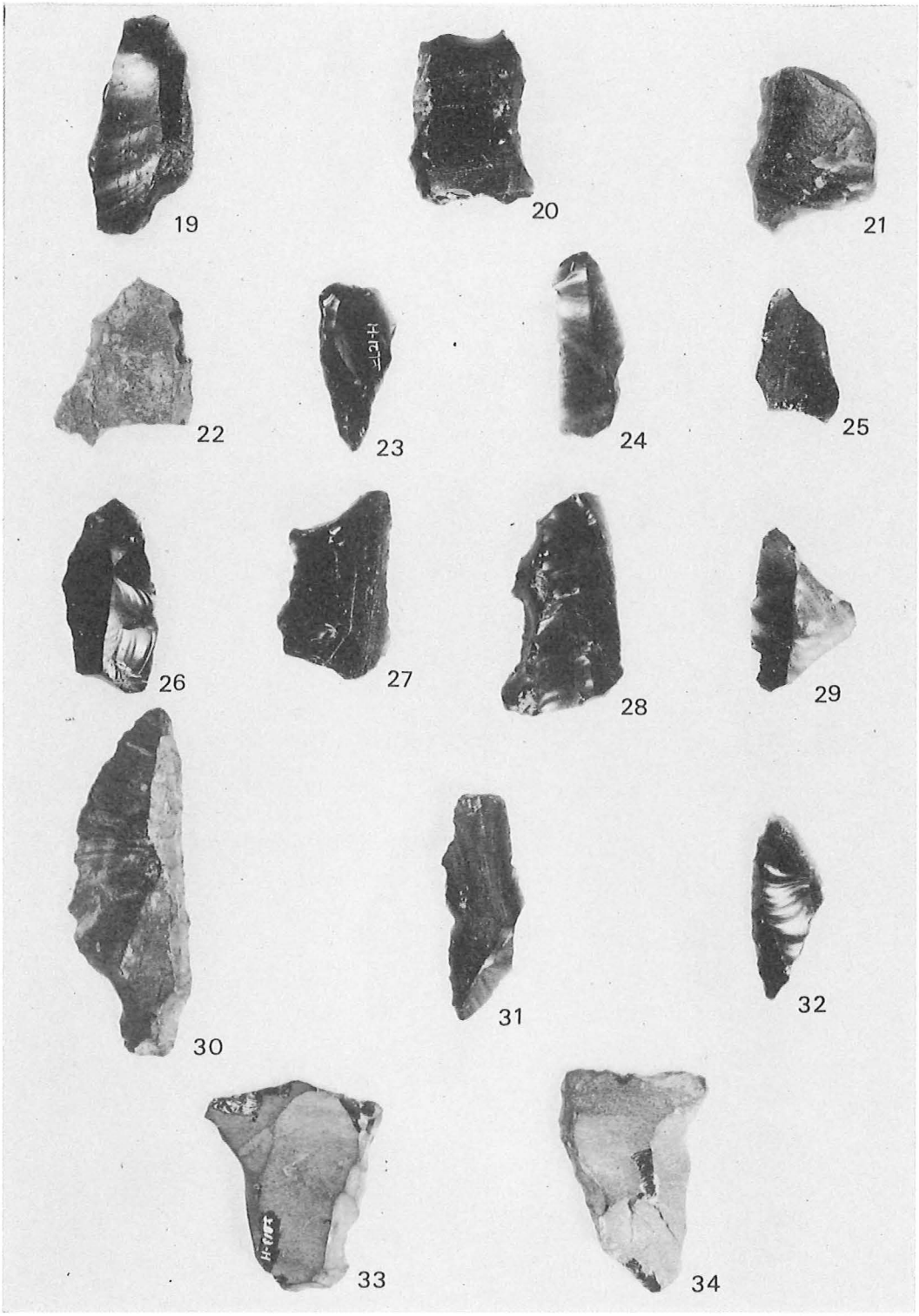

砥石・石核（裏）



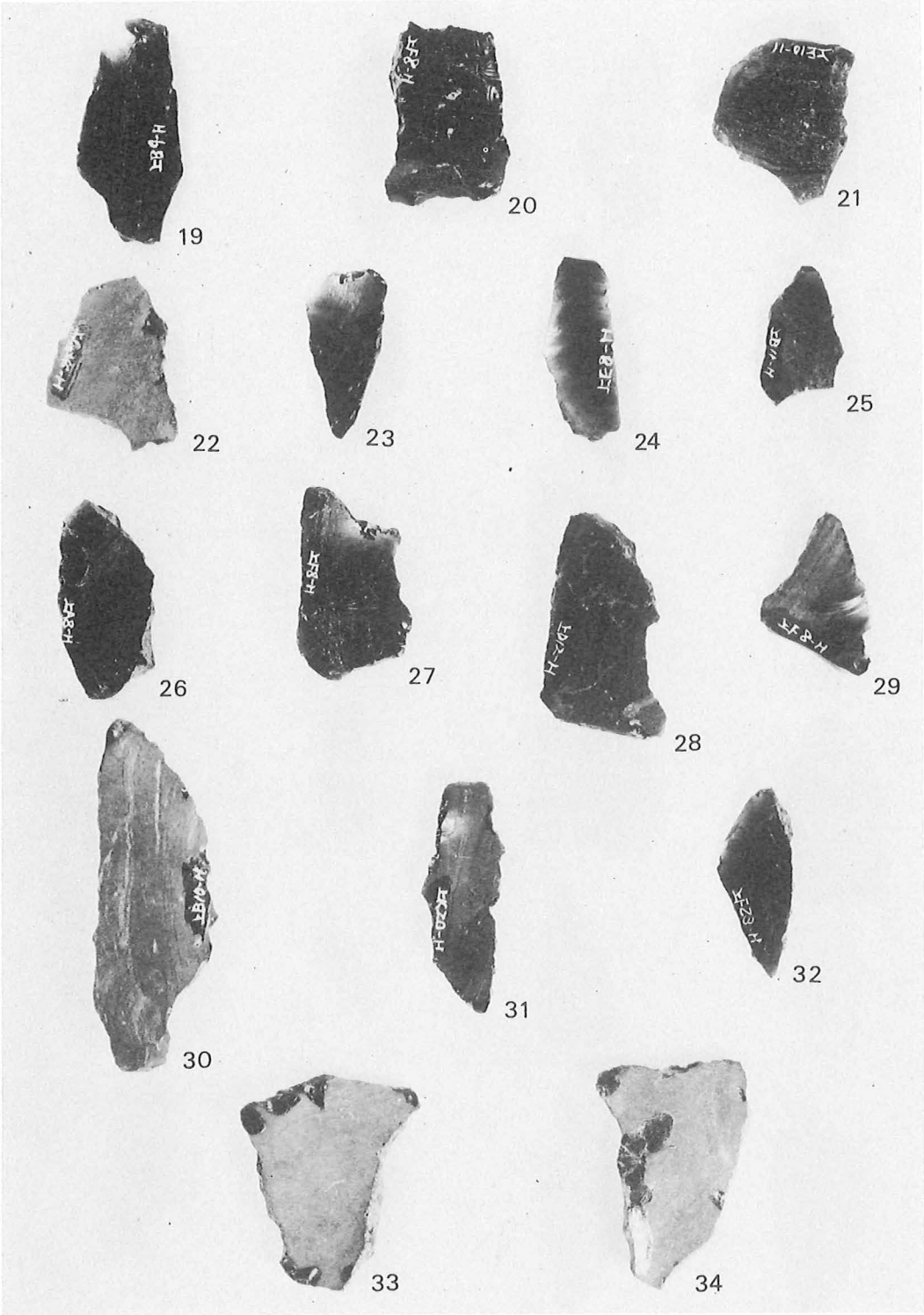

遺跡周辺表面採集の石器（表）



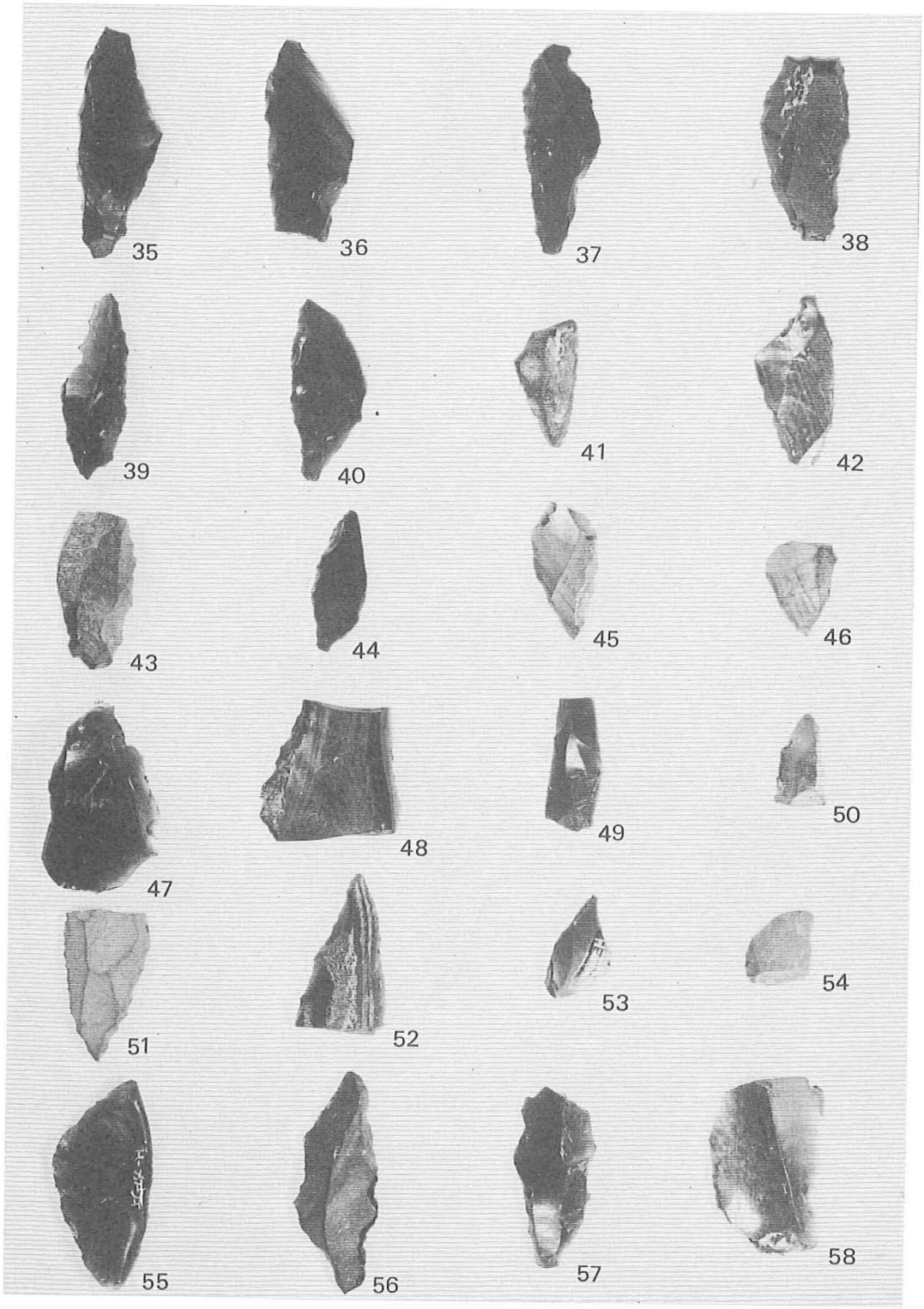

遺跡周辺表面採集の石器（裏）



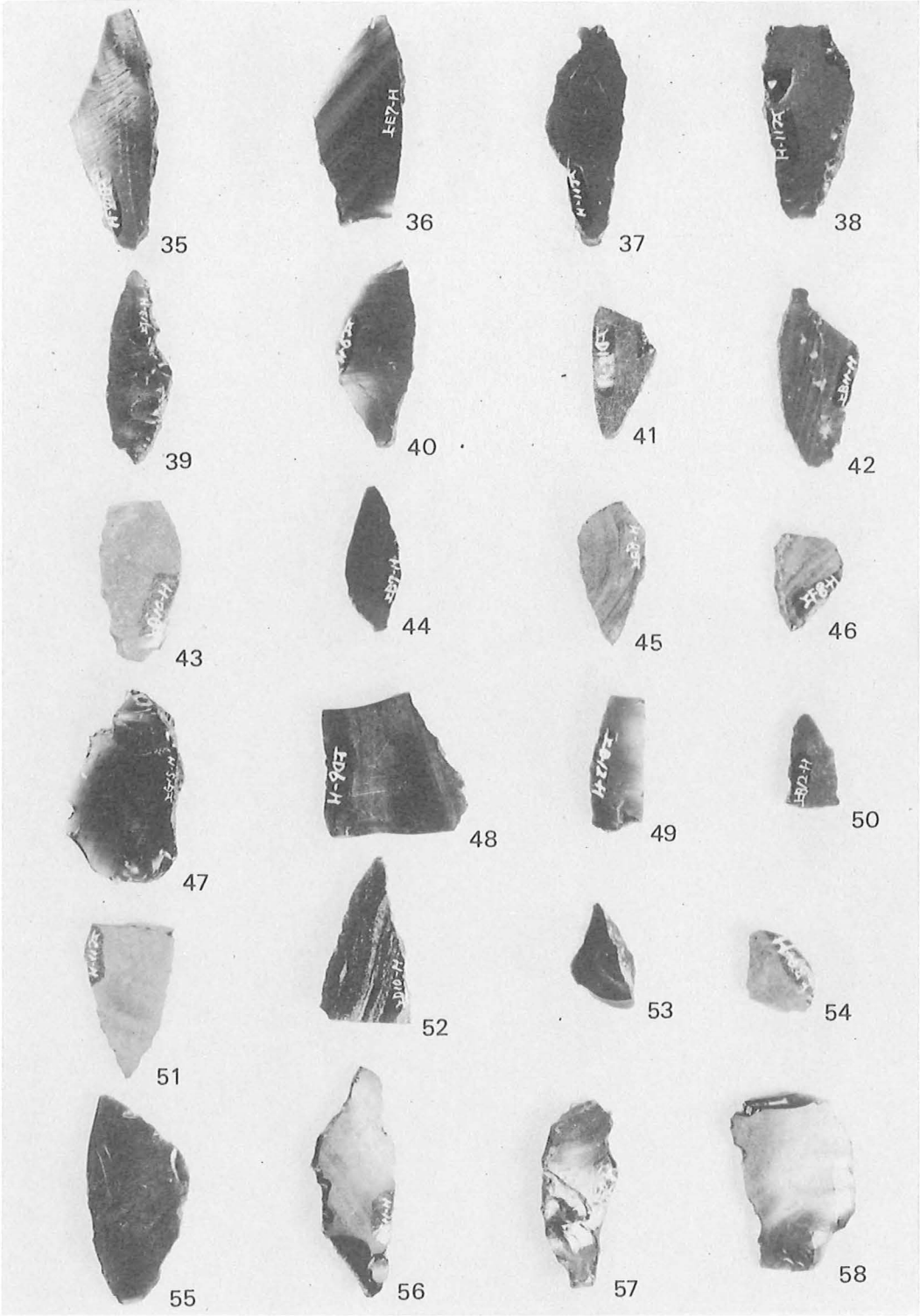

A 地点表土出土の石器 (1) (表)



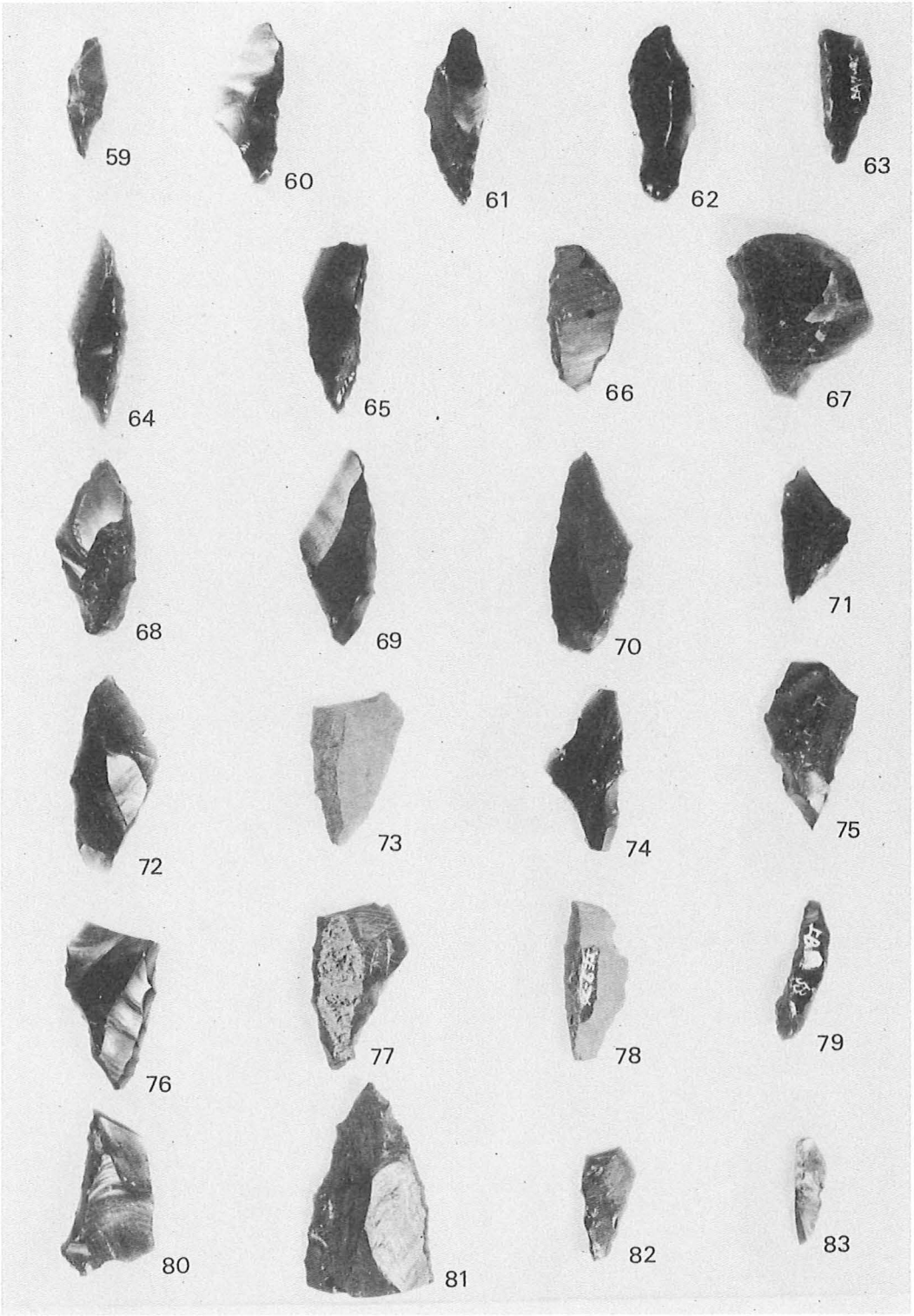

A 地点表土出土の石器 (1) (裏)



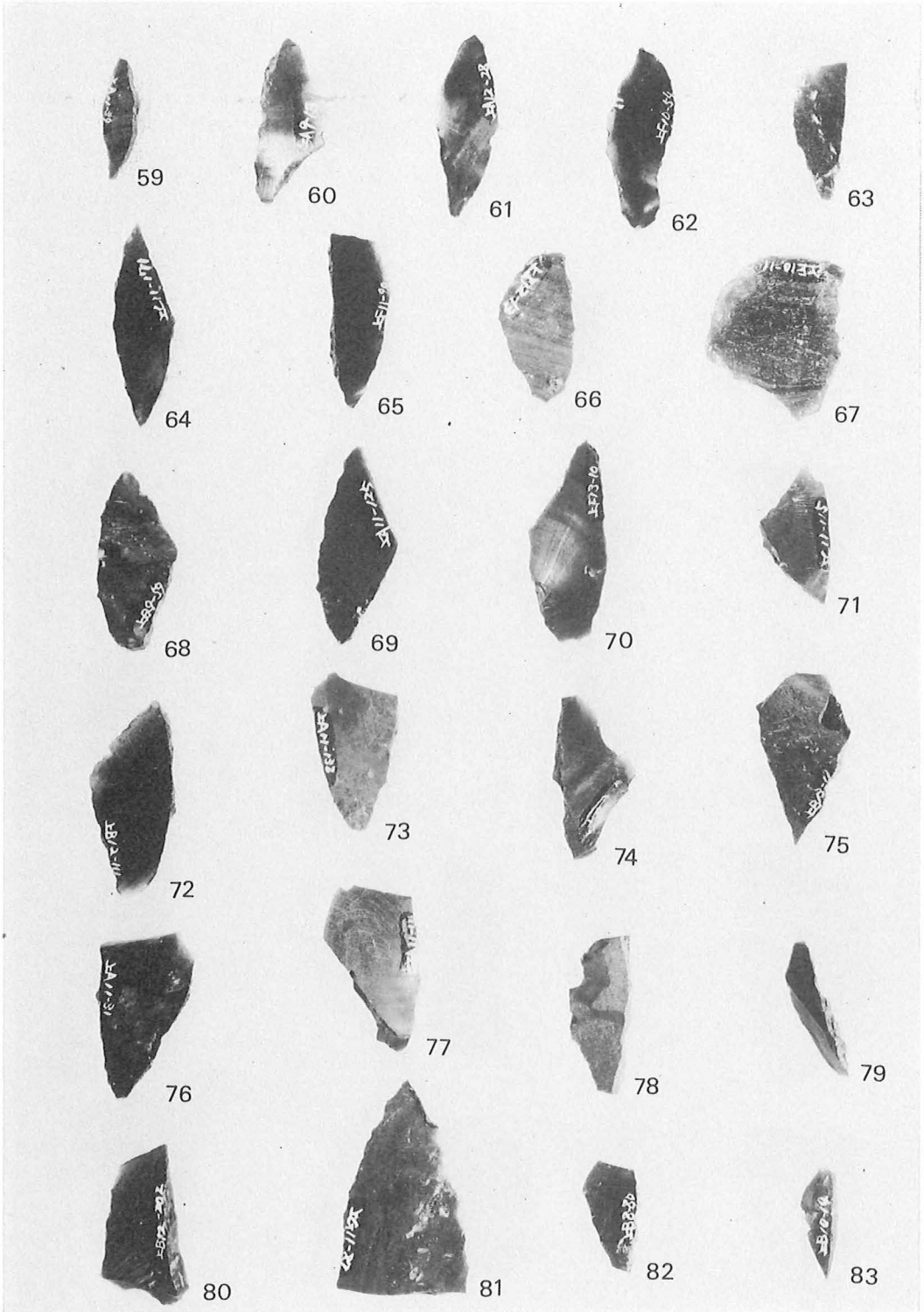

A地点表土出土の石器(2)（表）



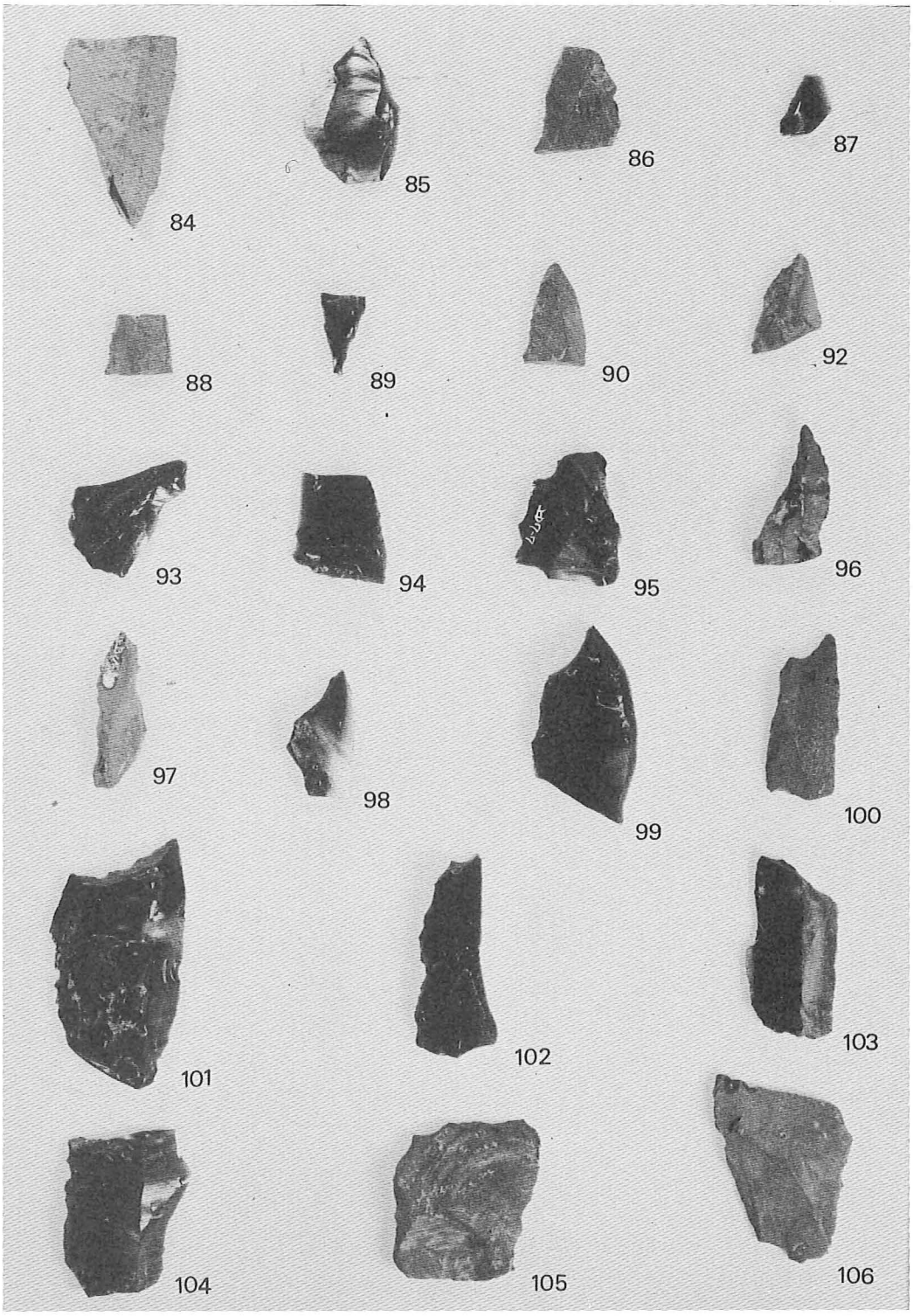

A地点表土出土の石器(2)(裏)


59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83

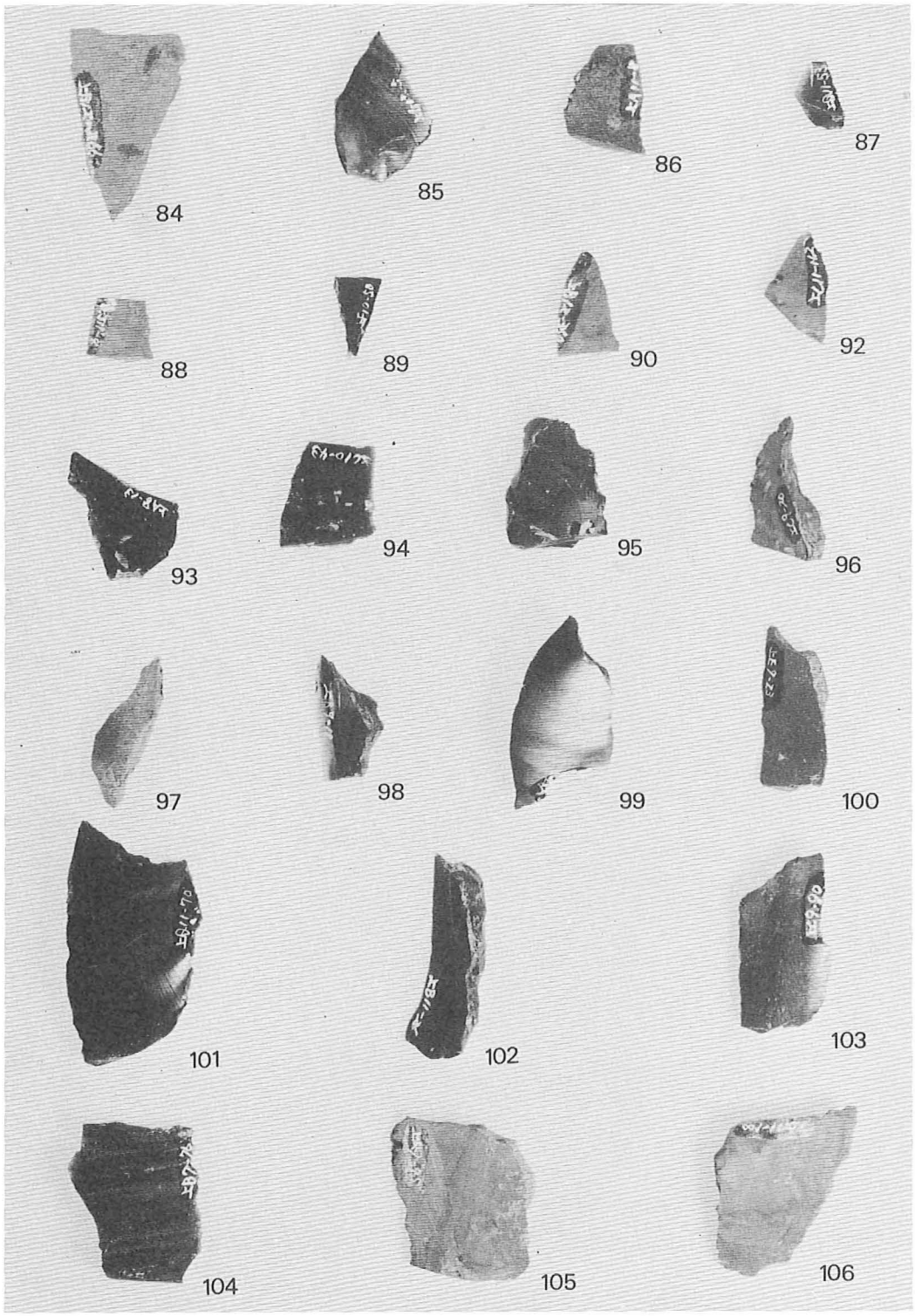
A地点出土の石器(1)(表)


59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83

A 地点出土の石器 (1) (裏)

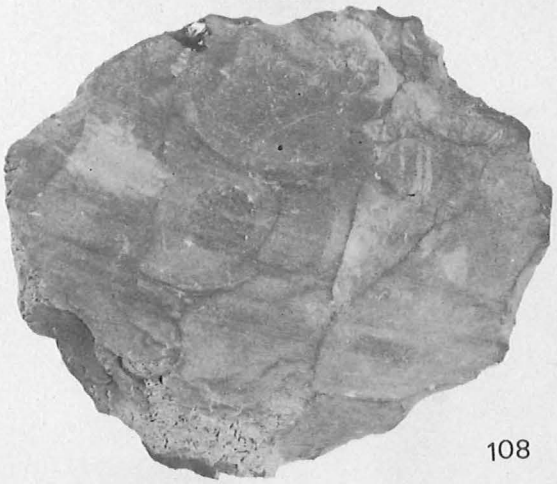

84
85
86
87
88
89
90
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106

A 地点出土の石器（表）


84
85
86
87
88
89
90
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106

A 地点出土の石器（裏）

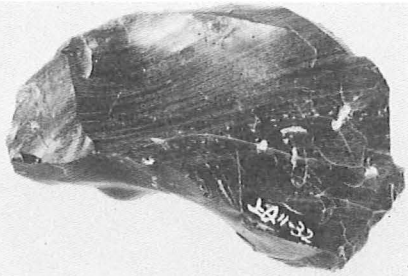
107



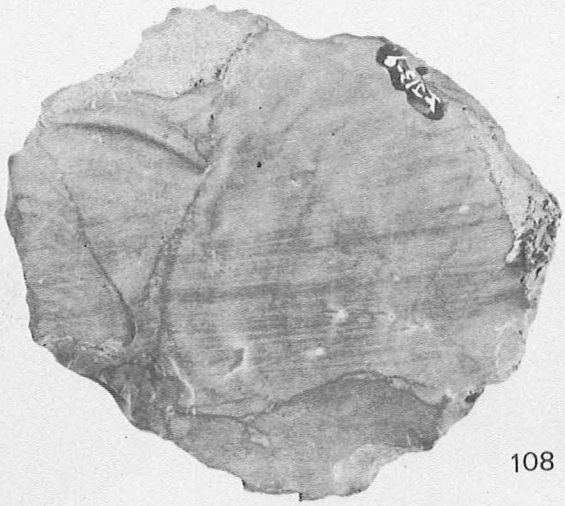
108

109

A地点出土の石核(1)(表)



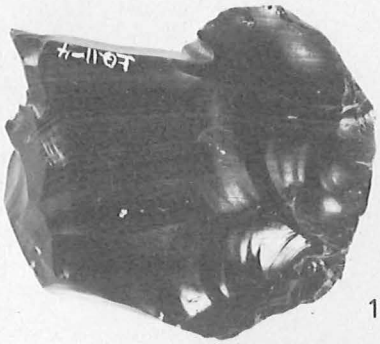
107



108

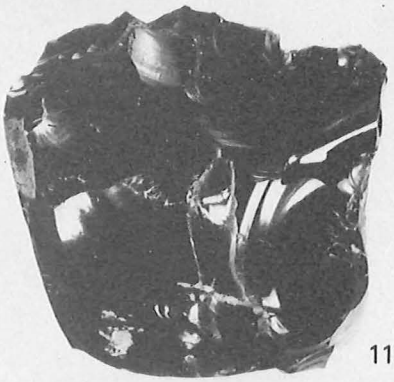
109

A 地点出土の石核 (1) (裏)



110

111



112

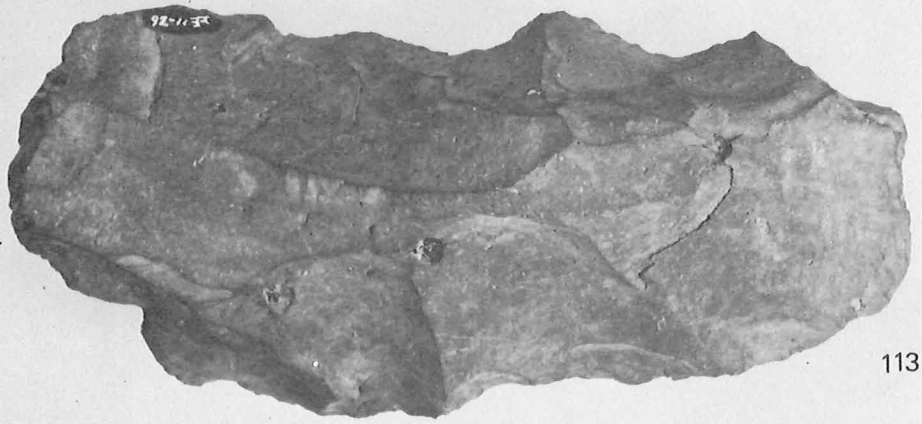
113

A地点出土の石核(2)(表)

110

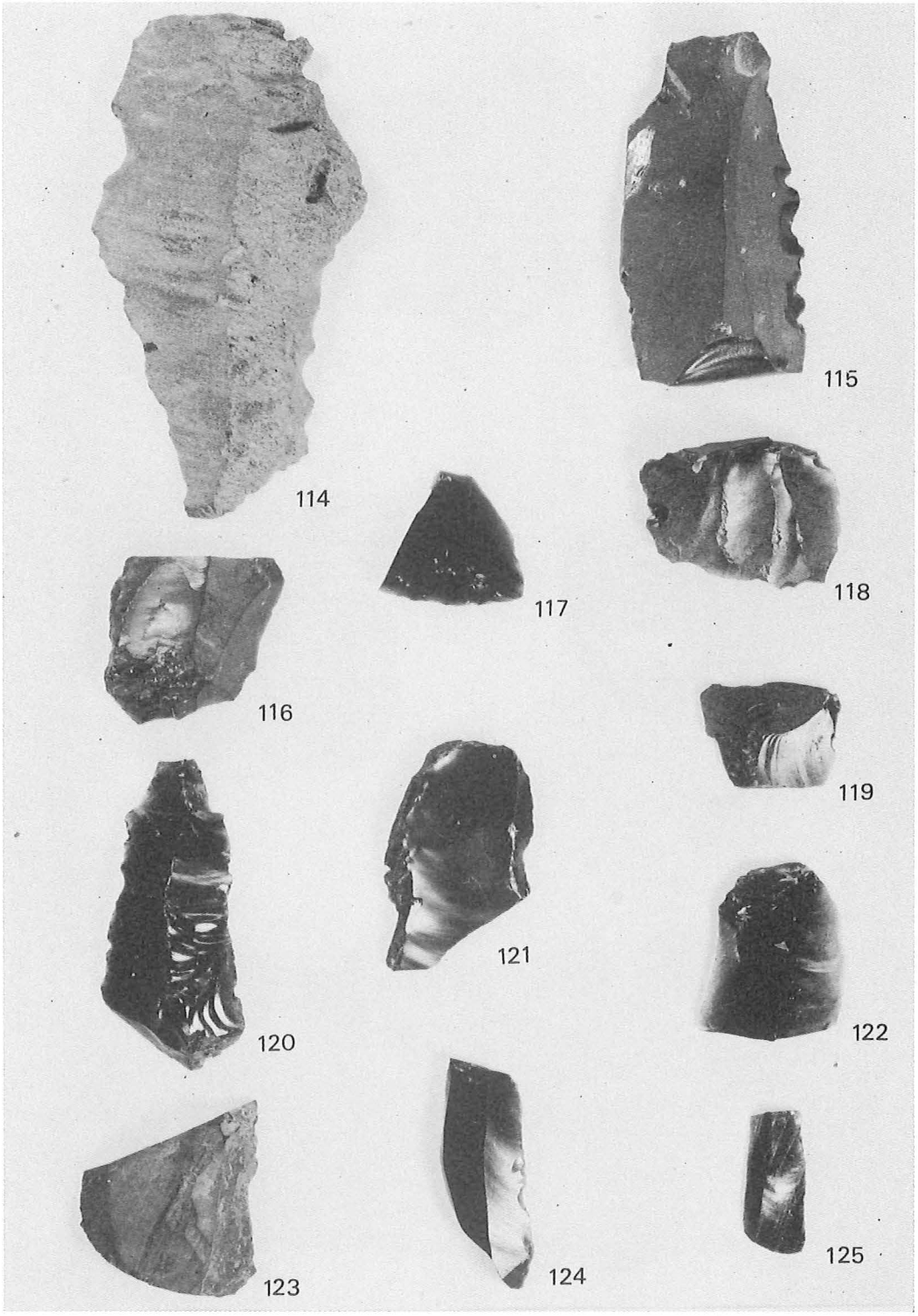
111

112

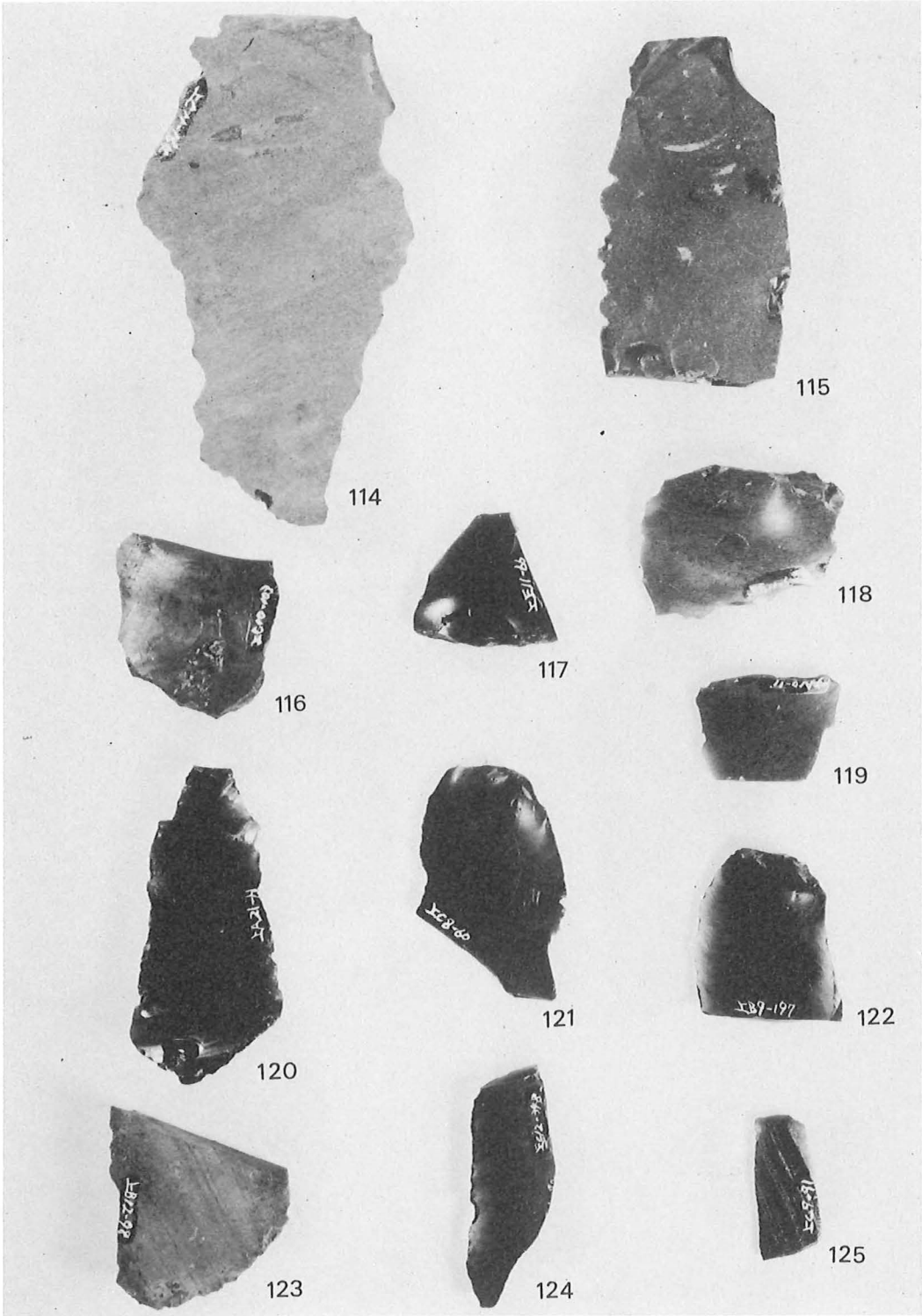


113

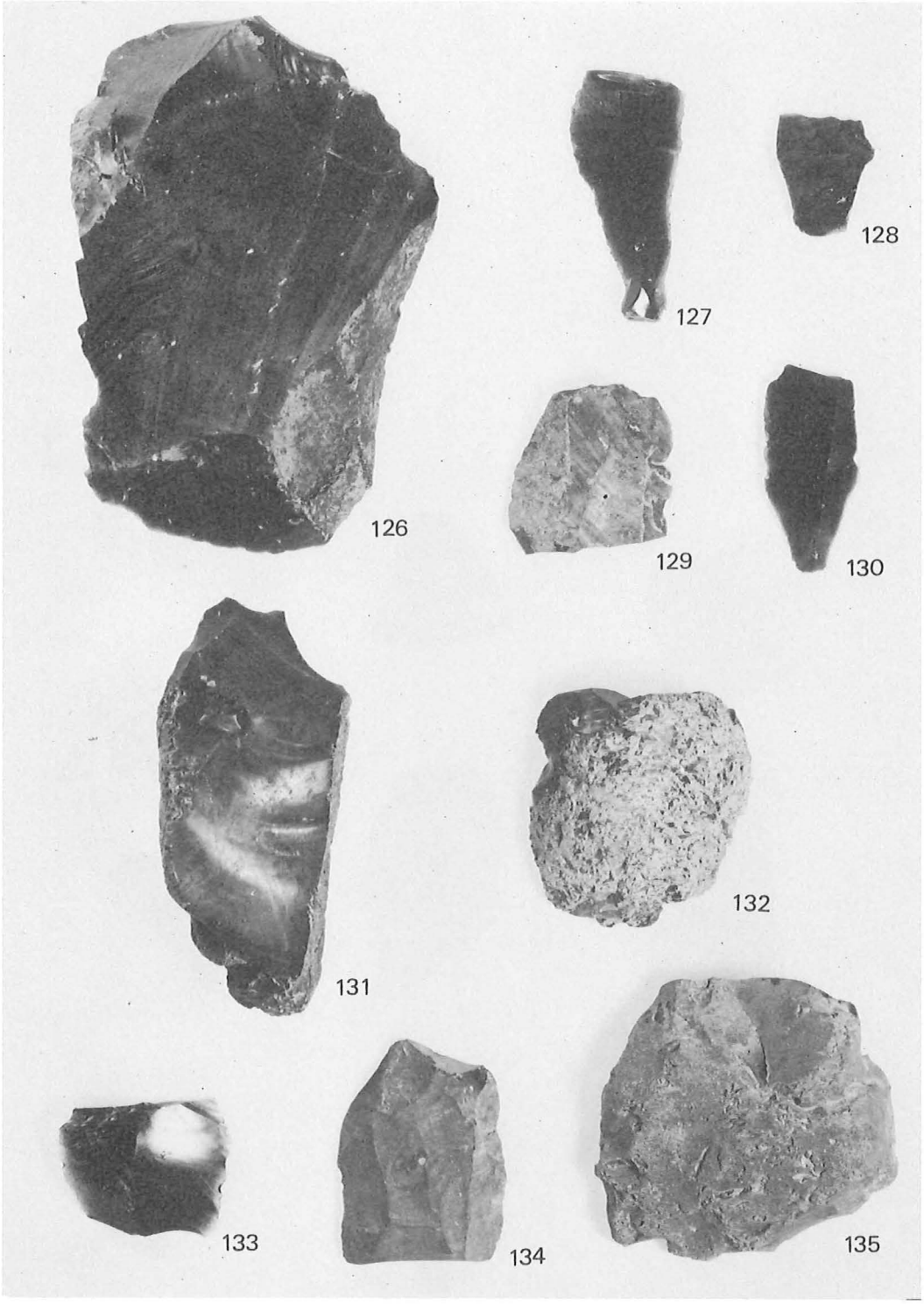
A 地点出土の石核 (2) (裏)



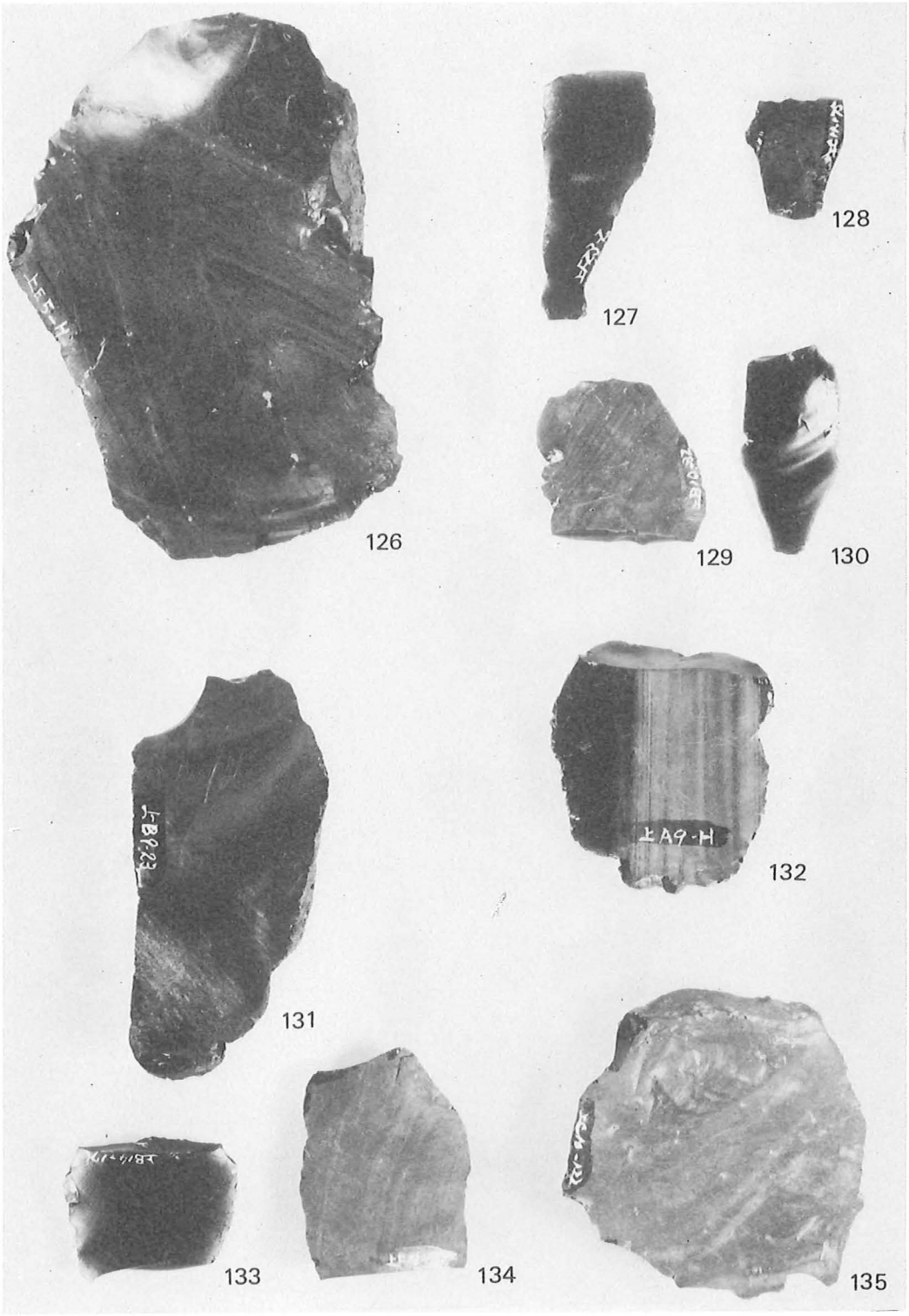

A 地点出土の石器 (3) (表)



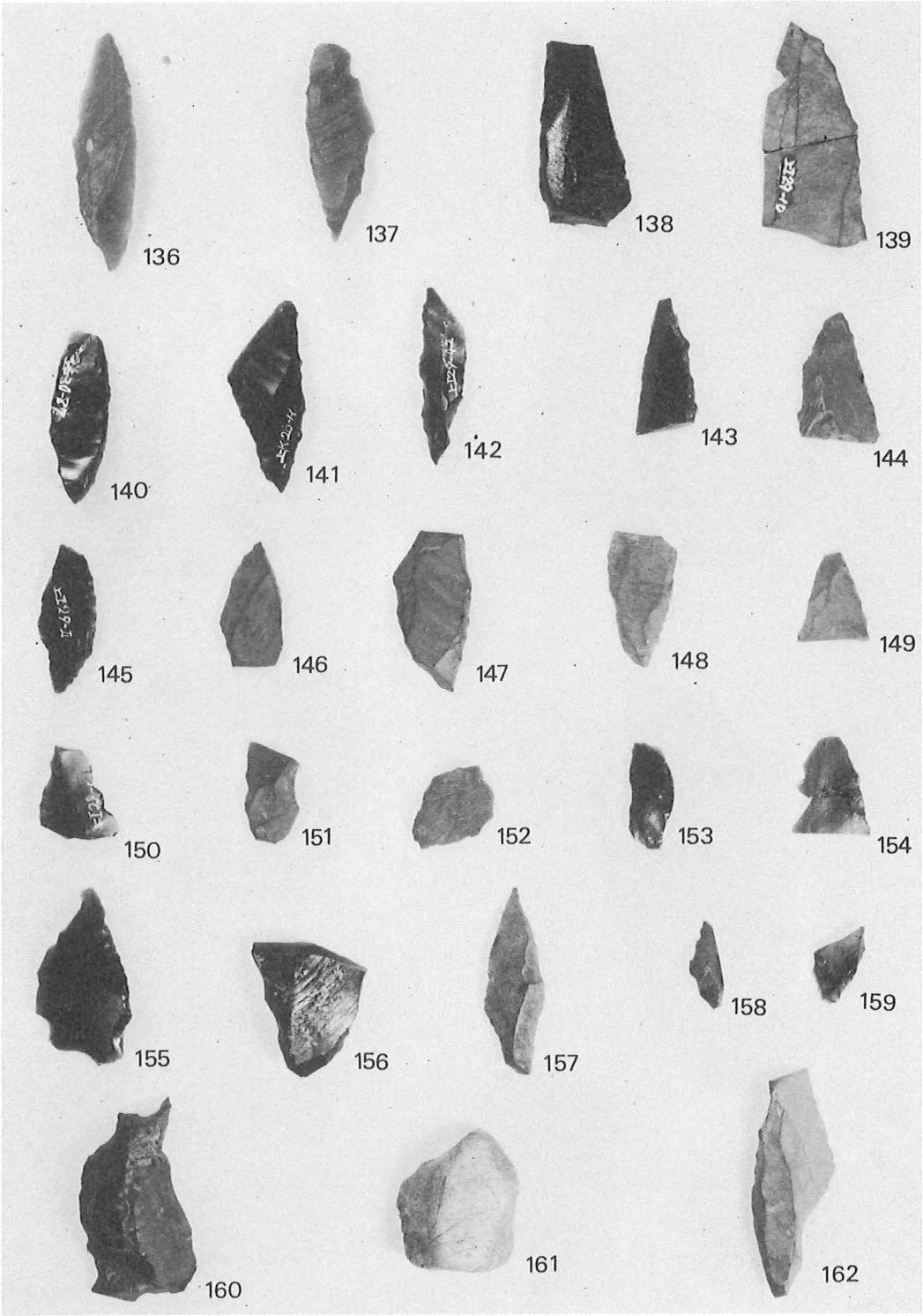

A 地点出土の石器 (3) (裏)



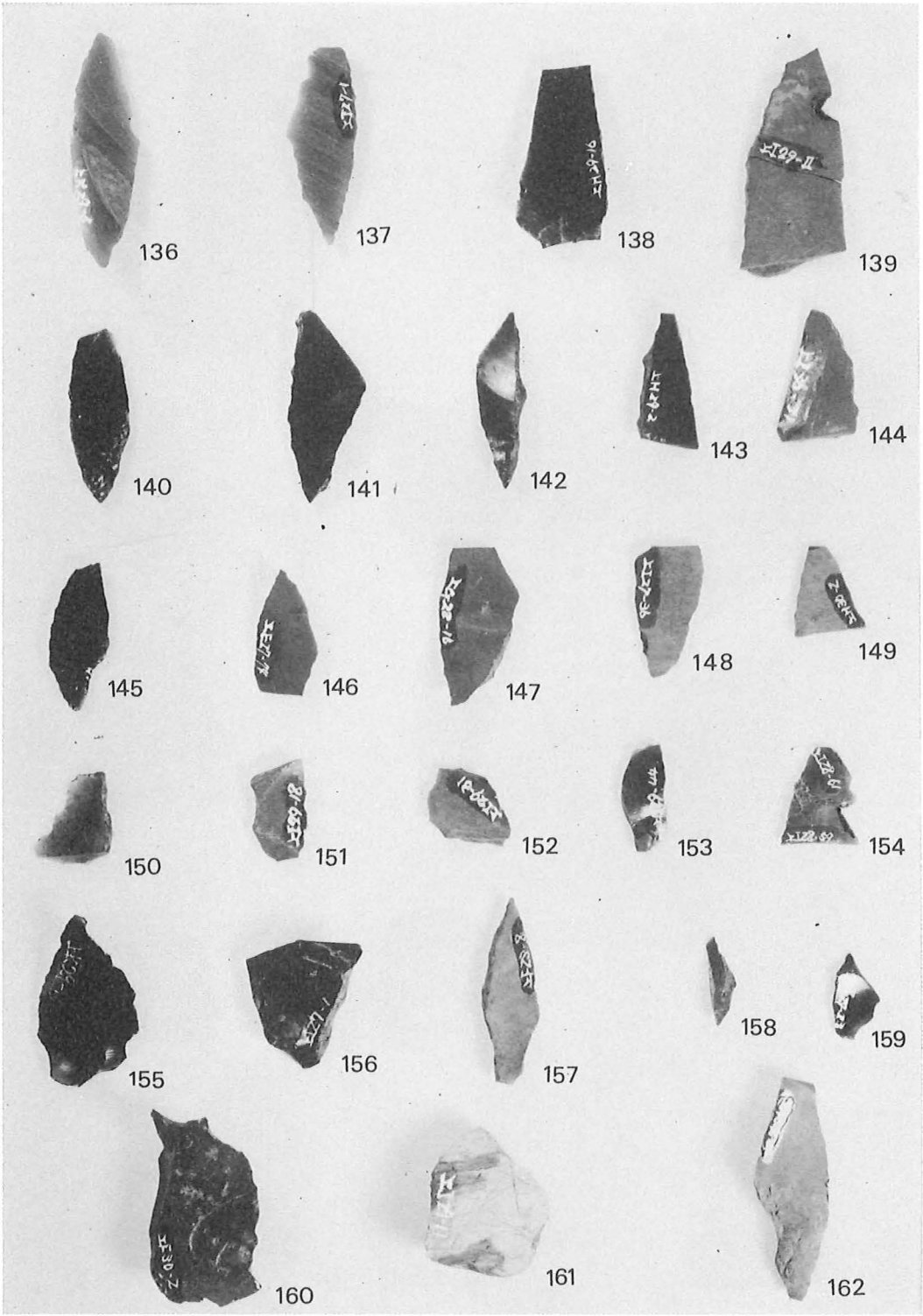

A地点出土の石器(4)（裏）



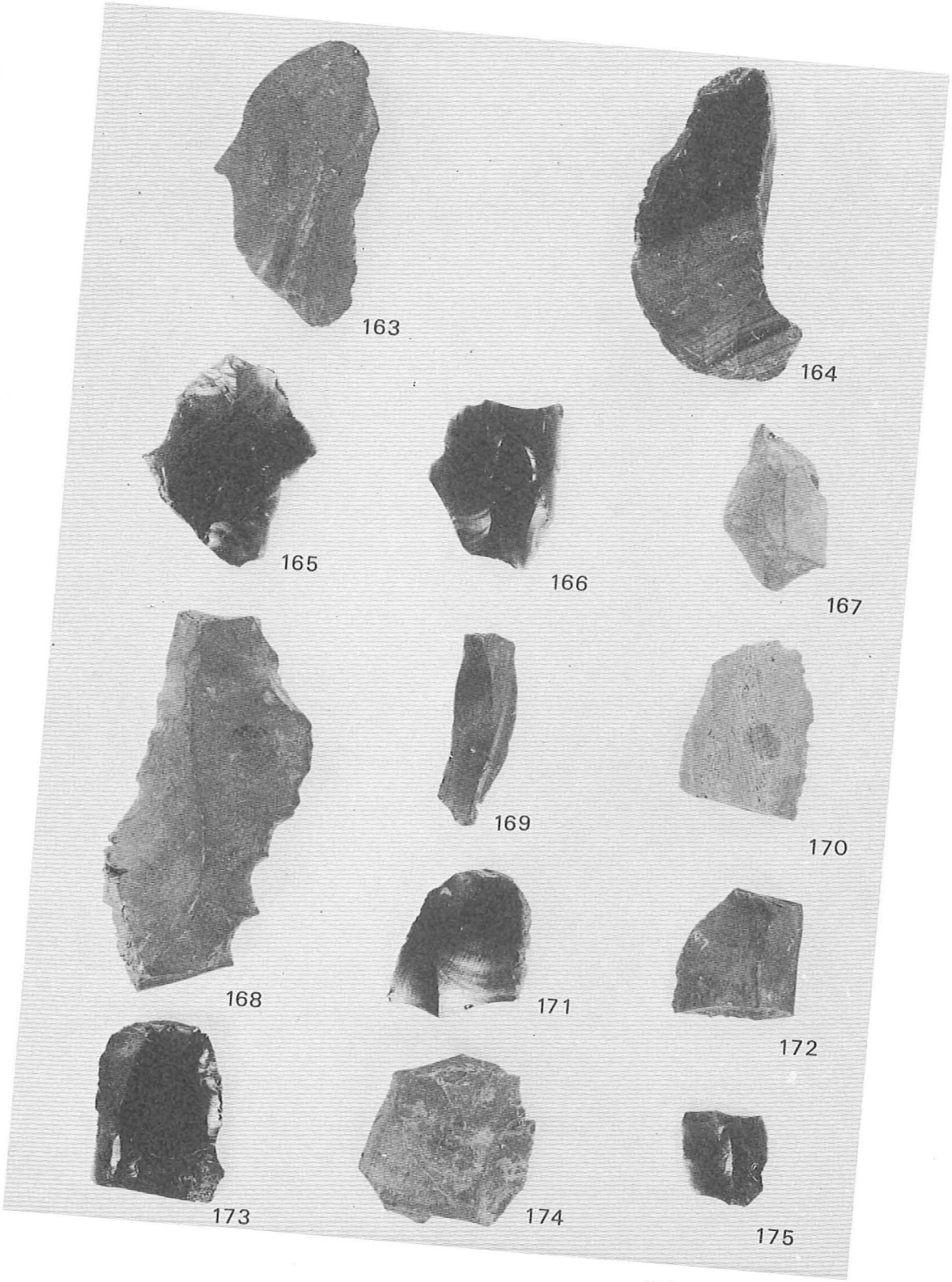

A 地点出土の石器 (4) (表)


136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162

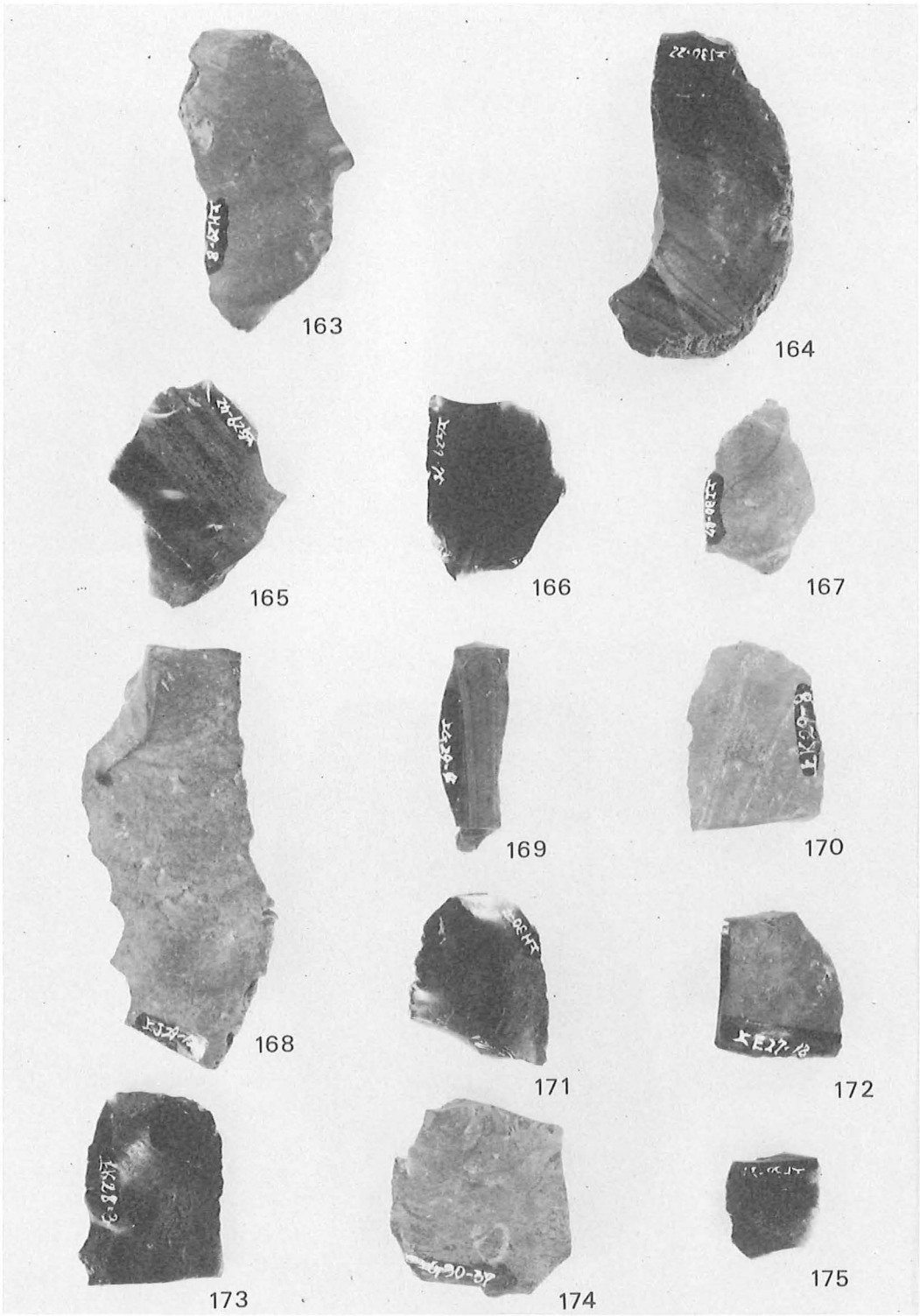
B 地点出土の石器 (1) (表)


136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162

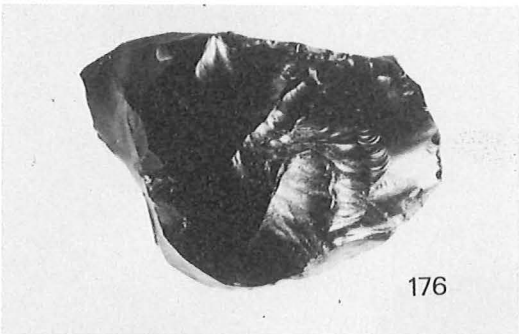
B地点出土の石器(1)(裏)

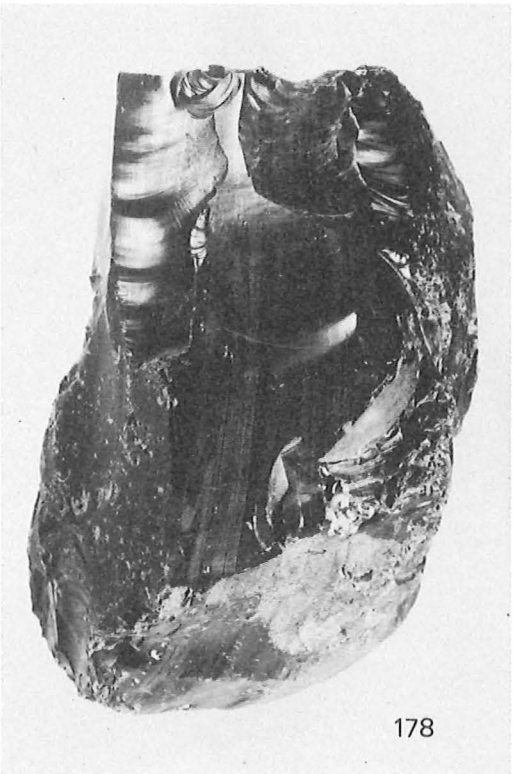



B地点出土の石器（表）

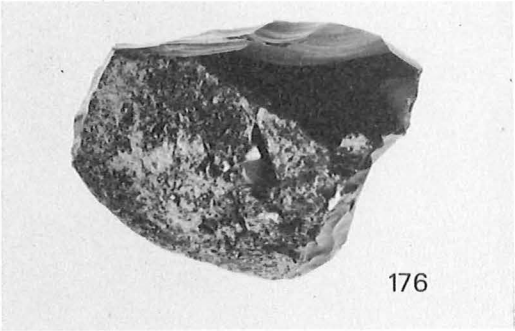


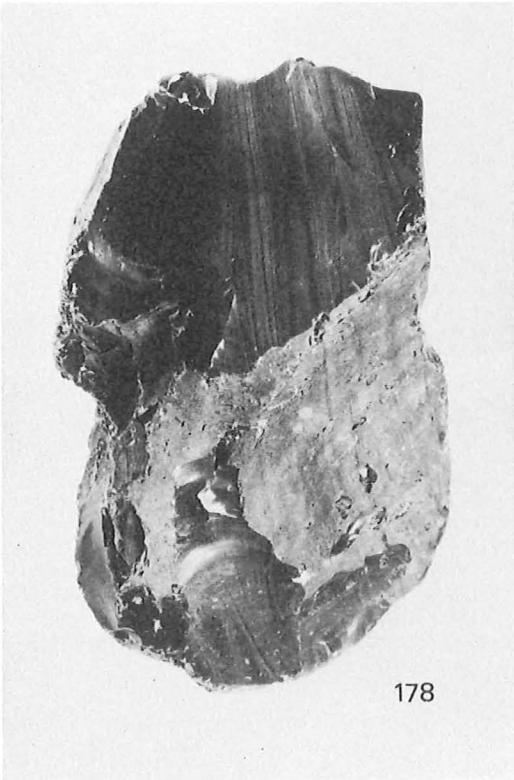

B地点出土の石器（裏）



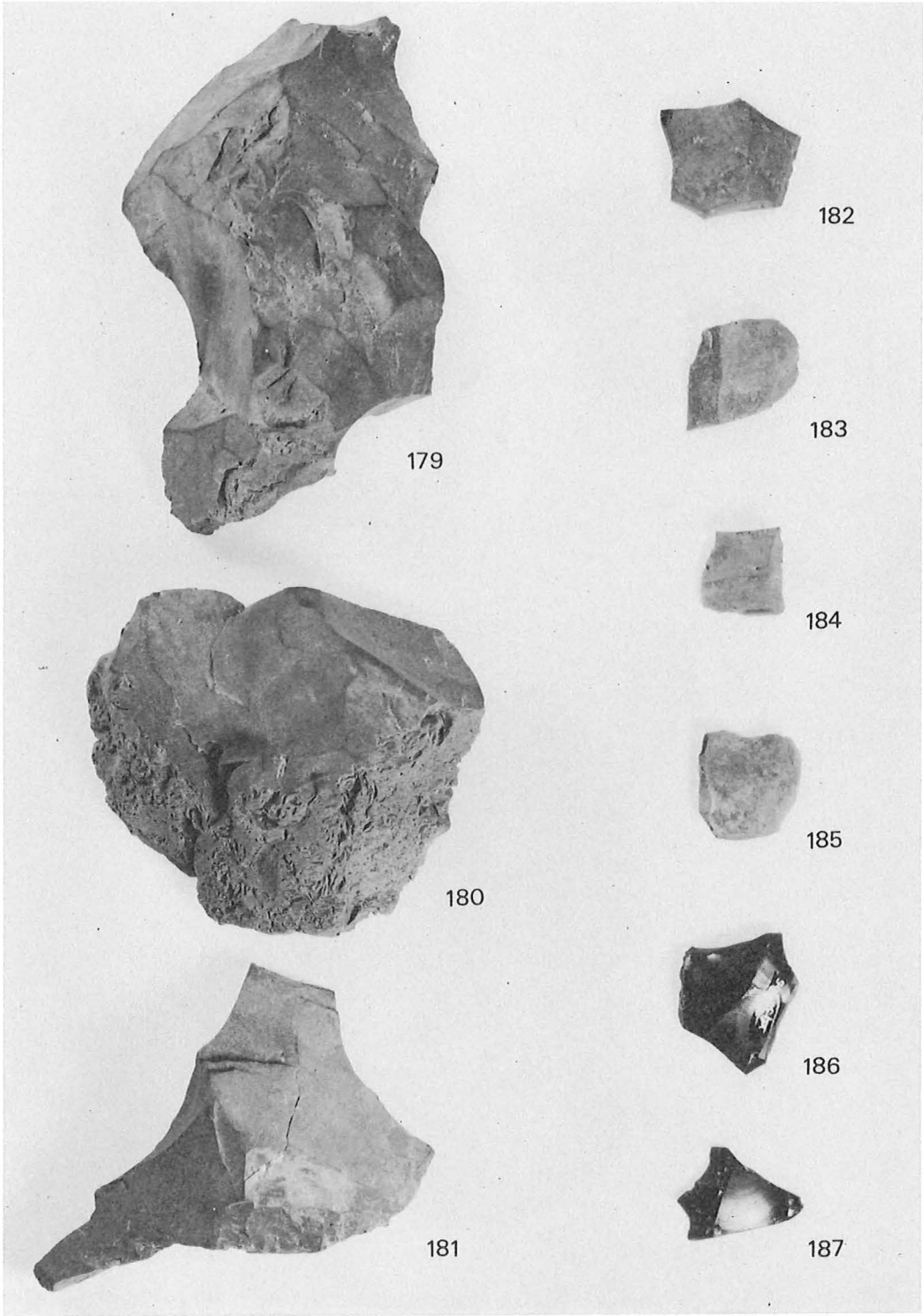



B地点出土の石器（表）

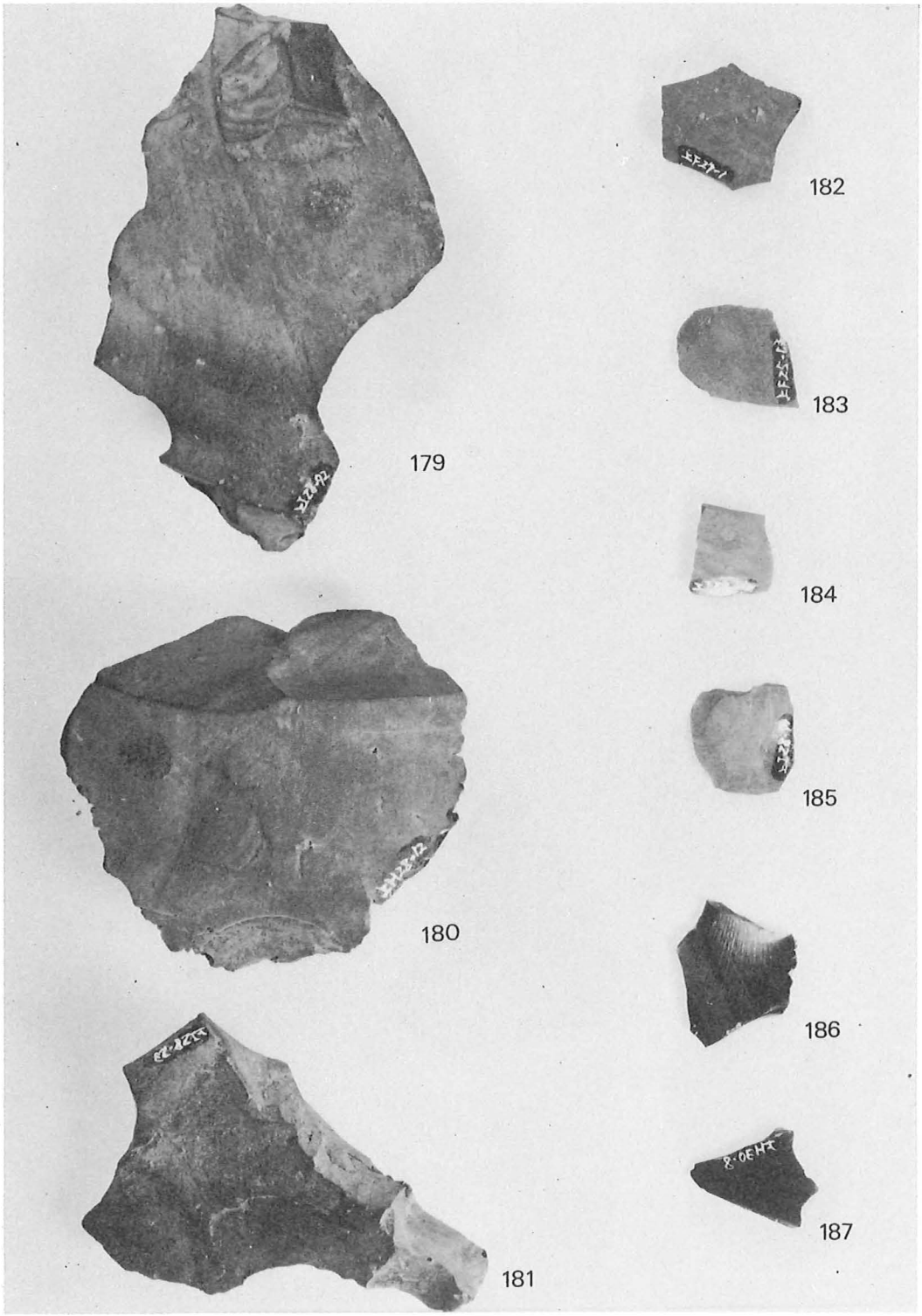




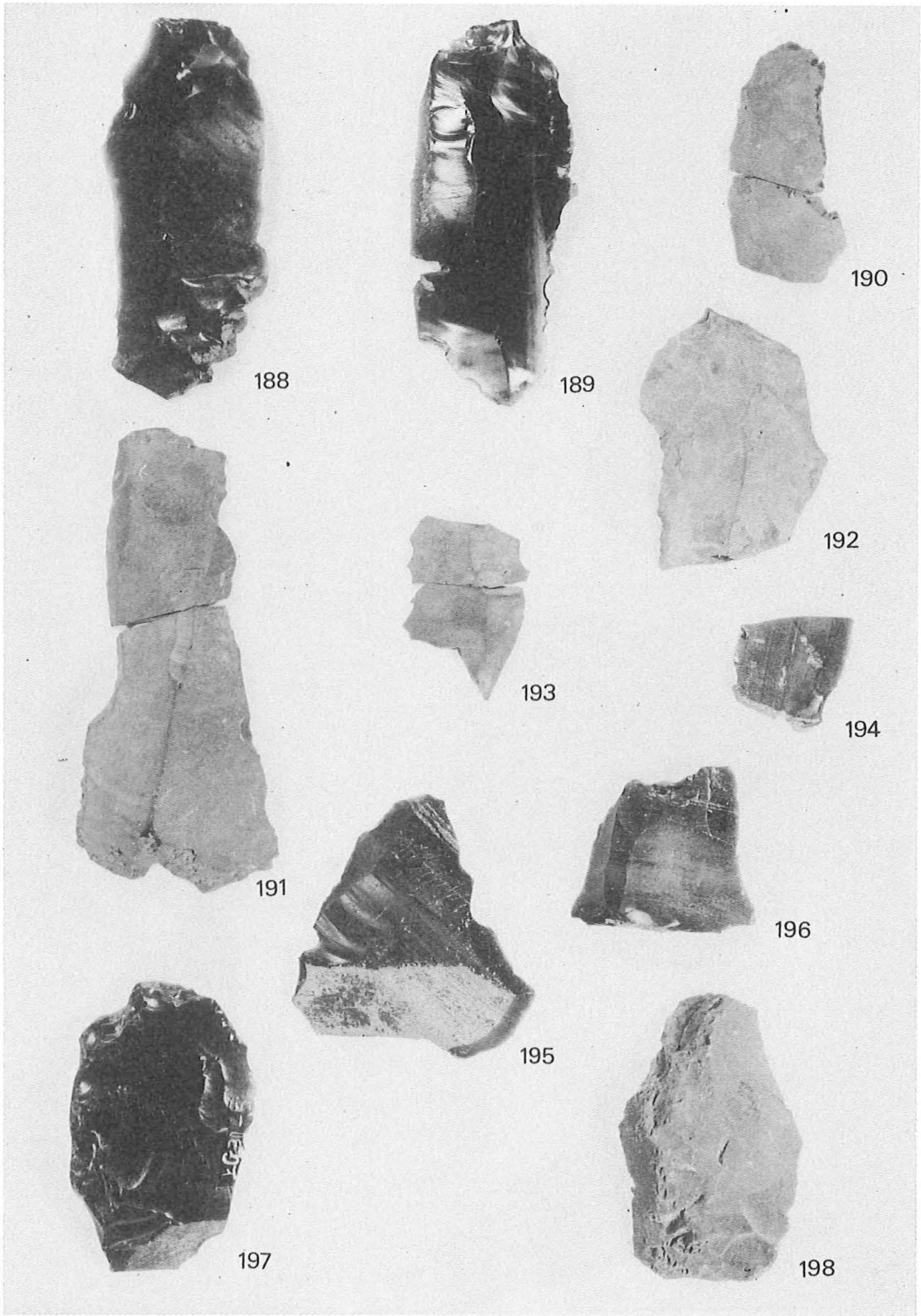

B地点出土の石器（裏）



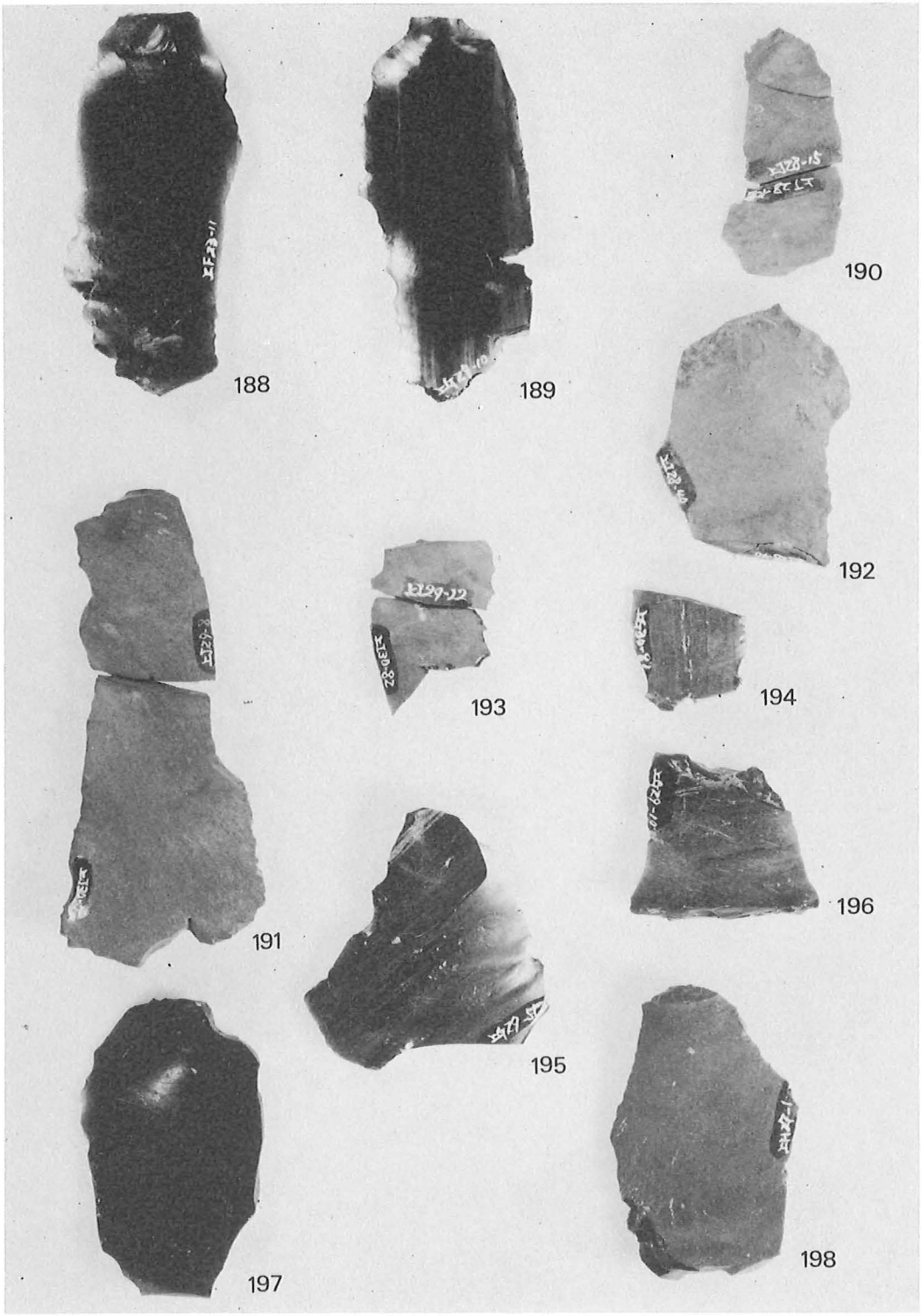

B地点出土の石器（表）



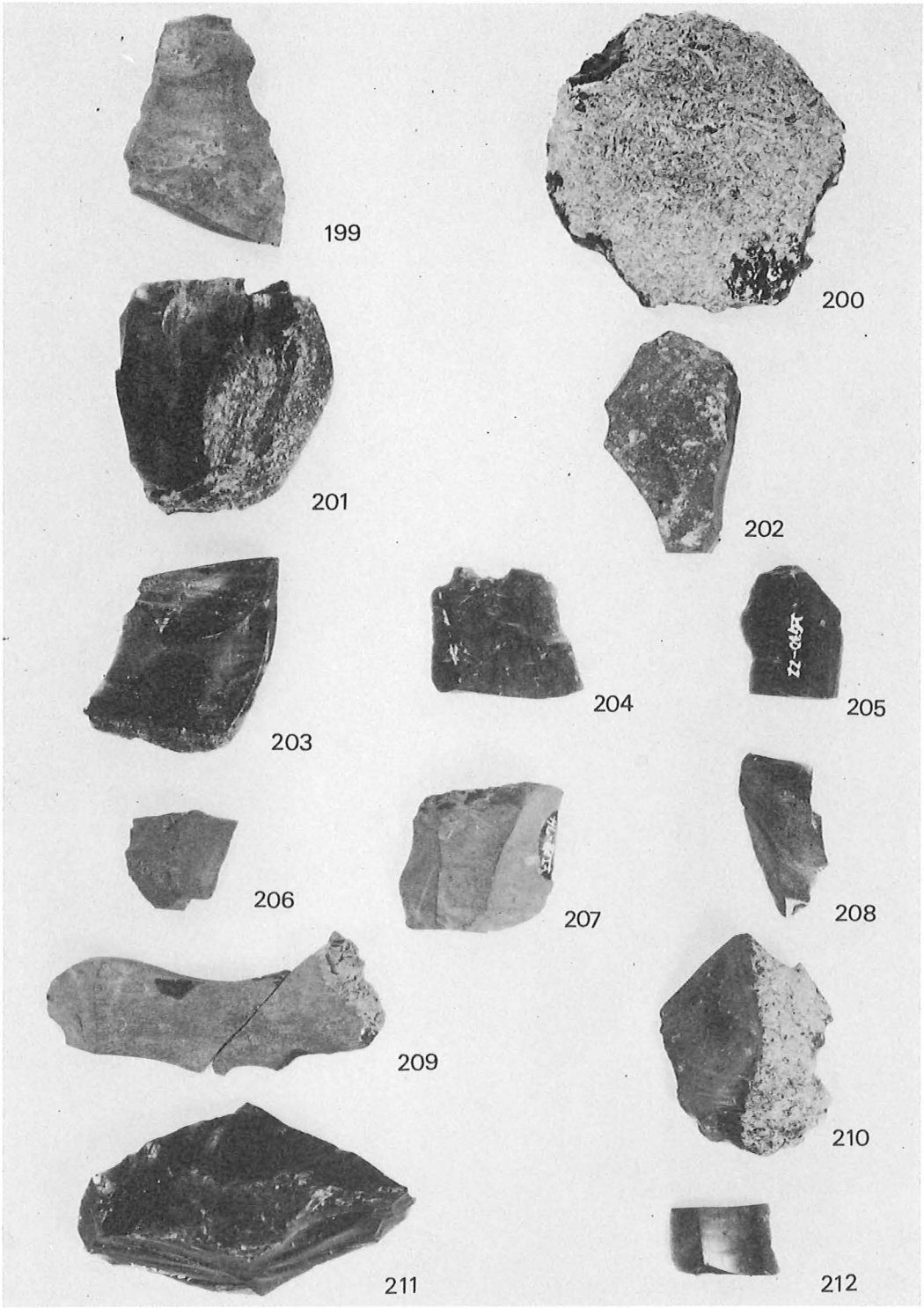

B地点出土の石器（裏）



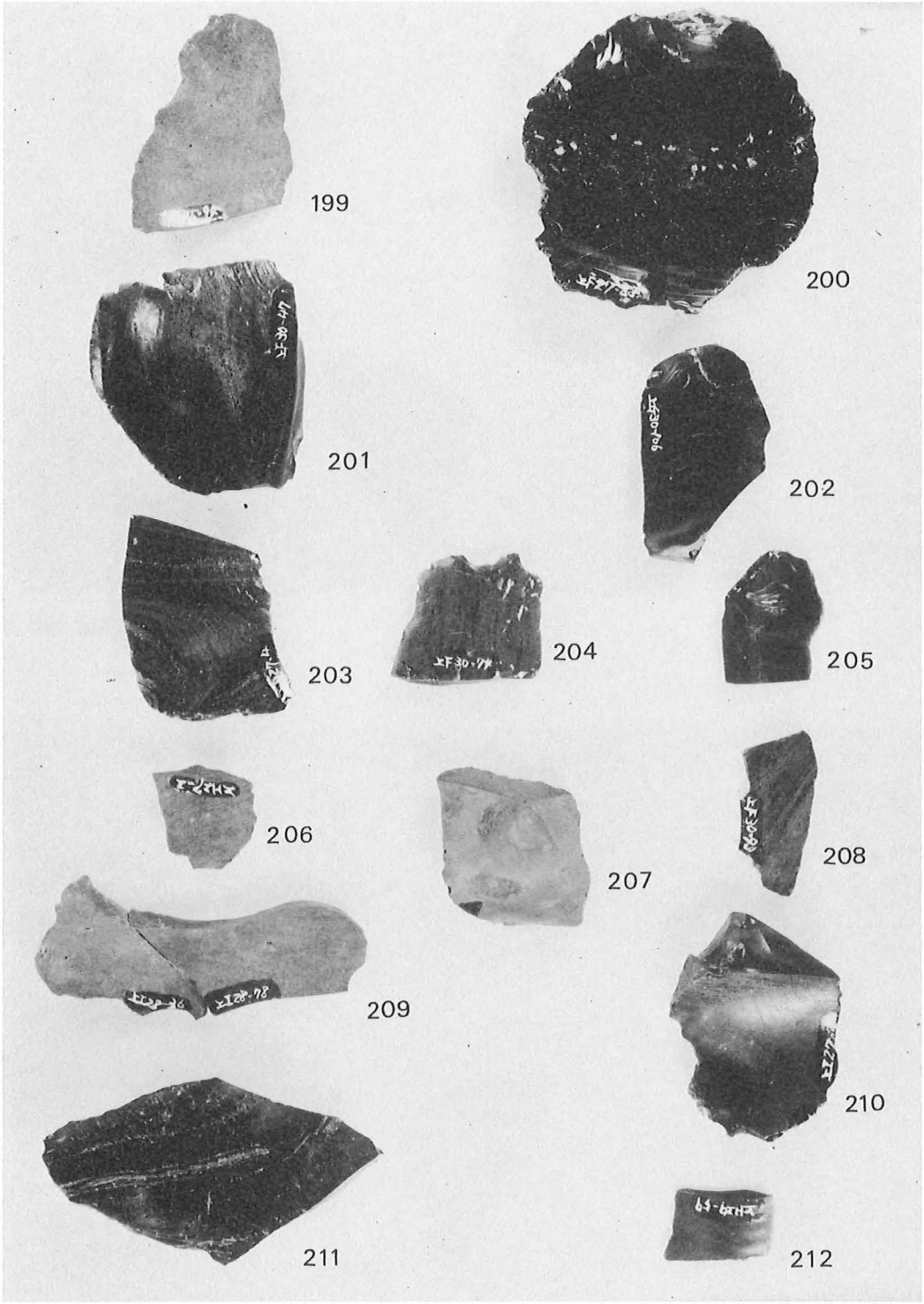

B 地点出土の石器（表）



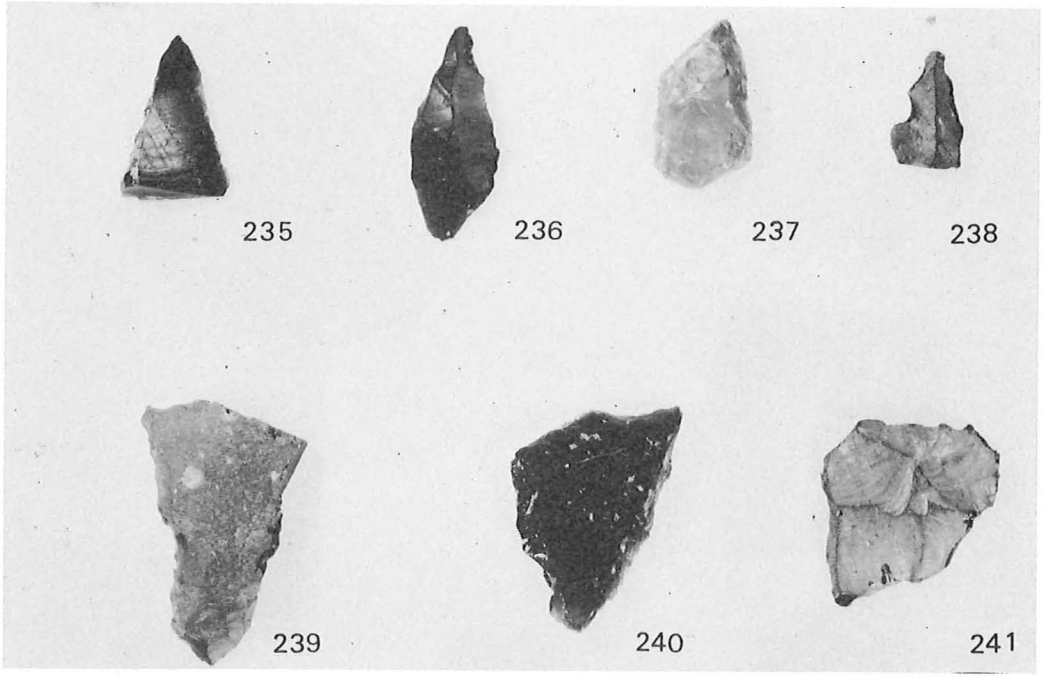

B地点出土の石器（裏）



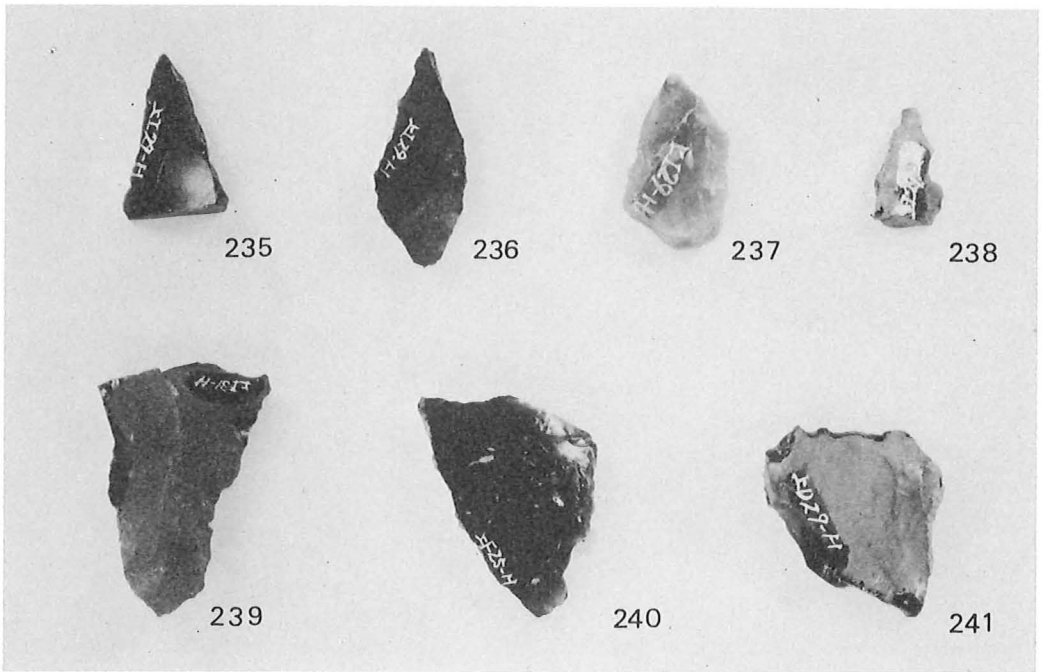

B 地点出土の石器（表）




B地点出土の石器（裏）




B地点表土出土の石器（表）




B地点表土出土の石器（裏）

調査参加者

長崎県文化財調査報告書　第81集

上　原　遺　跡

1986

発行所　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2－13

印刷所　三省堂印刷所
長崎市幸町4－28